

上信越自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書2

—佐久市内その2—

木戸平A・吹付・東林・鶉ヲネ・上中原・干草場
城の口・西林・東祢ぶた・西祢ぶた・大星尻古墳群
丸山古墳群・丸山II・丸山・北山寺・東大久保
西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂

本文編

1991

日本道路公団東京第二建設局
長野県教育委員会
財団法人 長野県埋蔵文化財センター

本文

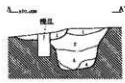
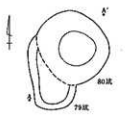
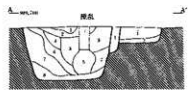
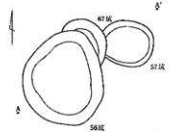
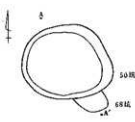
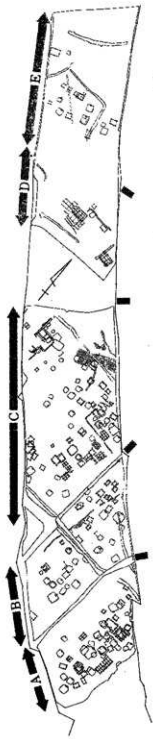
ページ	行	誤	正
巻頭写真 例言	下	(西祿ぶた……千草場・西林) 8. 立教大学……同原子内研究所	(西祿ぶた……千草場・西林) 8. 立教大学……同原子内研究所
3	10	浸食して形成し細	浸食して形成した細
13	11	: 円辺に対になる	: 縁辺に対になる
57	29	内に埋置されていた土器。	炉内に埋置されていた土器。
84	2	(図40、PL26・40)	(図40、PL40)
120	32	～であり、382～404は特に	～であり、382・404は特に
131	39	打製石斧に2点が認められた	打製石斧に24点が認められた
142	21	ことを示唆している。	ことを示唆している。
148	1	102 が光沢痕状を呈するほかは、	102 が光沢痕状を呈するほかは、
150	7	縄文中期末葉から	縄文中期末葉から
151	32	数量的な内分けは、	数量的な内訳は、
152	21	とりわけ42・45はそうした	とりわけ44・45はそうした
〃	27	薄手・堅磐なつくりで、	薄手・堅磐なつくりで、
〃	28	「ラッパ」状に開く口縁部	「ラッパ」状に開く口縁部
158	19	第1地点	第一地点
171	36	(加暦利EⅢ～Ⅳ期)	(加暦利EⅢ～Ⅳ期)
175	17	(123) が、打ち割られて	(33) が、打ち割られて
〃	17	123 は中央に人為的と	33は中央に人為的と
〃	20	2本の打製石斧(106・107)	2本の打製石斧(16・17)
〃	20	特に106は、	特に17は、
〃	22	石棒(134) があげられる。	石棒(90) があげられる。
〃	27	、その登土(採用)	、その登土(採用)
177	11	、東祿ぶた遺跡(第2章第9節)	、東祿ぶた遺跡(第3章第9節)
203	25	ら、さらに大規模なもの	ら、さらに大規模なもの
232	36	集中するものが多い(114・16)	集中するものが多い(14・16)
236	2	片鉢1(7)。	片口鉢1(7)。
237	20	3・4のように	3・6のように
247	11	外面には墨書が書かれるが	外面には墨書が記されるが
249	39	1は外底部から	7は外底部から
261	3	近世墳墓	近世墳墓
283	36	安山岩製(39, 40, 42)	安山岩製(39, 41, 42)
323	5～6	丸山古墳群の範囲とされていたが、	重複のため削除
401	30	土器(図6・7・1～43、PL127)	土器(図6・7・1～43、PL127・128)
432	24	A 小型精製……の形成と型式	A 小型精製……の形式と型式
492	31	ここで産地推定と	ここで産地同定と
551	38	弥生時代の石鏃とも思われる	弥生時代の石斧とも思われる
697	3	46号掘立柱建物址(図152)	46号掘立柱建物址(図152、PL180)
738	33	I E 2層が軟間に	I E 下層が軟間に
〃	35	I E 2層を掘り込み面と	I E 下層を掘り込み面と
740	15	I E 1層のあり方、	I E 上層のあり方、
〃	19～20	I E 2層の明褐色土が	I E 下層の明褐色土が
755	1	2号掘立柱建物址(図212)	2号掘立柱建物址(図212、PL187)
758	32	7号掘立柱建物址(図215)	7号掘立柱建物址(図215、PL187)
760	25	18号掘立柱建物址(図216)	18号掘立柱建物址(図216、PL177)
806	29	3は外底部に「十」	3は外底部に「X」
821	2	10はカマド煙道部	8～10はカマド煙道部
〃	15	24号住居址(図35、PL231・251)	24号住居址(図35、PL231・251・253)
834	20	3は猪産産で	13は猪産産で
840	26	7号掘立柱建物址(図55、PL234)	7号掘立柱建物址(図55)
855	1	32号掘立柱建物址(図70、PL238)	32号掘立柱建物址(図70、PL238・252)
942	36	なっていたB地点	なっていたC地点
1009	30	近藤義尚	近藤義尚
1010	2	第3章第1節	第3章第1節(河西執筆分を除く)
〃	3	第2節(岡村・寺島執筆分を除く)	第2節(河西・岡村・寺島執筆分を除く)
〃		執筆者追加	{ 河西克造 第3章1節1・2 〃 2節1・2

図版

ページ	図版番号	誤	正
96・97 ・98	49・50 ・51	} 50坑・56坑・79坑の土層図	「攪乱」追加 別紙参照
204	4		
369	15	6住-10	6住-15
371	16	口土器・金属器 ●石臼	口土器・金属器 ●石臼
〃	〃	●石臼の番号 3・4・5・6・7・8・9	8・9・10・11・12・13・14
555	11	図中の番号1・2	3・4
944～ 947	1～4	地点範囲欠落	別紙参照
948～ 949	5・60	地点範囲欠落	別紙参照

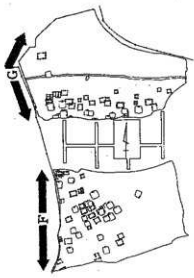
写真

PL	列	誤	正
39		1・2・5・6・8・11・	1～3・5・6・8・11・
115		6-7・6-3・6-9・6-10	6-12・6-8・6-14・6-15
129		左 2号住居址	左 3号住居址
186		左 150号掘立柱建物址	左 151号掘立柱建物址
〃		右 155号掘立柱建物址	右 150号掘立柱建物址
217	右 列	127-8	127-11
221	左 列	148-11	148-9
245	左 列	6-9	6-8
247	右 列	12-13	12-12



↑ 97頁 図50
 ↙ 96頁 図49
 ← 98頁 図51

「攪乱」を追加



↑ 204頁 図4
 スケール訂正



第3章第18節 5分析(4)集落変遷の図1~図6へ追加

左 図1~4 「A~E地点」を追加 (944~947頁)

右 図5・6 「F・G地点」を追加 (948~949頁)

上信越自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書2

—佐久市内その2—

木戸平A・吹付・東林・鶴ヲネ・上中原・干草場
城の口・西林・東祢ぶた・西祢ぶた・大星尻古墳群
丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・東大久保
西大久保・腰巻・粟毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂

本文編

1991

日本道路公団東京第二建設局
長野県教育委員会
財団法人 長野県埋蔵文化財センター



岩村田地区から浅間山を望む (栗毛坂C・西赤塚・中久保田・枇杷坂)南より



佐久市東地区遠景 (西務ぶた・東務ぶた・城の口・千草場・西林)南より



栗毛坂道跡群A地区 (東カ6)



栗毛坂道跡群B地区 (東カ6)



栗毛坂遺跡群C地区 (東か6)



吹付遺跡 (9号住居址出土土器)

序

上信越自動車道佐久インターまでの長野県分は、群馬県との県境となる八風山をトンネルで通過し、佐久市北東部の山麓部をほぼ東西に横断し、關ヶ流山を抜け佐久平に入り、湯川を渡り佐久インターまでの全長11.9 kmにあたります。

昭和61年10月から平成2年にかけて23遺跡が発掘調査されました。発掘面積は255,500 m²、膨大な量の遺構、遺物が検出され、発掘調査に足かけ4年間、冬期の整理作業を含み報告書刊行まで5年間の歳月を要しました。

発掘調査の概要については、既に現地説明会・勸長野県埋蔵文化財センター年報・埋蔵文化財ニュース・出土遺物展示会等で公開してまいりました。その後の整理作業では、今まであまり調査の手が入っていなかった東地地区から平根地区にかけての縄文時代から平安時代にかけての山間地での集落と、また栗毛坂遺跡群を始めとする平坦地での集落構成の対比が明確となるよう努めてまいりました。佐久市内の各遺跡は、石器製作跡として著名な下茂内遺跡を一冊、その他の22遺跡を一冊として報告するよう計画を立てました。本書は「佐久市内その2」として木戸平A、吹付、上中原、彌ヲネ、東林、西林、千草場、城ノ口、東称ぶた、西称ぶた、大星尻古墳群、丸山II、丸山古墳群、丸山、北山寺、東大久保、西大久保、腰巻、栗毛坂、西赤座、中久保田、枇杷坂の各遺跡についてまとめました。

本書は各遺跡ごとの事実記載を中心としたものとなりましたが、東地地区では、谷間部に展開する縄文時代の集落の一端が検出され、特に吹付遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭にかけての敷石住居跡を中心とした集落構成が明らかとなりました。

高速道路がこの地区の各遺跡の上端部を通過することとなり、遺跡の中心部からはずれ、調査された遺構は、土坑、陥し穴等ではありましたが、集落立地の研究上貴重な資料を得ました。

平根地区では、この地方では極めて類例の少ない積石塚古墳の大星尻古墳群、縄文時代前期末から中期初頭の土坑群等が調査された丸山遺跡、平尾富士の西山麓に立地する平安時代～中世にかけての集落・墓址群が検出された北山寺遺跡が注目されました。

佐久平に入っては、栗毛坂遺跡を始め平坦部の集落の調査となりましたが、取り分け湯川右岸低位段丘上に立地する栗毛坂遺跡A地区では、縄文時代早期末から前期にかけての石器製作址が、またB・C地区からは、古墳時代から平安時代にかけての大集落址の調査を行い、この地域での集落構成、佐久平の土器編年等を明らかにすることが出来ました。

本書は、地理的にも、また歴史的環境も異なる遺跡を各論的にまとめましたが、この地域の歴史を解明する上では重要な問題提起をしたものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただきました日本道路公団東京第二建設局、同佐久市工事事務所、長野県高速道局、同佐久高速道事務所、佐久市、同教育委員会、佐久市農業協同組合、地区地権者会等の関係諸機関、発掘作業や整理作業に従事された多くの皆さん、直接のご指導を賜った長野県教育委員会文化課、研究者の皆さん、発掘調査を実施した勸長野県埋蔵文化財センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成3年3月20日

勸長野県埋蔵文化財センター

理事長 樋口太郎

例 言

1. 本書は関越自動車道上越線(上信越自動車道)建設工事に伴い、昭和61年から平成元年にかけて事前調査された、佐久市内の第8次施行命令区間内23遺跡のうち、下茂内遺跡を除いた22遺跡—木戸平A・吹付・上中原・鷲ヲネ・東林・西林・干草場・城の口・東栞ぶた・西栞ぶた・大星尻古墳群・丸山古墳群・丸山II・丸山・北山寺・東大久保・西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂—の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託を受けた長野県教育委員会が、(財団法人)長野県埋蔵文化財センターに委託して実施されたものである。
3. 実際の発掘調査および整理事業は、(財団法人)長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所(佐久市大字安原に所在)で担当した。
4. 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の関越自動車道(下仁田—佐久)平面図(1:1,000)、佐久市発行の都市計画図(1:2,500)、建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000・1:50,000)をもとに作成および複製した。
5. 写真編巻頭、「佐久市香坂東地」「佐久市岩村田付近」の航空写真は、東洋航空事業株式会社(現 朝日航空株式会社)が47年8月から9月にかけて撮影したものを使用した。
6. 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。
佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化調査センター・日本道路公団東京第二建設局・同佐久工事事務所・佐久総合病院・中部電力上田営業所・西沢寿晃(信州大学医学部)・小林達雄(國學院大学)・松沢亜生(奈良国立文化財研究所)・森山公一・吉沢壯夫(望月高等学校)・小口 徹(市立岡谷南都中学校)・森嶋 稔・林 幸彦・高村博文・三石宗一・小山岳夫・羽毛田卓也・竹原 学・須藤隆司・木内 捷・西沢正巳・堤 隆・花岡 弘・中沢 悟・桜岡正信・綿貫邦男。
7. 縄文土器の分類記述に際しては廣瀬昭弘・三上徹也・寺内隆夫(当センター職員)の協力を得た。
縄文小形石器の分類に際しては大竹憲昭(当センター職員)の協力を得た。
輸入磁器に際しては市川隆之(当センター職員)に分類していただいた。
8. 立教大学の鈴木正男・同原子内研究所戸村健児・野田市郷土博物館の金山喜昭には黒曜石の水和層年代測定・熱中性子放射化分析をお願いした。
9. 委託関係 航空写真は株式会社パスコ、株式会社協同測量社、新日本航業株式会社、中央航業株式会社に依頼した。
10. 発掘調査および文責など本書刊行に関する分担は巻末に一括掲載してある。
11. 出土遺物は一括して、(財団法人)長野県埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管してある。

(諸機関・諸氏は順不同、敬称略)

凡 例

- 1 本書に掲載した実測図・写真の縮尺は、原則として以下のように統一してある。

遺構図

栗毛坂遺跡群……	竪穴住居址・掘立柱建物址	1:80	住居址内施設	1:40
北山寺遺跡	土坑	1:40		
その他の遺跡……	竪穴住居址・掘立柱建物址	1:60	住居址内施設	1:30~40
	土坑	1:40		

遺物図

土器・陶磁器	1:4	大形土器	1:6~1:8	土器拓影	1:3	金属製品	1:3
銭貨拓影	2:3	石器・石製品	2:3~1:6				

遺物写真

土器環類・陶磁器	2:5	土器甕類	1:4	金属製品	1:2
その他	実測図と同縮尺				

- 2 遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。
縄文土器、石器・石製品……1からの通し番号
その他……各遺構ごとの通し番号
- 3 重複遺構については、原則として上端のみを実線で表示してある。
- 4 実測図中のスクリーントーンは以下の事項を表わしている。

ア 遺構図

堅い床の範囲



焼土・火床



炭・灰



柱痕



地山



カマド構築材(柚土)



イ 遺物

石器

摩耗痕



敲打痕



古代以降の土器

黒色処理部分



須恵器以降の日本陶器



輸入磁器



本文編目次

巻頭写真

序

例言

凡例

本文編目次

第1章 序 説	1
第1節 調査の契約	1
1 発掘調査委託契約	1
2 埋蔵文化財発掘調査と契約業務の経過	3
第2節 調査の普及公開と体制	4
第3節 調査の方法	5
1 発掘調査の方法	5
2 遺跡・遺構名称と記号	5
3 調査区設定と測量	6
4 報告書編集の方法	11
(1) 編集方針	
(2) 遺構の記述	
(3) 遺物類の記述	
第2章 環 境	14
第1節 佐久地方北部の地形発達	14
第2節 歴史的環境	25
第3章 調 査	33
第1節 木戸平A遺跡	33
1 遺跡の概観	33
2 調査の経過と概要	33
3 基本土層	35
4 遺構と遺物	36
(1) 遺構	
(2) 遺構外出土遺物	
5 まとめ	39

第2節 吹付遺跡	40
1 遺跡の概観	40
2 調査の経過と概要	40
3 基本土層	45
4 遺構と遺物	46
i 第一地点の調査	46
(1) 縄文時代の遺構と遺物	
ア 住居址	
イ ビット群	
ウ 焼土址	
エ 遺物集中箇所	
オ 屋外埋墓	
カ 土坑	
キ 遺構外出土遺物	
ク 平安時代以降の遺物	
ii 第二地点の調査	150
(1) 遺構	
ア 焼土址	
イ 配石状遺構	
(2) 遺構外出土遺物	
ア 土器	
イ 土製品	
ウ 石器	
エ 小結	
5 まとめ	160
(1) 縄文時代中期後葉の土器群とその変遷	
(2) 縄文時代遺物の時期別出土分布	
(3) 石器の分布状況について	
(4) 遺跡の形成と消長	
(5) おわりに	
第3節 上中原遺跡	183
1 遺跡の概観	183
2 調査の経過と概要	183
3 遺構外出土遺物	184
4 まとめ	184
第4節 鴫ヲネ遺跡	185
1 遺跡の概観	185
2 調査の経過と概要	185
3 基本土層	186
4 遺構と遺物	186
(1) 縄文時代の遺構と遺物	186
ア 土坑	
イ 遺構外出土遺物	
(2) 時期不明の遺構	194
5 まとめ	194
第5節 東林遺跡	195
1 遺跡の概観	195
2 調査の経過と概要	195

3	遺構外出土遺物	196
4	まとめ	196
第6節 西林遺跡		
1	遺跡の概観	197
2	調査の経過と概要	198
3	基本土層	199
4	出土遺物	199
5	まとめ	199
第7節 干草場遺跡		
1	遺跡の概観	200
2	調査の経過と概要	200
3	基本土層	202
4	遺構と遺物	203
	ア 1号土坑 イ 遺構外出土遺物 ウ 1号墳墓	
5	まとめ	208
第8節 城の口遺跡		
1	遺跡の概観	209
2	調査の経過と概要	209
3	出土遺物	210
4	まとめ	211
第9節 東袴ぶた遺跡		
1	遺跡の概観	212
2	調査の経過と概要	214
3	基本土層	215
4	遺構と遺物	215
(1)	縄文時代の遺構と遺物	215
	ア 住居址 イ 屋外埋戻 ウ 焼土址 エ 土坑 オ 遺構外出土遺物	
	石鏃 スクレイパー 小剥離痕を有する剥片 石核・残核 原石	
	打製石斧 大形剥片石器 磨製石斧 磨石類	
(2)	弥生時代の遺物	234
(3)	平安時代の遺構と遺物	234
	ア 住居址 イ 土坑	
5	まとめ	238
第10節 西袴ぶた遺跡		
1	遺跡の概観	240

2	調査の経過と概要	241
3	基本土層	241
4	遺構と遺物	242
	ア 住居址 イ 掘立柱建物址 ウ 土坑 エ 遺構外出土遺物	
5	まとめ	254
第11節 大星尻古墳群		
1	遺跡の概観	256
2	調査の経過と概要	257
3	基本土層	259
4	遺構と遺物	261
(1)	縄文時代の遺構と遺物	261
	ア 竪土址 イ 土坑 ウ 遺構外遺物	
(2)	弥生時代の遺構と遺物	289
	ア 遺構 イ 遺構外出土遺物	
(3)	大星尻古墳	290
(4)	近世の遺構と遺物	294
(5)	人骨	299
5	まとめ	301
(1)	縄文時代遺跡としての性格	301
(2)	石器群からみた生活基盤の様相	303
(3)	大星尻古墳の諸相	304
(4)	1号墓について	311
第12節 丸山古墳群・丸山II遺跡		
1	遺跡の概観	313
2	調査の経過と概要	313
3	基本土層	316
4	遺構と遺物	316
	ア 住居址 イ 土坑 ウ 遺構外出土遺物	
5	まとめ	321
第13節 丸山遺跡		
1	遺跡の概観	322
2	調査の経過と概要	323
3	基本土層	324
4	遺構と遺物	325
(1)	縄文時代の遺構と遺物	326
	ア 住居址 イ 土坑 ウ 遺構外出土遺物	

(2) 平安時代の遺構と遺物	347
ア 住居址 イ 遺構外出土遺物	
5 ま と め	350
第14節 北山寺遺跡	352
1 遺 跡 の 概 観	352
2 調 査 の 経 過 と 概 要	352
3 基 本 土 層	353
4 遺 構 と 遺 物	354
(1) 縄文時代の遺物	356
(2) 平安時代の遺構と遺物	357
ア 住居址 イ 溝址	
(3) 中世の遺構と遺物	370
ア 住居址 イ 獨立柱建物址 ウ 土坑 エ 遺構外出土遺物	
5 ま と め	384
第15節 東大久保遺跡群	387
1 遺 跡 の 概 観	387
2 調 査 の 経 過 と 概 要	387
3 基 本 土 層	389
4 遺 構 と 遺 物	389
5 ま と め	391
第16節 西大久保遺跡群	392
1 遺 跡 の 概 観	392
2 調 査 の 経 過 と 概 要	392
3 基 本 土 層	393
4 遺 構 と 遺 物	393
5 ま と め	394
第17節 願巻遺跡	395
1 遺 跡 の 概 観	395
2 調 査 の 経 過 と 概 要	396
3 基 本 土 層	397
4 遺 構 と 遺 物	400
(1) 縄文時代の遺構と遺物	400
ア 土坑 イ 遺構外出土遺物	
(2) 古墳時代前期の遺構と遺物	409
ア 住居址 イ 鏡土址 ウ 土坑 エ 遺構外出土遺物	
(3) 古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物	420

ア 住居址	イ 煙址	
(4) 中世	424
(5) 近世	427
ア 溝址	イ 遺構外出土遺物	
5 まとめ	431
(1) 腰巻遺跡とその周辺	431
(2) 古式土師器の検討	432
第18節 栗毛坂遺跡群	440
1 遺跡の概観	440
2 調査の経過と概要	440
3 調査の方法	443
4 基本土層	447
i A地区	450
(1) 概観	450
(2) 縄文時代の遺構と遺物	454
ア 概要	イ 土坑	ウ 礎群
エ 遺構外出土遺物		
(3) 弥生時代後期以降の遺構と遺物	529
ア 竪穴住居址	イ 掘立柱建物址	ウ 溝址
エ 遺構外出土遺物		
ii B地区	545
(1) 概観	545
(2) 縄文時代の遺構と遺物	550
(3) 弥生時代の遺構と遺物	552
(4) 古墳時代～平安時代の遺構と遺物	554
ア 住居址	イ 掘立柱建物址	ウ 溝址
エ 櫓址	オ 土坑	カ 煙址
キ 特殊遺構	ク 遺構外出土遺物	
(5) 中世以降の遺構と遺物	750
ア 住居址	イ 掘立柱建物址	ウ 溝址
エ 櫓址	オ 土坑	カ 遺構外出土遺物
iii C地区	784
(1) 概観		
(2) 遺構と遺物		
ア 住居址	イ 掘立柱建物址	ウ 櫓址
エ 溝址	オ 土坑	カ 遺構外出土遺物
5 分析	875
(1) 古墳時代末から平安時代の遺物	875
(2) 栗毛坂遺跡群の文字関係資料	905
(3) 遺構の分析	920
(4) 集落変遷	941
6 まとめ	955

第19節 西赤坂遺跡	967
1 遺跡の概観	967
2 調査の経過と概要	967
3 基本土層	969
4 遺構と遺物	971
(1) 遺構と遺物	971
ア 掘立柱建物址	
イ 土坑	
ウ 溝址	
エ 耕地整理址	
オ 遺構外出土遺物	
5 まとめ	982
第20節 中久保田遺跡	983
1 遺跡の概観	983
2 調査の経過と概要	983
3 まとめ	983
第21節 枇杷坂遺跡群	984
1 遺跡の概観	984
2 調査の経過と概要	984
3 基本土層	985
4 遺構と遺物	985
(1) 遺構と遺物	985
ア 住居址	
イ 掘立柱建物址	
ウ 溝址	
エ 土坑	
オ 遺構外出土遺物	
5 まとめ	997
第22節 土器・石器類以外の遺物	999
第4章 結 語	1005

挿 図 目 次

序説

- 図1 上信越自動車道路線図
 図2 調査区設定
 図3 大々地区設定1 (平根・岩村田地区)
 図4 大々地区設定2 (香坂東地地区)

環境

- 図1 地形図
 図2 基本土層
 図3 沖積段丘形成のモデル
 図4 谷型斜面 (A) と尾根型斜面 (B) における斜面
 形と表層物質の関係 (平野1968より引用)
 図5 周辺遺跡 (香坂東地地区)
 図6 周辺遺跡 (平根・岩村田付近)
 図7 周辺遺跡 (佐久平)

木戸平A遺跡

- 図1 調査区および周辺遺跡 (1:4,000)
 図2 遺構配置
 図3 基本土層
 図4 1・2号土坑
 図5 3・4号土坑
 図6 5・6号土坑
 図7 遺構外出土土器
 図8 「陥し穴」の立地と湧水

吹付遺跡

- 図1 グリッド配置
 図2 遺構配置
 図3 基本土層
 図4 1号住居址
 図5 2号住居址 (1)
 図6 2号住居址 (2)
 図7 3号住居址
 図8 4号住居址遺物分布 (1)
 図9 4号住居址 (2)
 図10 4号住居址 (3)
 図11 4号住居址 (4)
 図12 4号住居址 (5)
 図13 4号住居址 (6)
 図14 4号住居址 (7)

- 図15 5号住居址 (1)
 図16 5号住居址 (2)
 図17 5号住居址 (3)
 図18 5号住居址 (4)
 図19 5号住居址 (5)
 図20 5号住居址 (6)
 図21 5号住居址 (7)
 図22 6号住居址
 図23 7号住居址
 図24 8号住居址
 図25 9号住居址遺物分布 (1)
 図26 9号住居址 (2)
 図27 9号住居址 (3)
 図28 9号住居址 (4)
 図29 9号住居址 (5)
 図30 10号住居址
 図31 11号住居址 (1)
 図32 11号住居址 (2)
 図33 11号住居址 (3)
 図34 11号住居址 (4)
 図35 11号住居址 (5)
 図36 12号住居址 (1)
 図37 12号住居址 (2)
 図38 1号ピット群
 図39 焼土址
 図40 遺物集中I
 図41 遺物集中II
 図42 1号埋外埋壁
 図43 土坑の類型別分布
 図44 土坑 (1)
 図45 土坑 (2)・1号配石土坑
 図46 土坑 (3)・2号配石土坑
 図47 土坑 (4)
 図48 土坑 (5)
 図49 土坑 (6)
 図50 土坑 (7)
 図51 土坑 (8)
 図52 土坑出土遺物 (1)
 図53 土坑出土遺物 (2)
 図54 土坑出土遺物 (3)
 図55 遺構外出土土器 (1)

図56 遺構外出土土器 (2)
図57 遺構外出土土器 (3)
図58 遺構外出土土器 (4)
図59 遺構外出土土器 (5)
図60 遺構外出土土器 (6)
図61 遺構外出土土器 (7)
図62 遺構外出土土器 (8)
図63 遺構外出土土器 (9)
図64 遺構外出土土器 (10)
図65 遺構外出土土器 (11)
図66 遺構外出土土器 (12)
図67 遺構外出土土器 (13)
図68 遺構外出土土器 (14)
図69 遺構外出土土器 (15)
図70 遺構外出土土器 (16)
図71 遺構外出土土器 (17)
図72 土製品
図73 石器組成・石材組成
図74 遺構外出土石器 (1)
図75 遺構外出土石器 (2)
図76 遺構外出土石器 (3)
図77 遺構外出土石器 (4)
図78 遺構外出土石器 (5)
図79 打製石斧長幅厚相関
図80 遺構外出土石器 (6)
図81 遺構外出土石器 (7)
図82 遺構外出土石器 (8)
図83 遺構外出土石器 (9)
図84 打製石斧摩耗・欠損
図85 遺構外出土石器 (10)
図86 遺構外出土石器 (11)
図87 遺構外出土石器 (12)
図88 遺構外出土石器 (13)
図89 遺構外出土石器 (14)
図90 遺構外出土石器 (15)
図91 遺構外出土石器 (16)
図92 遺構外出土石器 (17)
図93 遺構外出土石器 (18)
図94 古代以降の遺構外出土遺物
図95 基本土層
図96 焼土址
図97 遺構外出土土器 (1)
図98 遺構外出土土器 (2)
図99 遺構外出土土器 (3)
図100 遺構外出土土器 (4)

図101 遺構外出土土器 (5)
図102 土製品
図103 遺構外出土石器
図104 縄文時代中期後葉の土器変遷
図105 出土土器のグリッド別分布 (1)
図106 出土土器のグリッド別分布 (2)
図107 出土土器のグリッド別分布 (3)
図108 出土土器のグリッド別分布 (4)
図109 出土土器のグリッド別分布 (5)
図110 出土土器のグリッド別分布 (1)
図111 出土土器のグリッド別分布 (2)
図112 縄文時代中期後葉の集落変遷 (1)
図113 縄文時代中期後葉の集落変遷 (2)

上中原遺跡

図1 地形および調査範囲 (1:2000)
図2 トレンチ設定・土層柱状図
図3 遺構外出土遺物

鶴ヶネ遺跡

図1 基本土層
図2 トレンチ設定・遺構分布
・IV層コンタ (1:400)
図3 4号土坑
図4 土坑 (1)
図5 土坑 (2)
図6 遺構外出土遺物 (1)
図7 遺構外出土遺物 (2)
図8 遺構外出土遺物 (3)

東林遺跡

図1 調査範囲および土層柱状図
図2 遺構外出土遺物

西林遺跡

図1 地形および調査範囲 (1:3,000)
図2 基本土層
図3 遺構外出土遺物

干草場遺跡

図1 地形および調査範囲 (1:3,000)
図2 遺構配置図
図3 基本土層
図4 1号土坑
図5 遺構外出土遺物
図6 1号墳墓

城の口遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:2,000)
- 図2 出土遺物

東祿ぶた遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:3,000)
- 図2 遺構配置
- 図3 基本土層
- 図4 1号住居址 (1)
- 図5 1号住居址 (2)
- 図6 2号住居址
- 図7 1号単独埋葬
- 図8 1・2号焼土址
- 図9 1号焼土址出土遺物
- 図10 3号土坑
- 図11 遺構外出土遺物分布
- 図12 遺構外出土土器 (1)
- 図13 遺構外出土土器 (2)
- 図14 遺構外出土土器 (3)
- 図15 遺構外出土土器 (4)
- 図16 遺構外出土土器 (5)
- 図17 遺構外出土土器 (6)
- 図18 遺構外出土石器
- 図19 弥生時代の石器
- 図20 3号住居址
- 図21 4号住居址
- 図22 1号・2号・4号土坑
- 図23 縄文時代中期末遺構分布模式図

西祿ぶた遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:3,000)
- 図2 基本土層
- 図3 遺構配置
- 図4 1号住居址 (1)
- 図5 1号住居址 (2)
- 図6 2号住居址
- 図7 3号住居址
- 図8 4号住居址
- 図9 5号住居址
- 図10 6号住居址 (1)
- 図11 6号住居址 (2)
- 図12 1号土坑出土遺物
- 図13 掘立柱建物址・土坑
- 図14 遺構外出土遺物

大星尻古墳群

- 図1 地形および調査範囲 (1:3,000)
- 図2 トレンチ配置・グリッド概念図
- 図3 拡張区遺構分布および基本土層
- 図4 1号土坑
- 図5 2・3号土坑
- 図6 7号・27号・28号土坑
- 図7 焼土址・土坑 (1)
- 図8 土坑 (2)
- 図9 土坑 (3)
- 図10 焼土址・土坑出土土器
- 図11 遺構外出土土器 (1)
- 図12 遺構外出土土器 (2)
- 図13 遺構外出土土器 (3)
- 図14 遺構外出土土器 (4)
- 図15 遺構外出土土器 (5)
- 図16 遺構外出土土器 (6)
- 図17 遺構外出土土器 (7)
- 図18 土製品
- 図19 遺構外出土石器 (1)
- 図20 石鏃の長幅相関・分類比率
- 図21 石鏃の鏃身と挟り部・側辺部状況の相関
- 図22 石鏃の第一次刻線打点部
- 図23 小剥離痕を有する剥片の背面状況
- 図24 遺構外出土石器 (2)
- 図25 遺構外出土石器 (3)
- 図26 12号土坑
- 図27 遺構外出土土器
- 図28 墳丘
- 図29 石室・出土遺物
- 図30 1号墓 (1)
- 図31 1号墓墓坑 (2)
- 図32 1号墓 (3)
- 図33 2号墓
- 図34 丸山遺跡と本遺跡の位置関係
- 図35 出土石器・石片類分布状況
- 図36 剥片・砕片・残核法量別數量
- 図37 築造工程
- 図38 設計企画
- 図39 立地環境

丸山古墳群・丸山II遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:3,000)
- 図2 遺構配置
- 図3 基本土層

- 図4 1号住居址
- 図5 2号住居址
- 図6 土坑
- 図7 遺構外出土遺物

丸山遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:4,000)
- 図2 発掘範囲および基本土層
- 図3 B・E区遺構配置
- 図4 3号住居址(1)
- 図5 3号住居址(2)
- 図6 3号住居址(3)
- 図7 土坑(1)
- 図8 土坑(2)
- 図9 土坑(3)
- 図10 土坑出土遺物(1)
- 図11 土坑出土遺物(2)
- 図12 土坑出土遺物(3)
- 図13 遺構外出土遺物(1)
- 図14 遺構外出土遺物(2)
- 図15 遺構外出土遺物(3)
- 図16 遺構外出土遺物(4)
- 図17 出土石器類・その他の分布状況
- 図18 遺構外出土遺物(5)
- 図19 遺構外出土遺物(6)
- 図20 ビエス・エスキューの長幅相関および素材形状
- 図21 小剥離痕を有する剥片の長幅相関および背面状況
- 図22 石核・残核の自然面占有率と重量相関
- 図23 1号住居址
- 図24 2号住居址
- 図25 遺構外出土遺物

北山寺遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:3,000)
- 図2 基本土層
- 図3 遺構配置
- 図4 遺構外出土石器
- 図5 1号住居址
- 図6 2号住居址(1)
- 図7 2号住居址(2)
- 図8 3号住居址
- 図9 4号住居址
- 図10 5号住居址
- 図11 11号住居址
- 図12 12号住居址

- 図13 3号溝出土遺物
- 図14 1・2号溝址
- 図15 3号溝址
- 図16 6号住居址(1)
- 図17 6号住居址(2)
- 図18 6号住居址(3)
- 図19 足金物の彩金工程
- 図20 7号住居址
- 図21 8号住居址
- 図22 9号住居址
- 図23 10号住居址
- 図24 13号住居址
- 図25 1号孤立柱建物址
- 図26 土坑(1)
- 図27 土坑(2)
- 図28 土坑(3)
- 図29 土坑出土遺物
- 図30 遺構外出土遺物

東大久保遺跡

- 図1 東大久保・西大久保遺跡群調査範囲 (1:4,000)
- 図2 東大久保・西大久保遺跡群全体区・土層図
- 図3 1号土坑
- 図4 1号溝址
- 図5 遺構外出土遺物

西大久保遺跡

- 図1 遺構外出土遺物(1)
- 図2 遺構外出土遺物(2)

藤巻遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:4,000)
- 図2 基本土層
- 図3 遺構配置
- 図4 16号土坑
- 図5 34・45号土坑
- 図6 遺構外出土遺物(1)
- 図7 遺構外出土遺物(2)
- 図8 遺構外出土遺物(3)
- 図9 遺構外出土遺物(4)
- 図10 遺構外出土遺物(5)
- 図11 2号住居址(1)
- 図12 2号住居址(2)
- 図13 3号住居址
- 図14 5号住居址

- 図15 6号住居址
- 図16 7号住居址
- 図17 8号住居址
- 図18 火床
- 図19 35・36号土坑
- 図20 遺構外出土遺物 (1)
- 図21 遺構外出土遺物 (2)
- 図22 1号住居址
- 図23 4号住居址
- 図24 畑址
- 図25 3号溝址 (1)
- 図26 3号溝址 (2)
- 図27 3号溝・白石城・平尾城
- 図28 2号溝～1号溝の変遷
- 図29 1号溝址
- 図30 2号溝址
- 図31 4・5号溝址
- 図32 遺構外出土遺物
- 図33 「く」字状口縁裏の想定型式変遷
- 図34 短頸壺の想定型式変遷
- 図35 小型丸底土器の形式
- 図36 腰帯遺跡における小型精製土器崩壊後の想定形式群
- 図37 多段口縁裏集成

栗毛取遺跡群

- 図1 地形図および調査区設定 (1:10,000)
- 図2 調査区分図 (1:6,000)
- 図3 全体図
- 図4 基本土層

A地区

- 図5 A地区の位置・調査範囲
- 図6 A地区の地形・遺構配置・基本土層
- 図7 A地区の地形形成過程と環境の推移
- 図8 土坑 (1)
- 図9 土坑 (2)
- 図10 4号土坑出土遺物
- 図11 礫群の分布状況
- 図12 礫群と石器の出土相関図
- 図13 1・2号礫群
- 図14 3・4号礫群
- 図15 5・6号礫群
- 図16 7・8・9号礫群
- 図17 10・11・12・13号礫群
- 図18 14・15号礫群

- 図19 石器の分布状況
- 図20 素材面を残す石鏃の長幅相関・重量別数量
- 図21 遺構外出土石器 (1)
- 図22 遺構外出土石器 (2)
- 図23 遺構外出土石器 (3)
- 図24 遺構外出土石器 (4)
- 図25 第一次剥離打点部位・分類別数量
- 図26 鏃身長・挟り部、鏃身長・側辺部の相関
- 図27 分類別完形・欠損品数量
- 図28 破損部位の数量・比率
- 図29 分類別の鏃部入射角・摩耗部位
- 図30 遺構外出土石器 (5)
- 図31 遺構外出土石器 (6)
- 図32 遺構外出土石器 (7)
- 図33 遺構外出土石器 (8)
- 図34 遺構外出土石器 (9)
- 図35 素材の性状・重量相関
- 図36 刀部の形状・刀部角の相関
- 図37 分類別の長幅相関・刀部側面形
- 図38 長幅相関と背面状況
- 図39 長・幅・厚・重相関 (1)
- 図40 遺構外出土石器 (10)
- 図41 遺構外出土石器 (11)
- 図42 遺構外出土石器 (12)
- 図43 長・幅・厚・重相関 (2)
- 図44 N-15グリッドにおける石片類の重量別数量・剥片の自然面有無
- 図45 遺構外出土石器 (13)
- 図46 遺構外出土石器 (14)
- 図47 遺構外出土石器 (15)
- 図48 遺構外出土石器 (16)
- 図49 遺構外出土石器 (17)
- 図50 遺構外出土石器 (18)
- 図51 遺構外出土石器 (19)
- 図52 遺構外出土石器 (20)
- 図53 遺構外出土石器 (21)
- 図54 遺構外出土石器 (22)
- 図55 遺構外出土石器 (23)
- 図56 遺構外出土石器 (24)
- 図57 遺構外出土石器製品
- 図58 遺構外出土石器 (1)
- 図59 遺構外出土石器 (2)
- 図60 遺構外出土石器 (3)
- 図61 遺構外出土石器 (4)
- 図62 遺構外出土石器 (5)

図63 遺構外出土土器 (6)
 図64 遺構外出土土器 (7)
 図65 遺構外出土土器 (8)
 図66 遺構外出土土器 (9)
 図67 遺構外出土土器 (10)
 図68 遺構外出土土器 (11)
 図69 遺構外出土土器 (12)
 図70 遺構外出土土器 (13)
 図71 遺構外出土土器 (14)
 図72 遺構外出土土器 (15)
 図73 遺構外出土土器 (16)
 図74 1号住居址
 図75 2号住居址
 図76 3号住居址 (1)
 図77 3号住居址 (2)
 図78 4号住居址
 図79 5号住居址
 図80 6号住居址
 図81 7号住居址
 図82 8号住居址
 図83 9号住居址
 図84 10号住居址
 図85 11号住居址
 図86 1号孤立柱建物址
 図87 遺構外出土遺物 (1)
 図88 遺構外出土遺物 (2)

B地区

図1 B地区の位置・調査範囲
 図2 遺構配置(1)
 図3 遺構配置(2)
 図4 遺構配置(3)
 図5 遺構配置(4)
 図6 土坑
 図7 遺物分布
 図8 土器拓影
 図9 159号住居址
 図10 113号住居址
 図11 3号住居址
 図12 4号住居址 (1)
 図13 4号住居址 (2)
 図14 5号住居址 (1)
 図15 5号住居址 (2)
 図16 6号住居址 (1)
 図17 6号住居址 (2)
 図18 28号住居址
 図19 32号住居址
 図20 7号住居址
 図21 9号住居址
 図22 10号住居址 (1)
 図23 10号住居址 (2)
 図24 43号住居址
 図25 11号住居址 (1)
 図26 11号住居址 (2)
 図27 42号住居址
 図28 12号住居址 (1)
 図29 12号住居址 (2)
 図30 12号住居址 (3)
 図31 12号住居址 (4)
 図32 45号住居址
 図33 13号住居址 (1)
 図34 13号住居址 (2)
 図35 14号住居址 (1)
 図36 14号住居址 (2)
 図37 15号住居址
 図38 16号住居址
 図39 18号住居址
 図40 19号住居址
 図41 21号住居址
 図42 22号住居址
 図43 23号住居址
 図44 24号住居址
 図45 27号住居址
 図46 29号住居址
 図47 30号住居址
 図48 31号住居址 (1)
 図49 31号住居址 (2)
 図50 41号住居址
 図51 33号住居址
 図52 34号住居址
 図53 35号住居址
 図54 36号住居址
 図55 37号住居址
 図56 39号住居址
 図57 40号住居址
 図58 44号住居址 (1)
 図59 44号住居址 (2)
 図60 101号住居址
 図61 102号住居址
 図62 103号住居址

- 图63 104号住居址
 图64 105号住居址 (1)
 图65 105号住居址 (2)
 图66 106号住居址
 图67 107号住居址
 图68 108号住居址
 图69 109号住居址
 图70 110号住居址 (1)
 图71 110号住居址 (2)
 图72 111号住居址
 图73 112号住居址 (1)
 图74 112号住居址 (2)
 图75 114号住居址
 图76 115号住居址
 图77 116号住居址
 图78 117号住居址 (1)
 图79 117号住居址 (2)
 图80 118号住居址 (1)
 图81 118号住居址 (2)
 图82 119·126号住居址
 图83 120号住居址 (1)
 图84 120号住居址 (2)
 图85 120号住居址 (3)
 图86 120号住居址 (4)
 图87 121号住居址
 图88 122号住居址
 图89 123号住居址
 图90 124号住居址
 图91 125号住居址 (1)
 图92 125号住居址 (2)
 图93 127号住居址
 图94 128号住居址 (1)
 图95 128号住居址 (2)
 图96 129号住居址
 图97 130号住居址 (1)
 图98 130号住居址 (2)
 图99 131号住居址
 图100 132号住居址 (1)
 图101 132号住居址 (2)
 图102 144号住居址
 图103 133号住居址 (1)
 图104 133号住居址 (2)
 图105 135号住居址
 图106 136号住居址 (1)
 图107 136号住居址 (2)
 图108 137号住居址 (1)
 图109 137号住居址 (2)
 图110 143号住居址
 图111 138号住居址
 图112 139号住居址
 图113 140号住居址
 图114 141号住居址
 图115 142号住居址
 图116 145号住居址 (1)
 图117 145号住居址 (2)
 图118 146号住居址
 图119 147号住居址
 图120 148号住居址 (1)
 图121 148号住居址 (2)
 图122 149号住居址 (1)
 图123 149号住居址 (2)
 图124 150号住居址 (1)
 图125 150号住居址 (2)
 图126 151号住居址
 图127 152号住居址
 图128 153号住居址
 图129 154号住居址
 图130 156号住居址
 图131 157号住居址 (1)
 图132 157号住居址 (2)
 图133 158号住居址
 图134 8号孤立柱建物址
 图135 9·10号孤立柱建物址
 图136 11·12号孤立柱建物址
 图137 13·14号孤立柱建物址
 图138 15·16号孤立柱建物址
 图139 17号孤立柱建物址
 图140 20·23号孤立柱建物址
 图141 24号孤立柱建物址
 图142 25·26号孤立柱建物址
 图143 27·28号孤立柱建物址
 图144 29·30号孤立柱建物址
 图145 31·32号孤立柱建物址
 图146 33·34号孤立柱建物址
 图147 35·36号孤立柱建物址
 图148 37·38号孤立柱建物址
 图149 40号孤立柱建物址
 图150 41·42号孤立柱建物址
 图151 43号孤立柱建物址
 图152 44·46号孤立柱建物址

図153 47・48号孤立柱建物址
 図154 49・50号孤立柱建物址
 図155 52・53号孤立柱建物址
 図156 54・55号孤立柱建物址
 図157 56・57号孤立柱建物址
 図158 58・59号孤立柱建物址
 図159 60・61号孤立柱建物址
 図160 62・101号孤立柱建物址
 図161 102・103号孤立柱建物址
 図162 104・105号孤立柱建物址
 図163 106号孤立柱建物址
 図164 107号孤立柱建物址
 図165 108号孤立柱建物址
 図166 109・110号孤立柱建物址
 図167 111・112・113号孤立柱建物址
 図168 115・116号孤立柱建物址
 図169 117・118号孤立柱建物址
 図170 119・120号孤立柱建物址
 図171 121・122号孤立柱建物址
 図172 123・124号孤立柱建物址
 図173 125・126号孤立柱建物址
 図174 127・128号孤立柱建物址
 図175 129・135号孤立柱建物址
 図176 136・138号孤立柱建物址
 図177 139・141号孤立柱建物址
 図178 142・145号孤立柱建物址
 図179 143号孤立柱建物址
 図180 144号孤立柱建物址
 図181 146号孤立柱建物址
 図182 148・149号孤立柱建物址
 図183 150・151号孤立柱建物址
 図184 152・153号孤立柱建物址
 図185 154号孤立柱建物址
 図186 櫛列
 図187 土坑の長短軸深さの相関
 図188 土坑(1)
 図189 土坑(2)
 図190 土坑(3)
 図191 土坑(4)
 図192 土坑(5)
 図193 土坑(6)
 図194 土坑(7)
 図195 1・2号畑址
 図196 3号畑址
 図197 特殊遺構1～4

図198 特殊遺構5・6
 図199 特殊遺構7
 図200 特殊遺構8
 図201 遺構外出土遺物(1)
 図202 遺構外出土遺物(2)
 図203 遺構外出土遺物(3)
 図204 1号住居址
 図205 2号住居址
 図206 8号住居址
 図207 17号住居址
 図208 38号住居址
 図209 160号住居址
 図210 1・4号孤立柱建物址
 図211 3号孤立柱建物址
 図212 2号孤立柱建物址
 図213 5号孤立柱建物址
 図214 6号孤立柱建物址
 図215 7号孤立柱建物址
 図216 18号孤立柱建物址
 図217 19号孤立柱建物址
 図218 21号孤立柱建物址
 図219 45号孤立柱建物址
 図220 溝址(1)
 図221 溝址(2)
 図222 溝址(3)
 図223 溝址(4)
 図224 溝址(5)
 図225 溝址(6)
 図226 溝址(7)
 図227 溝址(8)
 図228 溝址出土遺物(1)
 図229 溝址出土遺物(2)
 図230 1号棚址
 図231 2～7号棚址
 図232 土坑の長短軸深さの相関
 図233 土坑(1)
 図234 土坑(2)
 図235 土坑(3)
 図236 土坑(4)
 図237 遺構外出土遺物

C地区

図1 C地区の位置・調査範囲
 図2 遺構配置(1)
 図3 遺構配置(2)

- 図4 1号住居址
 図5 2号住居址
 図6 3号住居址
 図7 4号住居址
 図8 5号住居址
 図9 6号住居址
 図10 7号住居址(1)
 図11 7号住居址(2)
 図12 8号住居址
 図13 9号住居址(1)
 図14 9号住居址(2)
 図15 10号住居址
 図16 11号住居址(1)
 図17 11号住居址(2)
 図18 12号住居址(1)
 図19 12号住居址(2)
 図20 13号住居址
 図21 14号住居址
 図22 15号住居址(1)
 図23 15号住居址(2)
 図24 16号住居址
 図25 17号住居址
 図26 18号住居址(1)
 図27 18号住居址(2)
 図28 18号住居址(3)
 図29 19号住居址
 図30 20号住居址(1)
 図31 20号住居址(2)
 図32 21・30号住居址
 図33 22号住居址
 図34 23号住居址
 図35 24号住居址
 図36 25号住居址
 図37 26号住居址
 図38 27号住居址(1)
 図39 27号住居址(2)
 図40 28号住居址
 図41 29号住居址
 図42 31号住居址
 図43 32号住居址
 図44 33号住居址
 図45 34号住居址
 図46 35号住居址
 図47 36号住居址
 図48 40号住居址(1)
 図49 40号住居址(2)
 図50 41号住居址
 図51 42号住居址
 図52 43号住居址
 図53 1・2号獨立柱建物址
 図54 3・4号獨立柱建物址
 図55 5・6・7号獨立柱建物址
 図56 8・9号獨立柱建物址
 図57 10号獨立柱建物址
 図58 11・12号獨立柱建物址
 図59 13号獨立柱建物址
 図60 14号獨立柱建物址
 図61 15・16号獨立柱建物址
 図62 17・18号獨立柱建物址
 図63 19号獨立柱建物址
 図64 20・21号獨立柱建物址
 図65 22・23号獨立柱建物址
 図66 24・25号獨立柱建物址
 図67 26・27・28号獨立柱建物址
 図68 29・30号獨立柱建物址
 図69 31号獨立柱建物址
 図70 32号獨立柱建物址
 図71 33・52号獨立柱建物址
 図72 34号獨立柱建物址
 図73 36・37号獨立柱建物址
 図74 38・39号獨立柱建物址
 図75 40・41・42号獨立柱建物址
 図76 43号獨立柱建物址
 図77 44・46号獨立柱建物址
 図78 47・48・49号獨立柱建物址
 図79 50・51・53号獨立柱建物址
 図80 54・55号獨立柱建物址
 図81 56号獨立柱建物址
 図82 溝址
 図83 溝址(1)
 図84 溝址(2)
 図85 溝址(3)
 図86 土坑
 図87 土坑の長短軸・深さの相関
 図88 遺構外出土遺物(1)
 図89 遺構外出土遺物(2)

分析

土器

- 図1 食器の焼き物別割合
- 図2 須恵器の法量
- 図3 黒色処理の食器の法量
- 図4 黒色処理の器種別割合
- 図5 ミガキの模式図
- 図6 食器の分類と変遷
- 図7 土師質の法量
- 図8 甕の分類と変遷
- 図9 ロクロ甕の変遷
- 図10 羽釜の分類と変遷
- 図11 1段階
- 図12 2段階
- 図13 3段階
- 図14 4段階
- 図15 5段階
- 図16 6段階
- 図17 7段階
- 図18 8段階
- 図19 9段階
- 図20 10段階
- 図21 11段階
- 図22 12段階
- 図23 13段階
- 図24 14段階
- 図25 15段階
- 図26 16段階
- 図27 17段階

栗毛坂遺跡群の文字関係資料

- 図1 墨書が施される器種と部位
- 図2 墨書の種類
- 図3 黒書土器出土点数
- 図4 『天』一覧
- 図5 『天』一覧
- 図6 『天』・『天』の時期別分布 (1) (1:1,500)
- 図7 『天』・『天』の時期別分布 (2) (1:1,500)

遺構の分析

- 図1 住居址段階別軒数
- 図2 住居址規模
- 図3 住居址段階別規模 (B地区)
- 図4 住居址段階別規模 (C地区)
- 図5 住居址段階別面積

図6 住居址主軸

- 図7 住居址主柱穴
- 図8 住居址出入口
- 図9 カマドの位置
- 図10 掘り方の類型
- 図11 孤立柱建物址諸形態
- 図12 住居址と孤立柱建物址の関係
- 図13 孤立柱建物址主軸
- 図14 土坑分布と形態別基數

集落変遷

- 図1 B地区段階別変遷 (1)
- 図2 B地区段階別変遷 (2)
- 図3 B地区段階別変遷 (3)
- 図4 B地区段階別変遷 (4)
- 図5 C地区段階別変遷 (1)
- 図6 C地区段階別変遷 (2)
- 図7 鉄器等の分布
- 図8 田切り地形と山間部遺跡

西赤座遺跡

- 図1 地形図 (1:3,000)
- 図2 基本土層
- 図3 遺構配置
- 図4 1号孤立柱建物址
- 図5 IIU区土坑群
- 図6 IVB区土坑群
- 図7 1~4号溝址
- 図8 1・3号溝址出土遺物
- 図9 5号溝址
- 図10 6~12号溝址
- 図11 流路群
- 図12 耕地整理址
- 図13 遺構外出土遺物

中久保田遺跡

- 図1 地形および調査範囲 (1:3,000)

枇杷坂遺跡群

- 図1 地形・発掘範囲・遺構配置
- 図2 1号住居址
- 図3 2号住居址
- 図4 3号住居址
- 図5 1号孤立柱建物址
- 図6 2号孤立柱建物址

- 図7 3号孤立柱建物址
 図8 4・5号孤立柱建物址
 図9 1・2・4号溝址

- 図10 3号溝址
 図11 土坑
 図12 石鏃

挿 表 目 次

序説

- 表1 上信越自動車道(県境～佐久IC間)発掘調査工程および調査契約一覧表
 表2 組織
 表3 遺跡記号一覧
 表4 大々地区一覧
 表5 整理担当

環境

- 佐久地方北部の地形発達
 表1 本地域の地質発達史

歴史的環境

- 表1 周辺遺跡一覧(1)
 表2 周辺遺跡一覧(2)

吹付遺跡

- 表1 土坑一覧(1)
 表2 土坑一覧(2)
 表3 土坑一覧(3)
 表4 土製品一覧
 表5 出土石器一覧

東林ぶた遺跡

- 表1 出土石器一覧

大尾尻古墳群

- 表1 土製品一覧
 表2 出土石器・石片類一覧

丸山遺跡

- 表1 出土石器類・石片類一覧

北山寺遺跡

- 表1 土坑一覧

腰巻遺跡

- 表1 出土石器・石片類一覧

栗毛坂遺跡群 A地区

- 表1 石器・石片類の出土数量

栗毛坂遺跡群 分析(1)

- 表1 ミガキの割合
 表2 段階別住居址一覧

栗毛坂遺跡群 分析(2)

- 表1 栗毛坂遺跡群の文字関係資料(1)
 表2 栗毛坂遺跡群の文字関係資料(2)
 表3 栗毛坂遺跡群の文字関係資料(3)
 表4 栗毛坂遺跡群の文字関係資料(4)
 表5 栗毛坂遺跡群の文字関係資料(5)

付図

- 表1 竪穴住居址一覧
 表2 孤立柱建物址一覧

土器・石器類以外の遺物

- 表1 骨
 表2 種子
 表3 炭
 表4 木本
 表5 草木

第1章 序 説

第1節 調査の契約

1 発掘調査委託契約

本報告書は上信越自動車道(関越自動車道上越線)建設工事に伴い消滅してしまう、長野県佐久市内(群馬県境～佐久インターチェンジ間、約11.9 km)22の埋蔵文化財包蔵地の保護を目的とした発掘調査結果を記録したものである。

上信越自動車道は、首都圏と上信越地方を結ぶ幹線道路として計画され、日本道路公団(以下公団)によって建設される。東京都練馬区を起点とし、関越自動車道新潟線との重複間をもち藤岡ジャンクション(以下「J・C・T」)より西に別れ群馬県・長野県を経て新潟県上越市で北陸自動車道と接続する全延長280 kmの高速自動車国道である。新潟線藤岡J・C・Tより藤岡インターチェンジ(以下「I・C」)までは既に昭和55年7月より供用されている。今回建設される藤岡I・C～佐久I・C間は67 km(第8次施行命令区間)で、群馬県約55.1 km、長野県佐久市約11.9 kmである。

基本計画は藤岡市から長野市間が昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が第8次区間施行命令を受けている。高速自動車国道用地内に所在する埋蔵文化財については、「日本道路公団の建設事業など工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に準じて実施されている。上信越自動車道用地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いおよび調査経過は次のとおりである。

基本計画発表により長野県教育委員会文化課(以下「県教委」)は、埋蔵文化財保護施策のため昭和49年文化庁文化財保護部の指導と国庫補助を受け、予定建設路線の佐久市～信濃町間総延長約112 km、総面積約500 K m²におよぶ建設予定地域内埋蔵文化財の緊急分布調査を実施した。

昭和56年、群馬県藤岡市から同松井田町、同57年、松井田町から長野県佐久市までの路線発表がされた。昭和57年県教委は第2次公共関連事業に伴い予定地域内埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、13遺跡の範囲を確定した。

昭和58年、中心杭が設置されルート確定。

昭和60年度、県教委は公団と工事工程および発掘調査の調整段階に至り、詳細分布調査の必要性が高まった。

昭和61年度県教委は文化庁の補助金を受け、試掘および踏査による詳細分布調査を財団法人長野県埋蔵文化財センター(以下「埋文センター」)・佐久市教育委員会の協力を得て実施し26遺跡の範囲を確定した。

昭和61年、県教委と公団東京第二建設局との協議のうえ、路線決定されている第8次施行命令区間内の埋蔵文化財包蔵地を発掘調査の対象とし、県教委が公団より委託を受け、さらに同年10月これを埋文センターに再委託した。

昭和61年10月、埋文センターは佐久調査事務所を佐久市大字安原1367に設置、6名で発足し、10月7日より栗毛坂遺跡群の一部から発掘調査を開始した。以後足かけ4年にわたり県教委と協議を重ねながら埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。最終的に発掘調査した遺跡は23遺跡、調査期間は昭和61年10月～平成元年5月まで行い、調査面積は合計255,500 m²におよんだ。

報告書作成に伴う整理作業は、次回刊行の下茂内遺跡を除く22遺跡を、佐久I・C以北の先線の発掘調査と並行しながら平成元年4月～平成3年3月までの2年間で行った。

契約の際、取り交される契約書および計画書の書式は、埋文センター刊行の「中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書—岡谷市内—」に掲載されているのでここでは略す。

2 埋蔵文化財発掘調査の契約業務の経過

上信越自動車道は群馬県藤岡市より同松井田町の松井田 I・C（仮称）約34.9 km に至る。これより長野県境に横たわる急峻な山地を蛇行しながら高度を増し、碓氷川・国道18号および信越本線を2度横越した後、碓氷パインバス（国道18号）・碓氷 I・C（仮称）に至る。大山トンネル、県道下仁田・軽井沢線、日暮山トンネルを通過し、群馬と長野の県境となる八風山の南麓（妙義麓船佐久高原国定公園内）をトンネルで通過し、長野県佐久市香坂に出る。

佐久市香坂地域は、関東山地に属する八風山と寄石山を源流とする香坂川が浸食して形成し細長い谷で、川は西に流下し佐久平で千曲川に合流する。上信越自動車道はこの香坂谷の奥、東地区の北斜面を通過し、北側の駒留山をトンネルで抜け、佐久山塊の西端に位置する平尾富士山西麓の平根地区を通過し、佐久平北西部の岩村田地区の仙祿湖近くで佐久 I・C（仮称）に至る。

遺跡は駒留山トンネルを境に、香坂東地区の山間の谷部と佐久平に面する山麓および台地上部に2大別することができる。香坂地区では香坂川に向って南へ傾斜する谷部と寄石山麓の根根上に立地する下茂内遺跡（このみ南斜面に立地）～西袛ぶた遺跡の11か所の遺跡（約68,000 m²）が、平根・岩村田地区には平尾富士の山西麓に大星尻古墳群～北山寺遺跡、佐久平台地上には東大久保遺跡群～枇杷坂遺跡群の12か所の遺跡（約187,500 m²）が所在した。

発掘調査の契約は各年度ごとに行われたが、設計変更・用地買収の遅れおよび踏査・発掘調査段階で県教委・公園と協議を重ねながら遺跡数・調査対象面積がしばしば変更された。その間の経緯について簡略に記したい。

昭和61年度に実施された関越自動車道上越線用地内詳細分布調査を基準に調査対象地が決定された。その後昭和61～62年度にかけ鉾物師釜遺跡・鴉ヲネ遺跡（一部）・袛ぶた城址・留場遺跡・大星尻古墳群（一部）・一本松古墳群が県教委・埋文センター・佐久市教育委員会による踏査・試掘および公園の設計変更によって調査対象から外された。

昭和62年度には丸山古墳群の詳細なトレンチ調査が実施されたにもかかわらず古墳が検出されるに至らず、新たに包蔵地として丸山II遺跡を確認3,000 m²が調査対象となった。

昭和63年度八風山トンネルの坑口に位置する下茂内遺跡は4,550 m²の契約面積で開始されたが予想をはるかに越える豊富な内容を持つ遺跡であったことが判明し、27,000 m²へと大幅に面積が拡大した。そのため発掘調査は1月末まで続き、標高約1,000 m地点での厳寒最悪コンディションで調査は難行した。

平成元年度下茂内遺跡は、八風山トンネル坑口部分の設計変更に伴い1,200 m²の面積が追加された。また、佐久 I・C内に管理用施設の新設計画決定にともない、西赤座遺跡2,500 m²が調査増となった。調査は年内に予定されたが用地買収の問題から翌年度調査に変更された。

平成2年度、公園では平成4年度佐久 I・C 供用開始にむけ、佐久 I・C 先線の工事が急務となり16,200 m²の早急な調査を余儀なくされた。

昭和61年度から平成2年度までの発掘調査・整理作業を顧みると、昭和63年度までの発掘調査は比較的順調に行われた。だが、平成元年度から2年間の予定で開始された報告書作成に伴う整理作業は、その期間中に管理用施設の新設・埋文センター長野調査事務所の調査面積の急増に伴う調査員の応援派遣、あわせて平成4年度佐久 I・C 供用開始に向けての佐久 I・C 先線の発掘調査などにより、大幅に停滞した。

第2節 調査の普及公開と体制

上信越自動車道に関連する埋蔵文化財調査体制は、昭和61年10月1日佐久調査事務所新設によって庶務部2名、調査部5名で実質的なスタートがきられた。県境から佐久I・C間の23遺跡、調査対象面積255,500m²の調査にあたり、その主体年度にあたる昭和62年度・63年度においては、所長・調査部長の着任と開所当初の調査研究員5名から24名と大幅増員のもと一班4名の班編成により発掘調査に対応した。設計変更に伴う下茂内遺跡および高速道管理施設用地の西赤座遺跡の追加契約による発掘調査を除き、昭和63年度にはほぼ発掘調査を完了した。平成元年度からは調査研究員8名体制で平成2年度まで整理作業を行い、23遺跡中下茂内遺跡を除く22遺跡を所収した本報告書の刊行に至っている。

各遺跡ごとの経過は前掲の経過一覧表および第3章各節に記述したのでここでは省略するが、調査経過で触れていない埋蔵文化財保護に対する普及公開活動も調査研究と並行して行った。昭和62年8月2日・昭和63年10月16日栗毛坂遺跡群、同年11月21日下茂内遺跡で現地説明会を開いた。出土品展示会は63年3月3日～6日・平成元年3月2日～5日の2回佐久創造館で開催し、パネル展示はもとより吹付遺跡9号敷石住居址の復原展示などを行い、合計2,400名の見学者に好評を博した。

表2 組織

財団法人長野県埋蔵文化財センター組織表



佐久調査事務所組織表

年 度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度
所 長		伊藤万寿雄	伊藤万寿雄(6.1付)事務 局へ転任 畑 幹雄(6.1付)	畑 幹雄 (庶務部長兼務)	畑 幹雄 (庶務部長兼務)
庶務部長	畑 幹雄(11.1)着任	畑 幹雄	畑 幹雄(所長兼務)	畑 幹雄	畑 幹雄
庶務部長補佐			中沢 克明		
主 任			関 次郎	関 次郎	関 次郎
主 事	六川直利(9.1)着任	六川 直利			
調 査 部 長		丸山敏一郎	丸山敏一郎	欠	欠
調 査 課 長 (平成元年度から設け)				寺島 俊郎(代理)	寺島 俊郎(代理)
調 査 研 究 員	白田武正(9.1)着任 寺島俊郎(10.1)着任 馬場長光(10.1)着任 二木 勇(10.1)着任 山上秀樹(10.1)着任	伊藤 隆之 高田 実 井上 誠典 寺島 俊郎 白田 武正 豊田 伸・ 宇賀神誠司 中野 亮一 岡村 秀雄 中沢 徹 河西 克彦 馬場 長光 河内 行雄 降旗 史敬 黒岩 徹也 二木 勇 小林 秀行 百瀬 忠幸 近藤 尚哉 山上 秀樹 小野 恵一 吉沢 信幸 新海 昭生 和田 文人	伊藤 隆之 新藤 節生 井上 誠典 下島 章博 白田 武正 高田 実 宇賀神誠司 寺島 俊郎 岡村 秀雄 中野 亮一 河西 克彦 降旗 史敬 河内 行雄 二木 勇 木内 美一 三石 俊司 奥水 太伸 宮脇 正典 小林 秀行 百瀬 忠幸 近藤 尚哉 山上 秀樹 小平 恵一 吉沢 信幸	宇賀神誠司 岡村 秀雄 小林 秀行 奥水 太伸 近藤 尚哉 新藤 節生 百瀬 忠幸	宇賀神誠司 岡村 秀雄 小林 秀行 近藤 尚哉 新海 昭生 田中正治郎 百瀬 忠幸 奥水 太伸(調査員)
	計(7名)	計(28名)	計(28名)	計(10名)	計(11名)

第3節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査に当たっては、毎年度3分の1もの調査研究員の異動などがあるため、一定の調査方針に従い共通した方法を取る必要が生じる。その基準を示すため埋文センターでは「遺跡調査の方針と手順」を作成し、これに準じながら各遺跡ごとに調査方針および計画を立て、発掘調査を行った。

2 遺跡・遺構名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便をはかるために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を与えた。3文字の1番目は県内を9地区(10地区目は予備)に分けた地区記号、2・3番目は遺跡名の頭文字から採った。例えば、木戸平(DKD)は、佐久地区の地区記号D、KIDODAIRAのKとDを組み合わせてDKDとした。各種の記録や遺物の注記などはこの記号を用いている。

遺構名称は検出時に決定するため、遺構種類に適合しない場合がある。そのため形状および遺構の特徴から、記録の便をはかるため記号を用いた。

S B (竪穴住居址・竪穴状遺構など)、S T (孤立棟建物址など)、S D (溝・記置原溝)、S K (土坑・竊穴など)、S A (柱列・櫓列)、S L (畑址・水田址)、S M (古墳・方形周溝墓・墳墓)、S F (火を焚いた跡が単独かつ面的に広がるもの)、S H (集石など)、S X (その他の不明遺構)。

- A 北信地区(下内郡、下高井郡、上高井郡、飯山市、中野市、須坂市)
- B 長野地区(上水内郡、更級郡、埴科郡、長野市、更埴市)
- C 上小地区(小県郡、上田市)
- D 佐久地区(北佐久郡、南佐久郡、小諸市、佐久市)
- E 松本地区(南安曇郡、東筑摩郡、埴尻市、松本市)
- F 大北地区(北安曇郡、大町市)
- G 諏訪地区(諏訪郡、岡谷市、諏訪郡、茅野市)
- H 上伊那地区(上伊那郡、伊那市、駒ヶ根市)
- I 飯伊地区(下伊那郡、飯田市)
- J 木曾地区(木曾郡)
- K 予備

※(長野県山城市町村圏に相当する)



表3 遺跡記号一覧

地区	番号	遺跡名	遺跡記号	地区	番号	遺跡名	遺跡記号
東	1	下茂内	D S M	平	13	丸山古墳	D M Y
	2	木戸平A	D K D		14	丸山II	D M Y
	3	吹付	D F T		15	丸山	D M M
	4	上中原	D K N		16	北山寺	D K Y
	5	鶉ヲネ	D U O		17	東大久保	D H O
	6	東林	D H B		18	西大久保	D N O
	7	西林	D N B		19	腰巻	D K M
	8	千草場	D H K		20	栗毛坂	D K G
	9	城の口	D J K		21	西赤座	D N A
	10	東祓ぶた	D H N		22	中久保田	D N K
	11	西祓ぶた	D N N		23	枇杷坂	D B W
12	大星尻古	D O B					
地				岩 村 田			

3 調査区設定と測量

調査区(グリッド)の設定にあたっては、従来の設定方法では、各遺跡ごとに任意の点を基点(NS=0, WE=0)とし、一辺50mの正方形を大地区として設定していた。この方法を用いると、周囲を調査する市町村の発掘調査結果との図上復元が困難であった。そこで当佐久調査事務所では事務所設立にあたり、今までの調査区の設定方法を改変した方法で設定することにした。その内容は、次のような事項である。(図2)

1. 調査区は、国土地理院の平面直角座標系(当事務所では第VIII系 $X=0.000$, $Y=0.000$)を基点に200mの倍數値を 200×200 mの区画に設定し、これを大々地区とした。大々地区は調査範囲を最小限におさえ、北西から南東へI・II・III……のローマ数字をあたえる。

例 栗毛坂遺跡群(DKG)は $X=+31,800$, $Y=-1,400$ が大々地区設定の起点DKG Iとなる。

$X=+31,200$, $Y=-1,000$ はDKG VIII(Aミ)となる。

2. 大々地区を 40×40 mの25区画に分割し大地区とした。大地区は、北西から南東へ順にA→Yのアルファベットをあたえた。

例 DKG VIII(大々地区)を25区画した大地区のAミ部分はDKG VIII Sと表記される。

3. 大地区を 8×8 mの25区画に分割し中地区とした。中地区は、北西から南東へ順に1→25の番号をあたえた。遺構測量の基準とした。

例 DKG VIII S(大地区)を25区画した中地区のAミ部分はDKG VIII S-07と表記される。

4. 大地区を 2×2 mに分割しこれを小地区とした。小地区は、大地区の北西隅を起点としX軸上に西から東へA→Tのアルファベットを、Y軸上に北から南へ01→20の数字を記号として与え40区分し、両者を合わせて小地区名とした。小地区は遺構外遺物の取り上げの基準とした。

例 DKG VIII S(大地区)を40区分した小地区のAミ部分はDKG VIII S-E10と表記される。

各地区の呼称は北西隅で表す。そして、近接し合う複数の遺跡では、当然ながら大々地区を共有することになるが、遺跡単位でその地区名は異なる。

例 DKG IIIは枇杷坂遺跡群(DBW I)・西赤座遺跡(DNA I)・中久保田遺跡(DNK I)と共有する。

各遺跡のグリッド設定は図3・4、表4に記した。

現場による調査区およびベンチマークの設定は、道路公園設置の引照点を利用した。調査区は中地区(8×8 m)が基本で、業者委託をして設定したが、一部は調査研究員によって設定した。標高は同様に公園の基準点を利用してベンチマークを設定した。

遺構などの測量は、原則として簡易測量方法で行った。全体図と遺構実測図については、業者委託の航空写真測量を採用したが、一部では平板測量を実施した。発掘範囲やトレンチの位置、土層のポイントは光波測距機を用いて計測した。

縮尺は、土層および遺構については20分の1、住居址付属施設は10分の1、全体図類は100分の1表記を原則とした。

遺物の取り上げについては、遺構外のは小地区ごとまたはドットあるいは中地区での取り上げとした。遺構内では、層別別の取り上げとした。竪穴住居址は、層別別はむしろん、床面上・カマド内出土などとしたほか、遺存状態の良い遺物は1点ずつ位置と標高を記録した。

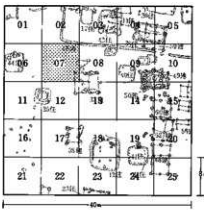
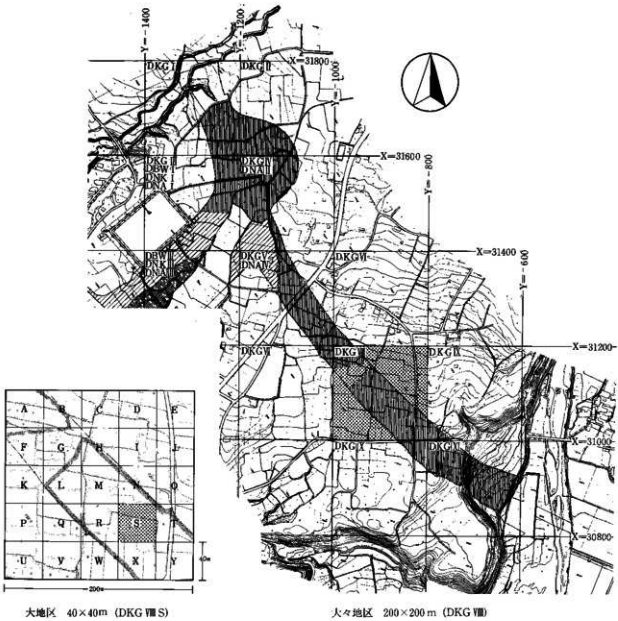


図2 調査区設定

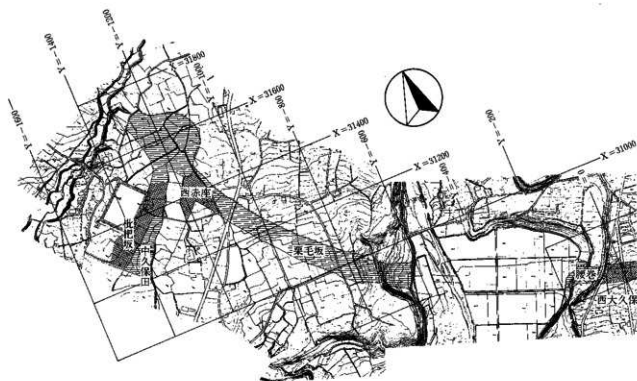


图3 大々地区設定1 (平根・岩村田地区)

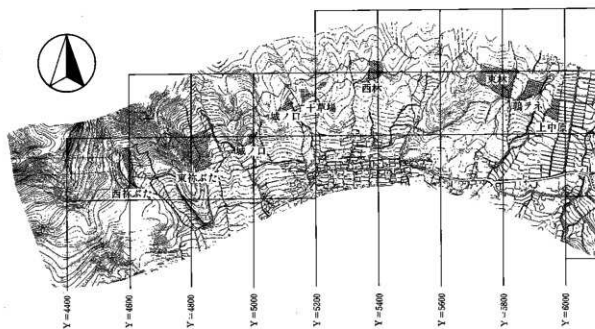
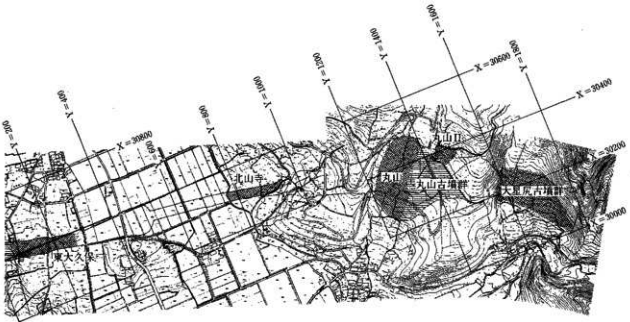


图4 大々地区設定2 (香坂東地区)



X = 30000

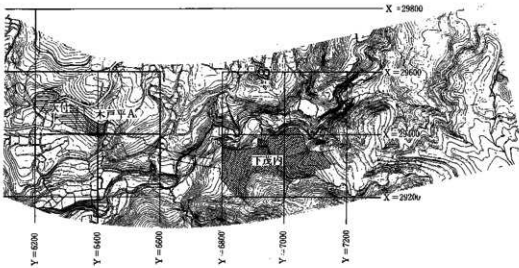


表4 大々地区一覧

地区	番号	遺跡名	調査対象面積 m ²	I	II	III	IV	V	VI
東	1	下茂内	28,200	X = +29,600 Y = + 6,800	X = +29,600 Y = + 7,000	X = +29,400 Y = + 6,800	X = +29,400 Y = + 7,000		
	2	木戸平A	3,000	X = +29,600 Y = + 6,200	X = +29,600 Y = + 6,400	X = +29,400 Y = + 6,200	X = +29,400 Y = + 6,400		
	3	吹付	10,300	X = +29,600 Y = + 6,000	X = +29,600 Y = + 6,200				
	4	上中原	1,700	X = +29,800 Y = + 5,800					
	5	鞠ヲネ	2,400	X = +29,800 Y = + 5,800					
	6	東林	7,900	X = +30,000 Y = + 5,600	X = +30,000 Y = + 5,800	X = +29,800 Y = + 5,600	X = +29,800 Y = + 5,800		
	7	西林	2,400	X = +30,000 Y = + 5,200	X = +30,000 Y = + 5,400	X = +29,800 Y = + 5,200	X = +29,800 Y = + 5,400		
	8	千草場	1,700	X = +29,800 Y = + 5,000	X = +29,800 Y = + 5,200				
	9	城の口	700	X = +29,800 Y = + 4,800	X = +29,800 Y = + 5,000	X = +29,600 Y = + 4,800	X = +29,600 Y = + 5,000		
	10	東祢ぶた	7,400	X = +29,800 Y = + 4,600	X = +29,800 Y = + 4,800	X = +29,600 Y = + 4,600	Y = +29,600 Y = + 4,800		
	11	西祢ぶた	2,300	X = +29,600 Y = + 4,400	X = +29,600 Y = + 4,600				
平	12	大星尻古墳群	20,000	X = +30,400 Y = + 1,400	X = +30,400 Y = + 1,600	X = +30,200 Y = + 1,400	X = +30,200 Y = + 1,600		
	13	丸山古墳群	2,200	X = +30,600 Y = + 1,200	X = +30,600 Y = + 1,400	X = +30,400 Y = + 1,200	X = +30,400 Y = + 1,400		
	14	丸山II	3,000	X = +30,600 Y = + 1,400	X = +30,400 Y = + 1,400				
	15	丸山	25,300	X = +30,600 Y = + 1,200	X = +30,600 Y = + 1,400	X = +30,400 Y = + 1,200	X = +30,400 Y = + 1,400		
	16	北山寺	5,100	X = +30,600 Y = + 600	X = +30,600 Y = + 800				
	17	東大久保	8,700	X = +30,800 Y = ± 0	X = +30,800 Y = + 200	X = +30,600 Y = ± 0	X = +30,600 Y = + 200		
根	18	西大久保	6,400	X = +30,800 Y = - 200	X = +30,800 Y = ± 0	X = +30,600 Y = + 0			
	19	腰巻	5,300	X = +30,800 Y = - 200					
	20	栗毛坂	78,500	I X = +31,800 Y = - 1,400	II X = +31,800 Y = - 1,200	III X = +31,600 Y = - 1,400	IV X = +31,600 Y = - 1,200	V X = +31,400 Y = - 1,200	VI X = +31,400 Y = - 1,000
村			VII X = +31,200 Y = - 1,200	VIII X = +31,200 Y = - 1,000	IX X = +31,200 Y = - 800	X X = +31,000 Y = - 1,000	XI X = +31,000 Y = - 800		
	21	西赤座	9,200	X = +31,600 Y = - 1,400	X = +31,600 Y = - 1,200	X = +31,400 Y = - 1,400	X = -31,400 Y = - 1,200		
山	22	中久保田	7,800	X = +31,600 Y = - 1,400	X = +31,400 Y = - 1,600	X = +31,400 Y = - 1,400	X = +31,200 Y = - 1,600	X = +31,200 Y = - 1,400	
	23	枇杷坂	16,000	X = +31,600 Y = - 1,400	X = +31,400 Y = - 1,600	X = +31,400 Y = - 1,400			

4 報告書編集方法

(1) 編集方針

本報告の対象となる22遺跡はその時期・性格・規模などの点で多様であることから、各遺跡の報告に際しては、事実記載・分析を基本方針とした。このため本報告書は合本的性格を持つが、一方で佐久地区全体が時期的に通観できるような分担体制をとるとともに、冊子としての統一性に心掛けた。なお、各遺跡の評価を下すまでを報告者の責任と考える。

表5 整理担当

地区	番号	遺跡名	遺跡担当	地区	番号	遺跡名	遺跡担当	時代別担当ほか		
東	1	下茂内		根	13	丸山古墳	宇賀神	縄文土器	百瀬・近藤	
	2	木戸平A	百瀬		14	丸山II	宇賀神	縄文小彩石器	新海	
	3	吹付	百瀬		15	丸山	寺島	縄文大彩石器	岡村	
	4	上中原	新海		16	北山寺	寺島	弥生-古墳時代土器	宇賀神	
	5	鶴ヲネ	新海		17	東大久保	寺島	弥生時代以降の石器	岡村	
	6	東林	新海		18	西大久保	寺島	奈良時代以降の土器	寺島	
地	7	西林	宇賀神	岩村田	19	腰巻	寺島	自然遺物	奥水	
	8	干草場	宇賀神		20	栗毛坂	寺岡宇賀	島村神	保存処理	奥水
	9	城の口	宇賀神						写真撮影-プリント	奥水
	10	東落ぶた	百瀬		21	西赤座	岡村			
	11	西落ぶた	岡村		22	中久保田	岡村			
	12	大星見古墳	百瀬		23	枇杷坂	岡村			

(2) 遺構の記述

ア 竪穴住居地の記述

記載は、原則的に以下の順序で記述してある。位置・立地、検出状況・重複・切り合い、規模・形状・床面積、主軸方位、覆土、遺物の出土状況、床面・壁・周溝、柱穴・ピット、カマド、時期。

なお、事実記載の数量が膨大になる栗毛坂遺跡群は、数値等について表を節末に付し、本文中では記述していない。

床面積の計測にはプランメーターを用い、3回の計測の平均値を採用した。主軸方位は、カマド設置壁を上として推定・計測した。

イ 掘立柱建物地の記述

記載は、一部を除いて原則的に竪穴住居地と同様である。主軸方位は桁行き方向で推定・計測し、不明なものについては南北棟として推定・計測した。柱間寸法は柱穴の状況により、柱痕・据え方・掘り方の中心部を基準として計測した。面積は、柱列の内側で計測した。

なお、事実記載の数量が膨大になる栗毛坂遺跡群は、数値等について竪穴住居地同様に節末に付した。

(3) 遺物類の記述

ア 縄文土器の整理と記述

縄文土器の整理に際してはまず必要に応じて計量を行いながら遺構内および遺構外それぞれに按作業

を行った。接合終了後、遺構やグリッドを単位として時期別分類を実施した。分類の単位は草創期から晩期の6期区分を大枠とし、さらに土器型式群ないしは土器様式を単位として設定した。設定項目は以下の15期に区分され、本報告書すべてに共通するものとした。

草創期の土器

早期前葉の土器（押型文系土器・捺文系土器・貝殻沈線文系土器）

早期後葉の土器（貝殻朱紋文系土器）

早期末葉～前期初頭の土器（絡糸体E紋文系土器・花横下層式土器など）

前期前葉の土器（岡山式土器・黒浜式土器など）

前期後葉の土器（碓礪式土器・北山川下層式土器など）

前期末葉～中期初頭の土器（五穀ヶ台式土器など）

中期前葉の土器（壺沢式土器・新道式土器・阿玉台式土器など）

中期中葉の土器（壺内式土器・井戸尻式土器）

中期後葉の土器（加曾利E式土器・曾利式土器・佐久系の土器）

後期初頭の土器（峠名寺式土器）

後期前葉の土器（壺之内式土器）

後期中葉～後葉の土器（加曾利B式土器など）

晩期の土器

以上のような時期設定のもとに土器群の分類を進め、各分類項目ごとに総数量や分布を記録しつつ、資料化できる個体の抽出を行った。

抽出した土器の記載は上記の時期区分にしたがって行い、必要に応じて細分類を加えた。しかし、この段階で分類項目を記号化して表記することは避け、小見出しの提示にとどめた。また、原則的には従来の編年観・型式観におおむね準拠して記述したが、一部本地域に特徴的な土器については便宜的な名称を用いた。

図版の作成に当たっては時期区分の序列にしたがって掲載したが、個別的には実測図を優先し拓影図をそれに続けた。図版中の個体番号については各遺跡を単位として、遺構内・遺構外をとわず初出のものから通し番号をつけた。

なお、土器の分類記述に際しては、廣瀬昭弘・三上徹也・寺内隆夫（内センター長野調査事務所）の協力を得た。

Ⅰ 縄文時代の石器・石片の記述

縄文時代の石器を分類・記述する際に、もっとも一般的に使用される分類言語の範疇は器種分類であろう。この器種分類は外形的特徴などから石器を分類していくが、その分類基準説明言語は各々の石器で異なったもので、統一された同地平で石器を分類したものではない。その要因は外形的特徴からくるイメージが基礎にあるためだ。そのため分類言語それ自体が示す・対応する厳密な石器は存在しない。このことは反面、イメージを説明するための言語枠から外れる石器が存在することも明らかである。であるから、あるイメージを説明するため、石器が表面的に持っているそれだけの形と、その形が生れた背景を含む「形」を説明する言語が混在して分類説明を行なうわけである。

以上のような性格を器種分類は持つが、縄文時代の石器研究が伝統的に用いてきたことも事実であり、これに用いられる分類言語によって意志の伝達がはかられてきた。今後の研究方向としては一般的に認識されている分類言語をどう規定してゆくのが基本的な問題となる。この場合も単なる属性の羅列を越え

た、諸石器の相互の関係性の中でされねばならないと考える。

これらの背景をふまえた上で、本報告では外形の特徴を基にした器種分類によって、原則として、以下の区分・配列に従って記述した。その前提の後、属性等を抽出した。この第一義的な器種分類は、本書の全遺跡を網羅するものである。

各器種の外形の特徴を、以下のように捉えた。

1. 尖頭器：鋭利な先端部を作出した石器
2. 石鎌：扁平で鋭利な先端部を作出した、三角形の小形石器
3. 石錐：角錐ないし円錐状の先端部を作出した石器
4. 石匙：対照的な抉りを有し、刃部を作出した石器
5. スクレイパー：縁辺部に刃部を作出し、規則的な剥離痕が二段以上重なる石器
6. ビエスエスキュー：円辺に対になる剥落した痕跡が連続する石器
7. 小剥離痕を有する剥片：素材の一部に小剥離痕が連続する石器
8. 大形剥片石器：おもに安山岩系の素材剥片の縁辺に刃部を作出した石器
9. 打製石斧：礫・大形の剥片を打ち欠いて斧形に整形された石器
10. 磨製石斧：礫・大形の剥片を打ち欠いて、さらに研磨して、斧形に整形された石器
11. 敲石：てごらな礫の端部に敲打痕が認められる石器
12. 磨石類：てごらな礫の面に磨面・凹みが認められる石器
13. 石皿・台石：大形の礫素材の面に磨面が認められる石器
14. 多孔石：大形の礫素材の面にV字状の凹みが認められる石器
15. 砥石類：礫素材の面に研磨作業面を持つ石器
16. 礫器：礫素材の一部に粗雑な加工が認められる石器
17. 石製品
18. 軽石製石
19. その他
 - ・剥片：主要剥離面を有する石片
 - ・石核・残核：ネガティブな岩塊、特に碎屑状なものを後者とする
 - ・原石

ウ 古代の土器

土器の種類および分類、また、時期は3章18節5分析(1)土器の中で行うこととする。各遺構からの出土土器の整理に際しては特に遺構の時期と異なる土器を除き破片を含め遺物の個体数を把握することにとめたが、整理期間および筆者の能力から各遺構に帰属する遺物を詳細に分別しきれなかった。

図版作成に当たっては、食器・煮沸具・貯蔵具・鉄製品・土製品・石製品の器種順に、その各々は須恵器・土師器・灰釉陶器の順に掲載した。

エ 輸入土器

輸入土器に際しては市川隆之(当センター長野調査事務所)に分類して頂いた。

第2章 環境

第1節 佐久地方北部の地形発達

以下の記述は、発掘調査を行った各遺跡の土層を基に、小地域での過程を類推し一般化を試みたものである。使用したデータは各遺跡の土層所見と5000分の1地形図を主とし、地質に関しては『佐久市志自然編』（註1）や『上越線地踏査報告書』（註2）などに発表されている内容に準拠して記した。

1 地形概観

上越線ルートに伴う地形は、大観して東半が山地、西半が平坦地となっており、東から西へ傾斜していると言える。平面的な位置では、南北に細長い佐久盆地の東北端部に当たり、周辺山地から盆地間線の緩斜面を上越線ルートが東西に突き抜ける形になっている（図1）。一般に東半の地質は古く、地形も鮮新世後期以来大きな変化はなく、大局的には侵食地域である（註3）。西半は盆地中央（本地域より南方）へ向けて緩く傾斜しており、本地域では特徴的に浅間軽石流堆積物が表層を覆うものの本来は段丘（または扇状地）が発達する地域とみられ、主として南流する湯川等起源とする更新統が卓越するものと考えられる。このことから、西半は完新世以降の侵食地域であり、完新世の堆積地域に当たるいわゆる「沖積低地」は中込以南の千曲川流域の一带に求めることができる。

以上を背景とするため、今回発掘調査した各遺跡の土層は全般に薄く、土層の広がりも狭く、堆積量は沖積低地のものと比べものにならない。これに対し、中込以南の沖積低地では堆積量が圧倒的に多いことが予想され、長野盆地や松本盆地と同様、地下の深いところに縄文時代の遺跡が埋没している可能性が高い。

2 基盤地質

東半の周辺山地はグリーン・タフの駒込層・八重久保層、鮮新統の兜岩層および平尾山安山岩類・志賀溶結凝灰岩類・貫入岩類・荒船火山岩類、更新統～完新統の河川堆積物から成り、西半の平坦地は更新統最上部の浅間軽石流堆積物・軽石流二次堆積物、完新統の河川堆積物から成る（註1）。

地史から見ると、地質学のオーダーでの現地形が形成されるまで4回のステージを設定することができる（表1）。ステージ1はフォッサ・マグナ形成期（約2800万年前）～大杭時階の変動期（約400万年前）（註4）で、海の時代である。フォッサ・マグナ形成直後のグリーン・タフ海底火山活動に始まる活発な火成活動や地斜向流入する多量の土砂によって駒込層や八重久保層が堆積し、その後の地殻変動に伴って兜岩層（註5）や平尾山安山岩を堆積した。フォッサ・マグナ地域に生じた海（地斜向）が発展し変化し、やがて消滅（海退・陸化）していく段階である（註6）。

ステージ2は大杭時階の変動期～六甲変動期（約50万年前）（註7）で、湖と火山の時代である。小諸溶結凝灰岩や志賀溶結凝灰岩の噴出に伴って現佐久盆地からさらに西方の川西地区と呼ばれる地域にかけての一带が陥没して大きな湖が生じ、陸成層である小諸層群が堆積した。この段階は東半が陸化して現在ほど高くはない程度の山地になっていたと考えられ、貫入岩類や荒船火山岩類など旺盛な火山活動の舞台となっていた。

ステージ3は六甲変動期～更新世末（1万年前）で、川の時代である。佐久盆地や周辺山地、川西地区の丘陵が形成され、現地形の基本が完成された。東半の大型谷である香坂川に沿って、何回かの気候変動に伴

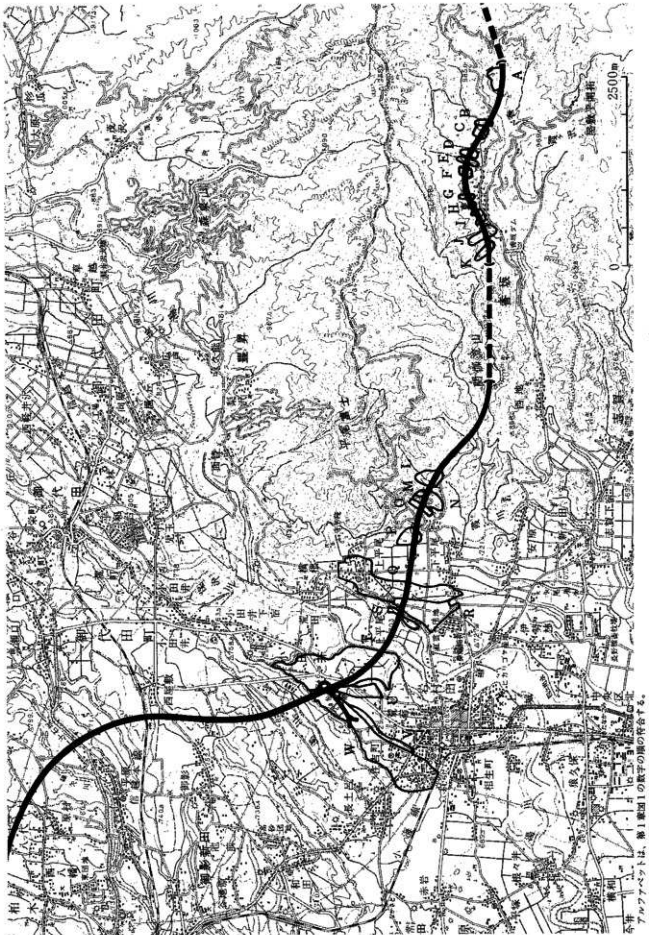


図1 地形図

表1 本地域の地質発達史

ステージ	年代	地層	絶対年代 (万年前)	地史上の事象	火成活動	地質環境
ステージ4	完新世	(西半) (東半)	1	江戸海進 縄文海進 最終氷期終了	浅間火山活動 A 降下礫石・スコリア H スコリア Sh テフラ 前掛山の活動	沖積段丘の形成 扇状地の形成
		扇状地堆積物 浅間軽石流 段丘堆積物				
ステージ3	更新世	扇状地堆積物 段丘堆積物	8	六甲変動	(八ヶ岳火山活動) 烏帽子火山群火山活動	段丘の形成
		扇状地堆積物 段丘堆積物	10			
ステージ2	鮮新世	小諸層群 志賀窪積凝灰岩層	50 164	大統時節の変動	塩基性火山活動	ブロック運動 堆積盆が南部へ移動
		扇状地堆積物 段丘堆積物	50			
ステージ1	中新世	扇状地堆積物 段丘堆積物	400	フォッサ・マグナ形成	酸性火山活動 グリーンタフ 海成火山活動	東平上昇 西半陥没一古小諸湖発生 一帯の平準化 地面向斜の消滅一陸化 地面向斜が東西に分化
		扇状地堆積物 段丘堆積物	540			
		八重久保層 駒込層	2800			

う段丘が形成され、河床は上下しながら全体として低下していった。西半は北部の烏帽子火山群-浅間山の形成と堆積盆の南方への移動に伴って南へ緩傾斜する地形となり、多分、南流する湯川の下流域には更新世の扇状地が形成され、また、湯川の下刻により段丘が形成されたと思われる。その後、更新世後期に入って八ヶ岳一帯の急激な上昇によって南北の傾斜の向きが逆転し、千曲川が現在のように北へ流れるようになって湯川の下流の流向が北方へJ字形にターンしたと推測される。

この間、本地域は全体に上昇と侵食が進み、山地はますます急峻に、谷部にはますます幅を広げ、だんだん現在見る地形に近づいてきたものと考えられる。こうした中、1万3000~1万年程度前2回にわたって浅間山が大噴火している。大量の軽石流が湯川に沿って流下し、扇状地や段丘を埋めつくした。

ステージ4は1万年前~現在で、地質年代と、周辺山地と盆地周縁斜面という本地域の地形的な位置からみて、地殻変動や河川の動きといったグローバルな見方は必要ない。マスマーブメントによって細部の地形が形作られた時代と言える。完新統または沖積層(註8)が形成される段階であり、地形形成のオーダーは今までの段階に比べて極めて小さく、所々で変化に富んでいる。以下に各遺跡の土層のデータを基に小地域での地形形成過程を考察する。

3 地形区分

上越線が山地から盆地周縁の緩斜面を貫いていることについては既に触れた。ここではまず、遺跡が立地する地形を山地と平地とに大区分する。ただし、盆地地形を周辺の山地と平坦地に分けるとき、平坦地には段丘や扇状地などから成る周縁斜面と沖積層から成る中央部の沖積低地とが含まれる。ここで言う平地は、盆地周縁の斜面を指す。

さらに、各遺跡が営まれていた頃の地形を基に小区分し、山地-河原、山地-谷間、山地-斜面、平地

一台地、平地—沖積段丘の5タイプについて記載する。

4 各タイプ

山地—河原タイプ

下茂内遺跡がこれに当たり、香坂川による沖積段丘上に立地している。

下茂内遺跡の基本土層は(第2図1)、段丘礫層または崖堆積物を基盤に、下位より層相の側方変化の激しい黄色砂層<XV層>、As—YP層(浅間—板鼻黄色軽石層)、ラミナを含む黄色砂壤土層<VII—VIII層>、上部が壤土化した(壤土モデルのA—C層)壤土層<V—VII層>、Sh層(下茂内テフラ層)、土壌モデルのA3層相当の土壌層<IVB層>、土壌モデルのA—B層相当の土壌層<III—IVA層>、土壌モデルのA—B層相当の砂壤土層<I—II層>である。この内、VII層、V層、IVB層には軽石片やスコリア質軽石等を少量混入している。また、VII層上面での検出面の地形は、香坂川の流線に平行して山側より微高地→低地→微高地→低地→沖積段丘段丘と、北東—南東方向に細長い微地形が縞状に繰り返す。低地には巨—小礫が密に堆積して、小刻みに蛇行している。

遺物は、As—YP層の上・下位から縄文草創期の尖頭器が、Sh層の下位層から縄文前期初頭の土器片が、Sh層の上位層から縄文中期の土器片が検出されている。なお、As—YPの絶対年代は1万3000—1万4000年前とされており(註8)、遺物のあり方と調和的である。以上から、約1万8000年前とされている最終水期最盛期に周辺斜面から砕屑物が供給されて谷底に平坦面が形成され、縄文草創期には平坦面上を古い香坂川が幾本かの分流を伴って下茂内遺跡を流れていたと考えられる。分流の存在と小蛇行の状況から、この遺跡の分流のどこかが閉塞されており、水期の砕屑物によってダムアップされていた可能性がある。いずれにせよ、分流間の微高地(中洲や島)で付近に転がっていた原石を打ち欠いて尖頭器を製作していたものと思われる。こうした中、西方の平地に浅間軽石流が流下するのと同時にこの遺跡にAs—YPが降下した。

縄文草創期後の河床低下に伴って遺跡は沖積段丘化(水を被らなくなった)し、谷壁斜面から小規模なマスマーブメントによって壤土層が堆積した。縄文早期初頭—中期頃にはこの壤土層は壤土化しており、草木の生い茂ったテラス状の景観となっていた。Sh降下後、少なくとも縄文中期をおとして谷壁斜面から極めて緩慢に細粒の砕屑物が供給され続け、IVB層が堆積した。おそらくこの間、香坂川は下刻が優先し、この遺跡が位置する沖積段丘面と河床との比高はだんだん大きくなっていったと思われる。

縄文中期以降、やや速いスピードで細粒の砕屑物が供給された段階が少なくとも2回(V層とIVB層)あり、それぞれの後に砕屑物の供給が長い間ストップしていた時代があったことが考えられる。これはIII—IVA層とI—II層とが別々に土壌化していることによる。ただし、詳細な時期は不明である。

山地—谷間タイプ

千草場遺跡、東祓ぶた遺跡、西祓ぶた遺跡、大星尻古墳群がこれに当たり、香坂川の支流がつくった谷中に立地している。

東祓ぶた遺跡の基本土層は(第2図2)、ロームを基盤に下位より基岩の風化礫を含む腐植した砂壤土層<VI—VII層>、異質物を多く含むやや土壌化した(土壌モデルのB層)粘土—壤土層<V層>、Sh層、Shテフラを塊状に含んだ強腐植層<IV層>、風化礫やShを含み壤土化した(土壌モデルのA—B層)砂壤土層<II—III層>、および耕土<I層>で、緩やかな斜面の底部付近に全層厚が最大70cmほどで堆積している。全体に細粒物質から成り、基岩の風化礫などの異質物を含み、特に下半の各土層については層全体の土壌化が進んでいる。下半の各土層に異質物を含み、土壌モデルのB—C層を欠くことから、下半の土層は現地で風化・土壌化したのではなく、上方で形成された腐植層がゆっくりと葡行してきて堆積したと考えられる。

遺物は、VI層上部から縄文早期末の土器片が、III層中から縄文中期後葉の土器片が検出されている。

Sh層は、浅間火山の前掛山が噴出した発砲不良の安山岩質スコリア質軽石で、山梨文化財研究所の河西氏によると、MK-26~28(前掛山N 0・26-28)テフラに対比される。東柵ぶた遺跡と同様の堆積環境にあった西柵ぶた遺跡や下茂内遺跡でも明瞭に確認されることから、今回の発掘調査で新たに発見された鍵層と言える。

Shテフラの降下時期は、下限について、下茂内遺跡ではSh層直下のV層上部から縄文早期初頭の土器片が検出され、東柵ぶた遺跡では崩積土と思われるV層と下方に小分布するVI層を挟んで、VII層上部から縄文早期末の土器片が検出されている。また、上限について、下茂内遺跡ではSh層直上のIVB層から縄文中期後葉の土器片が検出され、東柵ぶた遺跡では上位層のIII層上部から下茂内遺跡と同タイプの土器片が検出されていることから、縄文前期初頭~中期後葉であろうことが示唆される。

ここで、後述する表層物質の移動を考慮すると、上・下限の範囲が狭まる可能性があるが、移動・堆積

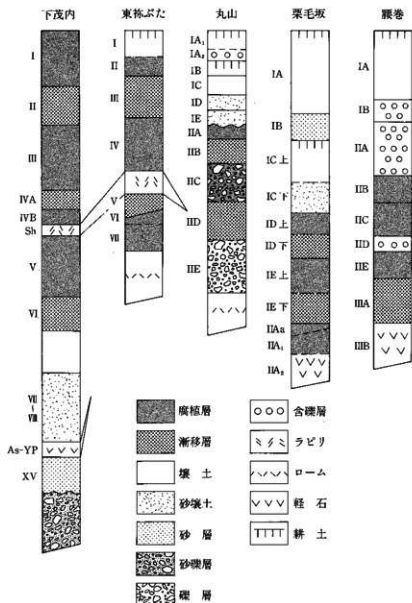


図2 基本土層

に関する実地のデータが現在までのところ明確ではないので、これ以上論を進めることはできない。絶対年代で約4000～6000年前の噴火によるものと理解される。

山地—斜面タイプ

木戸平A遺跡、吹付遺跡、鶉ヲネ遺跡、上中原遺跡、東林遺跡、西林遺跡、城の口遺跡、丸山II遺跡、丸山古墳群、丸山遺跡がこれに当たり、中心河川である香坂川に向けて緩傾斜する斜面上に立地している丸山遺跡の基本土層は(図2)、ロームを基盤に、下位より砂質泥をマトリックスとして巨礫を含む淘汰不良の土層<II E層>、塊状のローム粒や小礫大の風化礫などを多く混入しや土壌化した泥層<II D層>、巨礫を混入する部分もあるが全体に均質で腐植している壤土層<II C層>、土壌モデルのA～B層相当で小礫をわずかに含む壤土層<II A・II B層>、および遺跡内の小谷部を埋積した砂壤土～壤土層<I A1～I E層>である。丸山遺跡は南西向きに張り出した広い尾根内の凹地部に位置し、凹内のはば中心に当たる部分を小谷が南西流していたらしい。小谷を埋積したI A～I E層の土壌化はあまり進行していない。小谷付近ではII A～II B層が削刺され、II C層の直上にI層グループが重なっていることから、I層グループの何層かはI層グループ堆積以前に人為的に動かされた土である可能性もある。

II C層が、縄文前期末～中期初頭の土器片と石器、平安時代の土師器・須恵器を含んでおり、II C層を検出面に縄文時代と平安時代の遺構が検出されている。

地形形成を考察する上で注目したいのはII E層の存在である。礫を多く含み、マトリックスが砂質泥であるということは、比較的短期間に、あまり水の影響のない状態で堆積したことを物語っている。このような堆積物を発生させるメカニズムとして、人為的な埋め立て、崖錐性の崩落、土石流(mud-debris-flow土質の崩壊物の流作)が予想される。これらの内、人為的な埋め立てはII E層の規模・堆積時期からみて、当たらない。また、崖錐性の崩落は3つのメカニズムの中で最も時間を要するため、このような堆積物にしばしばミナ様の編模様や単層上部に薄い腐植層が見られたり、背後に急斜面を背負っていたりするが、丸山遺跡ではそういった所見はない。したがって、斜面上部が崩壊し、遺跡内の凹地を経由または到達点としてII E層が堆積したと考えられる。

この時の移動距離は土石流のもつ粘性からみて、それほど長くはなかったと思われる。

また、時期は下位層がローム層で上位層が縄文前期末～縄文中期初頭の遺物包含層となっていることから更新世末期～縄文前期中葉が予想されるが、地形学の成果(註10)から、河川上流部では永期に堆積が、間氷期には侵食が行われることが広く知られており、最終永期最盛期(約1万8000年前)または永期後半の頃(波部, 1991によると永期後半の方が堆積量が多い)であろうと思われる。

II E層の堆積後、崩積土を堆積する時代が続く(II D層堆積期)、縄文前期頃から斜面が安定した。その後平安時代まで御行土が堆積する静かな環境下にあったものと思われる。またこの上位に崩積土を暗示するII A層とII B層が堆積していることは、II B層とII A層を堆積した頃の気候が1万年～6000年前のII D層(崩積土)を堆積した時代と同様にやや寒冷な気候であった可能性を表わしている。

平地—台地タイプ

東大久保遺跡、西大久保遺跡、栗毛坂遺跡群B・C地区、西赤座遺跡、中久保田遺跡、枇杷坂遺跡群がこれに当たり、浅間軽石流がつくった平坦な台地上に立地している。

本地域には「田切り」地形が特徴的に発達するが、上記した各遺跡には埋没した古い「田切り」地形をしばしば認めることができる。古い「田切り」地形については、栗毛坂遺跡群が最も資料が豊富で、現地形が形成されるまでの過程を読み取ることができる。

栗毛坂遺跡群の基本土層 (M2、L) は、軽石流堆積物を基盤に、下位より基盤の腐植土層<II Aa・II A1層>、上部が土壌化した細粒砂と小礫から成る含礫泥層<I E上・I E下層>、上部が土壌化した異質物を多く含む含礫泥層<I D上・I D下層>、異質物を若干含むFe・Mnの集積層となっている砂壤土層<I C上・I C下層>、および水田耕土と集積層<I A・I B層>で、この内のI C層は全体に一旦グライ化した後の集積と考えられ、ある時期に地下水の通り道になっていた可能性が高い。

I層グループは台地上の凹地を埋めて堆積し、IE層からIC層へと上位層へ至るほど土層の広がりが大きくなり、特にIC層は凹地に対して溢れるように分布している。全層厚はB地区の東南部が厚く最大で150cmほどである。土層の広がりと含まれる礫の量、緩傾斜地であることから推測すると、シート状に広がる泥流による堆積物と考えられる。

遺物また遺構は、IIA1層から縄文中期以降、および古墳時代末～奈良時代初頭の、IE層から平安時代の、I C層から中世のものが検出されている。

基盤面の小地形を見ると、B地区の北西端部とこれに続くC地区が高く、B地区中央部より南東側は急な落差を伴って約5m低い面が形成されている。地表面の地形は緩く南傾斜しているため、土層は北部で薄く、南部で厚くなっている。低い面の上面は小規模な波状地形をしており、微高地部分の長軸はほぼ南北方向である。この方向は遺跡の東方を蛇行する湯川の流線に調和している。したがって、軽石流堆積後に遺跡の南東部が湯川によって侵食され、その結果落差5mの沖積段丘崖が形成され、さらに湯川の河床低下に伴って低位の沖積段丘面が形成されたと解釈される。こうして、古い「田切り」地形が出来上がった。

その後、泥流による埋積過程に至るが、I層グループの堆積時期に注目したい。発掘所見から得られる資料から、IE層は奈良時代初頭～平安時代、ID層は平安時代末～中世初頭、IC層は中世前半と予想される。松本盆地で筆者が考察した気候との関連と調和するのはID層とIC層であり、松本盆地との気候の差が大きくない限り、大量の降雨に伴う自然災害（洪水・中小河川の氾濫など）によるものと考えられる。IE層の堆積時期は、温暖期に向かう気候的には極めて安定した時期と思われ、地域的な気象上の時変があったか、人為的な開発に伴うアクシデントがあったのかも知れない。

平地—沖積段丘タイプ

北山寺遺跡、腰巻遺跡、栗毛坂遺跡群A地区がこれに当たり、沖積段丘崖をすぐ背後に持つ小規模な沖積段丘面上に立地している。

腰巻遺跡は湯川の低位沖積段丘面上にあり、基本土層は(第2図5)軽石流堆積物を基盤に、下位より基盤の腐植土層と漸移層(七葉モデルのA-B層)<II E・III A層>、崩落による含礫泥層<II D層>、異質物をあまり含まない2枚の腐植土層<II B・II C層>、厚い2枚の崩落による含礫泥層<I B・II A層>、および耕土<I A層>で、崩落による堆積物の分布が上位へいたるほど沖積段丘崖側から河川側へ進出しており、これに伴ってほぼ平坦な沖積段丘面から急斜面へと地形が変化している。

遺物と遺構は、II C層に縄文早期末・後期初頭の土器片・石器が含まれており、II B層から古墳時代前期の住居址と土師器等が検出されている。その他平安時代後期の住居址、中世の溝址、近世の溝址が検出されたが、複雑な土層の堆積状況のために掘り込み面がもう一つ明確でない。

対岸の低位沖積段丘上にある栗毛坂遺跡A地区では、基盤(腐植土層も含む)の上位層から縄文早期末～前期初頭の礫群と土器片が検出されており、腰巻遺跡の立地条件と時期が調和する。湯川と軽石流堆積物の上面との落差は約30mあり、1万年前から7000年前の間にこの落差が生じ、遺跡が営まれたことになる。栗毛坂遺跡B地区の沖積段丘崖(落差5m)を形成した時間、基盤の侵食面上に腐植層が形成される時間

を考慮すれば、落差約30mの段丘崖の形成に費やした時間はさらに短くなることが予想され、湯川の侵食の激しさを物語っている。

また、腰巻遺跡の土層で注目されるのは、上位層へいたるほど粗粒になる傾向にあることで、先に触れた平坦面から急斜面への地形発達が粗粒化に関わっていることが解る。この動因については後に述べる。

5 地形形成のパターン

(1) 沖積段丘の形成

更新世の段丘形成についての詳細な資料は近年富に増加してきている(註10)。それによると、河成段丘の

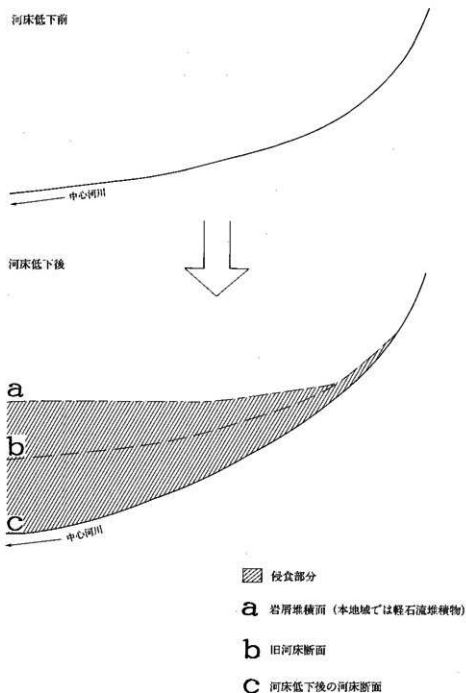


図3 沖積段丘形成のモデル

形成は気候との関連が深く、氷期には河川上流部では斜面崩落物による堆積が、下流部では流量の減少に伴って侵食が行われ、逆に間氷期には上流部で侵食が、下流部で堆積が行われる。したがって、現在谷中に見られる段丘群はかつての気候の変化の痕跡であり、約160万年間の山地の上昇運動を勘案すれば高位にある段丘ほど古く、また侵食を受けており、低位にある段丘ほど新しく原型を保っているということになる。ただし、段丘に関わって使う「高位」や「低位」の語は単に河川からの比高を表すのではなく、離水した時期を表している。

下茂内遺跡は香坂川との比高が約23 m あるが、遺跡が立地する段丘面より低位には新たな段丘は発見されず、段丘を構成する礫層も断面で分層することはできないので、これが最低位段丘=沖積段丘であることが判る。つまり、最終氷期の間に側壁から大量の崩落物の供給を受けたが、谷幅が狭い分、厚く谷底を埋積した。そして、最終氷期終了(1万年前)以降連続的に崩落物を下刻し続けた結果、ほぼ一気に比高の大きな沖積段丘が形成されたと考えられる。往々にして遺跡が立地する段丘面と現河床との比高が大きいと、「どうやって生活用水を得たのだろうか」と悩む向きがあるが、河川の下刻を考える必要がある。即ち、その遺跡が営まれた時期の河床の高さは、その遺跡がどの高さ(離水期)の段丘面上に立地するかを考察しないと推定できないのである。

ところで、栗毛坂遺跡群で見られる約30 m の沖積段丘崖はどのように形成されたのであろうか。河川の河床断面は総じて平衡曲線をなすが、最終的に到達する位置は海面であるという(註11)。ミクロにみて、山間盆地と周辺山地では、盆地内の中心河川との合流点の高度が平衡曲線の最終到達位置に当たる。本地域の場合、香坂川や湯川と千曲川との合流点がそれぞれである。ところが、中心河川の河床自体も下刻が行われているので、平衡曲線の到達位置の高度も下降し続ける。1万年前以降の上昇運動がわずかなものとして考慮にいれなければ、河川の下刻の最大の要因を中心河川の河床低下に求めることができ、この時の侵食量は河川の下流域が大となる(註3)。

以上に加え、最終氷期(約1万年前)には浅間軽石流が湯川の中・下流域に流下して河床を上げている先端は千曲川にまで達し、湯川や千曲川は直ちに元の河床曲線に戻そうと、急速に軽石流堆積物を侵食(下刻=河床低下)し、結果として落差30 m の沖積段丘崖が出来上がったものと考えられる。

(2) マスムーブメントの概要

マスムーブメントは風化した物質が重力によって斜面上を下方へ移動する現象で、移動体の速度や規模は斜面の角度や含水量に多くを支配される。匍行、ソリフラクション、流動、滑動、落下に区分されている。

匍行は最もゆっくりとした動きをするもので、年間の移動距離は数ミリ〜数センチメートルといわれている。匍行の特徴は明確なすべり面を示さないこと、表面の物質が微地形を変えずに移動する。

ソリフラクションは主として凍上現象に関わって、霜柱などによって「浮いた土」が溶着の際に下方へ徐々に移動するものである。

流動は規模が大きく速度も速い。いわゆる「山くずれ」の概念が適当である。含水量や構成物質の粒径によってさらに細分され、岩屑流(debris-avalanche)、土石流、泥流などと呼ばれる。

滑動は明確なすべり面上をその上にある物質がほとんど変形しないで移動するもので、いわゆる「地すべり」の概念が適当である。すべり面は粘土層などの不透水層が担うところが大きい。

落下は岩層が全部または部分的に空中を団塊となって落下するものである。

以上の内、本地域で確認できたものは匍行と流動による堆積物である。以下に土壌との関係について述べる。

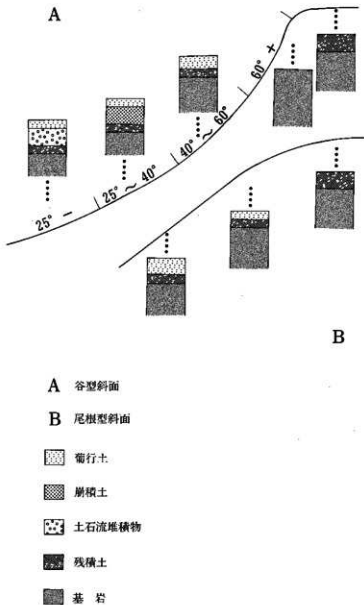


図4 谷型斜面(A)と尾根型斜面(B)における斜面形と表層物質の関係(平野1968より引用)

(3) 斜面での堆積

図4は斜面での土層の堆積をモデル図化した(註12)。ここでいう残積土とは、A～C層の土壤モデルの基本となるもので、基岩の風化物質が移動せずに原位置で土壌化し、堆積モデルでは傾斜角60°以上の急斜面を除いてあらゆる場所で確認できることになっている。土石流堆積物は流動現象によって下方へ移動し、モデルでは残積土上に緩斜面で堆積することになっている。崩積土は移動物質が移動先で土壌化したもので、崩行土より速い動きをする。モデルでは25～40°のやや急斜面で堆積する。崩行土はマスマーブメントによる堆積物としては一般的なもので、動きが極めて緩慢なために移動前・中・後を通して腐植化し、漸移層を伴わないことが多いと考えられる。したがって、急斜面を除くあらゆる斜面上で確認されるはずである。

実際の土層はどうなっているのだろうか。モデルのように基岩-残積土-崩行土の組み合わせは腰巻遺跡で見られるのみで、モデルに近い基岩-残積土の組み合わせは東祿ぶた遺跡と栗毛坂遺跡群に見られる。

全体に匍行土より移動の速い崩積土や土石流による堆積物が多いことに気付く。これは、傾斜角や降水量に異常がなかったとすれば、斜面表層の風化物質を支え続けるような植生が確固としていなかったことを想起させる。

極めて大ざっぱな考察ではあるが、移動の時期を勘案すると興味深い。山地では縄文草創期～早期の間に土石流や崩積土の堆積が行われ、平地では同じ時期に残積土が形成されている。もちろん傾斜角の問題を考慮する必要があるが、少なくとも暖巻遺跡が立地する地形環境は下茂内遺跡と共通する。異なる点は標高であり、「縄文海進」に向けて温暖化の傾向にあったとは言え、まだ現在の気候より寒冷だったとされており(註8)、山地と平地との植生の差が移動体の速度の差に表れたものと考えられる。続く縄文早期～中期では、山地も平地も匍行土の堆積を主とする穏やかな時期となり、Sh層もよく保存されている。

その後については資料の共通点がありませんために追究できないが、以上のように、気候が及ぼしたマスマーブメントの移動速度への影響を現在ある資料から読み取ることができる。

6 まとめ

- (1) 1万年前以降の河床低下は場所によって著しく大きいところがあり、これは1万年前以前の崩落物の厚さと中心河川の下刻の程度に支配される。
- (2) マスマーブメントの移動速度は、移動した時期の気候と標高に左右される可能性が高く、縄文草創期～早期には山地で比較的急速度のマスマーブメントが活動し、平地では緩慢な動きが認められた。縄文前期～中期には全域で緩速度のマスマーブメントが活動した。

註

- 註1 佐久市志編纂委員会 1988 「佐久市志・自然編」
- 註2 建設企画コンサルタントほか 1980 「奥越自動車道上越線松井田一佐久間地盤調査報告書」
- 註3 藤田和夫 1983 「日本の山地形成論」
- 註4 飯島南海夫ほか 1960 「古小諸湖と標結凝灰岩について」『フォッサ・マグナ総研紙』
- 註5 飯島南海夫ほか 1958 「フォッサ・マグナ東部の火山と基盤」『地球科学』37
神津徹祐・木崎喜雄 1955 「北佐久郡誌」
- 八木貞助 1931 「信濃荒船火山岩産の植物化石と其の周辺地質との関係」『地質学雑誌』43
- 註6 飯島南海夫 1962 「フォッサ・マグナ北東部の火山層序学的並びに岩石学的研究(その1)」『信州大学教育学部研究紀要』12
- 註7 藤田和夫 1962 「六甲変動、その発生前後—西日本の変遷構造と第四紀地殻変動—」
1968 「第四紀研究」7
- 註8 井関弘太郎 1983 「沖積平野」
- 註9 河西学・山梨文化財研究所 1990 「佐久市下茂内遺跡テフラ(報告)」
- 註10 渡部潤久 1991 「北上低地帯における河成段丘面の編年および後期更新世」『第四紀研究』1
古木秀一郎・宮寺正美 1986 「荒川中流域における下位段丘の形成過程」『第四紀研究』
伊藤真人・正木智幸 1984 「北アルプス、乳川流域における更新世の岩屑供給期」『地理学評論』57
平川一臣・小野有五 1974 「十勝平野の地形発達史」『地理学評論』47
- 註11 古川虎雄 1985 「濁淵変動帯の地形学」
- 註12 平野昌繁 1968 「斜面形と表層物質の関連性についての一考察」『地理学評論』41

第2節 歴史的環境

佐久地方は以前から、地元教育委員会などによる埋蔵文化財調査が進められており、着実にその成果を蓄積してきた。そして、上信越自動車道の建設を契機とした大規模な開発事業に先立つ、埋蔵文化財の調査件数も大幅に増加し、次々と新しい知見を得ている。

東に妙義荒船佐久高原国定公園、西に八ヶ岳中信国定公園、北は浅間の峰々に囲まれ、四方に美しい山なみを望む地である。ここを甲武信岳に源を発する千曲川が南北に貫流し、その数多くの支流は人々に水利と潤いとを与え、またそれらによって開析された大小さまざまな河岸段丘上には、数多くの原始・古代の遺跡が知られている。この千曲川に並行して、佐久甲州街道(国道141号線)が南北に走り、交通の動脈となっている。また高速道をはじめとした交通網の整備により首都圏から信州への玄関口として、新たな展開を見せようとしている。古くは古東山道や中仙道が、東海・近畿と関東とを結ぶ政治・経済・文化上の重要路であったように、新たな1ページを綴り始めていると言える。

上信越自動車道は群馬県藤岡市で分岐し、古今交通の難所である碓氷峠を迂回し佐久市に入る。県境の八風山トンネルを抜けた香坂川流域には、縄文時代草創期から後期の遺跡が知られている。すでに五斗代B(5)、兵士山(4)、曲尾(12)、茂内口(2)遺跡などの発掘調査が行われており、それに加え今回の調査によって、次第にその具体像が明らかになりつつある。

さらに自動車道を西下し平尾山麓を通過すると、佐久平に入る。田切り地形沿いの台地上には周防畑(102)、芝宮(62)長土呂(63)、栗毛坂(61)、枇杷坂(66)などの遺跡群がひろがる。ここでは、かつて弥生から平安時代にかけて連続とした暮らしが営まれていた。以上かけ足で今回の調査の跡をたどったが、周辺の遺跡調査の成果をふまえ、佐久地方の地域性や特色についてふれたい。

一般に、縄文時代の暮らしは移住から定住へ、また山間地から低地へとというように捉えられてきたが、香坂川流域の河岸段丘上に広がる、早期から後期にかけての遺跡を見ると、自然環境、特に地形的な要因に影響された居住域のあり方がうかがえる。つまり、許容人口の制約などによる出入りはあったにしろ、時間幅をもちながら香坂谷をひとつの生活単位として、縄文人の暮らしが営まれていたであろうことがうかがえる。また、湯川の低位段丘部に断続的に展開した栗毛坂遺跡群A地区と比較すると、生業などの生活基盤の違いが考えられる。

吹付遺跡(11)出土の中期前葉・後葉の土器からみると、関東土器文化圏、特に群馬の影響を受けつつ、佐久地方独自の土器文化を展開したことが読み取れる。さらに、香坂谷が物的・人的交流の地域的な接点であったとも位置づけられる。

弥生時代についても、概説的にいわれてきた生活基盤とは異なったあり方が指摘ができる。それは、東條ぶた遺跡(27)や下茂内遺跡(1)などの山間部にも弥生人の足跡が残されていることから、水田経営とは異なった生業を考える端緒となった。

一方、栗毛坂遺跡群A地区や下小平遺跡(74)・腰巻遺跡(52)など、湯川の氾濫原に点在した集落立地の遺跡のあり方には、水田経営を基盤とした、いわば典型的な集落立地の様子がうかがえる。それらは水利という面から包括された、ひとつの遺跡群として捉えられるとともに、土器や住居構造などから、群馬からの文化的な影響が認められる。

こうした湯川流域の占地の在り方は小規模で、単発的な集落立地は古墳時代後期前半頃まで続き、その後は、高位段丘に当たる田切り台地上に大規模な計画村落が営まれるようになる。この集落立地の変遷は、勅使牧の経営など律令体制という行政的な要因や、畑作の広がり・灌漑設備の整備などに伴う水田の拡大

など生産形態の変化によるものと考えられる。

また、西方の御牧原(113)・八重原古地には須恵器の古窯址群があり、確認されているもので70基余を数え、消滅したものを含めれば100基にのぼるとも考えられる。東北信地方の一大窯業産地であったことから、製鉄に関連した石附^{いしづけ}(87)の製炭窯などとともに、勅使牧のほか、その供給先である在地勢力の存在が暗示され、また私牧経営や群集墳の被葬者などとの関係にも興味深いものがある。

前期古墳から看取しえる動向として、瀧の峯古墳(83)の成果は注目される。墳頂出土の土器から東海地方西部とのかかわりや、弘法山古墳がある松本平との結びつきがうかがえる。

また、今回調査した大星尻古墳群(29)では、8世紀中葉の終末期古墳が確認された。同地東方の尾根部に数多く散在する古墳のひとつとして、被葬者と地域とのかかわりや開拓集団との関連など、佐久地方での終末期を再考する資料となった。

こうした大規模に展開した開拓集落は10世紀に入ると単発的となり、律令体制の崩壊と初期荘園の成立など社会的な動きと軌を一にして、衰退しはじめる。それは分業や流通面の変化・拡大といった社会的な背景が考えられ、次第に小単位の山棲み集落が形成されるようになる。こうした畑作を基盤とした遺跡のあり方が、西柵ぶた遺跡(28)などに認められたが、しかし長期にわたることなく、一見伝統集落に戻るかのように再吸収された様子が、腰巻遺跡や北山寺遺跡(38)などに認められた。

以上、佐久地方の地域性や特色についてふれた。今後、上信越自動車道関連の遺跡調査が小諸市や東部町へ展開するにつれて、東信地方の歴史がますます掘り起こされることとなる。

参考文献

- | | | |
|---------------|--------|-----------------------------|
| 白田町教育委員会 | 1989 | 『原遺跡』 |
| 川上村教育委員会 | 1983 | 『横尾』 |
| 岸野村誌編纂委員会 | | 『岸野村誌』 |
| 小諸市教育委員会 | 1983 | 『久保田』 |
| 小諸市教育委員会 | 1989 | 『和田原・鎌田原』 |
| 佐久市教育委員会 | 1980 | 『周防畑遺跡』 |
| 佐久市教育委員会 | 1981 | 『五斗代B』 |
| 佐久市教育委員会 | 1982 | 『舞台場』 |
| 佐久市教育委員会 | 1983 | 『中村』 |
| 佐久市教育委員会 | 1985 | 『樋村遺跡』 |
| 佐久市教育委員会 | 1985 | 『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』 |
| 佐久市教育委員会 | 1986 | 『大井城跡』 |
| 佐久市教育委員会 | 1986 | 『碑物師屋遺跡群』 |
| 佐久市教育委員会 | 1986 | 『瀧の峯古墳群』 |
| 佐久市教育委員会 | 1990 | 『茂内口』 |
| 佐久市教育委員会ほか | 1986 | 西裏・竹田峯 |
| 佐久市教育委員会ほか | 1987 | 北西の久保 |
| 佐久市教育委員会ほか | 1987 | 浪瀬・屋敷前・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ |
| 佐久市教育委員会 | 1988 | 鶴ヶネ |
| 千曲川古代文化研究所 | 1985 | 『編年』 |
| 戸沢克則 | | 『原始との対話—縄文人は生きている』 |
| 長野県史刊行会 | 1988 | 『長野県史考古資料編第一巻(Ⅱ)主要遺跡(北・東編)』 |
| 越後野田地蔵文化財センター | 1985 | 『宮平』 |
| 御代田町教育委員会 | 1988 | 『十二遺跡』 |
| 御代田町教育委員会 | 1987 | 『前田遺跡』 |
| 望月町教育委員会 | 1989 | 『平石遺跡』 |
| 望月町教育委員会 | 1982 | 『金塚遺跡』 |
| 八幡一郎 | 1978復刊 | 『北佐久郡の考古学的調査』 |
| 八幡一郎 | 1978復刊 | 『南佐久郡の考古学的調査』 |



图5 周辺道路（香取東地地区）

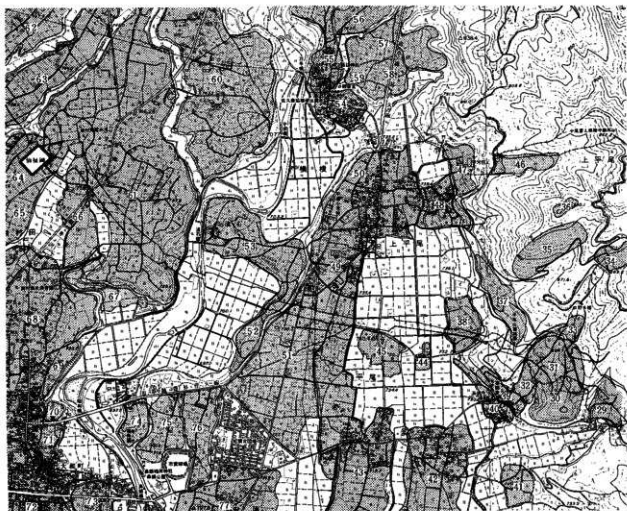


图6 周辺道路（平根・岩村田付近）

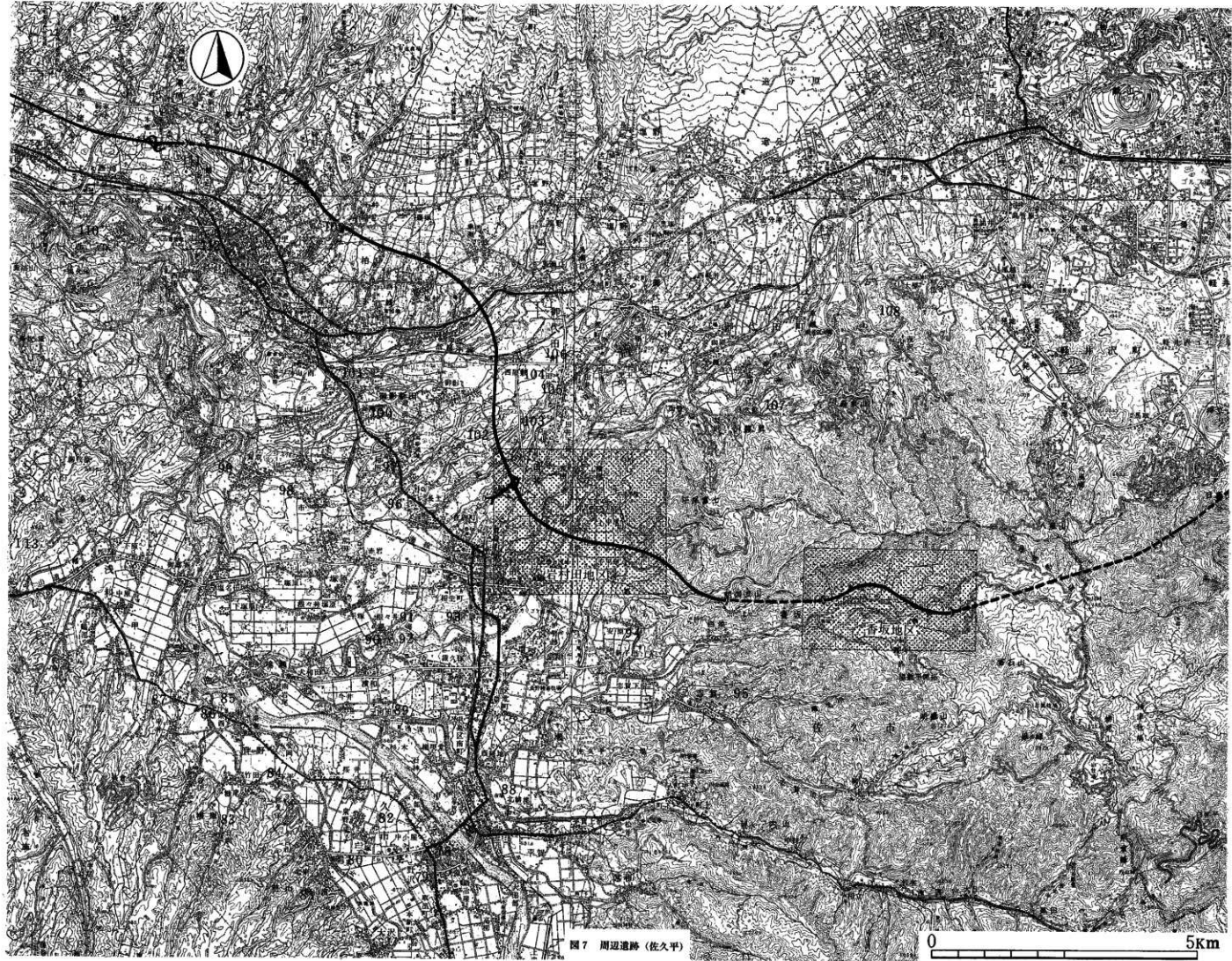


圖7 周辺遺跡 (柱穴平)

表1 周辺遺跡一覧(1)

No	遺跡名	時代	備考	No	遺跡名	時代	備考
①	下茂内	縄~中世		⑪	丸山II	縄・古	
2	茂内口	縄・平	昭和61年度発掘調査	⑫	丸山	縄・平	
3	雨原B	"		33	下半助A	平	
4	兵士山	"	昭和54年度発掘調査	34	下半助B	平	
5	五斗代B	縄	昭和54・55年度発掘調査	35	城古墳	古	
6	五斗代	"		36	平尾城	中	
7	東木戸平B	縄・平		37	橋ヶ窪	平	
8	東木戸平A	"		⑬	北山寺	平	昭和63年度発掘調査
9	木戸平B	縄・弥		39	万助久	平	
⑩	木戸平A	縄・平		40	木田橋	平	
⑪	吹付	縄・平・中世		41	大角	弥~平	
12	曲尾	縄・平	昭和61・62年度発掘調査	42	東村遺跡群	縄~平	下平尾遺跡
⑬	上中原	縄		43	戸屋敷	平	上谷遺跡
⑭	鶴ヲネ	"	昭和63年度発掘調査	44	宮前	平	
⑮	東林	"		45	宮前	平	
16	仙太郎	縄・平		46	矢沢古墳群	古	
17	鶴ヲネ北	縄・平		47	矢沢	平	
18	東山神	"		48	十二筋	平	
19	小屋場	"		⑯	東大久保遺跡群	縄~平	東大久保遺跡・塚畑遺跡・宿遺跡
20	西片替	縄		50	白岩城	中	昭和63年度発掘調査
⑰	西林	"		⑰	西大久保遺跡群	縄~平	昭和61・62年度発掘調査
⑱	干草場	平・近		52	腰巻	弥~平	昭和62年度発掘調査
23	裏林	縄・平	干草場遺跡	53	横石	弥~平	
⑳	城の口	縄・平		54	延寿城遺跡群	平	
25	屋敷前	縄・弥・平	小屋場・屋敷前	55	手の原遺跡群	縄~平	
26	淡瀬		昭和61年度発掘調査	56	上長坂遺跡群	縄~平	
㉑	東袴ぶた	縄・平		57	横根古墳群	古	
㉒	西袴ぶた	縄・平		58	上の原遺跡群	縄~平	
㉓	大星尻古墳	縄・古		59	延寿城跡	中	
㉔	丸山古墳群	古		60	跡坂遺跡群	弥~平	

表2 周遊道跡一覧(2)

No	道跡名	時代	備考	No	道跡名	時代	備考
61	栗毛坂道跡群	弥～平	昭和58年度発掘調査	91	宮の西	弥～中	昭和58年度25旧地点発掘調査
62	之宮道跡群	縄～平	昭和54・55・57年度発掘調査	92	北西久保	弥～中	昭和44・45・57・60年度発掘調査 昭和54年度試掘調査
63	長土呂道跡群	弥～中		93	一本駒道跡群	弥	昭和43・47年度発掘調査
64	虎把坂道跡	弥～平	昭和60年度発掘調査	94	安原大塚古墳	古	
65	琵琶坂	奈～平	昭和63年度発掘調査	95	志賀城跡	中	
66	西赤座	弥～平		96	西近津道跡群	縄～平	南近津道跡群 昭和46年度発掘調査
67	上岩子	平		97	和田坂道跡群	縄～平	昭和60・63年度発掘調査
68	岩村田道跡群	弥～中	昭和55年度発掘調査	98	五ヶ城	弥～平・中	昭和55年度発掘調査
69	石釜城跡	弥～中		99	久保田	縄～平	昭和58年度発掘調査
70	王城跡	弥～中		100	谷地区道跡群	縄～平	昭和60年度発掘調査
71	黒岩城跡	弥～中	昭和55年度発掘調査	101	宮ノ反A遺跡群	古～平	昭和59年度発掘調査
72	上の城道跡群	縄～平	昭和48・54・58年度発掘調査	102	周防堀道跡群	縄～平	昭和54・55・58年度発掘調査
73	下信濃石	平		103	曾根城跡	縄～平	昭和57年度発掘調査
74	下小平	弥～平	昭和55年度発掘調査	104	錦御園道跡群	弥～平	昭和59・61年度発掘調査
75	上小平	平		105	野火付	奈～平	昭和59年度発掘調査
76	機敷	平		106	前田道跡群	弥～平	昭和60・61・62年度発掘調査
77	蛇塚A道跡群	平	昭和57年度古墳範囲確認	107	富平	縄	昭和56年度発掘調査
78	野沢館跡	中		108	茂沢南石堂	〃	昭和51・54・55年度ほか発掘調査
79	儘田	古～平	昭和45年度発掘調査	109	柳 ^跡	〃	昭和36・46年度発掘調査
80	中道	奈～平	昭和46年度発掘調査	110	水	縄・弥	昭和30年度発掘調査
81	川越石室址	近	昭和58年度発掘調査	111	清水駅跡	奈～平	
82	市道	古～平	昭和49年度発掘調査	112	小諸城跡	中～近	
83	瀧峯古墳群	古	富士見塚古墳 昭和61年度発掘調査	113	御牧原古墳群	古・奈	昭和4年以降の発掘調査
84	西裏道跡群	縄～平～中	昭和61年度発掘調査				
85	休石	弥～平	昭和53年度発掘調査				
86	舞台場	弥～中	昭和56年度発掘調査				
87	石附窯址	古	昭和55・63年度発掘調査				
88	樋村	弥～平	昭和57・58年度発掘調査				
89	三河人形古墳	古					
90	根々井館跡	中					

丸付 No.は上信越自動車道埋蔵文化財調査にかかわる道跡

第3章 調 査

第1節 きどだいら 木戸平A遺跡

1 遺跡の概観

木戸平A遺跡は、佐久市大字香坂字^{まがら}曲尾312番地を中心とした尾根上に所在する。

香坂地籍は、香坂川のはたらきによって全体が大きな谷地形を形成し、右岸の南向き斜面に多くの遺跡が立地する中で、本遺跡と隣接する吹付遺跡は、香坂川の最も上流に位置する。この周辺は、八風山山系南麓から香坂川に向う緩斜面で、川に沿う一帯は香坂川の侵食により断崖状になっている。さらにこの南面する緩斜面は、香坂川に流下する小河川によって幾すじかの尾根がきざまれ、起伏が著しい。東側の尾根頂部を本遺跡、西側の小さな谷状地を取り囲んだ尾根縁辺部に吹付遺跡が立地する。

2 調査の経過と概要

上信越自動車道は遺跡の中央を東西に横断するため、面積3,000m²が調査対象地域となった。標高は911-917mをはかる。調査は、昭和63年8月17日から同年9月30日までの間実働20日を要し、調査研究員4名・作業員延べ125名が当たった。表土剥ぎに先行して東西方向にトレンチを設定し、土層堆積状況などを観察した。トレンチでは現在の耕作により下層が攪乱を受けている状況が見られ、特に調査区東側はその度合いがはげしかったが、西側はローム層上面から下は攪乱が及んでいなかった。この他に直交・平行する5本のトレンチを設定してローム層まで掘り下げた結果、土層堆積状況は調査区西側でI-III層に分層できたものの、東側は耕作の影響により明確に分層できなかつた。また確認された遺構・遺物では、西側で

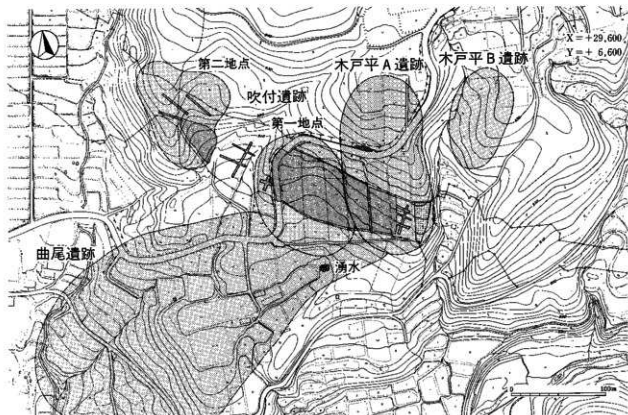


図1 調査区および周辺遺跡 (1:4,000)

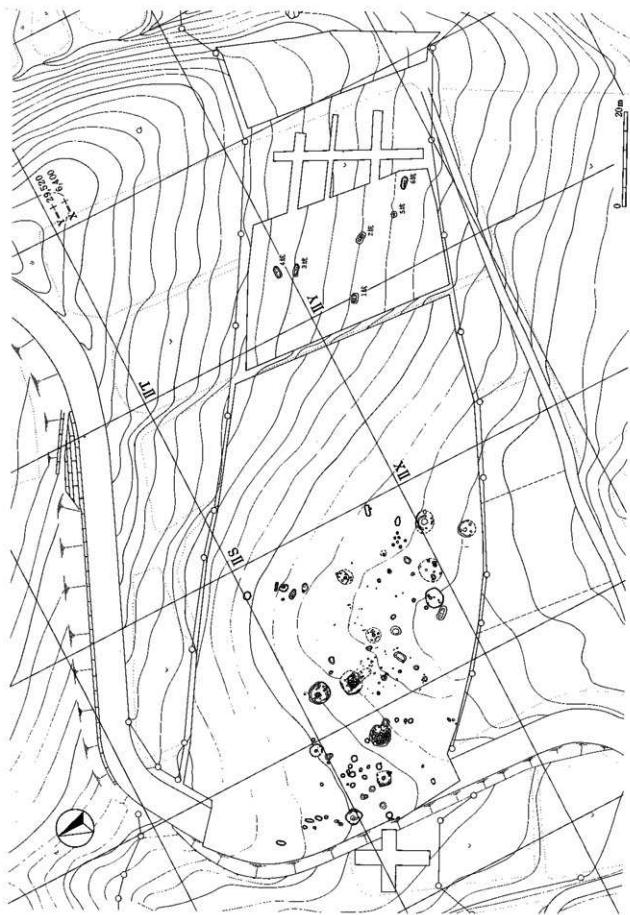


图2 遺構配置

縄文土器片が出土し、トレンチで土坑が認められたため、吹付遺跡に最も近い西側に重点を置いて調査を実施することにした。

第Ⅲ層(ローム層)で遺構検出を実施した結果、調査区西側で土坑6基検出された。時期決定の根拠になる土器がみられなかったため、土坑の帰属時期を明確にできないが、Ⅱ層(スコリア含有)より縄文土器片が出土したことから縄文時代の所産と推定できる。遺構の性格は、土坑底部に一列に並ぶピット状の落ち込みが認められることから、「陥し穴」と推定されよう。遺構精査に並行して土坑の分布範囲を把握する目的で一部表土剥ぎを行った。その結果、遺構分布範囲は西側に限定されることがわかった。遺構の測量にあたっては、検出遺構が調査区西側に限られたため、吹付遺跡で設定した8mグリッド杭よりトラバース測量を行い、調査区内に8mグリッド杭と方向杭を打った。標高は吹付遺跡より移動して3か所にベンチマークを設定した。空測・空撮を実施し、遺構分布図・コンタ図を写真測量で作成し、また発掘範囲図・トレンチ配置図は測量用の杭を基準にして三角測量を行い、後に作図した。

調査日誌抄

- 7月27日 土層堆積状況を把握すべく、トレンチを設定してローム層まで掘り下げる。
- 8月17日 調査区東側、ローム層で検出作業を実施。遺構が検出されなかったため、排土置場とする。
- 22日 調査区西側を中心にトレンチ設定。土層堆積状況を観察しつつ、遺構確認を行う。
- 29日 土坑6基を検出し調査にはいる。
- 30日 グリッド杭を設定。
- 9月2日 土層柱状図を記録。
- 9日 トレンチ設定の位置を三角測量で記録。
- 14日 遺構の広がりを捉えるため、中央付近を拡張する。
- 20日 土坑の実測および写真撮影などを開始。
- 21日 空測・空撮を実施。
- 30日 遺構の調査をすべて完了し、調査を終了する。
- 12月5日 整理作業開始。遺構図など図面類の確認、遺物の洗浄・注記を行う。



3 基本土層

基本的な層序は、Ⅰ層：現耕作土、Ⅱ層：スコリア質軽石を含む黒褐色土、Ⅲ層：ローム層である。

Ⅱ層はスコリア層全体に散点する黒褐色粘性土で、この層より縄文土器が出土したことから、隣接する吹付遺跡のⅣ層と対応できると推定される。本遺跡ではⅡ層の下はローム層で、吹付遺跡Ⅴ層(黒褐色土)に対比される層は認められないが、土坑の覆土下部に類似した土が見られる。これらのことから、吹付遺跡Ⅴ層は尾根頂部においては安定して堆積せず、遺構内だけに堆積したと推定される。

本遺跡の地形は、土層柱状図から推測すると、遺構がつくられた縄文時代と現在とはほぼ同じ傾向であったと考えられる。

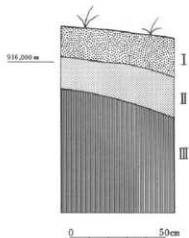


図3 基本土層

4 遺構と遺物

木戸平A遺跡が占地する尾根の先端に近い南西斜面に6基の土坑が検出された。規模・形状などに共通の特徴が認められ、一般に「陥し穴」とされている土坑である。また、遺構外からは、縄文時代後期前葉の土器片がわずかに出土した。

(1) 遺構

1号土坑 (図4、PL8)

II Y-A05グリッドに位置する。上端径224×140 cm、下端径150×74 cmの楕円形を呈すが、それぞれ短軸の中央にくびれをもつ。とりわけ下端は顕著にくびれ、パイオリン状をなす。深さは75 cm。

主軸方位はN-60°-Wを指し、等高線に平行する。平坦に整えられた坑底には、径10~15 cm、深さ18~34 cmの小ピットが3個列状に穿たれる。壁はほぼ垂直に立ち上がるものの、上半部は短軸のくびれ部を中心に大きく開く。土層は黒褐色土を基調とし、下層にはローム粒・ロームブロックが多く混入していた。遺物は出土していない。

2号土坑 (図4、PL8)

II Y-F09グリッドに位置する。上端径256×128 cm、下端径174×60 cmほどをはかり、不整な長楕円形を呈す。深さは80 cm。1号土坑と同様短軸中央付近にくびれが認められるものの、均整さを欠く。

主軸方位はN-35°-Wを指し、等高線に対して若干北に振れる。坑底はほぼ平坦に整えられ、長軸に沿って4個の小ピットが開口する。ピットは径15~30 cm、深さ18~30 cmをはかり、南東寄りの2つは極端に小さい。壁は長軸方向

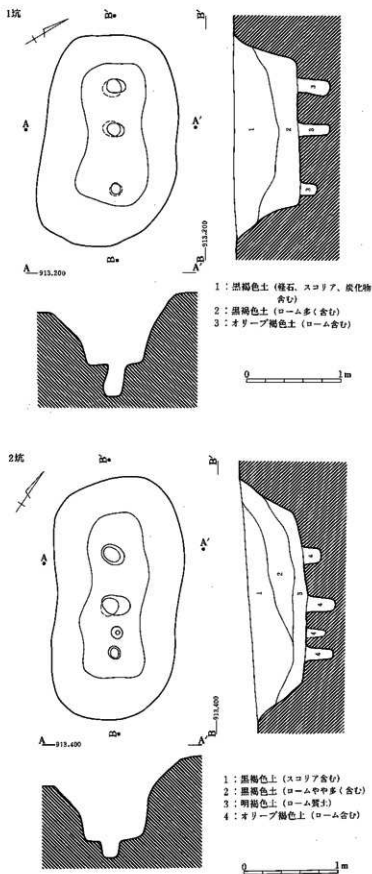


図4 1・2号土坑

をのぞき、急斜面に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主とするが、最下層にはローム主体の土が堆積していた。

遺物は出土していない。

3号土坑 (図5, PL8)

II Y-F01グリッドに位置する。上端径260×cm、下端径222×63 cmの不整長楕円形を呈す。深さは68 cmをはかる。坑底には、径15~20 cm、深さ18~23 cm ビットが長軸に沿って3個穿たれる。

主軸方向はN-53°-Wを指し、等高線に平行する。壁は比較的急傾斜に立ち上がる。覆土は黒褐色土を基調とし、下層にはローム粒・ロームブロックが多く含まれていた。

遺物の出土はない。

4号土坑 (図5, PL8)

II T-G09グリッドに位置する。長楕円形を呈し上端径256×136 cm、下端径226×75 cm、深さ60 cmをはかる。平坦に整えられた坑底には、径10~20 cm 深さ18~21 cmの小ビット3個が穿たれる。うち中央のビットは長軸線からずれて北壁側に寄る。

主軸方位はS-90°-Wを指し、等高線に対して南に振れる。壁は急傾斜に立ち上がるものの、上部は大きく開く。覆土は黒褐色土を主とし、下層には多量のロームが混入していた。

遺物の出土はなかった。

5号土坑 (図6, PL8)

II Y-G13グリッドに位置する。長軸130 cmほどの不整形を呈し、深さ94 cmをはかる。坑底は70×43 cmの楕円形をなし、平坦に整えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上部はやや傾斜をもって開口する。覆土は黒褐色土を基調とし、上層にはスコリア質軽石を、下層にはローム粒・ロームブロックを多く含んでいた。

遺物は出土していない。

6号土坑 (図6, PL8)

II Y-I15・16グリッドに位置する。上端径274×

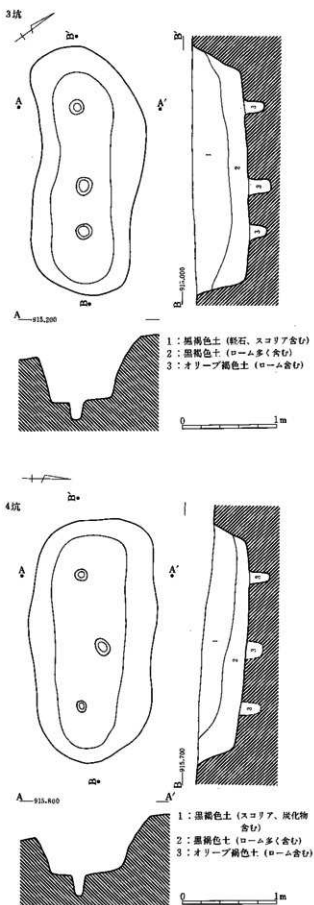


図5 3・4号土坑

130 cm、下端径240×74 cm、深さ37 cmをはかる。ほぼ長楕円形を呈すが、南東側は若干ふくらんで丸みをもつ。坑底には長軸上に並んで4個の小ピットが穿たれる。おおむね径12~17 cm、深さ10~15 cmをはかるが、中央のピットは深さ23 cmと最も深い。主軸方位はN-50°-Wを指し、等高線に平行する。

覆土は黒褐色土を基調とし、上層にはスコリア質軽石を、下層には若干量のロームが混入していた。

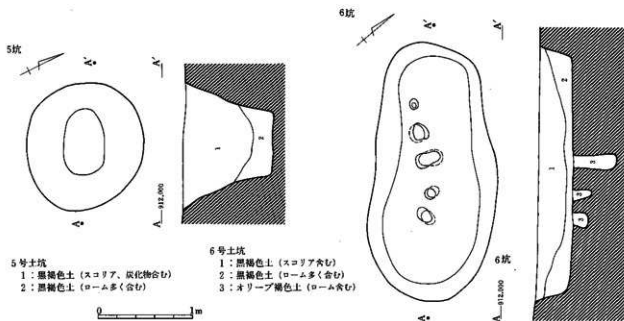


図6 5・6号土坑

(2) 遺構外出土遺物 (図7)

本遺跡の調査では、遺構の内外を問わず、若干量の土器片が出土したのみである。すべて縄文時代後期前葉の土器である。

1は山形状をなす口縁下に渦巻き状の沈線文が施される。また、内面にも隆線による渦巻き文が付加される。2は多条の平行沈線文が施されるもので、幾何学状のモチーフを構成すると見られる。赤味のある茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。器厚5 mmと薄手のつくりで、焼成は堅緻。5・6は大きく外傾して聞く無文の口縁部破片。8は沈線に区画された細い縄文帯が施される。内面上端部に沈線がめぐることから口縁下の破片と見られる。器厚4 mmほどと薄手のつくりで、内外面ともにていねいな器面調整が加えられる。

1~7は縄文時代後期前葉、堀之内I式に、8は同II式に相当しよう。

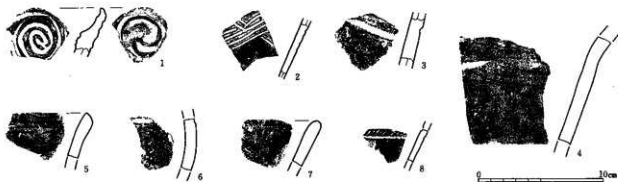


図7 遺構外出土土器

5 まとめ

今回の調査によって、木戸平A遺跡、より厳密にはその南端部付近に土坑群が存在すること、また、同地区が縄文時代後期前葉の遺物散布地であったことが明らかとなった。

土坑は縄文時代早期後葉に特徴的ないわゆる「陥し穴」に相当する規模・形態を備え、「群」としての分布にも一定の方向性が認められる。時期については伴出遺物がなく特定できないが、同様な土坑の検出をみた隣接する吹付遺跡で縄文時代早期後葉の土器片が出土していることから、従来より指摘されているように縄文時代早期後葉の所産である可能性を提示しておきたい。吹付遺跡例が縄文時代中期後葉の集落と重複して検出されたにもかかわらず、覆土中に該期の遺物をまったく含んでいなかったことはその可能性を高めている。分布的には支尾根の南西斜面に限定され、6基が南北に連なるような位置関係を保っていた。形態や主軸方位に若干の相違がみられ、すべてが同時に構築されたとは言えない。しかしながら、分布に見られる規則的なあり方は、土坑群（陥し穴群）が「けもの道」といった媒体を介して有機的に結びついていたことを示している。また、土坑群は調査区外の南北へもさらにのびていると予測される。

一方、吹付遺跡で検出した土坑（1号・2号・22号・23号など）と対比すると、上記のように縄文時代早期後葉という時間枠では一致する反面、占地においては対称的なあり方を呈す（図8）。本遺跡例が斜面に分布するのにに対し、吹付遺跡では谷頭から谷底への指向が認められる。後者の場合、図示したごとく、支谷状地形の先端に湧水あり、この水を求めて谷筋に集まる動物を対象として「陥し穴」が掘られたとも考ええられる。また、本遺跡例がおおむね楕円形を基調とするのに対して、吹付遺跡例は隅丸長方形を呈すという形態上の違いも認められる。これらの相違が生じた背景を特定することは困難であるが、ここでは、分布の違いには対象動物の習性に起因する用途の差を、形態の違いにはミクロな時間差や構築集団の差をそれぞれ想定しておきたい。いずれにしても、尾根の斜面と谷部とに「陥し穴」が掘られる傾向は一般的に見出せるところであり、狩猟の一形態と言う側面では普遍的な様相を呈していると言えよう。

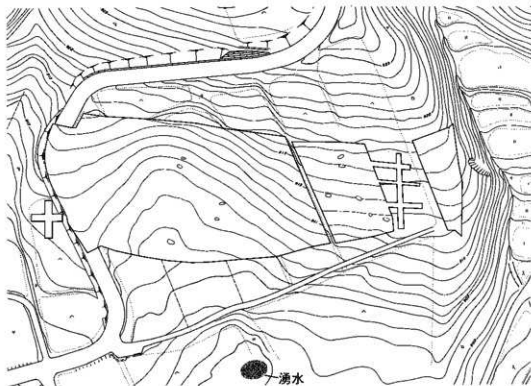


図8 「陥し穴」の立地と湧水

第2節 吹付遺跡

1 遺跡の概観

吹付遺跡は、佐久市大字香坂字曲尾311番地を中心とした緩斜面に所在する。

本遺跡の立地する南向き緩斜面は、曲尾遺跡群の占地に代表されるごとく香坂川流域でも最も生活に適した場所で、ここに縄文時代中期～後期の集落が広く展開したと推定される。また、ここは香坂川の最も上流であり標高が910mと高いため眺望がよく、香坂東地の集落・開脚流山を手前に見ながら佐久平が遠望できる。この台地では、南向き緩斜面の南西側、香坂川に近い一帯を曲尾遺跡が、その北側、東西の尾根間の狭小な地に吹付遺跡が立地し、東側の尾根部に木戸平A遺跡が立地する(木戸平A遺跡図1・2参照)。調査前は一部を除き畑地で、第一地点の凹地部分を中心に広い範囲にわたって縄文土器・打製石斧などが多く表採された。また、遺跡の南、緩斜面の中央部付近には湧水が見られ、現在でも水をたくわえている。

2 調査の経過と概要

上信越自動車道は遺跡の中央部を東西に横断するため、調査面積は10,400m²と広範囲にわたり調査は昭和63年6月23日から同年11月15日までの間実働120日を要し、調査研究員4名・作業員延べ970名が当たった。また遺跡の東側では木戸平A遺跡と接しているため、基本的には両遺跡と並行して調査をすることとなった。発掘調査に当たっては、調査区を南北に横切る県道香坂中込線を境として、東区・西区に分けて進めた。しかし、本報告に際しては、遺跡内部での性格や今後別の遺跡として捉え直される可能性も考慮し、前者を第一地点、後者を第二地点と呼ぶこととする。

なお、昭和63年度に調査を行うことができなかった県道香坂中込線下については、電線類の埋設工事およびカルバート・ボックスの工事工程に合わせ、平成2年3月7日～同31日まで調査を実施した。調査研究員1名と作業員数名がこれに当たり、延べ12日間を要した。

以下、地点ごとに概要を記す。既報(『年報5』1988)とは細部において若干異なるが、本報をもって最終報告とする。

第一地点：県道香坂中込線から木戸平A遺跡隣接地まで。現地形は、県道部分と木戸平A遺跡隣接地付近が高く、その間が凹地状を呈していたので、現地表面下での土層堆積状況・遺物出土状況などを捉える目的で、高遠道センター横に平行する方向に2本のトレンチを設定し、ローム層まで掘り下げた。その結果、現耕作土下に3枚の黒色土(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層)が認められ、Ⅲ・Ⅳ層より縄文時代中期～後期の土器・石器が出土した。また、遺構はトレンチで埋裏・配石を伴う土坑が確認された。トレンチの土層断面から土層の分布を推測すると、Ⅲ層は本地区中央部の凹地部分を中心に堆積し、Ⅳ層は調査区北側と1号住居址付近の南側一角を除くほぼ全域に堆積が認められ、特に凹地部分が厚い状況であった。表土剥ぎを行う前にトレンチ中央部で確認された配石付近を8×8mの範囲で掘り下げた。その結果、縄文土器・石器の出土が多く認められ、遺物はⅢ・Ⅳ層の両層に包含することが分かった。Ⅲ層での遺構検出では、Ⅲ層の堆積が薄い箇所または見られない箇所での礫の集中・1号住居址が認められたほかには遺構検出されなかった。遺物は、土器についてはⅣ層のものと比べ全体的に破片が多い傾向で、石器・獣骨も出土した(獣骨はⅢ層で確認されたが、上層に属する可能性がある)。Ⅳ層上面での遺構検出では礫の集中・遺物の広がりも確認されていたが、住居址は認められなかった。断面観察でスコリアを含む黒褐色土を覆土とする遺構が見られ、スコリアのわずかな含有度合いの相違によって検出されることが捉えられた。Ⅳ層を掘り下げる過程におい

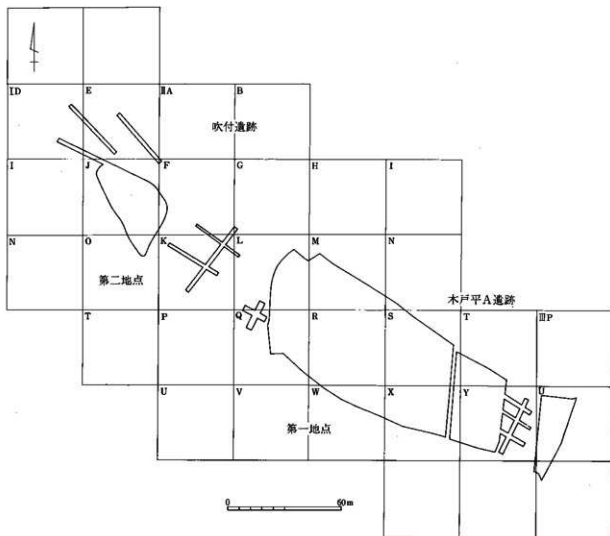


図1 グリッド配置

て、IV層下部で比較的大きな破片・土器の集中が見られたためIV層下部とV層で遺構検出を実施した。検出遺構の記録終了後、重機で凹地部分を中心にルーム層まで下げ、再検出を行った結果、9号住居址(敷石住居址)・土坑などの遺構が検出された。本地区では、12軒の住居址が検出されたが、そのうち2軒が柄鏡形敷石住居址であった。

第二地点：遺跡の西限部から県道まで。

遺跡範囲外にあたる西側の尾根にトレンチを入れた結果、緩斜面を中心に縄文時代後期を主とした土器が認められたことにより、この尾根も調査対象とし、谷部に尾根部を加えて調査範囲とした。谷部では谷の方向とそれに直交する3本のトレンチを重機で掘削して、ルーム層までの土層堆積状況を観察した。その結果、全体的に礫が見られ、特にIII・IV層は谷中央部が最も厚い状況であった。第一地点と同様、III・IV層より縄文土器片が認められたが、出土量は僅少かつ摩耗が著しく、さらに遺構を検出することがなかった。したがって、生活域としては認定できず、以後調査は4か所で土層柱状図を記録し終了とした。

尾根部の調査は、本遺跡の西限を確認する目的で尾根上・斜面にトレンチを入れ精査した結果、斜面より縄文時代後期の土器が一定域に集中して認められた。土器はIII・IV層から出土し、特にIV1層(尾根部ではIV1層・IV2層とに分層できた)で多く認められた。土層堆積はIII層・IV層とも斜面の最も凹地に堆積していたが、IV層の範囲はIII層より若干広がる状況である。なお、急斜面では耕作土下がルーム層であった。調査はIII

層での遺構検出から開始したが、遺構は認められず土器・石器が出土したのみであったため、IV 1層上面まで掘り下げ遺物の出土状況を観察した。遺物の出土はIV 1層から多かったことから、遺構検出はIV 1層で主に行った。その結果、斜面中位で傾斜がなだらかな部分より焼土址が1基検出されたものの、土器が多く出土した凹地部分では検出されなかった。さらにIV 1層をIV 2層上面まで掘り下げたがその過程においても、遺構は検出されなかった。出土遺物は、面的調査を行った範囲でも北から南方向に傾斜する緩斜面に多く認められ、先行トレンチを入れた凹地部分に集中して見られた。なお斜面上部・尾根上部にトレンチを入れたが遺構は検出されず、遺物の出土も認められなかった。

本遺跡の遺構測量は、第一地点・第二地点(尾根部)とも業者委託して国家座標に合わせた測量用の杭を設定し、それを基準に行った。標高も杭設定作業とともにに行いベンチマークを設定した。調査で用いたベンチマークは、第一地点では910.219m、907.955mで、第二地点谷部では906.102m、904.120m、尾根部では909.527mである。空測・空撮を実施し、調査区の発掘範囲図・遺構分布図・コンタ図を写真測量で作成した。トレンチ配置図は基本的に8mグリッド杭を用いた三角測量で記録し、後に作図した。また現場での遺構番号は両地点とも通し番号により記録した。

調査日誌抄

昭和63年度

- 6月23日 発掘調査開始。鶴アネ遺跡より部材運搬。
27日 調査区内の草刈り(残存部分は残す)。
29日 センター杭に沿ってトレンチを設定。
7月1日 西区に尾根傾斜面にトレンチを掘削。
6日 西区尾根部のトレンチで縄文土器が集中して出土。表土剥ぎを行う。
11日 東区トレンチ田・IV層から縄文土器出土。重機で田層上面まで剥ぎ。トレンチで配石・埋竈などを確認。配石周辺部を手掘りして下げ下層の状況を観察。
13日 東区田層で遺構検出。
25日 測量基準杭設定。
29日 西区田層で遺構は認められず、遺物を取り上げる。
8月9日 東区田層で遺構は認められず、遺物を取り上げる。
18日 信州大学の西沢寿晃氏、現場視察。
23日 夕方から夜の大雨により東区内の遺物が流失。
西区尾根部・谷部のトレンチ位置を記録。
26日 排水用のポンプを設置。
29日 東区土層転写を実施。
30日 西区IV 1層出土の遺物取り上げ開始。
31日 西区で焼土址(SF-01)記録。
9月2日 西区調査終了。
8日 東区IV 2層掘り下げ開始。1号住居址・1号配石土坑を検出。サブトレンチを設定し遺構検出。
13日 東区IV 2層出土の遺物取り上げ。1号住居址実測
15日 重機で残存部分の表土剥ぎ実施。
17日 西区尾根頂部に数本のトレンチを重機で掘削。
21日 吹付遺跡・木戸平A遺跡空測・空撮。
27日 東区8mグリッドに沿ってトレンチを入れる。
29日 東区02トレンチ西側の礫集中か所の精査。
10月5日 東区IV 2層の残存部分を剥ぎ、V層で遺構検出。
19日 1号住居址調査終了。3号～7号住居址実測。
26日 全景写真撮影。8号住居址調査終了。
29日 2軒目の敷石住居址(9号住居址)確認。
31日 吹付遺跡には調査研究員と作業員3名が残り、V層を剥ぎVI層(ローム層)検出。





图2 遺構配置

- 11月11日 9号住居址の敷石の取り上げ。
 14日 プレハブ内外をかたづけ、遺物を事務所に運搬。
 15日 発掘器材の撤収。調査終了。
 12月5日 整理作業開始。遺物の洗浄・注記、遺構の図面など記録の確認と修正を行う。
 平成2年度
 3月7日 重機により県道下を掘削。遺構検出を行う。
 8日 住居址1軒、土坑敷基を検出。
 12日 住居址の掘り下げと並行して、グリッド杭を設定。
 13日 土坑の調査および調査区のコンタクト作成。
 15日 住居址の図取りと写真撮影。
 26日 調査区を拡張して、遺構検出を行う。
 27日 住居址1軒、土坑5基を検出。
 29日 遺構の掘り下げを行い、ほぼ完掘。
 30日 遺構群の図取りと写真撮影。
 31日 全景写真撮影後、器材の撤収。調査を完了する。

3 基本土層

層位はI層：耕作土、II層：暗褐色土、III層：黒色土、IV層：スコリアを含む黒褐色土（IV1層とIV2層に分層される）、V層：黒褐色土、VI層：ローム層である。遺物が出土した土層の分布は、縄文時代中期～後期の土器を含むIII層では、遺跡の全域にわたって見られるが、第二地点尾根部・第一地点凹地状の箇所に特に厚い堆積が見られることから、IV層堆積後に凹地化した部分を中心に堆積した層と推定される。IV層は、スコリアの含有度合い、色調の相違によりIV1層とIV2層とに分層した。IV1層は暗褐色土でスコリアの散点が顕著で、IV2層は黒褐色土でスコリアの散点はIV1層と比較して少ない反面、スコリアが層下部でブロック状（集塊）を呈す特徴がある。本遺跡ではIV層・V層が全域にわたって分布し、V層堆積後IV層が基本的には全域に見られるが、凹地部分を中心に堆積したと推定される。またIV層が明確に分層できた地点は、第二地点尾根部斜面のみで、第二地点谷部・第一地点ではIV層上部（IV1層）を確認できなかった。遺物出土状況を見ると、IV1層上半部、第二地点IV2層下半部にかけて出土量が多い傾向があった。

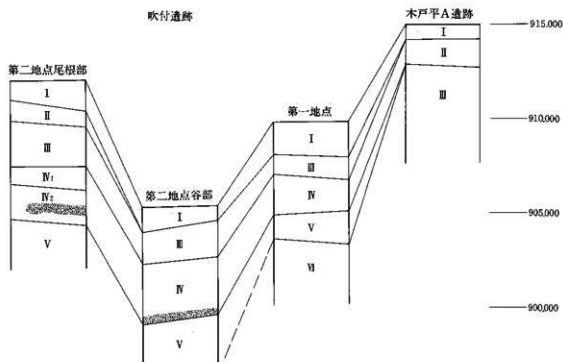


図3 基本土層

4 遺構と遺物

i 第一地点の調査 (PL10)

第一地点は前記したとおり、吹付遺跡の主要地区に相当し、縄文時代中期の集落跡などが検出された。遺構群は小支谷の凹地を取り囲むように分布し、とりわけ、西側尾根の斜面には住居址とともに土坑群が主体的に分布していた。検出された遺構の総数は、住居址12軒、ピット群1基、屋外埋葬1基、焼土址3基、配石・配石土坑2基、土坑85基、遺物集中出土区2か所を数える。土坑の中には縄文時代早期後葉のものと思われる「陥し穴」が数基含まれ、前節で記したように、該期における木戸平A遺跡と本遺跡との不可分な関係が推定される。

また、遺構覆土内や遺構外土層中からは、総重量355,710g、14,452片を数える縄文時代の土器片と総数582点の石器類が出土した。遺構外遺物は主として遺構群に囲まれた中央の凹地部分から出土し、その分布範囲は集落の変遷とともに微妙な変化をみせていた。

なお、遺構外からは平安時代および中・近世の遺物もわずかに出土しており、本遺跡は縄文時代のみならず平安時代以降も営為の対象として、人々の手が加わり続けたことが考えられる。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

ア 住居址

1号住居址 (図4、PL11・39)

調査区の東南隅、IIW04・05グリッドに位置する。VI層上面で検出されたが、後世の削平や耕作により著しく擾乱されており、柱穴や炉址、周溝などを残すのみであった。

壁が残っていないことから規模・形状については推定の域は出ないが、柱穴と周溝の位置関係などから、径510×390cmをはかる楕円形プランが想定される。しかし、周溝が2重になる箇所があり、建て替えや拡張が行われた可能性も考えられる。床面はローム層を若干掘り込んで造られた地床であり、炉址北側の一部分にのみ残存した。炉址は住居址のほぼ中央にあり、径130×130cm、深さ20cmをはかる。南側に穏やかな傾斜をもつが、北側はほぼ垂直に掘り込まれる。炉底に焼土が認められたほか、焚き口と推定される南側には炭化物を多く含む焼土が堆積していた。炉石およびその抜き取り痕は認められなかった。

炉址の南には70cm余り離れて埋葬が検出された。口縁部および底部付近を欠く深鉢形土器を正位に埋設していた。

遺物 土器——1は埋葬に用いられていたもの。胴中位のみ残存する。2条1組の沈線文により器面を縦位分割し、その間を短沈線で埋める。

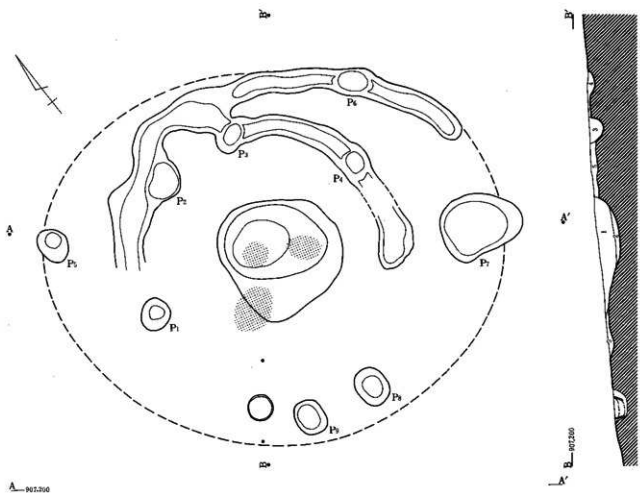
石器——1は緻密な安山岩製の大型剥片石器である。

時期 出土遺物より、本址は縄文時代中期後葉、本遺跡第1期に構築された住居址と考えられる。

2号住居址 (図5・6、PL12・39)

調査区南東端に近いIIW04・09グリッドに位置する。VI層(ローム層)上面で検出した。検出時にはすでに上部を削平された状態であったため、壁や床面の大半を失っていた。

全体の規模・形状については不明であるが、周溝や柱穴配置などから、径370cmほどの円形プランが想定される。床面はロームを若干掘り窪めて作られた地床であり、地形にそって北から南に向かって下がる。とりわけ、炉址の北側と南側とでは20cm余りの比高差をもつ。P1-3が主柱穴とみられ、三角形の配置をとる。径35-50cm、深さ60-90cmをはかる。P1内上部からは石器2が、P3からは土器2がそれぞれ出土した。また、北半部には幅20-40cm、深さ10-15cmの周溝がめぐり、その内部にもピット状の掘り

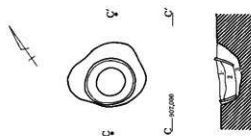


A-107.200

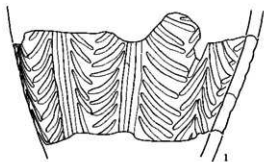
B-107.200



0 1m



0 50cm

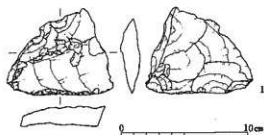


0 10cm

- 1 : 黒褐色土 (灰化物含む)
- 2 : 黒褐色土 (灰化物含む)
- 3 : 黒褐色土 (軽石含む)
- 4 : 灰黄褐色土 (灰化物含む)
- 5 : 暗褐色土
- 6 : 灰黄褐色土
- 7 : 黒褐色土 (2層に類似)

埋篋

- 1 : 暗褐色土
- 2 : 暗褐色土 (灰黄褐色土含む)
- 3 : 灰黄褐色土



0 10cm

图4 1号住居址

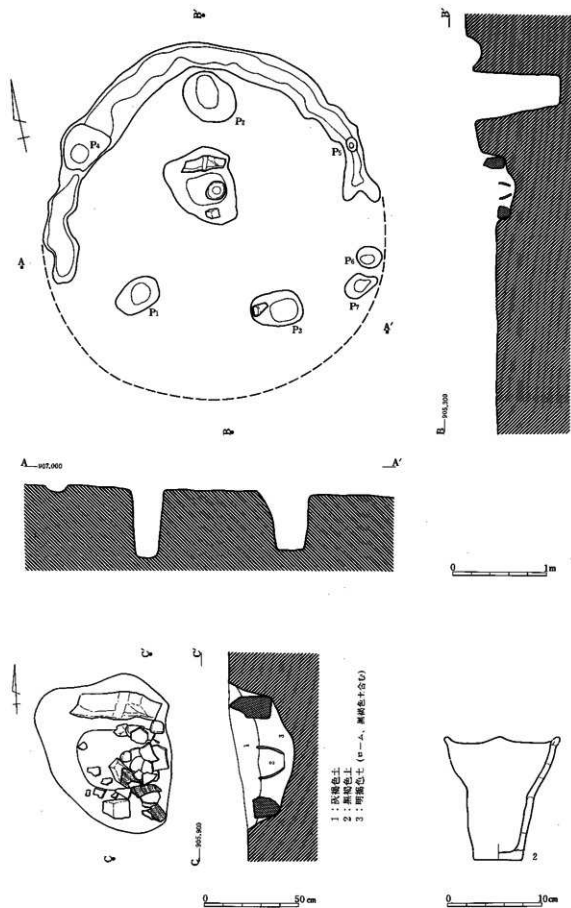


図5 2号住居址(1)

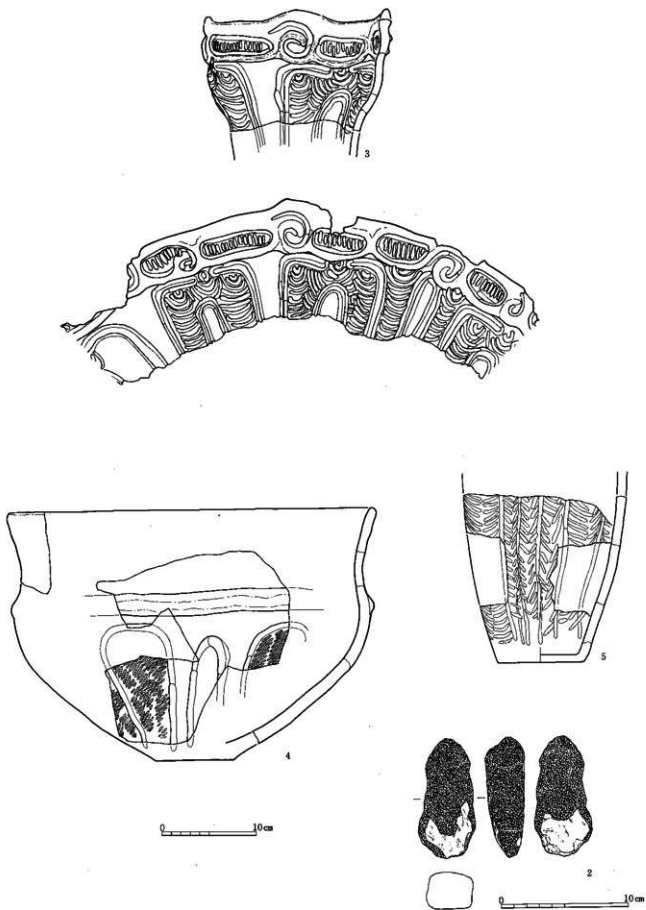


图6 2号住居址(2)

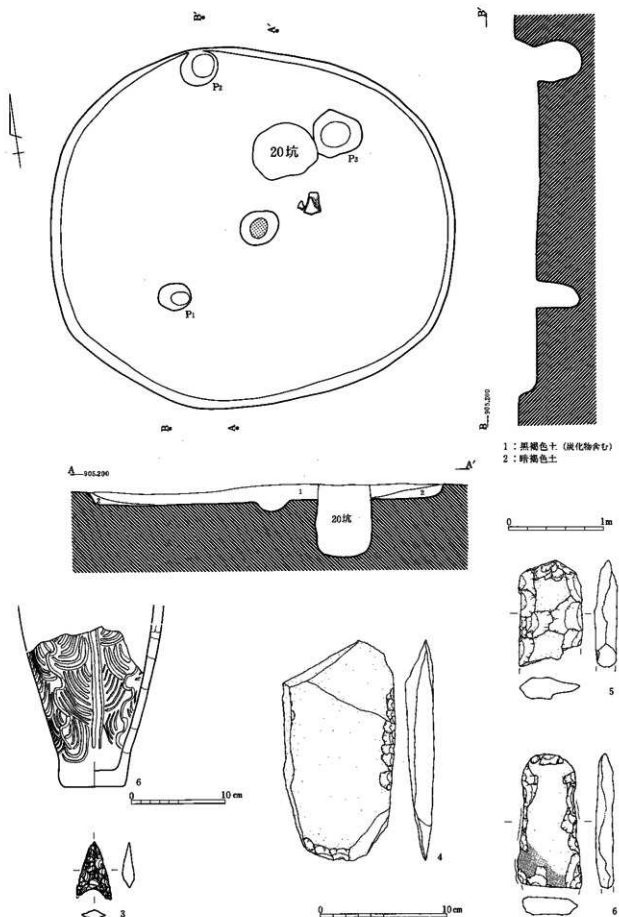


図7 3号住居址

込み(P4~7)が穿たれる。炉址は住居址のやや北寄り中央にある。径165×130 cm、深さ60 cmをはかる掘り方内の北と南に炉石をすえ、内部には胴下半を欠く土器を埋設してあった。炉内覆土中には多数の土器片が遺存し、炉石の一部と見られる角礫も認められた。

遺物 土器——図示したものがほとんどすべてである。2はP3より出土した小形土器。3は炉内に埋置されてあった土器で、胴下半を欠く。渦巻文と楕円文を横位に連結した口縁部文様帯をもち、胴部には曲線的な沈線区画文と鱗状の短沈線充填文が施される。4・5は炉内に遺存していた土器。

石器——2はP1内出土の磨製石斧で、敲打痕を全面に残したもの。輝緑岩製である。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期の所産と考えられる。

3号住居址 (図7、PL13・39)

調査区中央南寄り、II R-22・23グリッドに位置する。覆土および床を20号土坑に切られる。V層上面でIV層土を覆土とする落ち込みとして検出された。また、覆土中には炭化材や炭化物が含まれていた。

東西に長軸をもつ楕円形プランを呈し、径425×380 cmをはかる。VI層(ローム層)上面を床とし、きわめて軟弱な床であった。壁は急傾斜に掘り込まれ、壁高20~25 cmを残す。柱穴はP1~3が相当すると考えられ、やや不規則ながら2号住居址同様三角形の配置を示す。おおむね径35~50 cm、深さ40~50 cmをはかる。炉址は床面のほぼ中央に検出された。径35×40 cm、深さ40 cmの浅い掘り込み内に、焼上と炭化物がわずかに認められた。規模・形状から地床炉であったと考えられる。

遺物 土器——6は炉址近くの床面上に遺存していた深鉢形土器。胎土に粗砂・雲母を多く含み、赤味をおびた茶褐色を呈す。このほか覆土中から1,410 g・14点の土器片が出土した。

石器——3は黒曜石製の石鏃である。4~6は打製石斧で安山岩製である。このうち4は扁平な石片に簡単な調整が施されたものである。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第I期の住居であったと考えられる。

4号住居址 (図8-14、PL14・15・27・40・41)

調査区のはば中央、II R-06・07グリッドに位置する。柄鏡形の敷石住居址であり、IV層上部で検出された。当初張り出し部先端の埋裏と同基部の敷石が確認されたが、それぞれ単独の遺構として認識したままに周囲の掘り下げを続行したことから、張り出し部などプラン全体については未確認に終わった。

規模は主体部径410×500 cm、張り出し部推定長300 cm、同幅140 cmをはかり、主軸長は700 cmを越えていたと考えられる。主体部の中央やや前寄りに石囲い炉を設け、炉址を中心としてその周囲に扁平な礫を敷きつめていた。敷石は250×270 cmのほぼ方形を呈し、張り出し部と接する面を除く三方の縁には小礫が立位に埋め込まれていた。また、敷石部の北西隅と北東隅にはそれぞれ丸石が置かれ、張り出し部と主体部との接点には打製石斧と大形剥片石器が埋置されていた。張り出し部にも若干の敷石が使われていたとみられ、P6とP7上部は巨礫や扁平礫を立て配石状をなしていた。

主柱穴は主体部の敷石周囲に検出されたP1~5と考えられる。P10やP11など周溝内に検出されたピットも構造上重要であったと思われるが、東壁下の状況を把握できなかったことから全体像は不明のままとなった。張り出し部にはP6~8が検出された。とりわけ、上記したように主体部との接点に相当するP6・P7間は敷石や石器の埋置などに特異な状況がうかがえ、特別の配慮が加えられた空間であったと推定できる。炉址は扁平礫を立位に埋めて作られた方形の石囲い炉である。炉縁を敷石面とほぼ同じにそろえ、内部には小形の土器を埋設していた。また、張り出し部および主体部との接点には総数4個の埋裏が埋設されていた。これらのうち、埋裏1は主体部に対して外傾し、埋裏2・3は同内傾して埋められていた。

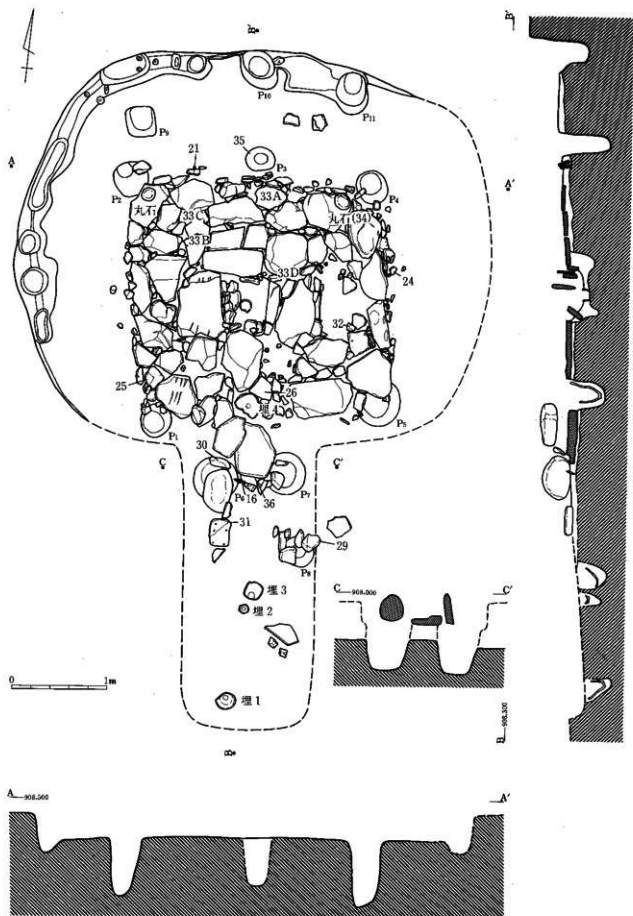
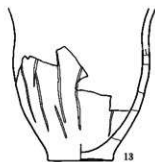
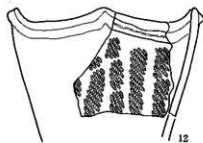
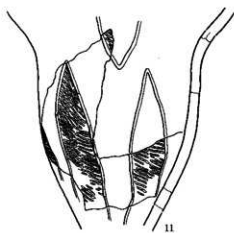
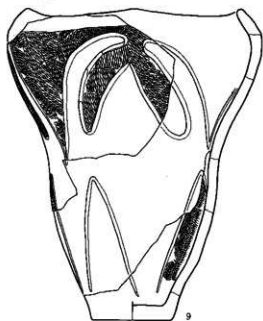


图8 4号住居址遺物分布(1) 图9 4号住居址(2)



0 10 cm

图10 4号住居址(3)

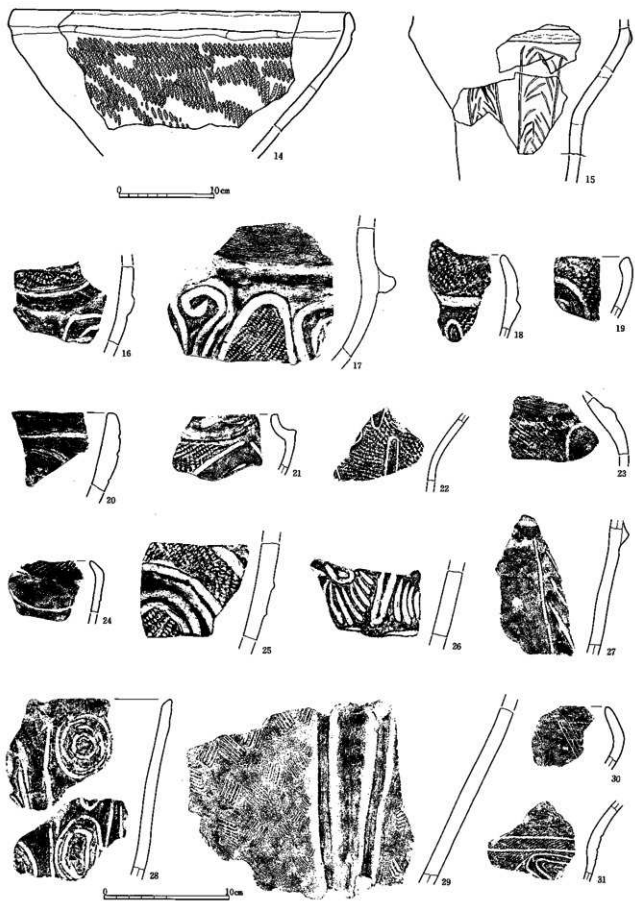


图11 4号住居址(4)

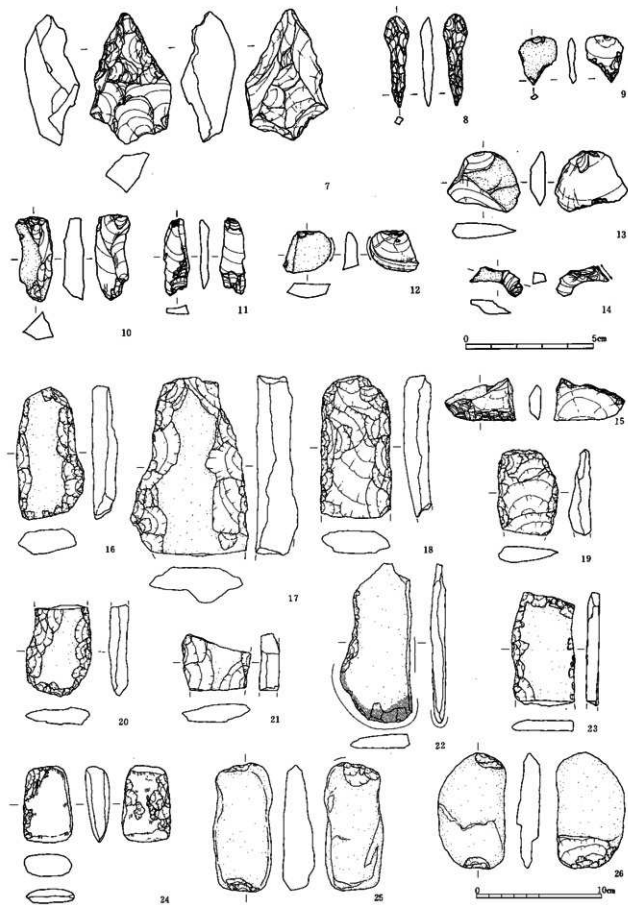


图12 . 4号住居址(5)

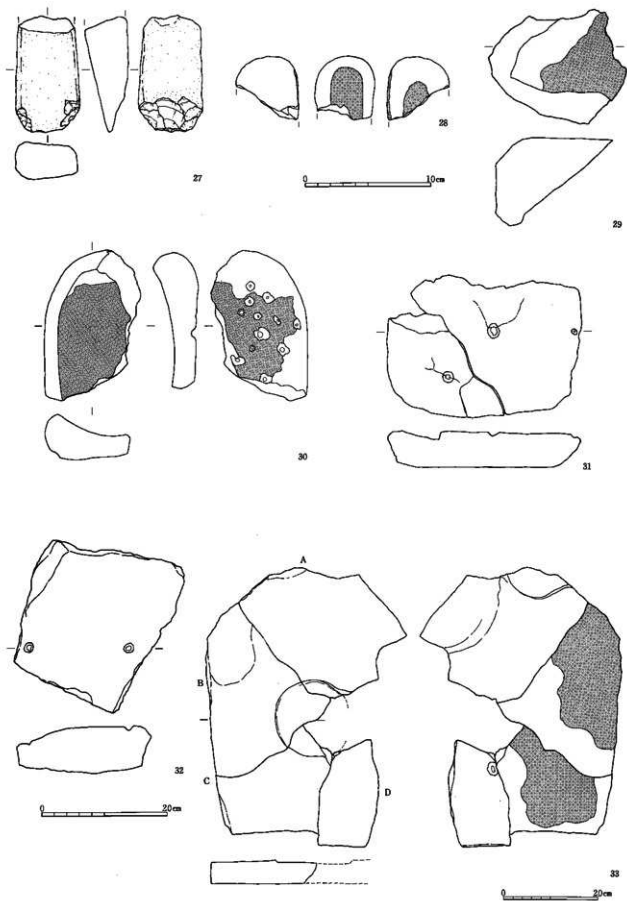


图13 4号住居址(6)

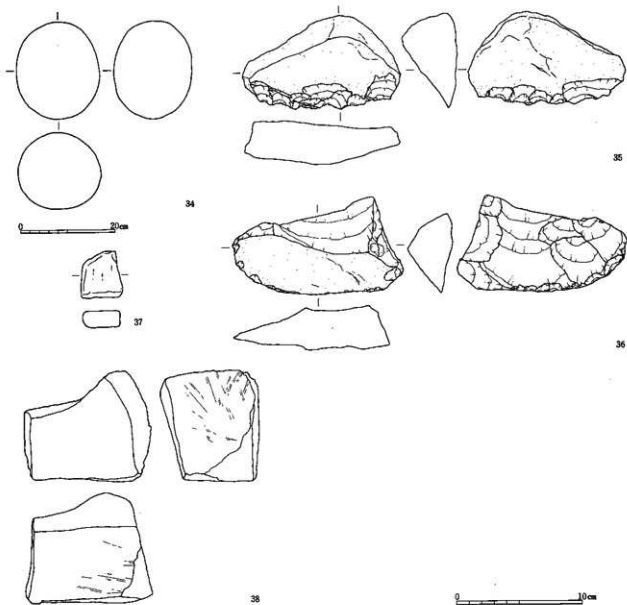


図14 4号住居址(7)

遺物 土器—総重量7,650g・342片出土した。7～9は埋裏1・2・4に用いられていたもの。すべて無節縄文を地文とする。10は炉内に埋位されていた土器。11～31は覆土中より出土した土器で、後期前葉に帰属する31を除き、ほかはすべて中期後葉の土器である。

石器—7は石槍と思われる。8・9は石錐、10・11はピエス・エスキーユ、12～14は小剝離痕を有する剥片である。16～23は打製石斧で16・17は調整が粗雑で、特に17は背面に礫面を残し両者ともに非実用品の可能性ある。33は敷石に利用された鉄平石の接合資料で中央部に掘り窪めた跡が認められる。7・13がチャート製、8～14が黒曜石製、24が輝緑岩製の他は安山岩製である。

時期 出土遺物の特徴から、本址は中期後葉、本遺跡第Ⅲ期に構築された住居であったと考えられる。

5号住居址 (図15～21、PL15・16・27・31・39)

調査区中央やや北寄り、II R-02グリッドに位置する。4 m 余り南には4号住居址がある。IV層中で遺物の集中的な出土により存在を確認したが遺構検出には至らず、V～VI層まで掘り下げてプランを確認した。規模は径490×435 cmをはかり、南北にやや長い楕円形を呈する。壁は急傾斜に掘り込まれ、壁高は最

大で55 cmを残す。覆土はIV層に対比される暗褐色土や黒褐色土であり、炭化物やローム粒を含んでいた。また、1～3層にかけては多量の遺物を包含し、とりわけ、炉址上部からその南側にかけては大形破片が数多く遺存していた。

VI層（ローム層）を掘り窪めた面をそのまま床とし、南寄りを除く壁下には幅20～40 cmの周溝がめぐり、床面には14個のピットが掘られていたが、そのうちP1・5・8の3つが主柱穴とみられる。径40～50 cm、深さ50～60 cmをはかる。このほか、P2・4・6・7・9も上層構築にかかわる柱穴であった可能性が高い。P10とP12や対ピット状のP13・14は出入口施設に関連する柱穴と考えられる。P11は埋襲に付随したものか。炉址は方形の石囲い炉であり、中央やや北寄りに設けられていた。径約90 cm、深さ65 cm余りの大きな掘り方内に大形の壺口礫を四方に組み合わせて作られ、内部には底部を欠く深鉢形土器が入れられていた。炉縁石上端から炉底までの深さは40 cm。また、炉辺南側には焼土の堆積が認められた。周溝や対ピット状のあり方などから出入口部と推定される南壁寄りには、埋襲が埋設されていた。径50×40 cm、深さ25 cmの掘り方内に、深鉢形土器の胴部を正位の状態で埋めてあった。

遺物 土器——総重量36,570 g・1,237片の土器が出土した。32は埋襲に用いられていた土器、33は炉内に入れられていた土器である。34～84は覆土中に遺存していたもの。32は縦位懸垂文により器面を4分割し、その間を蛇行懸垂文や鱗状の短沈線文で埋める。33は円形や逆「U」字状の沈線区画文内に縄文が充填施文される深鉢形土器。40は床面より10 cmほど浮いた状態で出土した小形土器。肩部に小さな橋状把手をめぐらし、丸をもつ体部には渦巻状のモチーフが組み合わされる。41の表裏と皿状の42には赤色塗彩の痕跡が認められる。

石器——出土量が一番多い。打製石斧は出土の半分以上をしめる。石錐（39）、小剥離痕を有する剥片（40～44）などの小形の石器は少ない。打製石斧のうち50・56は斜状の摩耗痕が認められる資料。68～70は磨石類である。石棒71は9号住居址出土の石棒と接合する。本址の方が先行するため廃棄されたものと判断される。72は軽石製品である。39～44が黒曜石製の他はすべて安山岩製である。

時期 本址は出土遺物より、中期後葉、本遺跡第Ⅲ期の所産であると考えられる。

6号住居址（図22、PL16・17・39）

調査区のほぼ中央、ⅡR-12グリッドに位置し、V層上面で検出された。IV層掘り下げ時に埋襲が確認され、住居址の存在が予測されたものの、調査の不便からプラン検出には至らなかった。その結果、V層上面で埋襲および炉址、さらに一部配石状を呈す礫と遺物の広がり記録したにとどまる。

炉址は径55×63 cm、深さ20 cm余りをはかり、南側に角柱状の炉石を残す。規模・形状から、炉石は当初より南縁に据えられていたのみであったと考えられる。炉底から炉壁にかけては部分的に焼土化していた。埋襲は炉址の南側に50 cmほど離れて検出された。径35 cmの掘り方内に底部を欠く深鉢形土器が上部を炉址側に傾けた状態で埋設されていた。炉址と埋襲の周囲には多数の円礫が遺物とともに遺存し、北西部および炉址東側では配石状を呈していた。これらの礫は住居構築時には炉址を中心として壁下をめぐっていたとも考えられ、その場合径280 cmほどの隅円方向プランが想定される。床はV層上面にあったと考えられるが、硬化面など明瞭には捉えられなかった。

遺物 土器——総重量3,730 g・53片が出土した。85は埋襲に用いられていた土器。形骸化した口縁部文様帯をとどめ、口縁下から胴部にかけては、2号住居址出土の3や5号住居址出土の38と同様なモチーフが描かれる。86は床面出土の大形破片。縄文を地文として、2本1組の懸垂文を縦位に連ねる。

石器——73はチャート製の石錐、74・75は打製石斧、76は礫器、77は多孔石である。73以外は安山岩製である。

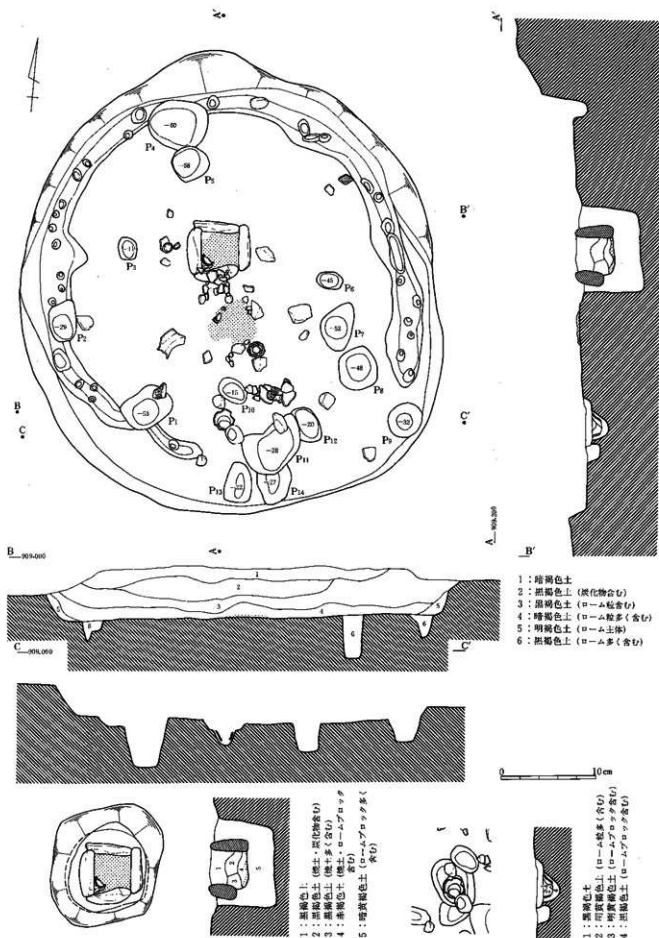


図15 5号住居址(1)

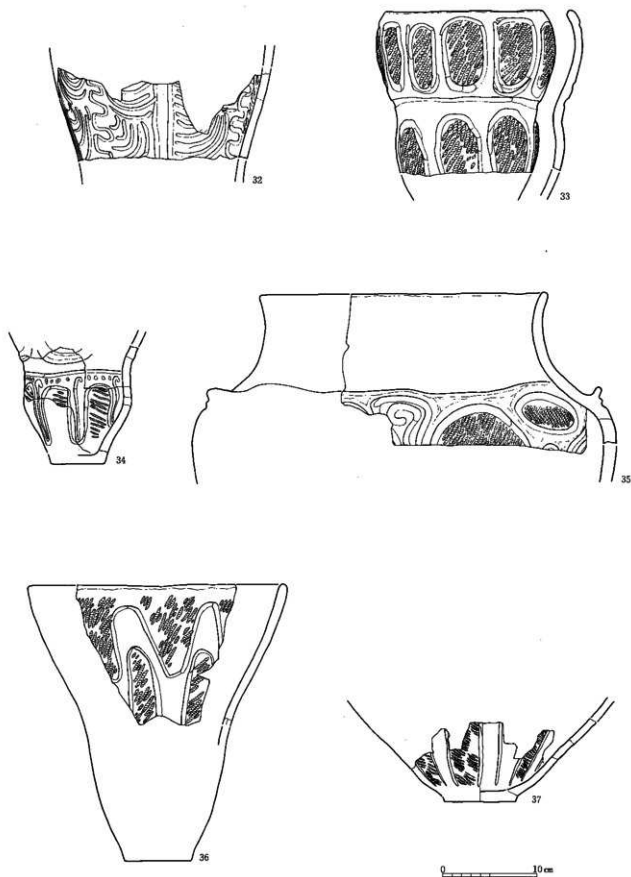


图16 5号住居址(2)

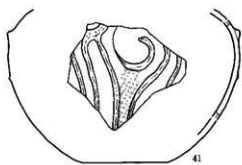
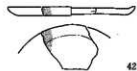
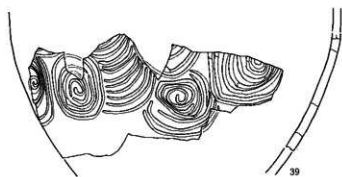
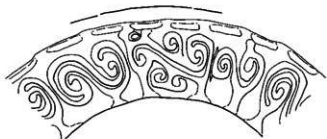
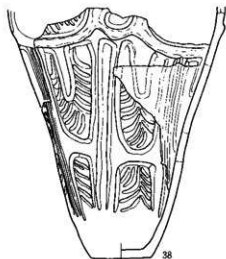


图17 5号住居址(3)

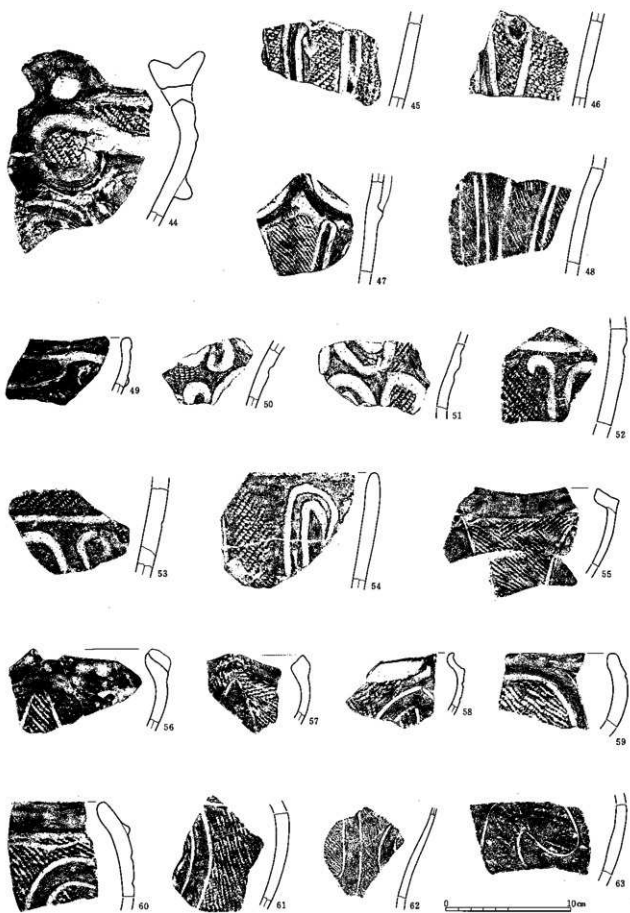


图18 5号住居址(4)

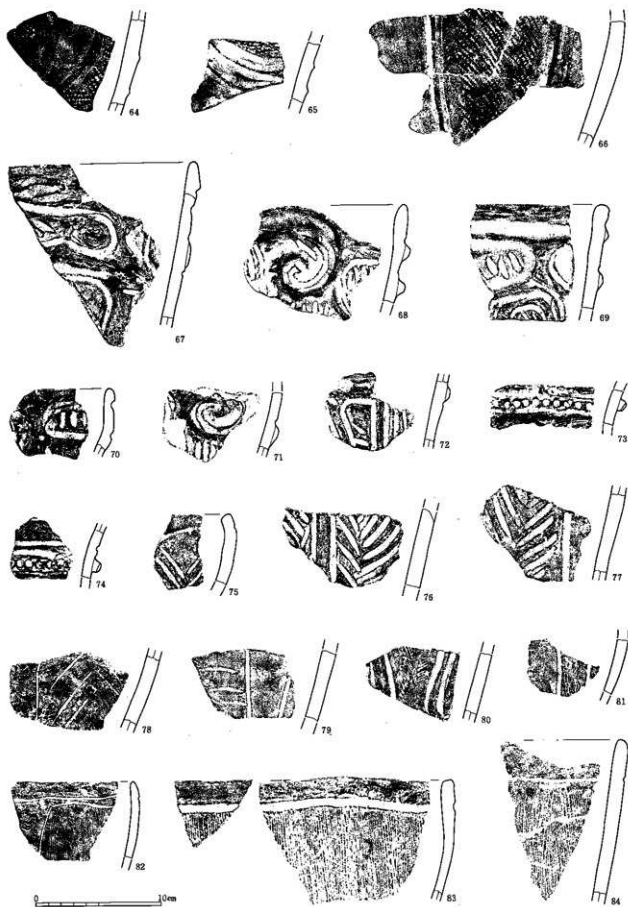


图19 5号住居址(5)

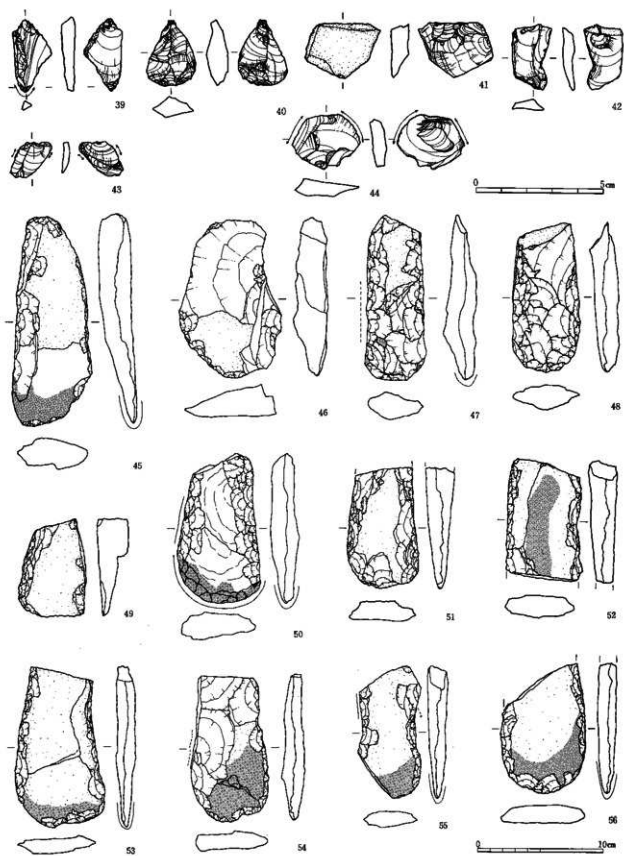


图20 5号住居址(6)

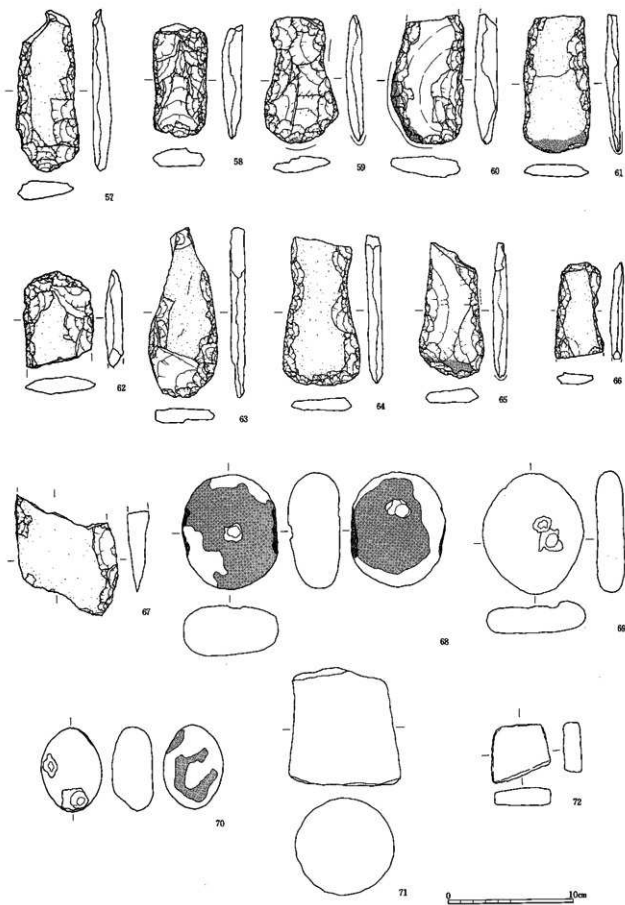


图21 5号住居址(7)

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期に構築された住居址と考えられる。

7号住居址 (M23, PL17)

調査区南東寄り、II R—23グリッドに位置する。IV層下部で埋襲が確認され、周辺を精査したところ柱穴とみられるピットが検出されたことから、住居址と判断した。検出時にはすでに床面を失っており、壁や床の範囲・覆土などは記録できなかった。

主柱穴と考えられるのはP1～4であり、東西に長い長方形配置に復原できる。P1とP4の間に埋襲が埋設され、その南側には対ピット状をなすP5・P6が掘られている。P7～P9については本址に伴うものか否か明らかにしえない。また、炉址や周溝も不明のままとなった。規模・形状については450×515 cmほどの楕円形プランが想定される。しかし、大形の対ピットが存在や埋襲に用いられていた土器の時期を考慮すると、敷石住居であったか否かは別として4号住居址や9号住居址のような柄鏡形を呈していたことも充分に考えられる。

遺物 土器——総重量1,230 g・5片の土器が出土したにすぎない。87は埋襲に用いられていた土器。口縁部と底部付近を欠いた深鉢形土器であり、逆「U」字状をなす細い沈線文が施される。胎土に粗砂を多く含み、調整も全体に粗い。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第III期に帰属すると考えられる。

8号住居址 (M24, PL18)

調査区中央部のやや西寄り、II R—14グリッドに位置する。IV層下部で検出された。

推定径約300×350 cmの楕円形プランを呈するとみられるが、壁の検出が一部にとどまったことから、全体の規模・形状は推定の域を出ない。床はIV層下部からV層上面にかけて掘り込んで作られていた。硬化面などは認められず、比較的軟弱であった。本址の中央やや北寄りに炉址が確認された。径約60 cm、深さ20 cmの掘り込みを有し、炉底には焼土が堆積していた。また、床面上には炉址を取り囲むように扁平な大形礫多数が遺存し、そのうちのいくつかには使用痕が観察された。柱穴・周溝は検出されなかった。

遺物 土器——総重量1,500 g・33片出土。88は上げ底状の脚を有する底部破片。遺構外出土のと類似する土器であろう。89・90は同一個体の土器片。縄文を地文として、隆帯文や沈線文が施される。

石器——78は多孔石である。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期に使用・廃棄された住居址と考えられる。

9号住居址 (M25-29, PL18-20・41)

調査区南西寄り、II Q—10グリッドに位置する。VI層上面において、暗褐色土の落ち込みとして検出された。検出時に攪乱と誤認したことから住居址との認定に至らず、住居址中央から南東側にかけてを過度に削ってしまっている。また、北西端部を28号土坑に切られる。

柄鏡形の敷石住居址であり、隅丸方形を呈する主体部に長さ160 cm余りの張り出し部が接続する。主体部径は450 cmほどをはかり、主軸長は618 cmに達する。覆土は暗褐色土を主体とし、炭化物やロームを含んでいた。主体部の中央やや前寄りに方形の石囲い炉を設け、床面には南東部を除いて敷石が施される。敷石は厚さ5～8 cmの扁平な礫をびっしりと敷き詰め、とりわけ、炉址の奥寄りには大形礫を用いていた。用材は遺跡周辺に産する板状節理の安山岩を多用し、すき間を小礫で埋めていた。南東側は壁下に敷石がめぐるのみであるが、これは住居構築当初より「土間」的な機能を意図していたことによると考えられる。この部分の床面上には完形の深鉢形土器をはじめ、磨石や打製石斧など石器類も多く遺存していた。

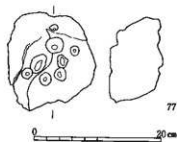
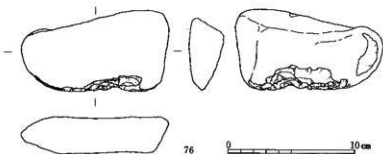
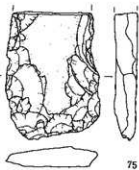
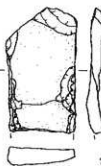
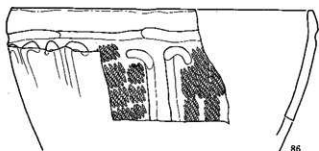
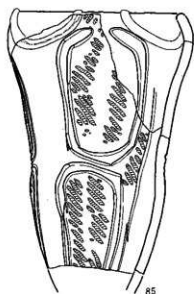
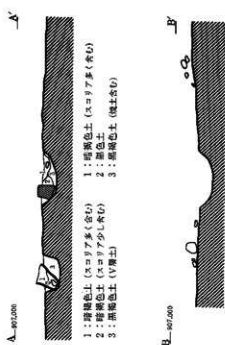
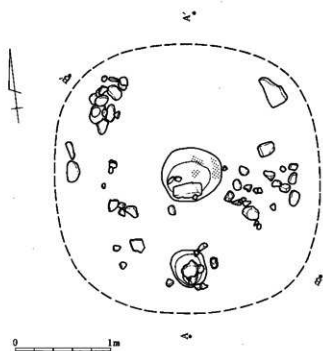
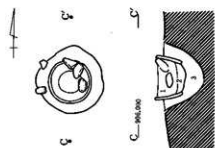
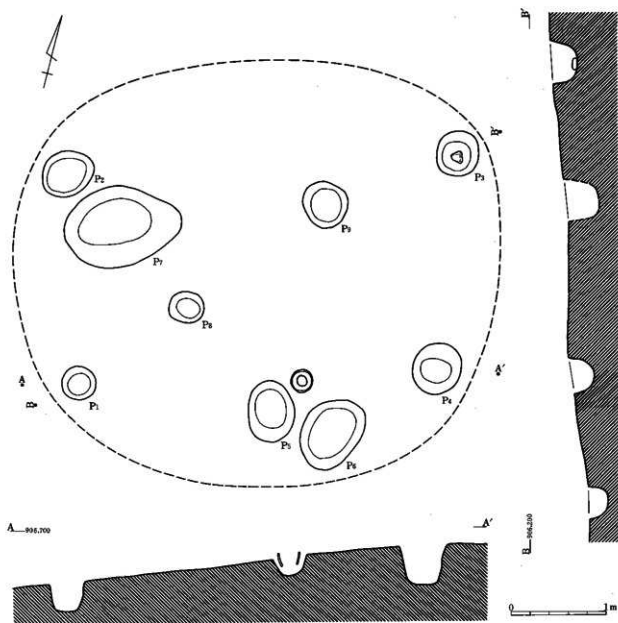


图22 6号住居址



- 1: 絵柄赤土 钵形(中央有凹)
- 2: 明褐色土 钵形(中央有孔)
- 3: 黄褐色土 (口縁有突起)

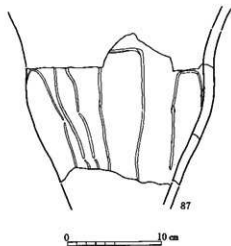


图23 7号住居址

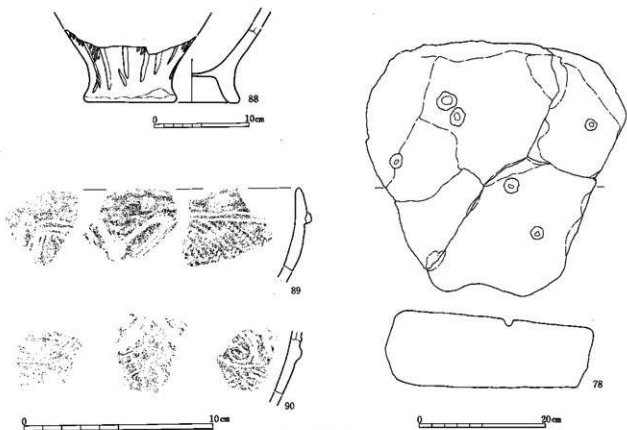
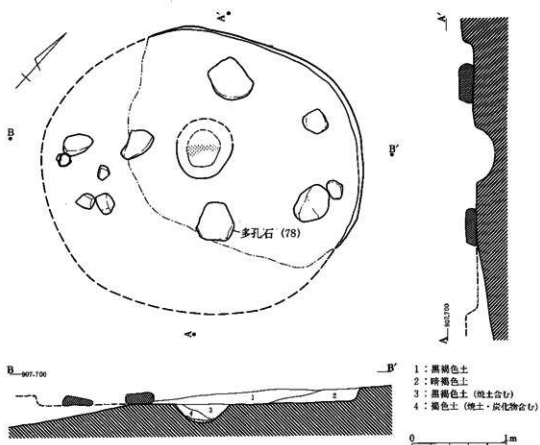


图24 8号住居址

また、柱穴を結んだ壁下には、小石を土石混合状にした土壌がめぐらされていた。柱穴は20～30 cm 間隔で壁下をめぐり、径約40 cm、深さ50～80 cmの大形のもの、径約25 cm、深さ15～20 cmの小形ものものと交互に穿たれる。炉址は扁平な大形礫を立位に組み合わせた方形の石囲い炉であり、内径30×50 cmをはかる。炉縁は敷石面より15 cmほど高く設置され、上端からの深さは30 cm 余りをはかる。また、炉底には大形の深鉢形土器を割って破片を敷き重ねてあった。

張り出し部と接する所には対ビットが連結したと思われる大きなビットが掘られ、くびれを介して接続する張り出し部の溝へと移行する。張り出し部の先端には一方の溝と連結したビットが穿たれている。
遺物 土器—総重量21,550 g・153片の土器が出土した。91は炉内に敷かれていた深鉢形土器。底部付近を欠損するが、口縁から胴部にかけては全周する。92～94は床面出土の土器。92は口径44 cm、器高52 cmの大形深鉢。95は覆土から出土した両耳広口壺の口縁部破片。

石器—打製石斧(79～82)、磨石類(83～85)、砥石(86)、石皿(87)、多孔石(88・89)、石棒(90)が出土した。82は扁平な剥片に荒い調整が施されたもので、上半部が縦方向に剝落したものととも考えられる。84は凹みが著しく、使用により形成されたというよりは凹んでいることに意味のある成形痕と捉えられるものである。90は5号住居址出土の71と接合する資料で、上部が71である。なお、86は砥石における作業面的な磨り面と整形痕としての剝離とが認められるもので欠損品である。すべて安山岩製である。

10号住居址 (図30、PL20)

調査区北西寄りのII L—25グリッドに位置し、VI層上面で検出した。ナガイモ栽培による擾乱が床面にも及び、炉址や柱穴などが破壊されていた。

径270 cmほどの隅丸方形プランを呈し、南壁に若干の張り出し部がつく。張り出し部を含めた主軸長は290 cm 余りをはかる。壁下には径15～20 cmのビットが多数めぐらされる。ビットは深さ5～15 cmほどのものがほとんどであるが、P1～4は30～40 cmと際立って深く主柱穴と考えられる。また、これらのビットは住居址中央部に収束するように斜めに掘り込まれている。張り出し部両側のビット(P5・6)も25～30 cmと深い。このふたつは張り出し部上で交叉するように掘られており、出入口施設に関わる柱穴と考えられる。以上のような柱穴配置から、本址は丸みをもつ角錐状の上屋に小さく張り出す出入口部が開口する構造であったと推測される。

ローム層を掘り込んだ面をそのまま床とし、その中央部に炉址が設けられる。炉址は径約55 cm、深さ20 cm 余りの掘り方を15 cmほど埋め戻し、上部に大形の土器破片が嵌められていた。北壁下の床面上には大形の凹石が、炉址の埋め戻し土中には多孔石が、それぞれ遺存していた。

遺物 土器—総重量960 g・3片の土器片が出土したのみである。96は炉址の火床部に敷かれていた両耳広口壺。肩部から底部にかけての4分の1が現存する。

石器—91は凹石、92は多孔石である。どちらも安山岩製である。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第III期に構築された住居址と考えられる。

11号住居址 (図31～35、PL20・21・28・39)

調査区西端、II L—23グリッドに位置する。V層中において検出されたが、道路建設時の削平が検出面まで及んでいた。

隅丸方形を呈し、規模は径320×290 cmをはかる。検出時より多数の遺物が出土し、本址中央から北西寄りにかけて集中した分布を示した。出土層位は覆土1層中にはば限定される。ローム層を掘り込んだ面をそのまま床とし、南西部がやや低まるものの、全体としては平坦に整えられる。東壁から南壁下にかけて

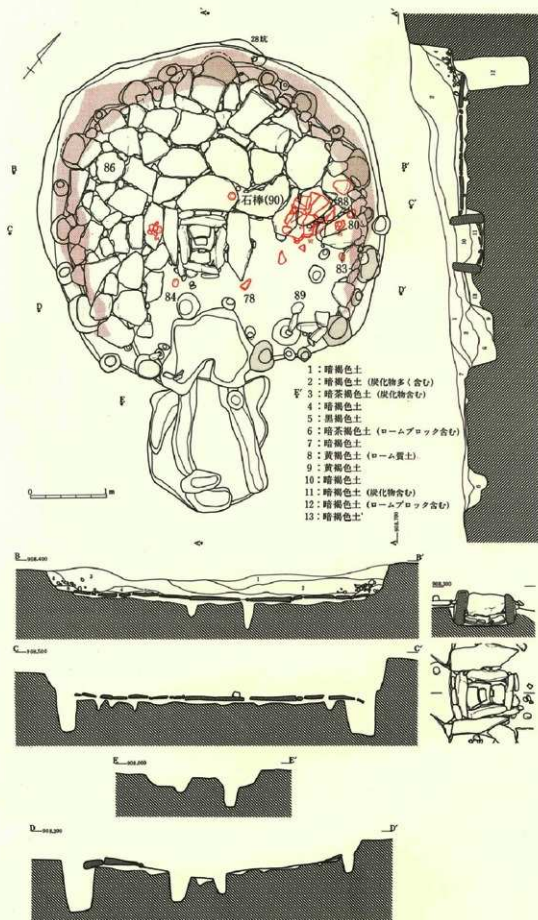
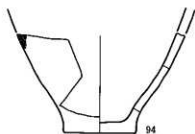
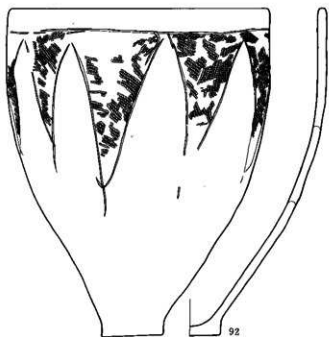
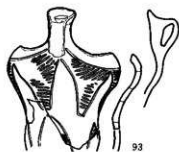
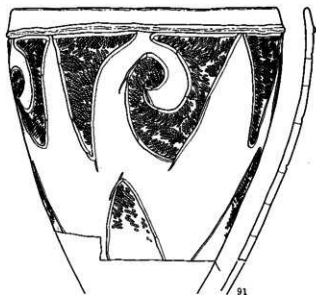


图25 9号住居址遺物分布(1) 图26 9号住居址(2)



0 10cm

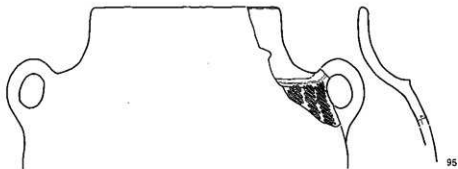


图27 9号住居址(3)

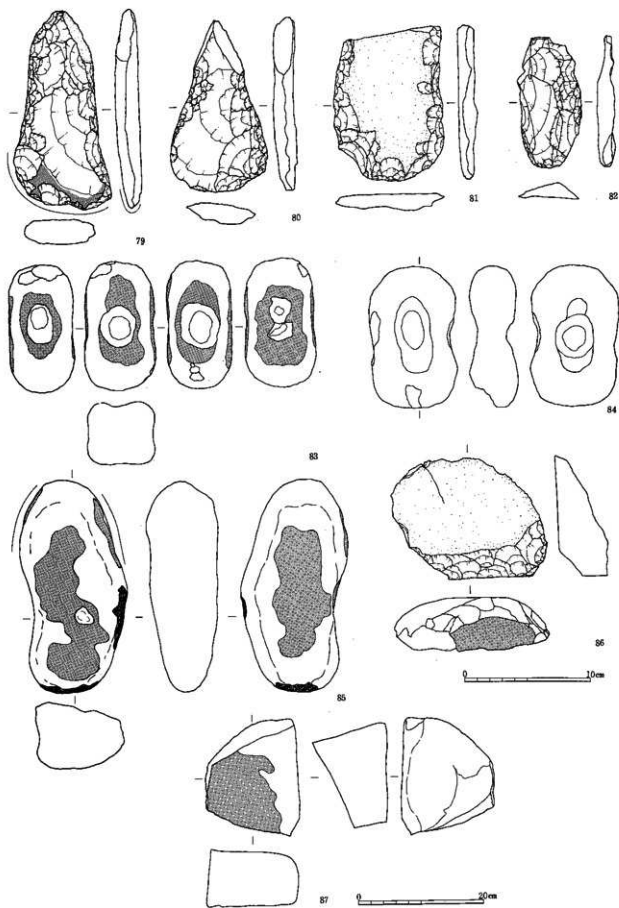


图28 9号住居址(4)

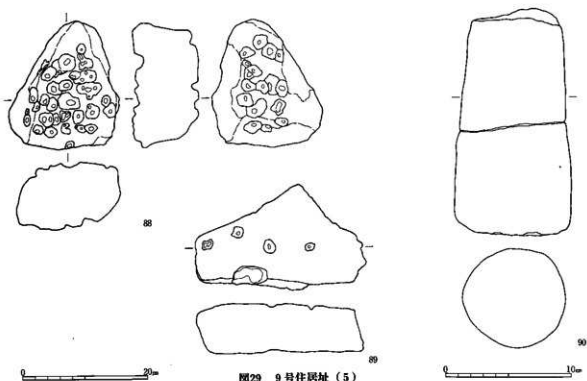


図29 9号住居址(5)

周溝がめぐり、壁下に近い位置には柱穴と考えられるピットが7個穿たれる。このうち支柱穴とみられるのはP1・2・4・5であり、これにP3・6が加わる。周溝の末端につながるP7は、位置関係から出入口施設にかかわるものであろう。また、P1とP6間の床面上には、深鉢形土器が伏せられてあった。上端が削平され当初の姿のままではないが、いわゆる「床面倒況土器」と考えられる。

炉址は中央やや奥寄りに設けられていた。径90×100 cmの不整形な掘り方を有し、底部には微量の焼土と炭化物が認められた。掘り方内に炉石の抜き取り痕と思われる凹みが見つかり検出されたことから、簡便な石囲いが存在した可能性が高い。

遺物 土器——総重量14,660 g・309片が出土した。97は床面に伏せられていた深鉢形土器。98～116は覆土中からまとめて出土したもの。縄文を地文とする一群(98～102・105～112)と短沈線を地文とする一群(103・104・113～116)とに大別される。後者の中で104・116は系統的に分離されるべき土器かもしれない

石器——石鏃(93)、スクレイパー(94・95)、打製石斧(99～101)、磨石(102)などのほか、98のような横刃形石器状のものが認められた。93～96が黒曜石製の他は、安山岩製である。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期の住居址と考えられる。

12号住居址 (図36・37, PL21・39)

調査区西端に近いIIQ-09グリッドに位置する。V層下部で検出されたが、斜面下方の東壁側は柱穴を残してすでに失われていた。

径315×325 cmほどの方形プランを呈するとみられ、壁高は最大で30 cmをはかる。VI層(ローム層)を平坦に掘り込んで床面とし、西壁下には周溝をめぐらす。床面には10個のピットが掘られており、そのうちP1・3・7・10の4個が支柱穴と考えられる。また、北壁及び南壁下のはば中央に掘られたP6とP9も11号住居址例と同様重要な柱穴であったと推測される。P9とP10は対ピット状の位置関係を保っており、出入口施設に関連した機能を合わせ持っていた可能性も否定できない。

炉址は中央やや前寄りにあり、径85×60 cm、深さ15 cmの楕円形を呈する。炉底には焼土と炭化物が若

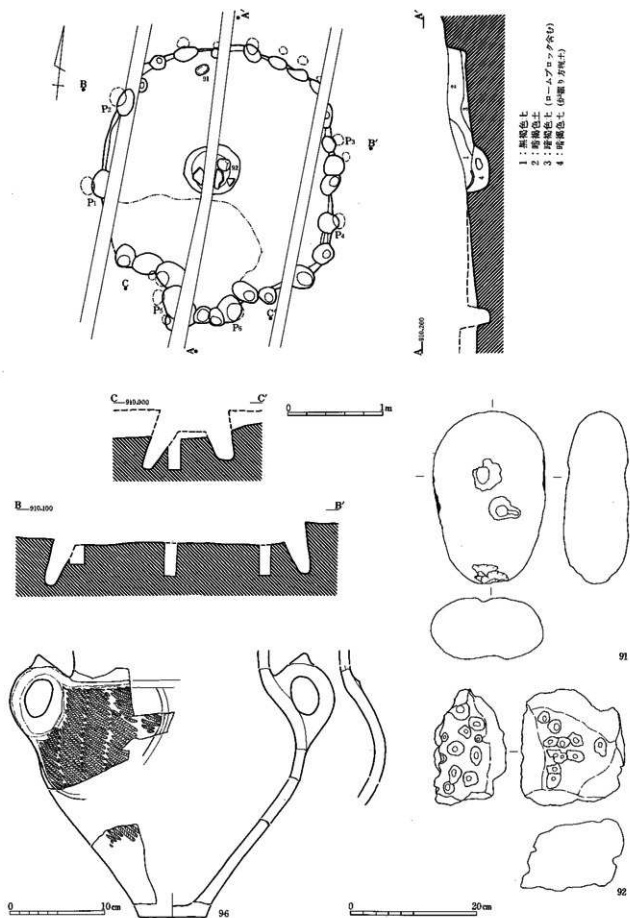


图30 10号住居址

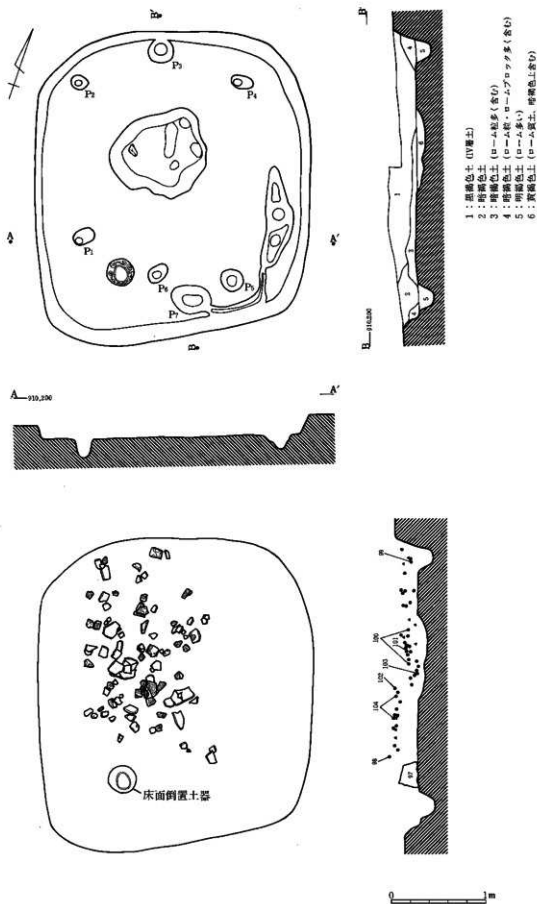


图31 11号住居址(1)

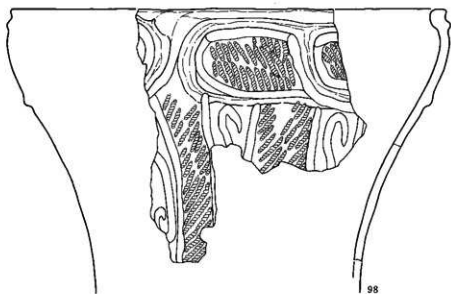
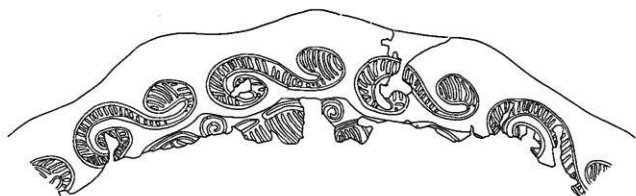
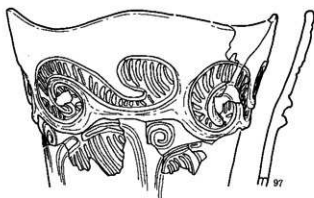


图32 11号住居址(2)

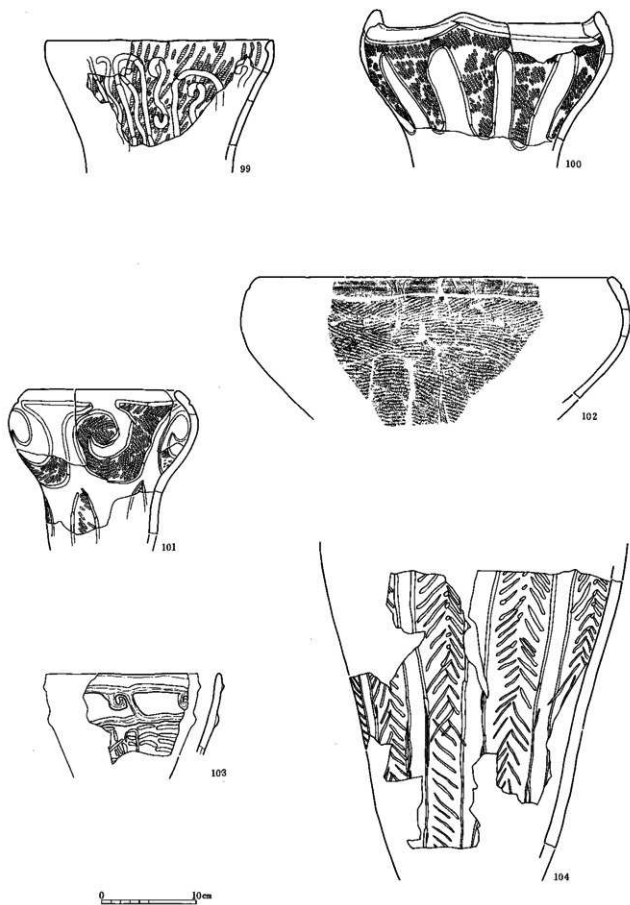


图33 11号住居址(3)

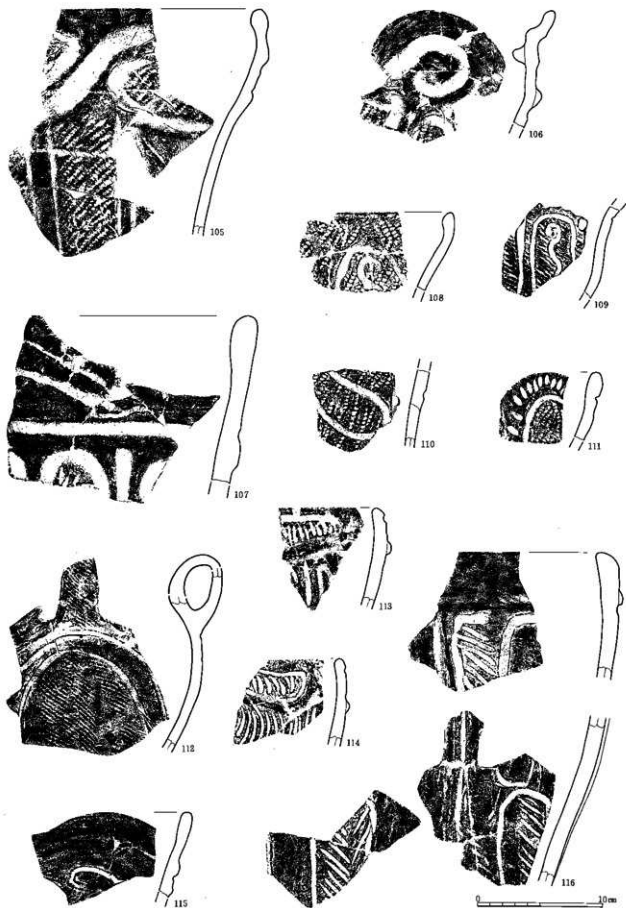


图34 11号住居址(4)

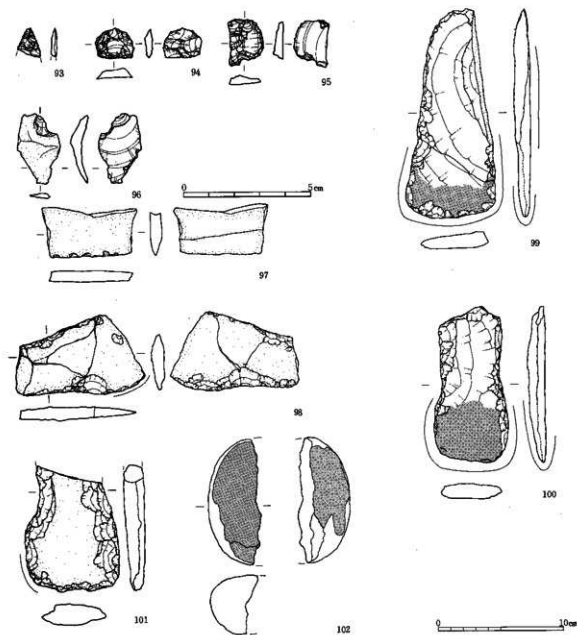


図35 11号住居址(5)

少量残存していた。炉石の抜き取り痕が確認されず地床炉であったと考えられるが、断定はできない。

遺物 土器——総重量1,550 g・67片が出土した。図示した1点を除き、ほかはすべて小破片であった。117は小形の深鉢形土器。底部付近のみで全体像は不明であるが、細い沈線で曲線的な文様が施される。

石器——103は石錐、104・105はスクレイパー、106・107は小剥離痕を有する剥片、108～110は大形剥片石器、111～113は打製石斧、108は緻密な安山岩製で刃部に細かな調整が施されている。103・104がチャート製、105～107が黒曜石製、他は安山岩製である。

時期 本址は、出土遺物から中期後葉、本遺跡第Ⅱ期の住居であったと考えられる。

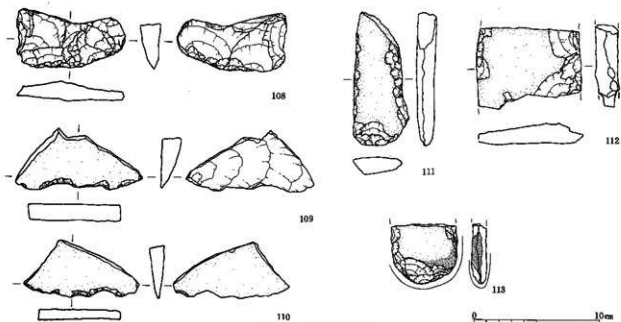


図37 12号住居址(2)

イ ビット群

1号ビット群 (図38)

調査区東寄り、II R-24グリッドに位置する。重機によるVI層検出時に、径40~60 cm、深さ20~30 cmのビット状遺構の集中か所として確認した。覆土は黒褐色土および灰褐色土であった。調査時点では土坑として個別に記録したが、周囲の状況や規模などを考慮し、整理の段階でビット群として一括した。

炉址や周溝などの諸施設は検出されなかったものの、住居址の痕跡である可能性がきわめて高い。住居

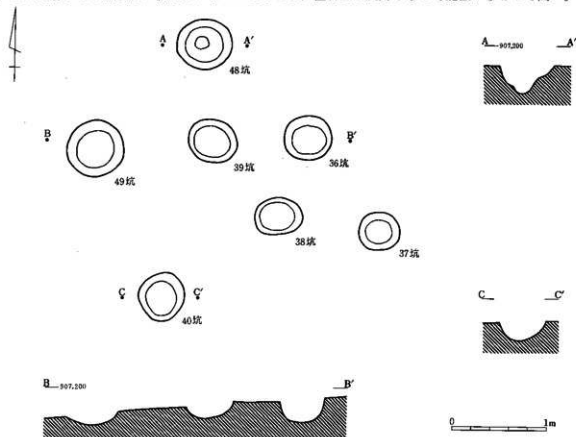


図38 1号ビット群

址と仮定した場合、37号・40号・48号土坑が主柱穴と考えられ、2号や3号住居址と同様三角形をなす柱穴配置を想定しうる。

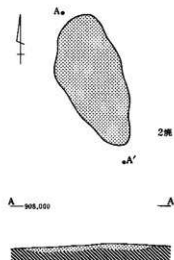
時期 伴出遺物がなく時期を細かく特定できないが、少なくとも中期後葉に帰属する遺構であることは動かさないと考えられる。

ウ 焼土址

2号焼土址 (M39)

調査区西寄り、II R-O13グリッドに位置する。IV層中部で検出。径145×70 cmの不整形な焼土の広がりとして確認された。焼土の厚さは約5 cmと薄い。平面および断面に掘り方は認められず、地山と焼土の境も漸移的变化を呈す。本址上部で火が焚かれ、地山が焼土化したと考えられる。

伴出遺物がなく帰属時期を明確にできないが、周囲の状況や検出層位などから、中期後葉の所産である可能性が最も高い。

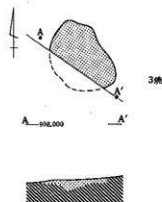


3号焼土址 (M39)

調査区西寄り、II R-O16・P16グリッドに位置し、IV層掘り下げ中に検出した。

径80×55 cmほどの範囲に、不整形な焼土の広がりが認められた。焼土は周辺部ほどまばらとなり、地山との境も不明瞭であった。断面は中心部が厚いレンズ状をなすが、平面同様地山との境は漸移的である。2号焼土址と同じく、地山が被熱により焼土化した遺構と考えられる。

伴出遺物はないが、検出面から中期後葉の土器片が多数出土していることから、同期の所産であると考えられる。



4号焼土址 (M39)

調査区のはば中央、II R-K07グリッドを中心に位置する。IV層掘り下げ時に、同層中部で検出された。

径約160×90 cmの楕円形を呈する焼土の広がりとして確認された。焼土の厚さは14 cm。平面および断面ともに焼土と地山の境は漸移的、掘り方を持たない。2号・3号焼土址と同様、地山が焼土化した様相を呈す。中心部ほど焼土化が著しく、断面も厚く凸レンズ状となる。

伴出遺物はないものの、検出層位や周辺出土の遺物から中期後葉の所産と考えられる。2号・3号焼土址とともにそれぞれが一定の距離を保って分布している反面、遺跡全体の中では、調査区の中央からやや西寄りにかけての部分に集中する傾向がうかがわれる。

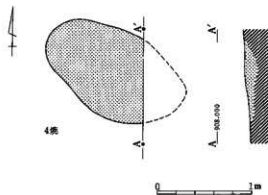


図39 焼土址

エ 遺物集中箇所

遺物集中Ⅰ (図40, PL26・40)

調査区東寄りのII R-O16グリッドに位置する。本址の南には3号焼土址が接し、3 mほど西には1号配石土坑(旧9号土坑)が存在する。IV層掘り下げ時に、大形の土器破片や石器類がまとまって出土した。周囲の遺物出土状況との間に粗目の差や内容の違いが顕著であったことから、特別の性格を持つ箇所と判断した。

径120 cm余りの範囲内に大形の土器破片や打製石斧・磨製石斧・敲石が集中して出土した。土器は器形復原可能な個体を含み、打製石斧と磨製石斧は折り重なるように遺存していた。

VI層(ローム層)調査時に、本址の下部から45号土坑が検出された。45号土坑は径50×40 cmの楕円形を呈し、遺物出土面から坑底までの深さは90 cmをはかる。両址が一体のものとするれば45号土坑埋め戻し後に土器および石器類が置かれたと推定できる。その場合、断定はできないが1号配石土坑と同様な性格が考えられ、墓址である可能性が最も高い。

遺物 土器——118は細い沈線により「U」字状・逆「U」字状の文様が施される小形の深鉢形土器。120は45号土坑の真上から出土した土器。沈線区西内に「ハ」の字状の短沈線文が充填される。

石器——114と115は折り重って出土した打製石斧と磨製石斧である。115は着柄の便をはかったものか敲打痕が認められる。敲石(116)は手頃な三角柱状の礫の稜線部を調整加工を施したものである。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第Ⅲ期に帰属すると考えられる。

遺物集中Ⅱ (図41, PL29)

調査区西寄りのII R-D-E12・13グリッドを中心に検出された。検出層位はIV層上面である。調査の時点では遺物集中箇所としての認定はできず、2 mグリッドごとに取り上げを行った。しかし、整理の段階で、後期前葉・堀之内Ⅱ式土器が一括して出土していたことが判明し、遺物集中箇所と認定した。

上記した4つのグリッドを中心として径4 mほどの範囲内に、図示した土器をはじめ時期を同じくする土器片が3,460 g・25片遺存していた。また、その周辺にも小破片ながら52,360 g・59片の土器片が散在しており、調査区全体の中できわめて特異な状況がうかがえる。炉址や柱穴などの諸施設こそ検出されなかったが、分布の規模や遺物の内容などから該期の住居址が存在したとも考えられる。住居址の存在を断定できる資料には恵まれなかったものの、祭祀の場やキャンプの場といった推測も含め、少なくともこの地点が人的営為の対象であったことは誤りない事実と思われる。

遺物 121は推定口径33.5 cm、推定器高31 cmをはかる深鉢形土器。全体の2分の1が現存する。朝顔形に開く口縁から直線的に底部へ移行する。「8」の字状の貼り付け文を伴う紐線文を口縁下にめぐらせ、胴上半部には幅の狭い縄文帯を用いて幾何学状・渦巻状のモチーフを交互に連続させる。明黄褐色を呈し、器面はていねいに研磨されている。胎土には川砂を多く含む。122は推定口径33 cm、推定器高26.5 cmをはかる深鉢形土器で、121と同様な器形・文様を呈す。123は推定口径38.5 cmをはかる口縁部破片。器面に粗い調整痕をとどめ、くびれ部には沈線がめぐる。124は深鉢形土器の胴下半であり、ほぼ全周する。一部に縄文施文が認められるほか、器面にはやや粗い研磨が加えられている。明黄褐色を呈し、胎土に川砂を多く含む。123と124は同一個体とも考えられる。また、121-124は色調や胎土・調整など全体のつくりがきわめて酷似しており、同時に製作された可能性がきわめて高い。125は暗茶褐色を呈す小形土器。沈線によって区画された縄文帯によって幾何学状のモチーフが施される。胎土に砂粒・石英などを含み、器面は研磨される。薄手・堅緻なつくりの土器である。

時期 本址は、後期前葉、堀之内Ⅱ式期に帰属する。

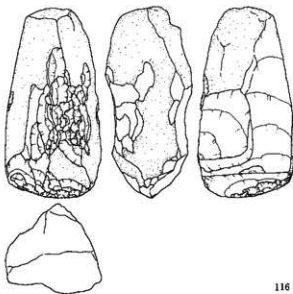
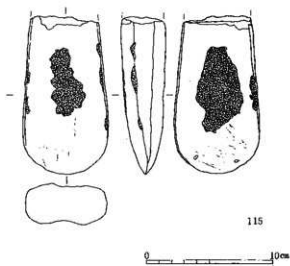
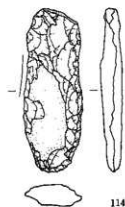
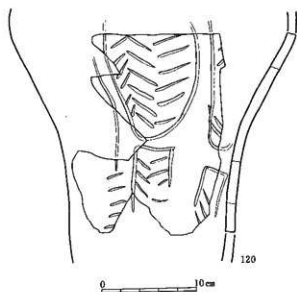
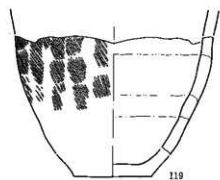
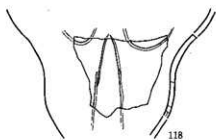


图40 遺物集中 I

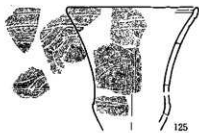
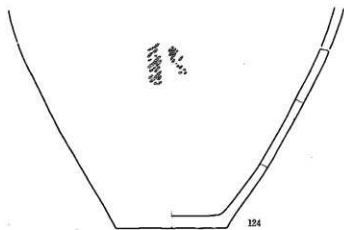
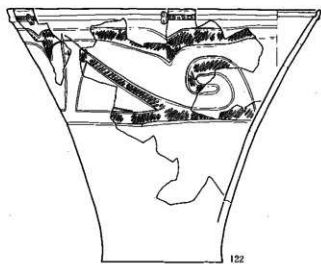
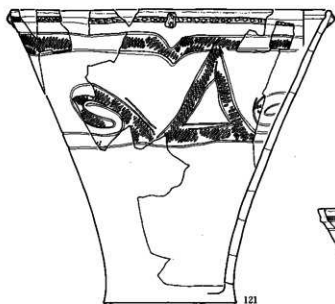


图41 遺物集中II

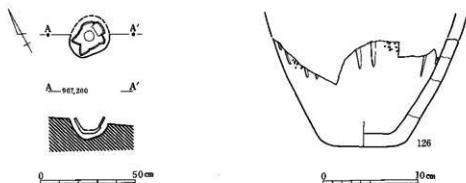


図42 1号屋外埋設

オ 屋外埋設

1号埋設 (M42)

調査区西よりのII R-C09グリッドに位置する。表土剥ぎに先行して掘ったトレンチの断面にかかったことから確認された。IV層中で平面プランを捉えたが、覆土の状況から掘り込み面も同層中にあると考えられる。

径20 cm余りの掘り方内に、深鉢形土器の底部破片を正位に埋設していた。土器の破断面は打ち欠いたと思われる割れ方を呈しており、埋設に際して大きさの調節が行われたことをうかがわせる。

126は埋設に用いられていた土器。縄文を地文として2本単位の沈線文が垂下する。比較的ていねいな調整が行われるものの、整形が粗く凹凸を残す。上部は二次焼成を受けて赤変しもろい。本址は中期後葉、本遺跡第III期の所産である。

カ 土坑 (M43-54, PL22-25・28, 表1-3)

前記したように、本遺跡からは配石土坑を含め87基の土坑が検出された。これらは形態的にいくつかのグループに分類することが可能であり、形態ごとの分布にも偏在する傾向がうかがわれた。そこで、すべての土坑を図示または列挙する煩雑さを避け、なおかつより理解しやすい方法として、土坑形態の類型化と各形態の分布傾向の抽出を行うこととした。また、記述に当たっては、遺物が出土した土坑を中心として各形態を代表する例を図示するにとどめ、記述も特に詳細な説明を要すると判断されるもののみに限った。各土坑の規模・形状・類型などは、一覧表に一括して示してある。

〈分類の基準と分類項目〉

土坑の形態を類型化するに際し、まず時的にも機能的にも分離される「陥し穴」(木平A遺跡参照)を一項目とした。「陥し穴」を除く他の土坑については、平面形と規模を第一の分類基準とし、さらに断面形と伴出遺物のあり方を加味して分類項目を設定した。I～VI類に分類される後者の一群は前記した各遺構と同様中期後葉に帰属し、本遺跡の集落構造に深くかかわっていたと考えられる。

陥し穴：早期後葉から同末葉にかけて多出することが知られるもの。

他の土坑に比べて規模が大きく、画一的な形態を示す。本遺跡の場合、隅丸方形を呈し、長軸に沿って3～4個のビットが穿たれるものが基本形である。1号・2号・22号・23号の4基がこれに相当する。

I 類：径30 cmほどのビット状を呈するもの。

25基検出された。深さ10～30 cmのものが多いが、46号・86号のように50 cmを越える土坑も

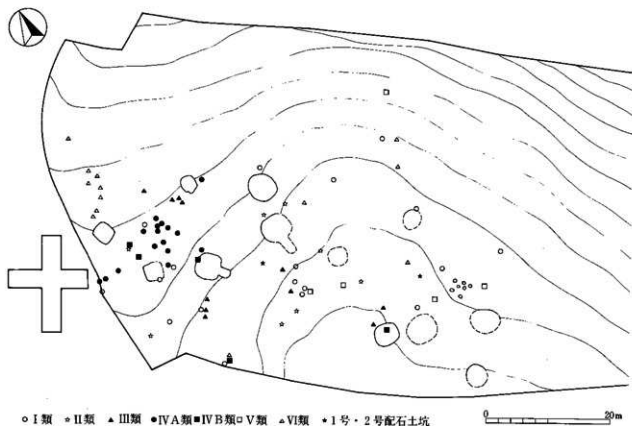


図43 土坑の類型別分布

存在する。遺構分布域内全体に散在する傾向を示す。唯一集中して分布する36号・40号・48号・49号の各土坑は1号ピット群として一括し、住居址の痕跡と考えた。

- II 類 長径100 cm ほどの小判形で、壁が比較的急傾斜で立ち上がるもの。全体で9基が検出された。深さ30 cm 前後から80 cm 余りと相対的に深いものが多く、1号・2号配石土坑など配石や礫・土器を伴う例を含む。調査区の中央付近に集中する分布傾向を示すほか、1号配石土坑や88号土坑のように東西にやや離れて位置する土坑もある。配石ないし礫を伴う例や坑底に土器が遺存していた例が存在することから、本類に含まれる土坑は墓坑であった可能性がきわめて高い。
- III 類：径80～100 cm の不整形を呈し、断面が丸底状をなすもの。総数11基を数える。深さは15～60 cm と変異に富むが、検出層位の異なる土坑が混在しており平均的には50～60 cm をはかると考えられる。調査区の中央付近に位置し、II類と共通したあり方を示す。配石状の礫を伴う土坑(19号)が認められるなど土坑自体にもII類と似た属性が認められる。積極的な根拠に欠ける面もあるが、状況的にはII類と同様本類も墓坑であった可能性が考えられる。
- IV 類：径70～140 cm ほどの円形ないし不整形を呈すもの。断面形により2種に細分される。
- A種 断面形がタライ状をなすもの。IV類の主体を占め、総数15基を数える。規模の点では大きさまでであるが、分布的には調査区西端の支根部分に集中する。形態的な特徴から、本来的には貯蔵穴であった可能性が高い。しかし、検出面からの深さが10～20 cm 足らずの土坑や埋め戻されたとみられる土坑があり、二次的な転用の問題も含め断定はできない。また、仮りに貯蔵

穴であったとすれば、南面する支尾根斜面という立地環境からみて、湿気を嫌う好乾性の貯蔵物が考えられる。

B種 断面が円筒状をなすもの。A種との区別は必ずしも絶対的ではなく、相対的に深く筒状を呈す土坑を本種とした。総数5基が分離される。20号や30号土坑のように調査区中央の凹地部分に位置するものもあるが、ほとんどはA種と同様な分布を示す。形態的な類似性や分布傾向から、A種と同様な用途が考えられる。ただし、貯蔵穴と考えた場合、凹地に存在する20号・30号両址については他址と異なり好湿性の貯蔵物が想定される。

V 類：楕円形ないし長楕円形を呈し、長軸が200 cm前後と大形の一括する。

調査区の中央付近からやや西寄りにかけて4基が存在する。分類要素以外に共通する特徴を見出せず、それぞれ個別的な形態をもつ。6号と7号土坑はとりわけ規模が大きく、ともに断面形が丸底状となる。また、10号土坑はやや不規則ながら「陥し穴」に含まれる土坑とも見受けられる。

VI 類：不整形で坑底から壁に至る掘り方が明確ではないもの。

調査区の西側支尾根部および中央北寄りを中心として、総数13基検出された。位置的に耕作時の攪乱を受けたか所であったり、該期の遺構分布域からはずれるか所であったりすることから、人為的に掘られたものか否か断定はできない。

1号土坑 (図44、PL23)

II R-T16グリッドに位置し、VI層(ローム層)上面で検出した。隅丸長方形を呈し、上端径240×98 cm、下端径226×82 cmをはかる。検出面からの深さは38 cm。主軸方位はN-75°-Wを指し、等高線に対して大きく振れる。坑底はおおむね平坦に整えられ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はIV層土に対比される黒褐色土であった。

2号土坑 (図44、PL23)

II R-F18・F19グリッドに位置し、V層上面で検出された。上端は径293×154 cmの不整な隅丸長方形を呈すが、下端は径229×104 cmをはかる均整のとれた隅丸長方形を呈す。検出面からの深さは92 cm。主軸方位はN-44°-Wを指し、等高線に対してほぼ平行する。平坦に整えられた坑底には、長軸に沿って径17 cm、深さ15~25 cmほどの小ピットが3個穿たれる。壁はほぼ垂直に立ち上がるものの、上半部は斜めに開口する。覆土はIV層に対応する黒褐色土であり、自然埋没の状況を示す。また、下部にはローム質土の堆積も認められた。

22号土坑 (図44、PL24)

II R-Q04グリッドに位置し、VI層(ローム層)上面で検出された。上端径191×54 cmをはかる軸の長い隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは29 cm。主軸方位はN-52°-Wを指し、等高線にほぼ平行する。坑底には長軸に沿って3個の小ピットが穿たれる。坑底は掘り方を7 cmほど埋めて平坦に整えられていた。覆土はIV層を基調とする黒褐色土であった。

23号土坑 (図44、PL24)

II R-P05グリッドに位置する。VI層(ローム層)上面で検出された。隅丸長方形を呈し、上端径212×113 cm、下端径192×73 cmをはかる。検出面からの深さは55 cm。主軸方位はN-38°-Wを指し、等高線に対

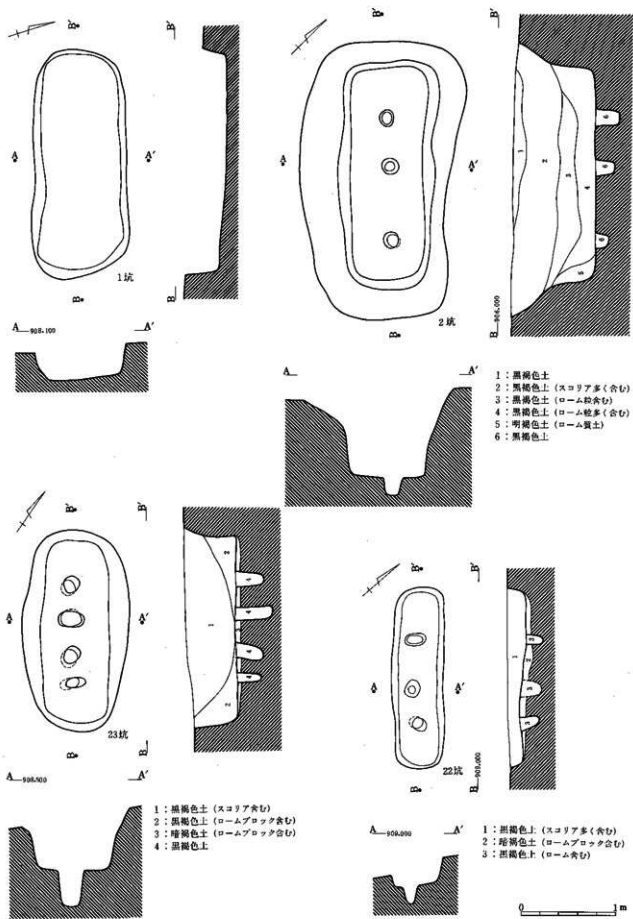


図44 土坑 (1)

して平行する。坑底には径18~27 cm、深さ25~40 cmの小ピットが4個開口する。坑底は掘り方を5 cmほど埋めて平坦に整えられており、ほぼ垂直に壁が立ち上がる。覆土はIV層に対比される黒褐色土を主とし、壁際から坑底にかけてはローム粒・ロームブロックが混入していた。

1号配石土坑 (図45、PL22)

調査区の中央やや東寄り、II R-M15グリッドに位置する。土層観察用トレンチの掘削時にIV層上部で確認された。当初は上部の石組のみと判断して配石と認定していたが、整理の段階で下部に別途検出された土坑(9号土坑)が重複することがわかり、検討した結果両者を一体の遺構と認定した。ただし、机上合

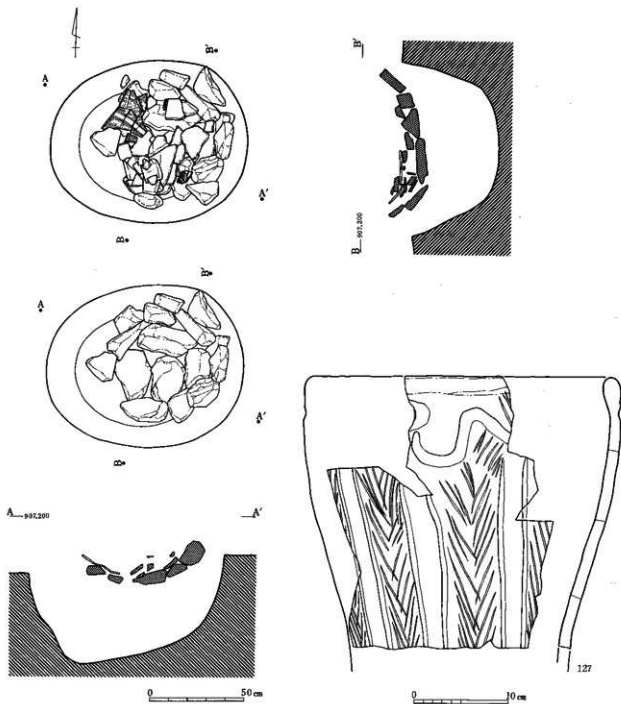


図45 土坑(2)・1号配石土坑

成で配石土坑としたことから、一覧表での名称は旧土坑番号のまま掲載し、改変後の遺構名は備考欄に記した。

径50×41 cmをはかる楕円形の土坑(Ⅱ類)上部に、18個の礫を用いて配石が組まれる。配石は径35 cm 余りの円形を呈し、中央部が大きく窪む。また、その上部には深鉢形土器の大破片が置かれていた。配石上端から坑底までの深さは65 cm。礫の多くは被熱を受けて赤変していたが、本址内で火が焚かれた痕跡はまったくなく、焼礫の転用が考えられる。

127は配石上に遺存していた土器。粗雑な綾杉状文を地文とし、形骸化した口縁部文様帯を残す。

時期 出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第Ⅱ期の所産と考えられる。

2号配石土坑 (図46, PL.22・40)

調査区中央やや西寄りのⅡR-B08グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。

径76×60 cmをはかる楕円形の土坑上部に配石が組まれる。土坑形態はⅡ類。配石は小・中礫を楕円形に敷き並べ、その上部に径40 cm を越える大礫を重ねる。下部の配石は1号配石土坑例と同様に中央部がやや窪む。また、下部配石中には緻密な安山岩製の石核が含まれていた(117)。

4号土坑 (図47)

ⅡR-A14グリッドに位置し、Ⅳ層上部で検出された。

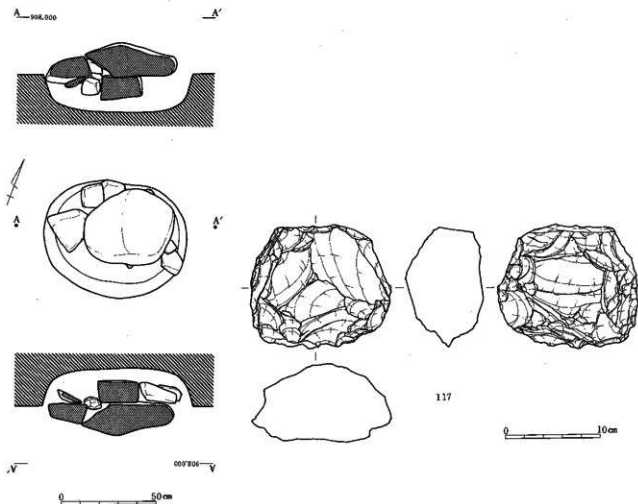


図46 土坑(3)・2号配石土坑

II類に帰属する楕円形の土坑であり、推定径120×90 cm、深さ60 cmをはかる。上面北側に大形礫を伴い周辺にも礫が遺存していた。覆土は2層に分けられ、ともにIV層を基調とする黒褐色土であった。

6号土坑 (図47・53)

II R-E12グリッドを中心に位置し、IV層中で検出された。上端径270×160 cmほどをはかる大形の土坑であり、V類に分類される。検出面からの深さは65 cm。断面は丸底状を呈し、平面形こそ違え隣接する7号土坑と類似する。覆土はIV層に対比される黒褐色土であったが、坑底にはロームを主体とする明褐色土が堆積していた。

10号土坑 (図47)

II R-R19グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

長径200 cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは42 cmをはかる。壁は急傾斜に掘り込まれ、坑底はほぼ平坦に整えられる。覆土はIV層に対比される黒褐色土であり、下部にはロームが混入していた。「陥し穴」とも考えられるが、ここではV類土坑の範疇で捉えておきたい。

19号土坑 (図48、PL22・23・40)

II R-D10グリッドに位置し、V層上面で検出された。

不整形を呈し、径122×117 cmをはかる。断面は丸底状をなし、III類に含まれる。検出面からの深さは60 cmと深く、IV層に対比される黒褐色土を覆土としていた。整理の段階で本址上部から南側にかけて礫が遺存していたことが明らかとなった。礫は30 cmを前後する大礫を主とし、多孔石などを含んでいる。

本址との関係は必ずしも明確とはいえないものの、4号土坑と同様な性格をもつことも充分に考えられる。

30号土坑 (図49)

II Q-P14グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

径50 cmほどの円形プランを呈し、検出面からの深さは55 cmをはかる。断面は筒状に掘り込まれ、一部でオーバーハングする。坑底はほぼ平らに整えられる。規模はやや小振りであるが、形態的にはIV類B種に分類される。覆土はIV層土を基調とする暗褐色土で、下部にはロームが混入していた。

52号土坑 (図49、PL24)

II Q-R05グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

径102×94 cmをはかり、平面形はほぼ円形を呈する。検出面からの深さは52 cm。断面タライ状をなし、IV類A種に分類される。覆土にはローム粒・ロームブロックが多く混入し、埋め戻されたと考えられる堆積状況を示していた。

56号土坑 (図50・53、PL24)

II Q-P02グリッドに位置し、67号土坑を切る。VI層上面で検出された。径141×120 cmの不整形を呈し、深さ86 cmをはかる。断面形はタライ状に深まり、坑底は平坦に整えられる。形態はIV類A種。覆土にはローム粒・ロームブロックが多く混入し、埋め戻されたと考えられる複雑な堆積状況を示していた。

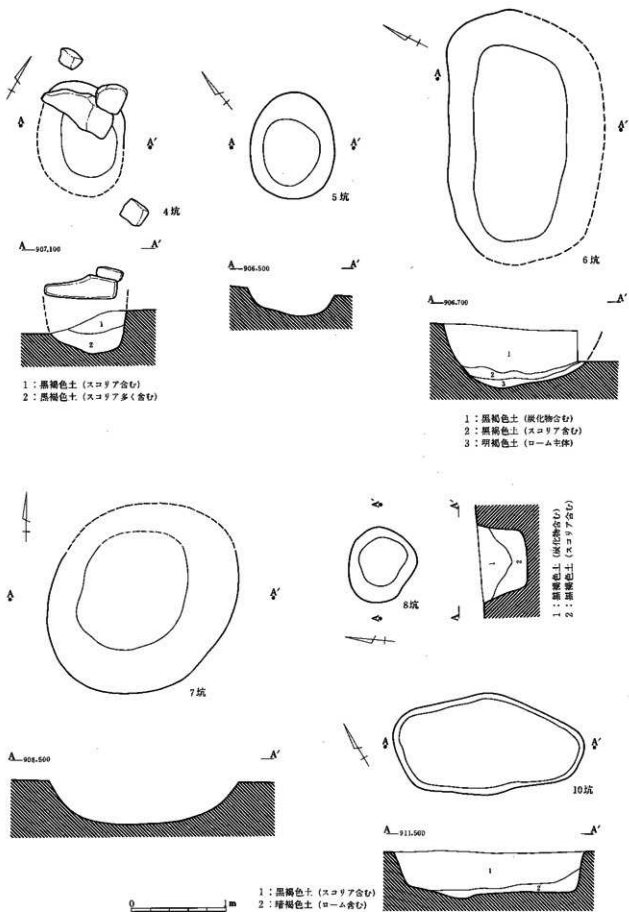


図47 土坑 (4)

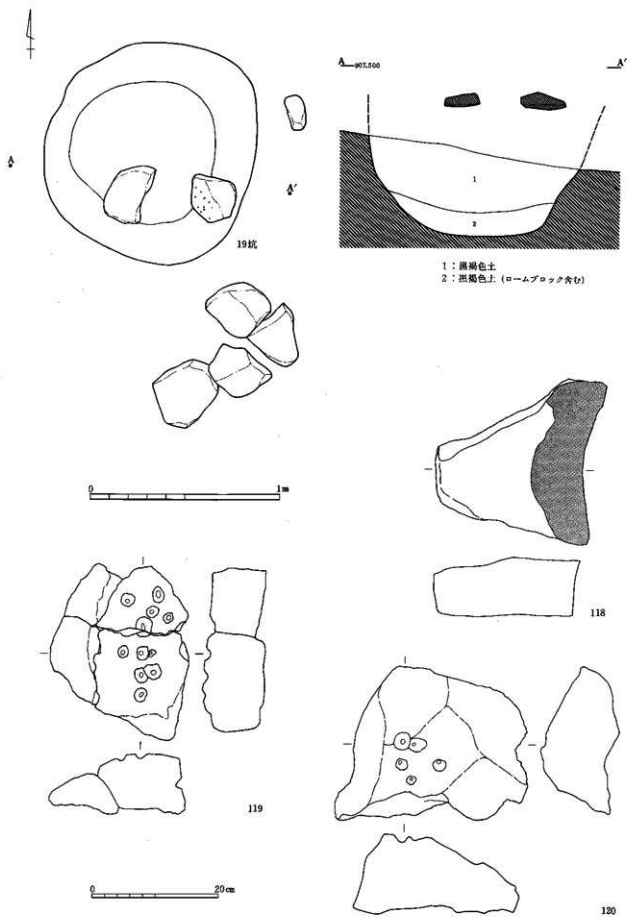


図48 土坑 (5)

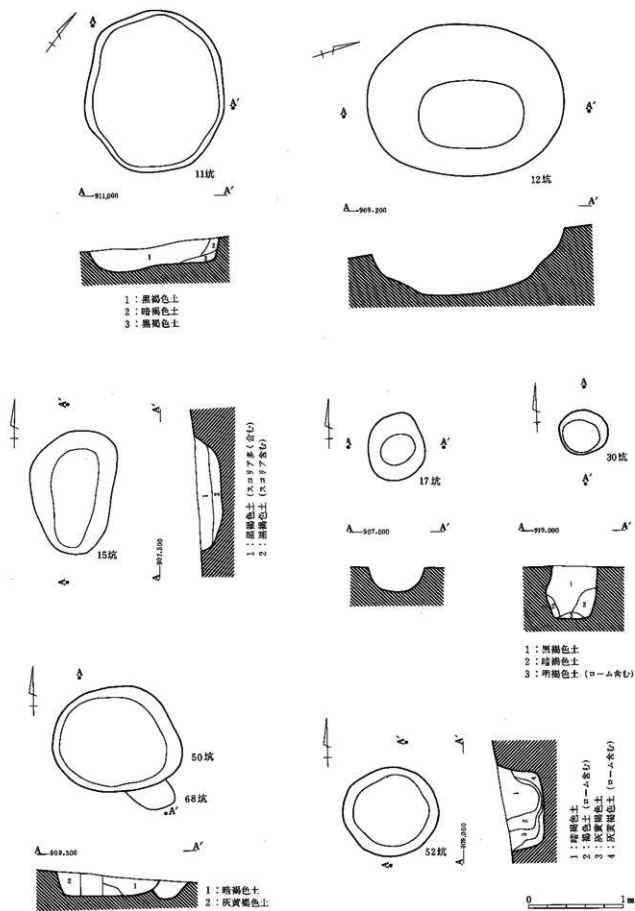
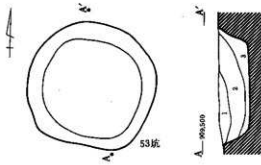
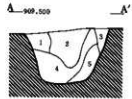
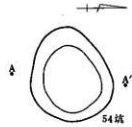


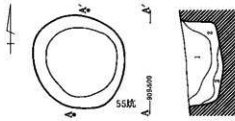
図49 土坑 (6)



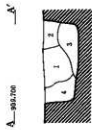
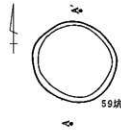
- 1: 黒褐色土
2: 黒褐色土 (炭化物含む)
3: 褐色土



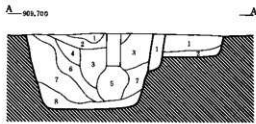
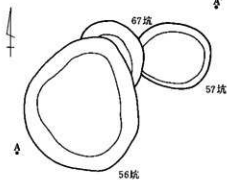
- 1: 黒褐色土
2: 黒褐色土 (ロームブロック含む)
3: 灰黄褐色土
4: 明褐色土 (ローム多く含む)



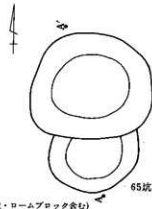
- 1: 黒褐色土
2: 灰黄褐色土
3: 灰黄褐色土 (ローム含む)



- 1: 灰黄褐色土 (炭化物含む)
2: 灰黄褐色土
3: 明褐色土
4: 灰黄褐色土 (ローム・ブロック含む)



- 56号
1: 黒褐色土
2: 暗褐色土 (ローム粒含む)
3: 明褐色土 (ローム粒・ロームブロック含む)
4: 明褐色土 (ローム粒含む)
5: 暗褐色土 (ロームブロック含む)
6: 褐色土 (ローム粒含む)
7: 暗褐色土 (ローム粒含む)
8: 暗褐色土 (ロームブロック含む)



- 67号
1: 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック含む)
- 57号
1: 暗褐色土 (炭粒含む)
2: 暗褐色土 (ローム粒含む)



- 64号
1: 暗褐色土
2: 暗褐色土 (ローム・炭化物含む)
3: 暗褐色土 (ローム・土塊)
4: 暗褐色土 (ローム・土塊)
- 65号
1: 暗褐色土
2: 暗褐色土



図50 土坑 (7)

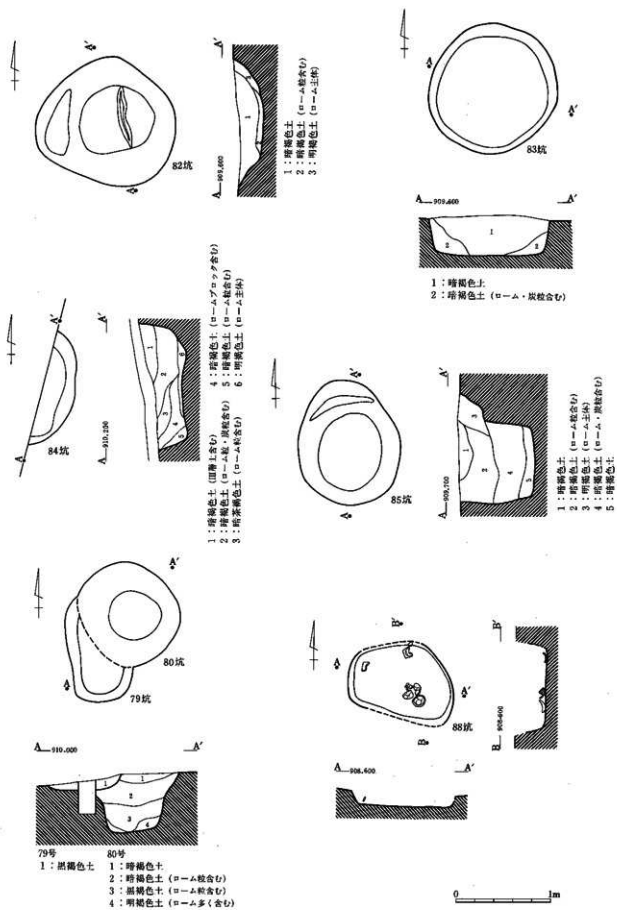


图51 土坑 (8)

83号土坑 (図51・53・54, PL25・28)

II Q-J 03・04グリッドに位置する。検出層位はVI層上面。径140×130 cmをはかり、ほぼ円形を呈する。検出面からの深さは40 cmと比較的深く、断面タライ状をなす。IV類A種に分類される。覆土はIV層土を基調とする暗褐色土であり、中・下層からは図53・54-155~160をはじめ多数の遺物が出土した。

84号土坑 (図51, PL25)

II Q-J 03・04グリッドに位置し、83号土坑の西に接する。調査区境の壁にかかり、IV層上面から掘り込まれた事実を確認した。プランの検出層位はVI層上面。

本址のほとんどが調査範囲外にあることから、全体の形状は不明のままとなったが、径130 cmほどの不整形円形を呈すると推定される。VI層(ローム層)をわずかに掘り込むのみであるが、掘り込み面からの深さは45 cmをはかる。断面タライ状をなし、IV類A種に分類される。

85号土坑 (図51・54, PL25)

II Q-M 03・N 03グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

径132×108 cmの不整形円形を呈し、断面円筒状をなす。検出面からの深さは80 cmであるが、84号土坑を参考とした掘り込み面からの深さはおよそ120 cmに達する。IV類B種に分類される。覆土はIV層を基調とする暗褐色土を主とし、壁際の一部にはロームが混ざる。また、覆土中から図52-130などが出土した。

88号土坑 (図51・54, PL25・28)

II Q-K 09・10グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

径116×82 cmほどの小判形を呈し、断面はタライ状をなす。道路建設時の削平を受け、壁の多くが失われていた。土坑形態はII類。平坦に整えられた坑底には、深鉢形土器の底部破片(図52-131・132)のほか花

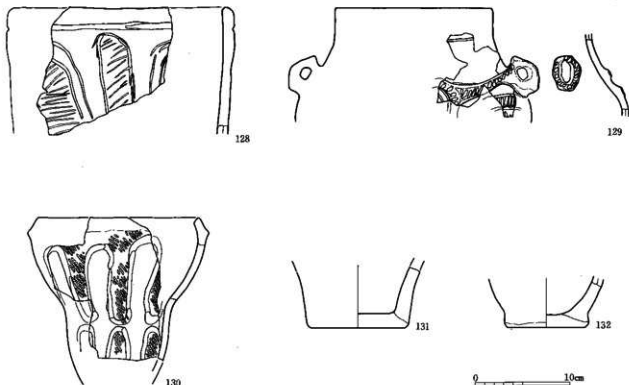


図52 土坑出土遺物(1)

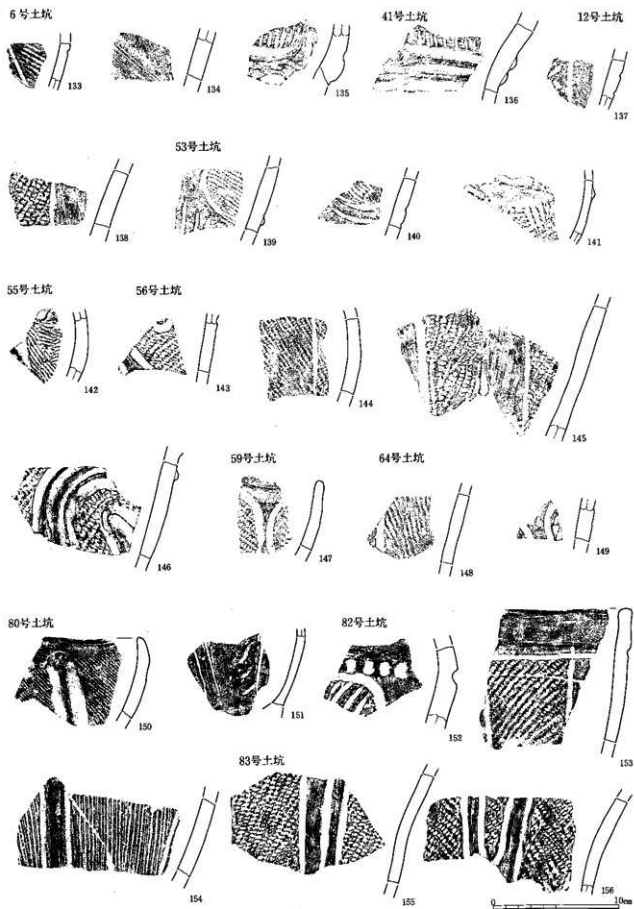


图53 土坑出土遺物 (2)

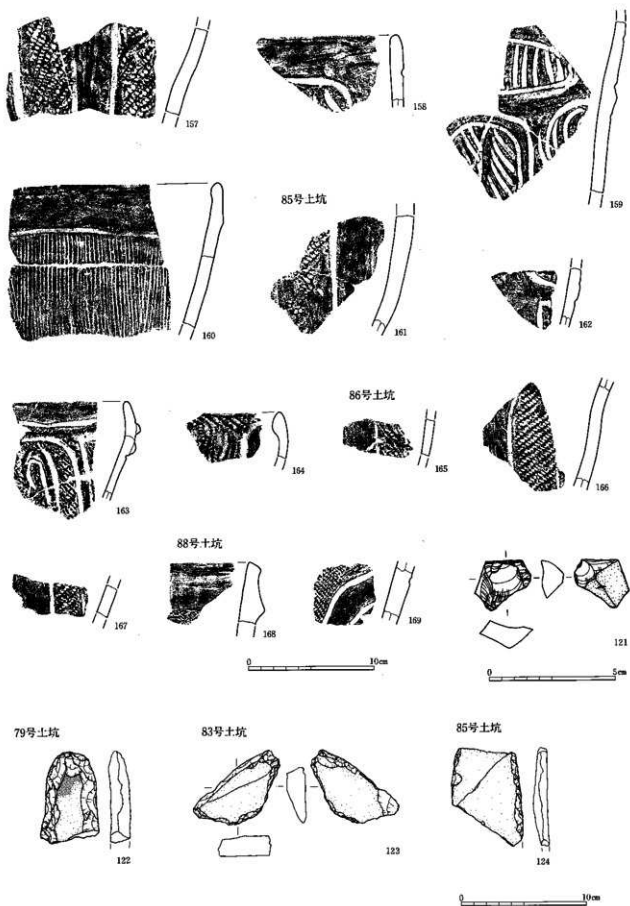


图54 土坑出土遺物(3)

表1 土坑一覧(1)

() は推定

番号	位置	規 模 (cm)			形 状		分 類	備 考
		上 端	下 端	深さ	平 面	断 面		
01	RT-16	240×98	226×82	38			陥し穴	
02	RF-18-19 RG-18-19	293×154	229×104	92			陥し穴	
03	RO-10 RP-10	(59)×(30)	(56)×(23)	28	小ビット	柱 穴	I	
04	RA-13-14	(124)×(92)	(80)×58	45	小判形	円 筒	II	
05	RC-13	113×89	70×58	30	小判形	丸 底	II	
06	RD-12 RE-12	(269)×(163)	205×95	61	楕 円	丸 底	V	第III b期
07	RG-13 RH-13	(223)×(187)	(135)×112	46	楕 円	丸 底	V	
08	RI-16	80×69	56×46	49	略円形	円 筒	IVA	
09	RM-15	(100)×(82)	75×(60)	46	小判形	丸 底	II	
10	RQ-18-19 RR-18-19	203×106	190×93	43	楕 円	タ ラ イ	V	
11	RR-01	171×146	160×132	29	楕 円	タ ラ イ	V	
12	RQ-04-05	206×160	109×71	70	不 整 形	丸 底	VI	第III b期
13	RP-07	171×130	77×42	63	不 整 形	丸 底	VI	
14	RG-06 RH-06	155×101	135×86	44	不 整 形	丸 底	VI	
15	RG-10	130×85	104×48	28	小判形	丸 底	II	
16	RM-14	81×(76)	53×32	39	不 整 形	丸 底	VI	
17	RC-11-12	73×64	37×30	26	略円形	丸 底	III	
18	RE-10	(33)×(32)	18×18	21	小ビット	柱 穴	I	
19	RC-10 RD-10	122×117	77×76	60	略円形	丸 底	III	
20	RI-18	65×56	57×49	52	円	円 筒	IVB	
21	RT-17	31×29	17×12	10	小ビット	柱 穴	I	
22	RQ-04 RR-04	191×54	182×41	29			陥し穴	
23	RP-05 RO-05	212×113	192×73	55			陥し穴	
24	QR-10	121×95	92×82	37	略円形	タ ラ イ	III	
25	QR-10	72×57	59×43	12	略円形	タ ラ イ	III	
26	QR-10	22×21	6×5	15	小ビット	柱 穴	I	
27	QS-09	89×80	80×72	32	略円形	丸 底	III	
28	QR-06	89×75	84×70	54	円	円 筒	IVB	
29	QP-14	mk×45	76×36	13	不 整 形	タ ラ イ	VI	
30	QP-14	51×47	39×33	55	円	円 筒	IVB	
31	QP-14	37×31	24×18	20	小ビット	柱 穴	I	
32	RD-11	28×25	15×13	24	小ビット	柱 穴	I	
33	RD-12	22×21	12×11	11	小ビット	柱 穴	I	
34	RD-12	38×32	22×18	13	小ビット	柱 穴	I	
35	RG-05-06	92×62	76×46	20	小判形	タ ラ イ	II	
36	RP-17-18	50×46	35×30	24	小ビット	柱 穴	I	
37	RP-18	43×41	28×25	13	小ビット	柱 穴	I	
38	RP-18	51×37	39×29	17	小ビット	柱 穴	I	

表2 土坑一覧(2)

番号	位 置	規 模 (cm)			形 状		分 類	備 考
		上 端	下 端	深さ	平 面	断 面		
39	RP-17-18	52×46	38×32	17	小ビット	柱 穴	I	
40	RO-18	52×48	36×33	20	小ビット	柱 穴	I	
41	RM-17-18 RN-17-18	169×123	117×86	42	楕 円	タ ラ イ	V	第II期
42	RL-17-18	66×59	55×43	44	小ビット	柱 穴	I	
43	RI-13-14	111×87	90×67	45	小 判 形	タ ラ イ	II	
44	RH-17	80×72	58×50	25	円	タ ラ イ	III	
45	RO-16	50×44	21×19	32	小ビット	柱 穴	I	
46	RK-05	34×27	29×16	52	小ビット	柱 穴	I	
47	RF-02	37×29	21×18	13	小ビット	柱 穴	I	
48	RO-17 RP-17	58×53	40×37	29	小ビット	柱 穴	I	
49	RO-17-18	60×58	40×38	12	小ビット	柱 穴	I	
50	QO-05 QP-05	138×111	114×94	26	不整円形	タ ラ イ	IVA	68坑を切る
51	QP-04	72×59	63×48	12	円	タ ラ イ	IVA	
52	QR-05	102×94	80×75	52	円	タ ラ イ	IVA	埋め戻し
53	QQ-03	140×138	113×105	31	円	タ ラ イ	IVA	第III期
54	QO-03	99×86	69×58	59	不整円形	タ ラ イ	IVA	埋め戻し
55	QO-01-02	104×96	76×72	46	円	タ ラ イ	IVA	第III期
56	QP-02	141×120	108×88	86	不整円形	タ ラ イ	IVA	67坑を切る 埋め戻し 第III期
57	QP-02	(82)×68	(70)×54	23	出	タ ラ イ	IVA	67坑に切られる
58	QP-01	82×81	69×67	38	円	タ ラ イ	IVA	
59	QQ-02	89×85	77×74	38	円	タ ラ イ	IVA	埋め戻し 第II期
60	QP-03	88×63	75×49	13	不整円形	タ ラ イ	IVA	
61	LP-19 LQ-19	75×62	65×53	16	略 円 形	丸 底	III	
62	LR-20	62×50	43×37	16	円	丸 底	III	
63	QO-01	48×36	39×26	11	小ビット	柱 穴	I	
64	QS-01 LS-20	128×112	83×67	25	略 円 形	丸 底	III	65坑を切る 第III期
65	QS-01	100×(85)	63×(55)	23	略 円 形	丸 底	III	64坑に切られる
66	MA-20	75×64	60×48	18	円	タ ラ イ	IVA	
67	QP-02	(80)×(63)	(53)×(30)	40	円	タ ラ イ	IVA	57坑を切る 56坑に切られる
68	QO-05 QP-05	(57)×(39)	—	19	小ビット	柱 穴	I	50坑に切られる
69	RP-04	56×44	47×35	37	小ビット	柱 穴	I	
70	RD-06	(101)×72	(83)×61	86	小 判 形	丸 底	II	
71	LM-16	69×45	56×30	13	不 整 形	丸 底	VI	
72	LM-15	81×(76)	(72)×(58)	19	不 整 形	丸 底	VI	
73	LM-16 LN-16	194×70	173×(43)	27	不 整 形	丸 底	VI	
74	LM-17 LN-17	155×(91)	(125)×60	27	不 整 形	丸 底	VI	
75	LM-18	77-63	52×42	17	不 整 形	丸 底	VI	
76	LL-18 LL-19	98×57	34×24	34	不 整 形	丸 底	VI	

表3 土坑一覧(3)

番号	位置	規模 (cm)			形状		分類	備考
		上端	下端	深さ	平面	断面		
77	LL-18・19	89×64	46×28	26	不整形	丸底	VI	
78	LM-12	200×85	177×68	16	不整形	丸底	VI	
79	QM-02	(155)×(67)	(95)×(48)	15	小判形	タライ	II	80坑との切り合い
80	QM-02	109×(99)	55×50	60	円	円筒	IVB	79坑との切り合い 第III期
81	QJ-04	68×(46)	55×(29)	20	小ビット	柱穴	I	
82	QK-03・04 QL-03・04	148×135	79×70	31	不整形	丸底	IVA	第III期
83	QJ-04	140×130	119×113	40	円	タライ	IVA	第II a期
84	QJ-04	125×(77)	96×(53)	45	不整形	タライ	IVA	
85	QM-03 QN-03	132×108	82×66	80	不整形	円筒	IVB	第II c期
86	QN-06	58×33	42×23	50	小ビット	柱穴	I	第III期
87	QM-09	57×(36)	42×23	20	小ビット	柱穴	I	
88	QK-09・10	116×(82)	104×74	17	小判形	タライ	II	第III期

崗岩の小礫が遺存していた。

キ 遺構外出土遺物

1) 土器 (図55-71, PL29-38)

遺構外からは総数12,138片・総重量258,000gの土器が出土した。これらは遺構分布範囲とほぼ重なり合うように出土し、とりわけ、調査区中央の凹部分に集中する傾向を示していた。出土層位はIII層下部からIV層上部にかけてである。時間的には縄文時代中期後葉を中心とし、早期後葉から前期初頭、中期初頭、後期初頭から同中葉の土器を含む。

以下、必要に応じて細分を加えながら、時期別に詳述する。

早期後葉の土器 (図55-170-180, PL31)

総重量11片・320gの土器片が出土したのみであり、すべてを図示した。

170-172は同一個体とみられる口縁部破片。直立ぎみに開く口縁上部からくびれを介して胴部へ移行する。微隆線による幾何学状の区画内に短沈線を充填し、要所に円形刺突文を加えている。口唇部は「内削ぎ」状に細まり、端部には鋭いキザミをめぐらす。外面はナデ調整されるものの、内面には横方向の条痕文をとどめる。明褐色ないしくすんだ褐色を呈し、胎土に植物繊維や砂粒を含む。173・174は微隆線による区画内に押しき沈線が充填されるもので、ともに「く」の字状に折れる段をもつ。175は沈線による幾何学状の区画内に押しき沈線が充填され、170などと同様に円形刺突文が加えられる。胎土に若干量の植物繊維のほか、砂粒・石英・長石などを多く含む。

176は格子目状の沈線文が施された胴部破片。胎土に川砂・小石を多く含み、くすんだ褐色を呈す。177-180は条痕文のみをとどめるもの。177・178は表裏に、179は裏面のみ、180は表面のみにそれぞれ斜方向を中心とする条痕文が認められる。くすんだ褐色ないしく茶褐色を呈し、胎土には植物繊維のほか砂粒・石英などを含む。

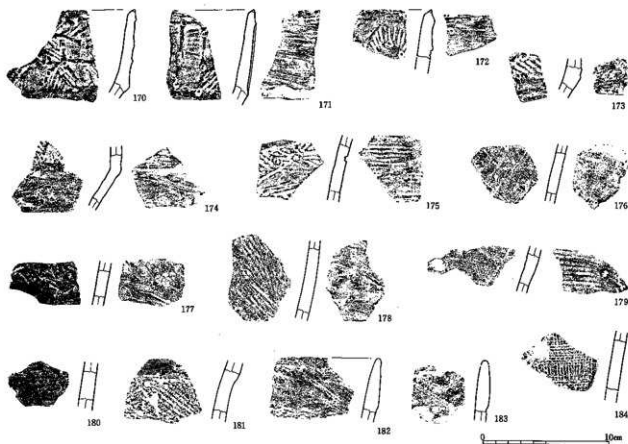


図55 遺構外出土土器(1)

早期末葉～前期初頭の土器 (図55-181~183, PL31)

図示した3片を含め、総数量4片・90gが出土したにすぎない。

181は斜縄文が施されるもの。異種の原体を用いて羽状に施文している。色調は茶褐色。胎土にはやや多くの植物繊維とともに粗砂・石英などが混入される。182・183は撚糸文が施される口縁部破片。ともに口端部が円頭状に細まる。撚糸文は原体縄2本揃え軸巻き回転施文により施される。182はL原体2本揃え、183はR・L原体2本揃えである。胎土に多くの植物繊維を含み、吸水性に富む。

中期初頭の土器 (図55-184, PL32)

図示した1点のみであり、II R-Eグリッドから出土した。

184は格子日状の沈線文が施された胴部破片。施文具は櫛歯状工具であろう。内面にはいいな器面調整が行われ、また、胎土には砂粒のほか石英などが含まれる。

中期後葉の土器 (図56-67-185-380, PL30・32-35)

前記したように、遺構群に囲まれた調査区の中央付近からまとまって出土した。出土総数11,801片・総重量243,630gをはかり、本遺跡出土土器の主体を占める。以下、系統的な相違に注目しつつその概要を記すが、分類による記号化を避け個別的な説明に重点をおく。

1. おもに縄文を地文とする一群 (図56-60-185-211, 図62-66-224-340)

加曾利E式土器とその系統上に連なる土器であり、該期土器群の中心的な位置を占める。

185-195・224-236は口縁部文様帯を有する。185と224は器形や文様に古い要素をもつが、190・191な

どをはじめとして口縁部文様帯が崩れるなどより新しい傾向を示す土器が多い。隆帯により胴部文様が構成される233は、東北地方中・南部に分布する大木系土器とも考えられる。

196～199・237～266は口縁部文様帯を消失し、凹線線をなす幅広い浅い沈線により波状モチーフなどが描かれる。196のようにずんぐりとした丸みのある器形が主体となり、これに198や265に代表される単純な器形の深鉢形土器が加わる。「角頭」状の口唇部形態を呈し、「蕨手」状の懸垂文が多用されることも大きな特徴である。328～340に一括した一群も凹線線の沈線文により文様が施され、「蕨手」状文を多用する。口縁部文様帯をとどめ、個々のモチーフが区画的であるなど大きな相違を示すものの、時間的な枠組みを共有する可能性が高い。

200～202・215・216・267～307は体部の文様が上下2段に分割される。屈曲の強いキャリパー状の器形を呈し、口縁下に「W」字状や「V」字状・「渦巻」状のモチーフが施される。4単位の波状もしくは山形状口縁線をなすものが多く、なかには201や215・216のように大形の楕円状把手のつく例もある。303～307は沈線文間に縄文が充填されず、総じて細く鋭い沈線により文様が描かれる。

308～319は隆線により文様が施される一群。1条単位のもの(308～314)と2条単位のもの(315～319)とがあるが、沈線により文様が施される一群に比べ量的にきわめて少ない。

203～206・320・321は口縁から底部まで屈曲をもたずに移行する大形の深鉢形土器。沈線によるもの(203)と隆帯によるもの(204～206・320・321)との違いはあるが、胴部を縦位分割して交互に縄文を充填する文様において共通性が強い。器形や法量など9号住居址出土のものと類似する。207・208・322～324は広口壺。209～211・325は櫛歯状工具による条線文を地文とする土器。部位を異にして縄文施文が併用される211の破断面には、製作時に加えられたキザミが認められる。接合面積を増やす工夫であろう。

326・327は本系統土器の中でも後期初頭まで下ると考えられる新しい要素をもつ。

2. おもに鱗状の短沈線文を地文とする一群 (図60・66・67-212・213・342-368)

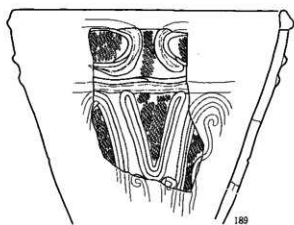
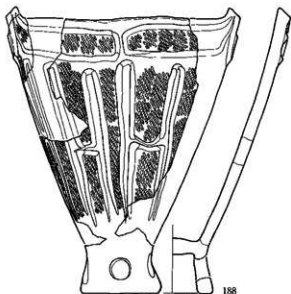
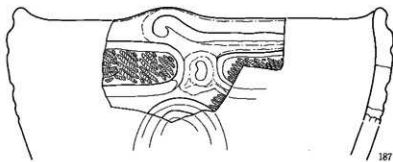
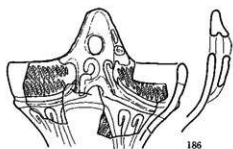
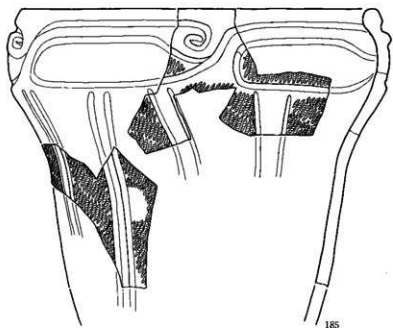
2号住居址出土の3や3号住居址出土の6を代表例とし、342～354などもそれらと同様な文様構成をもつ。ただし、345と346は隆帯状にキザミが加えられており、系統上異質な土器である可能性を残す。212は口縁部文様帯の意識が薄れ、沈線による形骸化したモチーフのみをとどめる。356～365などは口縁部文様帯を喪失し、212に現れた逆「U」字状の胴部文様が主要な位置を占めるようになる。213については便宜上本群に含めたが、器形・文様ともに異質な土器であり、系統性など検討を要しよう。また、366～369は以下の土器との識別に不安を残す。

3. おもに「ハ」の字状の短沈線文を地文とする一群 (図60・67-214・369-380)

214は口縁下に隆帯をめぐらし、胴部には短沈線文をやや粗雑に施す。371～375は縦位懸垂文により器形を分割し、空白部を「ハ」の字状をなす短沈線文で埋める。377～380は同一個体とみられる土器であり、櫛歯状工具を用いて「ハ」の字状文を施している。壺形を呈する土器とも考えられるが、口縁部および底部付近の形状が不明であり断定はできない。

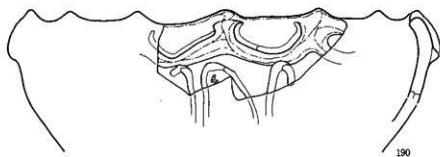
4. 小形土器・ミニチュア土器を一括する (図61-217-223)

217は口径推定8cmをはかる薄手の土器であり、口縁下を除いて縄文が施文される。220は口縁下に刺突文をめぐらし、胴部には逆「U」字状の区画文と細沈線による充填文が施される。推定口径は8.5cm。221は手捏ね土器に類する「カップ」状の土器。剥落痕より左右一対の鱗状把手がついていたと考えられる。222は赤色塗彩の痕跡をとどめた小形土器。外面口縁下および内面上部に赤色顔料がわずかに残る。223は

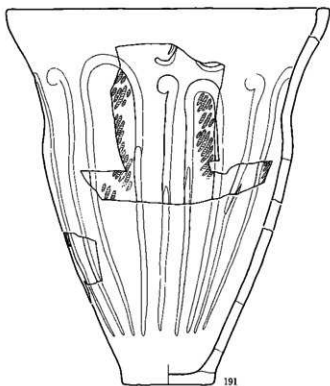


0 10cm

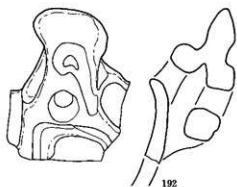
图56 遺構外出土土器(2)



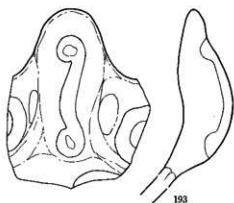
190



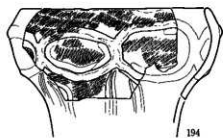
191



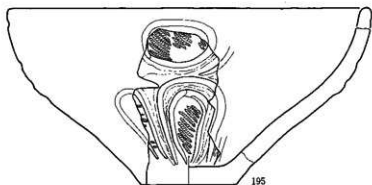
192



193

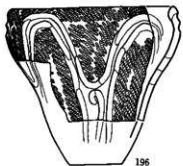


194



195

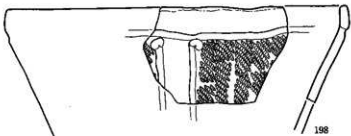
图57 遺構外出土土器 (3)



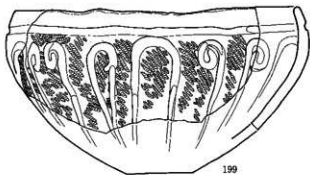
196



197



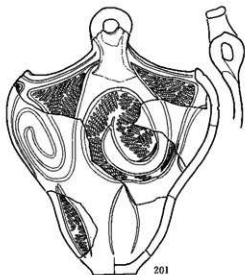
198



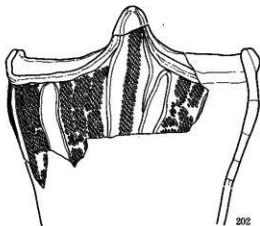
199



200



201



202



图58 遺構外出土土器(4)

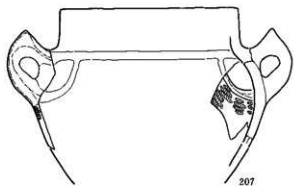
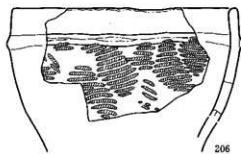
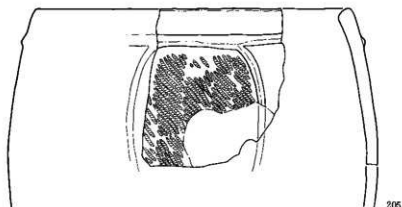
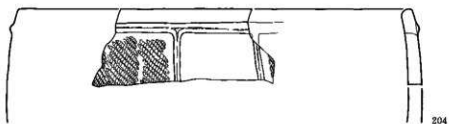
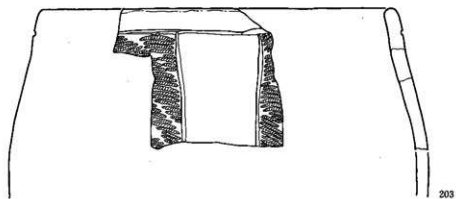


図59 遺構外出土土器(5)

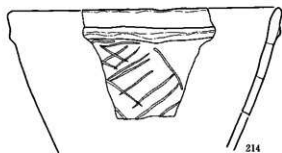
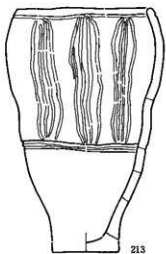
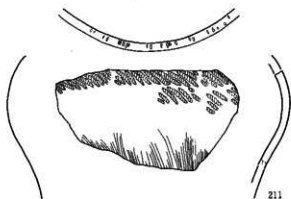
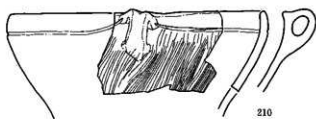
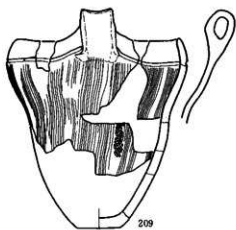
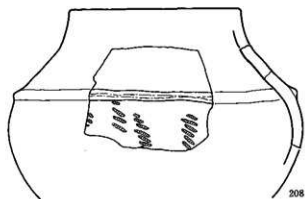
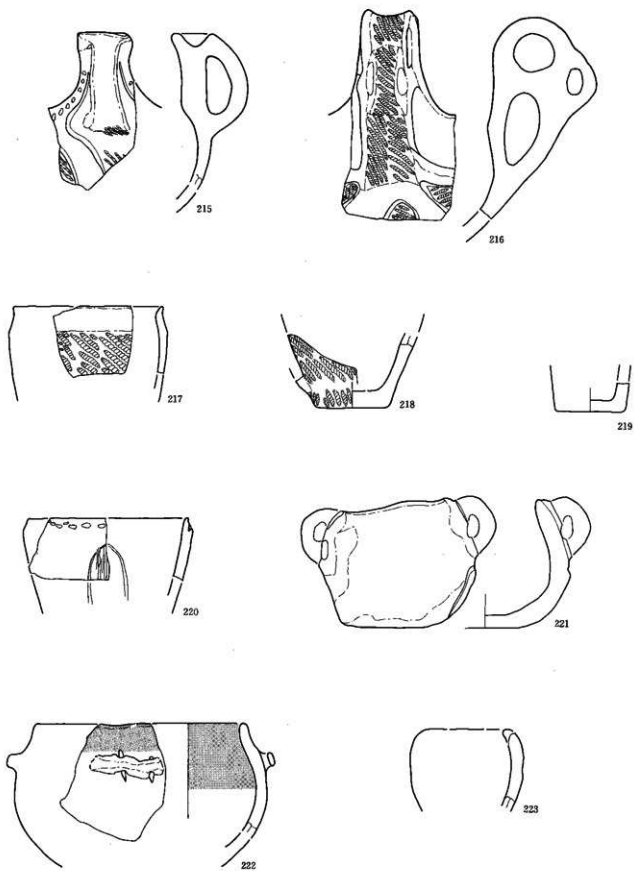


图60 遺構外出土土器(6)



0 10cm

圖61 遺構外出土土器(7)

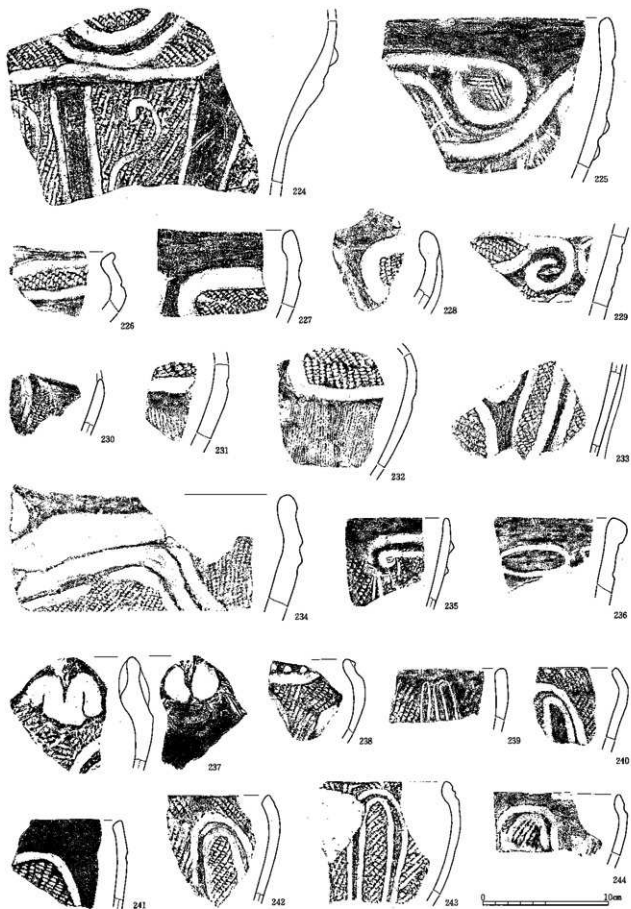


图62 遺構外出土器(8)

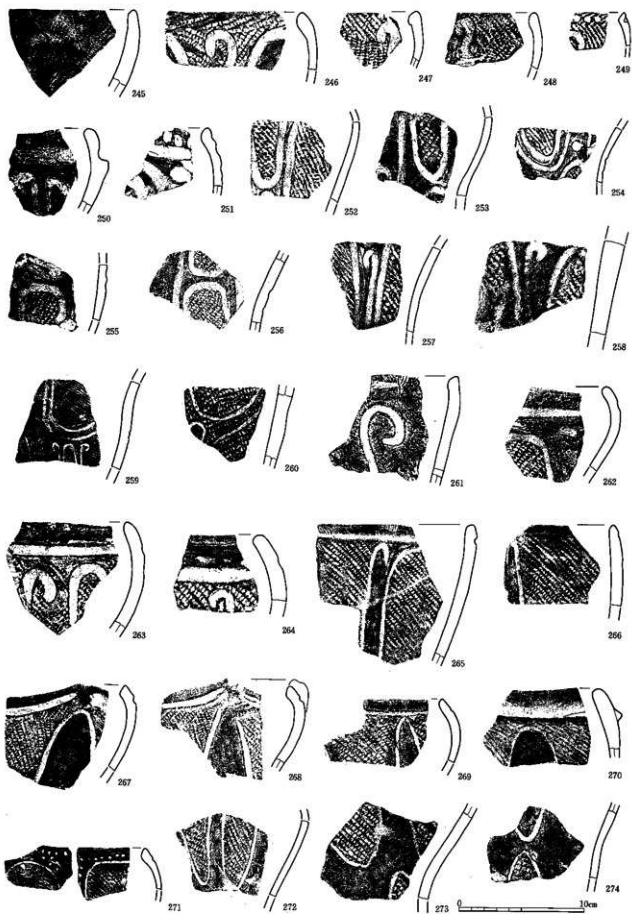


图63 遺構外出土土器(9)

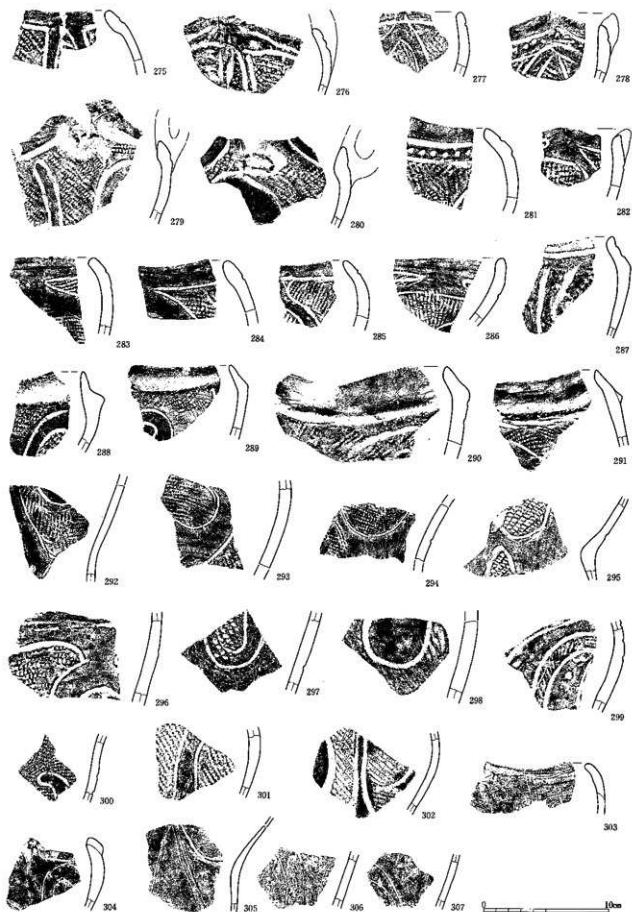


图64 遺構外出土土器 (10)

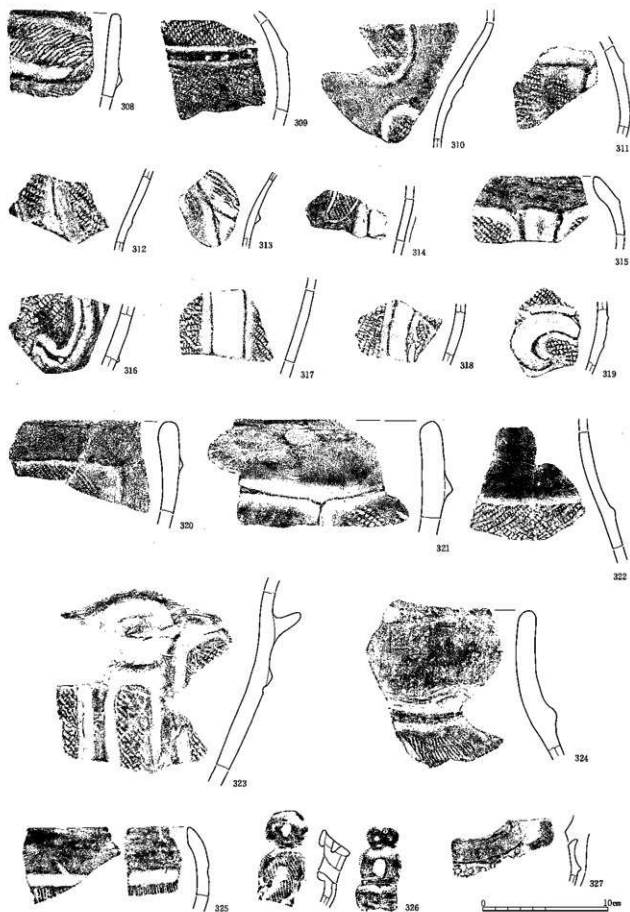


図65 遺構外出土土器 (11)

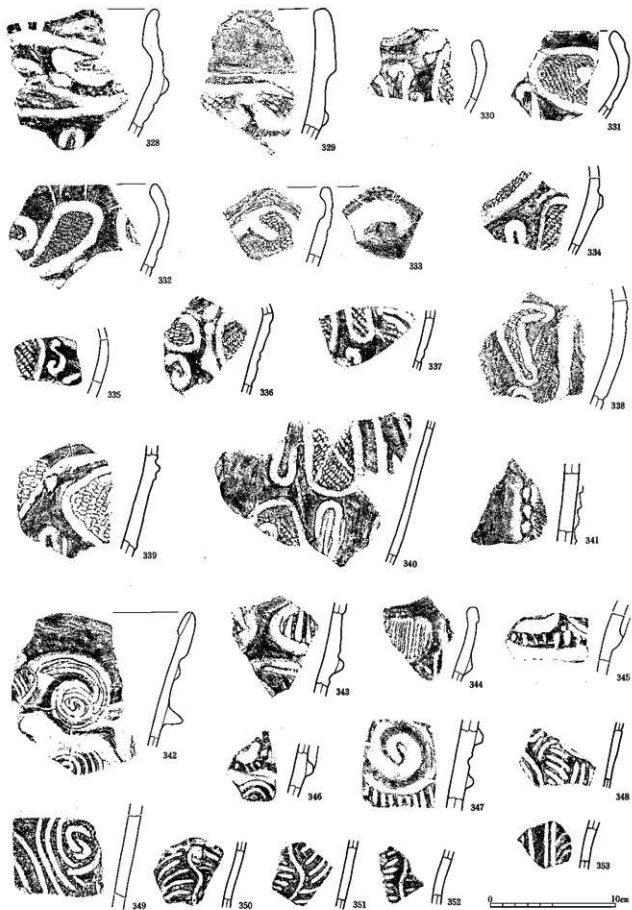


図66 遺構外出土土器 (12)

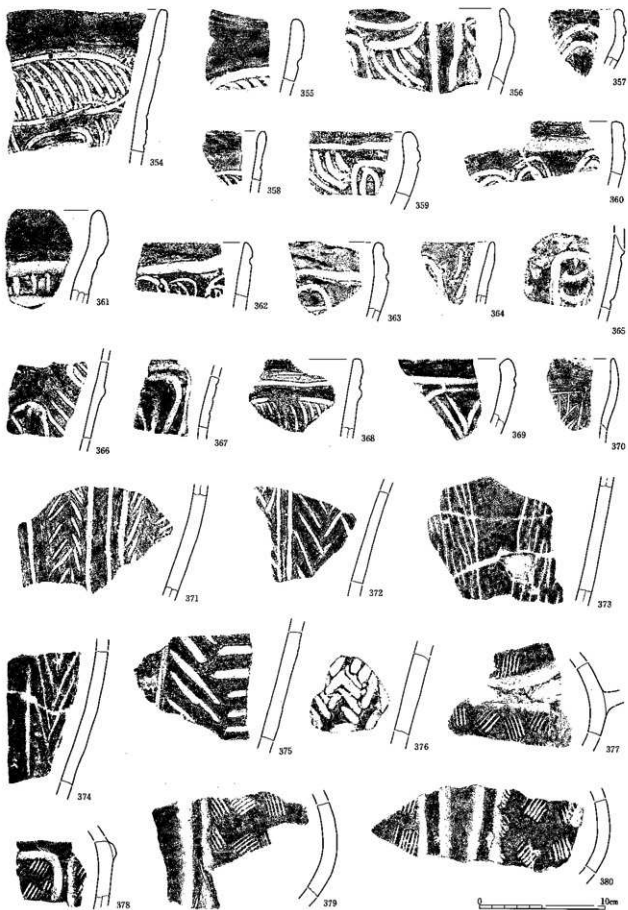
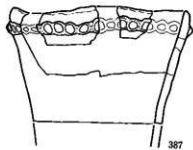
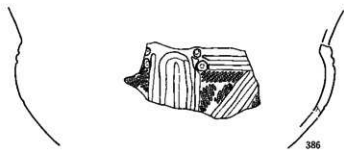
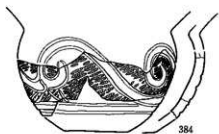
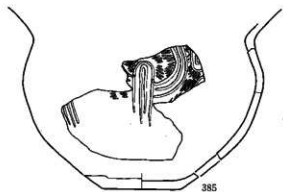
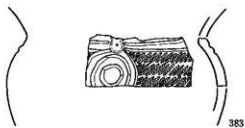
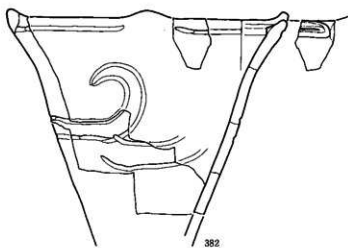
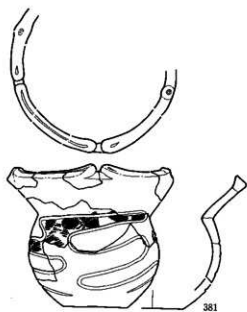


图67 遺構外出土器(13)



0 10cm

图68 遺構外出土土器 (14)

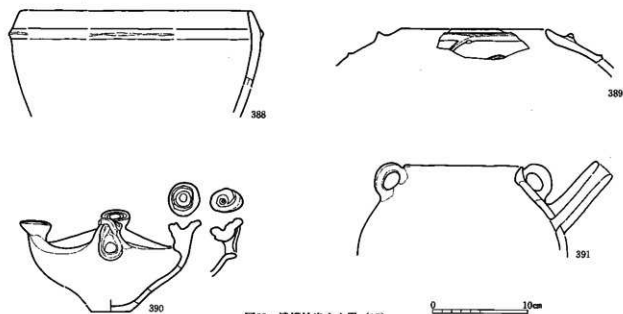


図69 遺構外出土土器 (15)

ぐい呑み状を呈し、口径は4 cmほどと推定される。

後期初頭の土器 (図68・381、図70・392～403、PL29・36)

出土総数31片・総重量1,290 gの土器が出土した。分布傾向はおおむね中期後葉の土器と一致する。

381は唯一復原できた個体。強くくびれる口縁下を無文帯とし、胴部には大きく蛇行する沈線文が施される。沈線文間には縄文が充填施文されるが、該期に特徴的な帯状構成にはなっていない。口唇部には突起が付加されるとともに、沈線文や刺突文も組み合わせられる。口径推定7.5 cm、器高推定7.5 cmをはかる。392～402は平行沈線文間に縄文を充填施文するもの。392は中期後葉、加曾利E系土器の要素をもつようにもみえる。平行する沈線は深く明瞭で、本群土器に特徴的である。また、397～399は「J」字状や「スベード」状の端部モチーフを伴う。403は平行沈線文間に刺突文が加えられる。

後期前葉の土器 (図68・69・382～391、図70・71・404～459、PL29・30・36)

出土総数266片・総重量9,220 gの土器が出土した。中期後葉の遺構分布範囲に重なる分布を示すが、若干南側に偏る傾向をもつ。とりわけ、堀之内Ⅱ式に比定される439～450などでは、遺物集中箇所としたⅡR-D・E12・13グリッドの周辺に集中していた。

382・404～410は沈線文のみによって文様が構成されるもの。382と404～407は前段階の土器からの系統をひく一群であり、382～404は特に古相を呈す。重区画文状のモチーフが施される410は、新しい要素をもつ土器と考えられる。

383～386・411～424は沈線文とともに縄文が施文されるもの。411は唯一出土した深鉢形土器。薄手・堅緻なつくりで、重層する沈線文間に一部に縄文が充填施文される。ほかは変形土器。球胴状の体部に大きく開く口縁部がつく。頸部に沈線文や紐線文をめぐらし、体部には2条ないし多条の沈線により弧状や渦巻状のモチーフが描かれる。空白部や沈線間の一部に縄文が充填され、磨消縄文を思わせる施文効果をもつ個体も少なくない。425・426は隆帯文が施される。427～438は種々の口縁部破片。

439～450は幅の狭い縄文帯によって幾何学状の文様が構成される一群。439～445は深鉢形土器。口縁下に「8」の字状の貼り付けを伴う紐線文がめぐる。446～450は変形土器。446と447の内面口縁下に沈線が

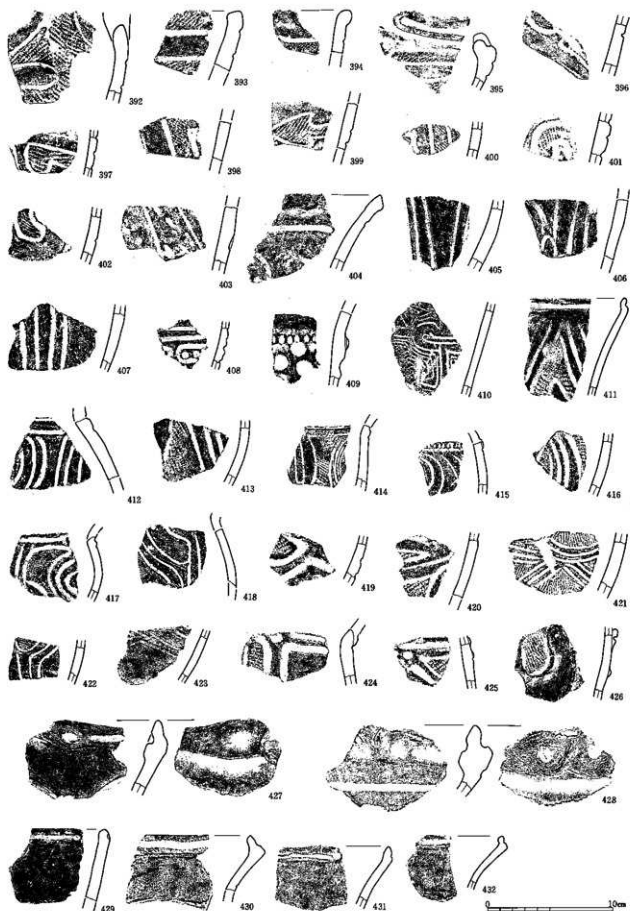


图70 遺構外出土器 (16)



図71 遺構外出土土器 (17)

めぐらされる。

451～456は粗製の深鉢形土器。口縁下に指頭状の圧痕が加えられた紐帯文をめぐらすのみであるが、内外面ともに比較的いいな器面調整が行われる。胎土に砂粒などを含み、おもに赤褐色を呈する。

457～459は時間的な併行関係に問題を残すものの、系統的に異質な土器をまとめた。457は縄文を地文とし、細い紐線文が付けられる。458・459は器面全体に特徴的な刺突文が施され、後者には曲線的な隆線文も認められる。458・459は新潟県下などに分布する三十船場式に比定されよう。

後期中葉の土器 (図71-460)

図示した1点が出土したのみである。460は「く」の字状に折れる胴部に平行沈線文をめぐらし、その沈線間を羽状の短沈線文で埋める。薄手・堅緻なつくりの土器であり、器面はいいな調整により平滑に仕上げられてある。

2) 土製品 (図72, PL31)

管状の土製品1点と土製円板9点が出土した。分布に際立った偏在性は認められず、遺構外出土土器の分布傾向と同様なり方を呈す。遺構数ならびに遺構外出土土器の量を考えれば、土製品の出土総数はきわめて少ない。土偶の出土が皆無であったことなど、時期的・地域的差異として今後の検討が必要となろう。

1は管状の土製品。一端を欠損する。先端部付近に沈線めぐるし、内部には径1.5~2mmほどの穴が貫通する。土製円板は9点中7点を図示する。大きさや加工状態などは一覧表に示すとおりであるが、おおむね円形を呈し、径3~4cmのものが多い。すべて中期後葉の土器片を用いている。

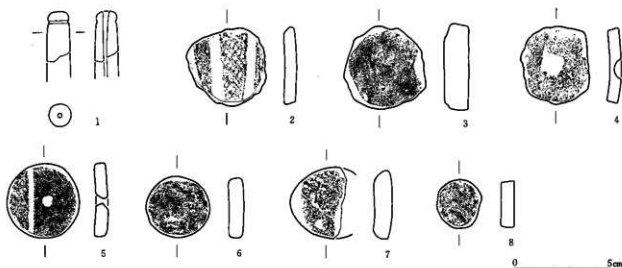


図72 土製品

表4 土製品一覧

(単位はcm・g。()は現存値)

番号	出土区	利用部位	長さ・幅・厚さ・重量	周縁加工	形態	時期	備考
1	II R-N08・IV層		(2.6) (1.2) (3.4)		筒状	中期後葉?	穿孔、半欠品
2	IV R-O08・IV層	胴部	4.1 4.1 0.7 13.4	打割	不整円形	中期後葉	
3	II R-G13・IV層	胴部	4.3 4.2 1.3 28.6	打割	不整円形	中期後葉	
4	II R-F14・III層	胴部	4.0 3.6 0.6 12.2	打割	不整楕円形	中期後葉	穿孔途中?
5	II M-I19・IV層	胴部	3.9 3.8 0.7 13.6	磨耗	円形	中期後葉	中心を穿孔
6	II R-R05・IV層	胴部	3.3 3.4 0.8 9.3	磨耗	円形	中期後葉	
7	II R-P13・IV層	胴部	3.7 2.8 1.1 (11.6)	磨耗	円形?	中期後葉	半欠品、推定重量20g
8	II R-K09・IV層	胴部	2.7 2.4 0.7 4.4	打割、一部磨耗	不整楕円形	中期後葉	
9	II R-C13・IV層	底部	(6.3) (2.8) 1.8 (27.5)	磨耗	円形?	中期後葉	半欠品、推定重量60g
10	II R-J11・IV層	胴部	(3.0) 4.5 0.9 (12.9)	打割後磨耗	不整円形?	中期後葉	半欠品、推定重量25g

3) 石器 (図73-93, PL42-48)

吹付遺跡I区で検出された石器・石片類は、図73に示した。このうち分類可能な石器は総数556点である。この数量は出土状況により4者に大別できる。縄文時代中期後葉、後期前葉土器の包含層となるIII~IV層(一部V層含む)から出土したもの。この包含層より上位の耕作による攪乱を受けているI~II層から出土したもの。出土層位不明なもの。遺構内出土のもの。以上である。図73にみられるように、III~IV層から出

土したもの以外は、遺構内出土のものを除いて、全体の5%にも満たないため、全体を一括して扱うこととした。また、石器の点数については完形品・欠損品をそれぞれ一点として計算してある。このため、たとえば打製石斧の部分小片についてもそれが再加工による可能性もあるが点数に入っている。さらに接合資料については接合されたものについて1点として扱った。

石片類については、一部写真掲載した。観察表については、まったくの不備である点をあらかじめお詫びしておく。

556点の石器は、一般に考えられているおおまかな用途に区分すれば、狩猟具（石鏃・石槍など）、樹木の伐採などのほか、さまざまな使われ方をされた加工具（磨製石斧・スクレイパー・石錐・石鏃など）、植物質資料の生産にかかわる採集・調理具（打製石斧・磨製類・石皿など）、精神的な用途が考えられるもの（丸石・石棒・多孔石など）などとなる。これらの石器組成を、Ⅲ～Ⅳ層出土のものを対象に図73に示した。図は一見して打製石斧の出土量の多さと、石鏃など狩猟具の少なさを示し、縄文時代中期における中部・関東地方にみられると同様の石器組成を表わしているといえる。

各器種に利用された石材については、図73に示した。図から明らかなように各器種によって一定の質の石材が選択されていることが知れる。このうち、安山岩は石器の素材としての視点から3者に分かれる。

安山岩A：円角礫を呈する安山岩、安山岩B：板状節理の安山岩片（鉄平石）、安山岩C：玄武岩に近似する緻密な安山岩である。なお、本文中の記述においては便宜的にこの3者を使用した部分もある。

各石材については、黒曜石以外は、吹付遺跡の位置する香坂川流域の河岸、付近の露頭、土中から充分得られるもので、輝緑岩についても、上信越自動車道群馬県境の八風山トンネル内で存在が確認できていることから、そう遠くない所からの採取であろう。とくに安山岩B・Cは八風山の山崖で露頭が確認でき、香坂川では円礫の安山岩が実際に得られている。繰り返しになるが、石材の選択状況は、素材としての石のもつ物理的性質を考慮して、必要度に応じていることが認められる。

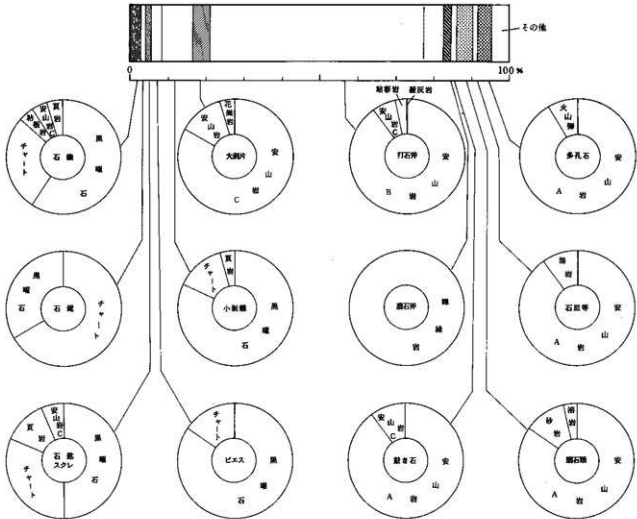
分布状況については別項(5まとめ)で述べるが、概観としてⅡRグリッドがその分布域にほぼあてはまる。もちろんこれらがすべて同時期に廃棄・遺棄されたものでもなく、住居址・土坑などの諸遺構も認められることから、集落内における空間利用のあり方の時間的変遷の中で全石器類が扱われねばならないであろう。

この他、原石・石核・石片については、図73にみられるように、黒曜石・チャートを利用した石器類の全体量が少ないことに比例して、たとえば黒曜石は総数56点が検出されたにすぎず、遺構内出土のものは極めて少ない。一方で、打製石斧の素材となる安山岩Bは20×10 cmほどの石片から5×5 cmほどの小石片まで含め出土量は多く、安山岩Cについても15×15 cmの岩塊から、2 cmほどの石片を含め出土量は多かった。これら黒曜石・安山岩の分布状況は、石器分布のあり方と同様にⅡRグリッドをその中心範囲としている。

以下、冒頭(第1章3節)の石器分類に従い、形態・製作技法などから細分を試み、各石器別に記述を行うこととした。なお、記述内容は遺構外出土のものを中心とするが、同時に遺構内出土のものについても包括することにした。また、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキュー、小剝離痕を有する剝片については、細分に際し、栗毛坂遺跡群(第3章18節)に基本的に従った。

石槍(図12-7、74-125・126、PL39・42)

石槍は、チャート製(7)、粘板岩製(125)、安山岩C製(126)である。機能的に石鏃と同様であり、組成的にもその占める位置は低い。しかしながら、石鏃以外にこのような狩猟具が存在する点は注目すべき内容を持っている。形状は、長短はあるものの、先端を突出させた角形状の平面形を呈す。7・125は小形・肉



数量	遺構	石 罫	石 罫	石 罫	スチレ	ピエス	小割燧	打石罫	大割内	磨石罫	磨石罫	石罫等	多孔石	石罫品	その他	黒燧石 成/重	チャート類 (g)	安山岩C (g)
1号住居址								1										216
2号住居址							1		1									51
3号住居址	1							3										
4号住居址	1	2			3	4	9	1	1	2	1			7	1			2369
5号住居址		1			2		4	51	1		2			3				3198
6号住居址	1							2					1	1				355
7号住居址																		15
8号住居址														2				297
9号住居址								5			2	1	2	1				1401
10号住居址										1			1					
11号住居址	1			1	1	1	3	3	2		1					15 / 7		555
12号住居址		1			2		2	3	3									126
道の遺構							1	4	1	1		1	2	1		1 / 11		616
遺構外Ⅰ～Ⅱ	3		1				1	19	3	1				1				
遺構外Ⅲ～Ⅴ	11	4	1	6	9	31	249	21	9	13		5	12	4		56 / 204	914	26600
遺構外不明	4		1				3	66	9		4	7	19	19				
合 計 (個)	21	8	3	11	13		49	413	42	13	25	10	23	36	5	57 / 215	914	35687

図73 石器組成・石材組成

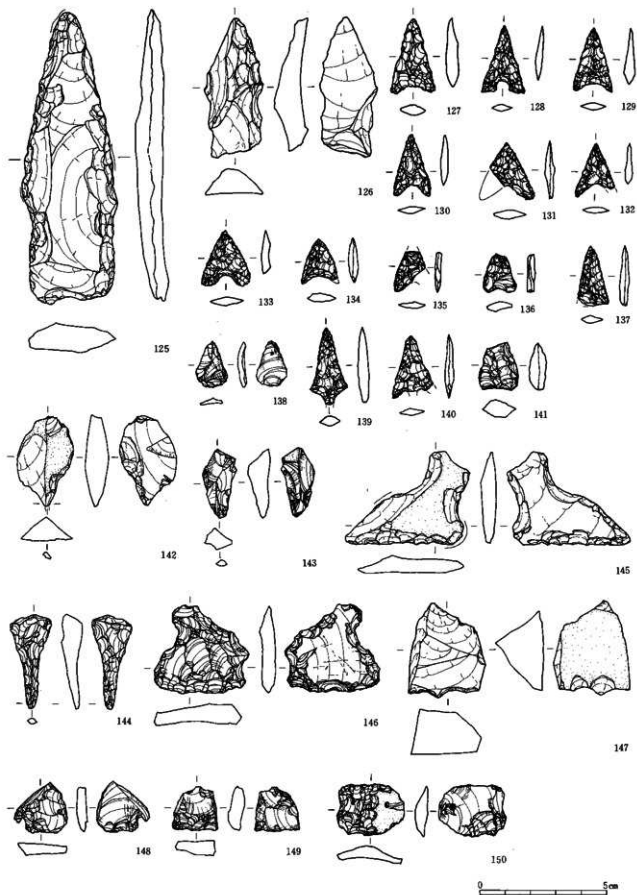


图74 遺構外出土石器(1)

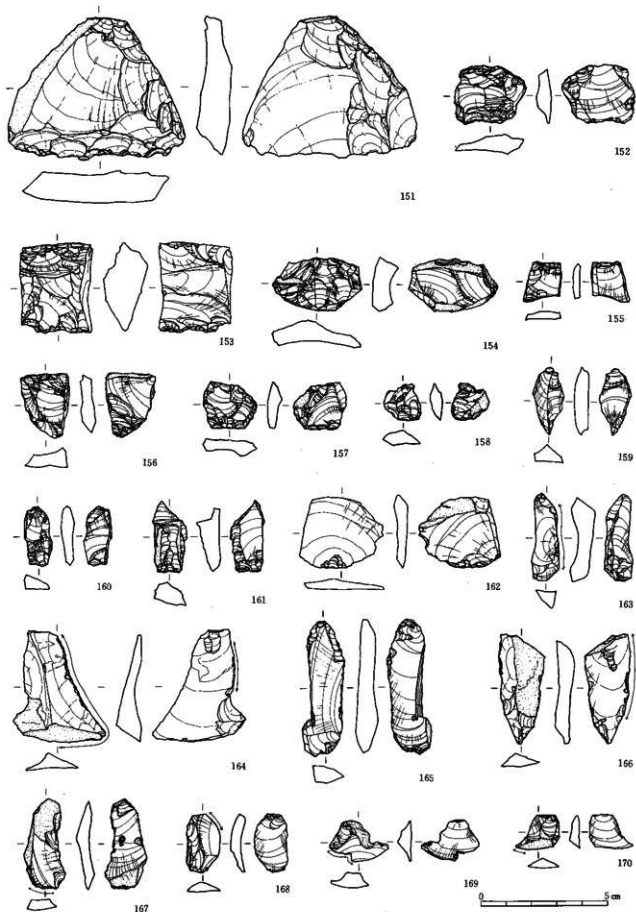


图75 遺構外出土石器(2)

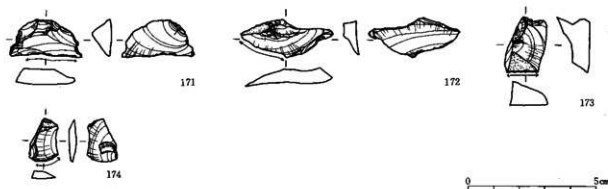


図76 遺構外出土石器(3)

厚で、先端部を除いて側縁からの調整加工はほとんど見られない。125は大形・薄手で先端から側縁にかけて連続した調整加工が両面に施されている。先端部に使用痕としての、側縁部に装着痕としての稜磨減(耗)が観察される。

石鎌 (図7-3、22-73、74-127-141、PL39・42)

石鎌(127-141)は、チャート製(73・127・128・129・134・133)のほか、黒曜石製である。総点数18点と少ない割りに、形状はバラエティーに富む。基部に視点をおき、分類した。

I類：無茎凹基(3・127-136)

II類：無茎平基(137)

III類：無茎円基(73・138)

IV類：有茎(139・140)

I類は、長幅比からさらに分類可能であろうが、全体量も少なく、きりがないので、バラエティーに含むだけとしておく。136はねじれた剥片を素材としているためか、縁辺に簡便な調整加工を施したものである。II類は一点だけ認められ、I類と比べ、長幅比が大きいものである。III類は、いずれも薄手の剥片を素材として、基部に剥片の打点部をあて、刃部・縁辺に簡便な調整加工を施す。このため、側面観は反る。なお、剥片をこれ以上調整してゆくことは不可能であることから、完形品と考えられる。IV類はいずれも基部欠損品で、茎長は不明である。そのほか、刃部の作出が完成しない厚手の未成品(141)が得られている。欠損品の率は全体で5割に近く、基部(脚部)の欠損が主体をしめる。完形品には再加工によるものも含まれるだろうが、使用可能なものの廃棄は、各報告書で認められ、指摘されるように、本遺跡でも認められる。

石錐(図12-8・9、20-39、36-103、74-142-144、PL39・42)

石錐(142・143)は、黒曜石製(9・39・143)・チャート製(8・142・144)・安山岩C製(103)である。つまみ部・錐部ともにていねいな調整加工が施されるもの(8・144)のほか、石片の端部を縁辺からの調整加工により錐部を作出したものが主体を占める。このうち9は、薄手の剥片を使用したものである。使用痕は、稜に若干の磨減が認められる程度であった。

石匙(図74-145-146、PL42)

石匙(145・146)は、黒曜石製(146)・チャート製(145)である。145は袈れ部から下の側縁部に、稜磨減が観察され、着装を想起させる。146は主要剥離面が残り、パルプの発達した部分が欠落させるように端部を

調整加工し、抉りを作出している。このためつまみ部は、幅広のものとなる。両者ともに対象物を斜めに切り込んでゆく使用法が考えられる点が指摘しうる。この他、2 cmほどの破片がある。

スクレイパー (図36-104・107、74・75-147-151、PL39・42)

小剥離面を有する剥片・大形剥片石器を除いた、調整加工された刃部を有する不定形石器を一括した。スクレイパー (107-151) は、チャート製 (104-147) のほかは黒曜石製である。総数8点と少量であったが、刃部調整されずに、スクレイパー的な使用がなされた石片 (特に安山岩C石片) が十分に想定されよう。大形剥片石器も含め、不定形石器の一群は、素材の形状を整形し一定の「型」を求めるといふよりも機能が充分はたしうる素材を選択し、調整加工を施すといったことが多分にあったと示唆される。出土したもののうち、素材縁辺の性状を利用し、急角度の片面剥離調整を施し、刃部が直状をなすもの (147・149-151)、同様な剥離調整を施すが、刃部が弧状になるもの (104) などが認められる。なお150については、縁辺からの押圧剥離が施され、石鏃の加工途中の可能性も考えうるものがあるがここで扱った。

ピエス・エスキーユ (図12-10・11、75-152-161、PL40・42)

両極打法の特徴を有する石片類を一括した。チャート製 (152-153) のほかは、黒曜石製である。このうち、二対以上の複合的な刃部を有するものはみられず、すべて一対の刃部である。形状より、縦長のもの (10・11-159-160)、方形状のもの (152-153-157)、一極の辺が弧状・突出状のもの (154-156-158) などに分類される。また155は上縁辺にツブレが見られ、剥片状の薄手であるが、11も薄手の剥片を利用していることから、欠損品として扱った。161も欠損品である。断面形はレンズ状のもの、台形状のもの、その中間形のもの各形状が認められる。159側面部は、風化度も異なり、いわゆる剪断状ではない。159は上下両端からの応力による、剪断状を呈し、本体より剥落したと思われる。

小剥離面を有する剥片 (図12-13、36-105、54-121、75・76-162-174、PL39・40・42)

小剥離面を有する剥片 (162-174) はチャート製 (13・164・166) のほか、すべて黒曜石製である。形状はバラエティーに富み、素材縁辺のあり方も同様である。また、破片 (105-172など) ・ネガティブな面で構成される残核状のもの (121・173など) もここでは除いてはいない。小剥離面の認められる部位の断面形は、薄手の偏平形状 (169など)、三角形状 (164・166など)、台形状 (105・121など) が認められる。なお、図上では表現し得ない微細な剥離面を持つもの (168-174など) も含め、剥離面のあり方で2分される。

I類：剥離面が連続し、規則的に並ぶもの41点 (105・164・168など)

II類：剥離面が不連続で不揃いに並ぶもの6点 (165・166など)

I類には、微細な剥離面を持つものが含まれるものが多いため、点数が多くなった。また、ノッチ状の剥離面を呈するもの (169) がある。刃こぼれ状を呈するもの (剥離面が不揃い) を含め、ほとんどが、素材の鋭い縁辺部を刃部 (機能部位) として利用したものと考えられる。なお、169は主要剥離面のバルブ部分に調整剥離状の小剥離面が認められる点で特異である。

大形剥片石器 (図4-1、7-5、37-109・110、54-123、77・78-175-194、PL39・43)

剥片を素材とする打製石器の中で不定形の一群の石器を扱うに際し、黒曜石・チャート製のスクレイパー・小剥離面を有する剥片に比べ、形状が大振りて、おもに現地で入手可能な安山岩製のものを一括した。剥片の長辺に刃部を有するものがほとんどとはいえ、横刃形 (型) 石器の概念規定・分類基準が流動的であることも考慮して、今回この用語は避けた。

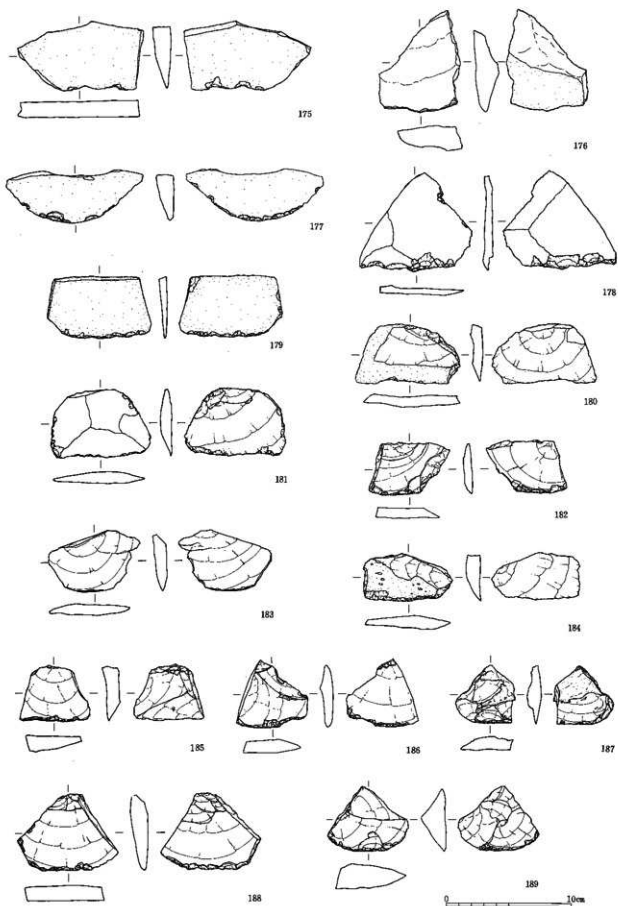


图77 遺構外出土石器(4)

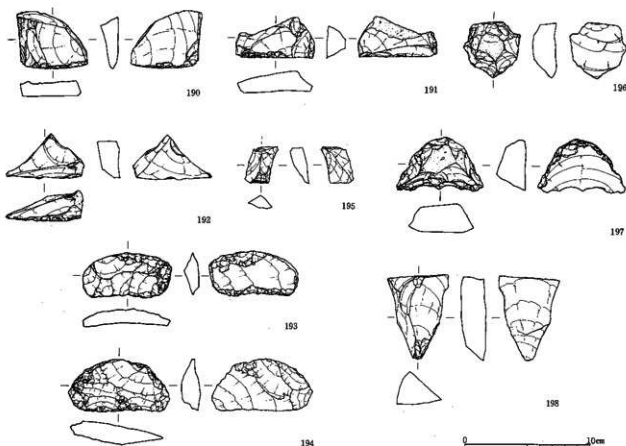


図78 遺構外出土石器(5)

I区からは、前述したごとく多量の安山岩の石片類が出土しているが、この中から、剥片の刃部を作成したものと・使用によると思われる連続した小剝離痕が認められるものを抽出した。このため、剥片の縁辺が、いかにも利用できそうなものなど(どんな状況であれ使用しようと思えば充分使用できる)は含めていない。石質・調整加工のあり方から以下のように分類される。

I類：安山岩B製で、基部に調整加工が施されないもの(109・110・175-179)

II類： " " 施されるもの(123・180-181)

III類：安山岩C製で、器体が薄いもの(1・15・182-188)

IV類： " " 厚いもの(189-192)

V類： " I・II類と比べ調整加工が全体におよぶもの(108・193・194)

VI類：その他

I・II類ともに、全体に薄手の素材を選択し、177を除いてほぼ直刃である。刃部は不連続・不揃いな刃こぼれ状のものがおもに観察され、刃部を作成した感はない。III類は、小剝離が片面のみに認められるもの(184-185-187)と、両面に認められるものがある。平面形は扇状のものが多く選択されている。IV類は、断面台形状のもの(191-192)が特徴的でいずれも片面に連続する剝離が認められる。V類は横長形状を呈し、基部に刃つばし状の調整加工が入る。VI類は、急角度の刃部調整加工が施されたスクレイパーである。169はラウンドスクレイパー状のもの、198は彫器的な機能が推測されようか。

VI類を除いて、剥片の長辺に刃部を持つ点では、横刃形石器といえようが、III・IV類における安山岩C製の石材は、本遺跡石器組成の主体となる打製石斧に2点が認められたにすぎず、本遺跡でみられる打製石斧石材の一般性からはずれ、打製石斧の主要な石材になり得ないものであった。したがって横刃形石器

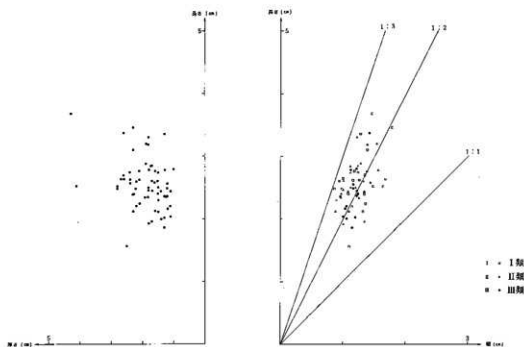


図79 打製石斧長幅厚相関

が、打製石斧と同様の素材と製作方法をとるといふ一般的な指摘に合致するものは、本遺跡ではみられない。ただし、打製石斧と同様な素材剥片を横刃形石器の範疇に入れるなら、I・II類が該当しよう。また、一定の横形の形状を呈することのみを横刃形石器の分類基準とすれば、V類がこれに該当する。このように認定しえない器種決定にこの用語を用いることは石器組成の点でも混乱のもとにならうから、大形剥片石器として本報告では分類したわけである。

なお、全体的に素材を極端に整形加工したものはほとんどなく、いずれも素材の形状を生かしたものの(選択されたもの)であることが指摘される。多量に出土した安山岩の石片類の背景があつてこそ、選択行為が可能であつたことを示唆するものでなかろうか。また、III類に認められる、両面に対応する連続する剥離痕は、縁辺を前後に移動することによって形成された(切る機能)ものとも考えられ、一方片面だけに連続する剥離痕を持つものは、スクレイパー状に使用されたことを推測させる。断面の形状も刃部角度は急である。

打製石斧 (図80-86-199-209, PL44-46)

打製石斧は、本遺跡の石器組成の主体をしめる。完形品(刃こぼれ的なもの、使用可能と思えるものも含む)は、68点あり、製作途中のものか、再加工によるものかは不明であるが破片が41点認められる。これらの破片と欠損品を含め総数は413点である。図73に示したように、このうち遺構内からは80点出土している。ここでは遺構外出土の完形品をおもに分類の対象とした。

① 石材・素材

石材は安山岩B(板状節理面をもつ安山岩)の特徴である板状の素材がおもに選択されている。ほかに、安山岩C24、粘板岩10などが認められるにすぎない。このため、完成した打製石斧の器面には両面に節理面(自然面)を多く残すものが多い。また、厚手の石材からは、横位の打撃によって素材を作出したのもみられる。石材は香坂川流域で得られるものである。

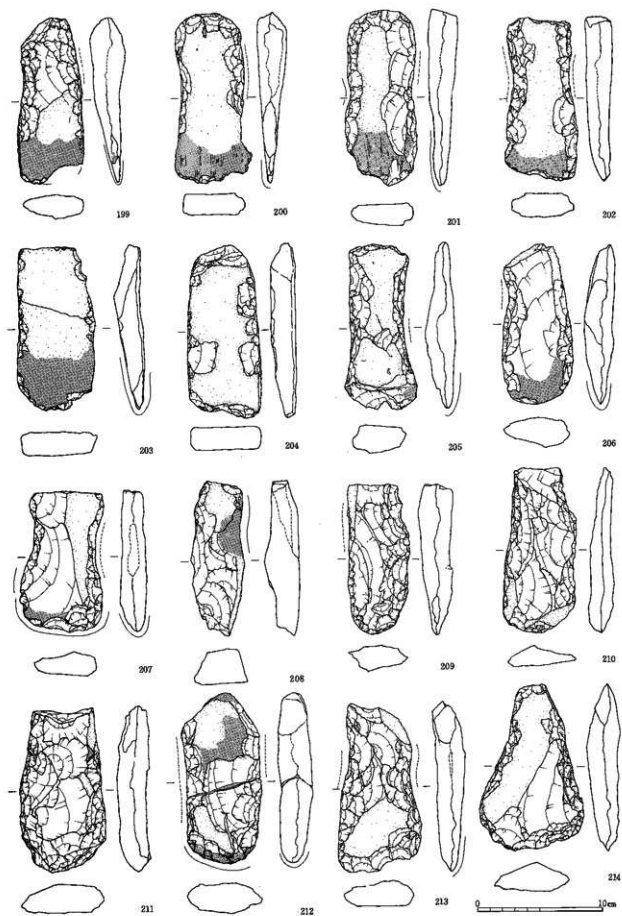


図80 遺構外出土石器(6)

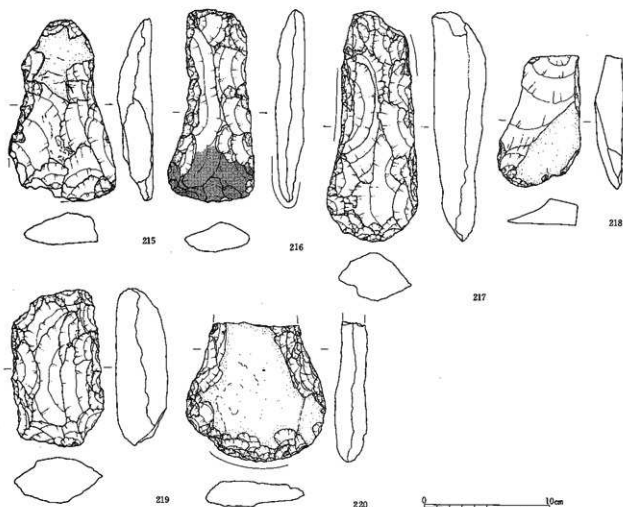


図81 遺構外出土石器(7)

② 製作手法

まず、板状礫を求める打製石斧の形状を想定し打ち割っていき一定の大きさの素材を得る。次に、周縁からの調整加工に入る。この段階で、調整が簡便なものと、剝離調整が多いものが認められる。刃部については、素材の縁辺を残すものと、そうでないものがみられる。また素材が板状であるため、身の反りは極端なものがないことになる。このように製作手法は全体として簡単なものであるが、調整加工の施し方に差異が認められる。

③ 形態分類

製作手法から知れるように、素材の板状礫を生かすような調整加工が指摘できる。その簡便さや刃部のあり方は、素材選択段階に製作者の意図が反映されていることは明らかであろう。このうち、特に素材の縁辺を刃部に利用している点に注目すれば、素材縁辺を利用しようとする製作者の意図は、必然的に素材の厚さを選択せざるを得ない。また再加工による平面形の変化は充分考えられるのに比べれば、調整加工の簡便なあり方は、平面形を整えることにその主眼があり、素材の厚みを減少させるといった意図が想像できない。

そういうことであれば打製石斧の「厚み」は、製作者の必要とするものをほとんど変化なく提示することになる。このような視点から、厚さを基準に打製石斧の分類を試みた。図79に長厚比を示した。

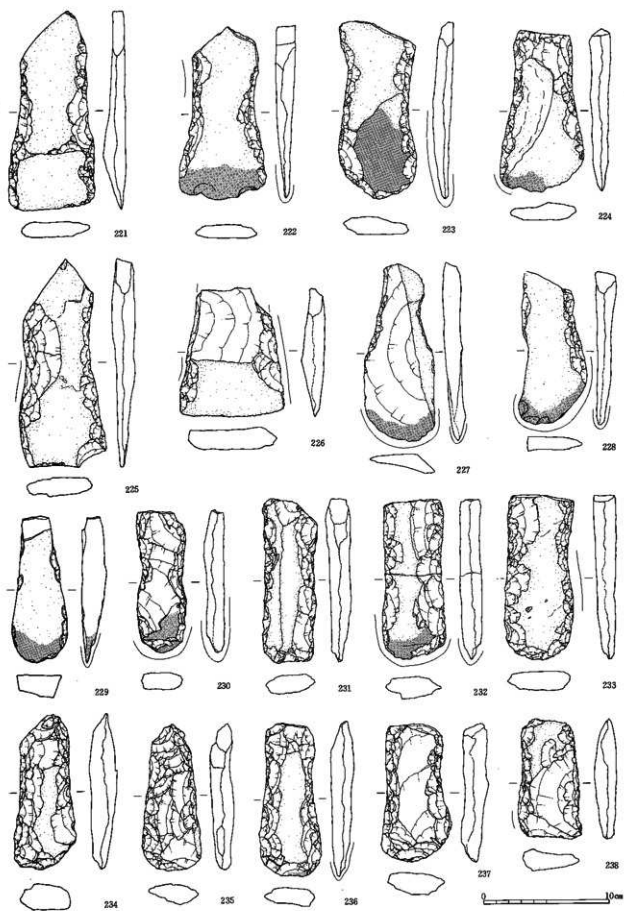


图82 遺構外出土石器(8)

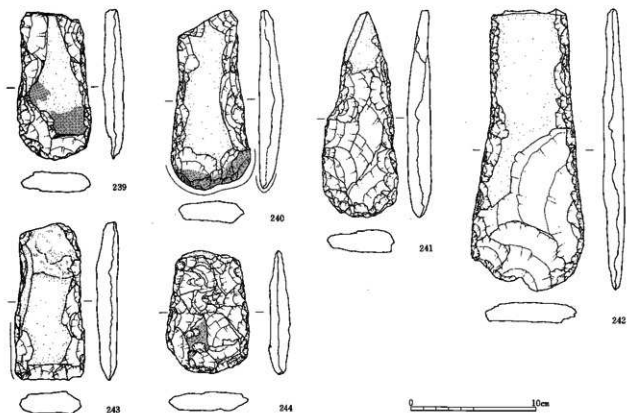


図83 遺構外出土石器 (9)

長さは、12 cm 前後に集中し、厚さは1～3 cm に集中する。厚さについては特に1～2 cm 内により多く分布し、2 cm 以上になると散見するようになる。また薄いものでは、1 cm 未満のものもみられる。このような結果から、分類は以下のようにされる。

- I 類 a : 厚さ 2 cm 以上のもので、刃部に素材縁辺を利用したもの (199～206)
- b : " 刃部に調整加工がみられるもの (207～217)
- c : " 形状が特異なもの (218～220)

	I	II	III	欠損
	3	5	6	12
	6	3	6	23
			2	4
				2

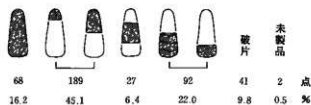


図84 打製石片摩耗・欠損

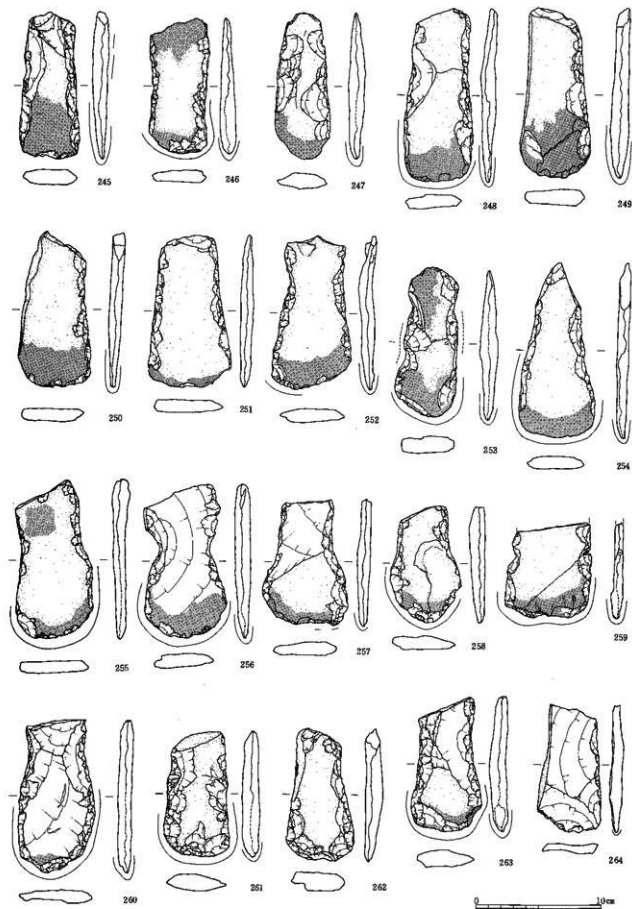


图85 遺構外出土石器 (10)

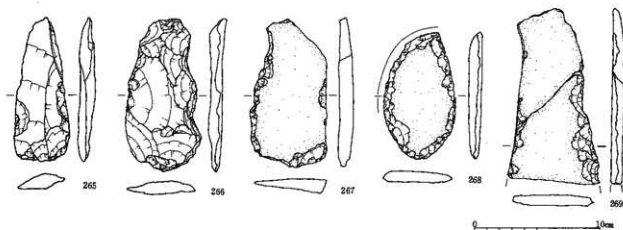


図86 遺構外出土石器 (11)

Ⅱ類 a : 厚さ1.5 cm 以上~19 cm 以下のもの、刃部に素材縁辺を利用したもの (221~229)

b : " 刃部に調整加工がみられるもの (230~244)

Ⅲ類 a : 厚さ1.4 cm 以下のもの、刃部に素材縁辺を利用したもの (245~258)

b : " 刃部に調整加工がみられるもの (263~269)

c : " 形状が特異なもの (263~267)

以上の大別3類の後に長幅の比を図に示した。全体に2 : 1の線上を中心に広がりを見せる。こまかく見れば、Ⅰ類は13cm 前後に横広がり分布するのにくらべ、Ⅲ類は幅が一定で長さが上下するような分布を示す。各分類の特徴を以下述べる。

Ⅰ類 a は、刃部が鋭く、刃こぼれ状の欠損が認められるものが多く、素材の自然面を多く残す。周縁の調整は刃部付近に少なく、基部に至って顕著である。とくに基部先端は、素材が基部で細身にならないもの (199~201・204) について著しい。着柄に関係するものなのであろうか。また、側縁部のタタキ痕が認められるものが半数ある。

Ⅰ類 b は、全体に側縁からの剝離調整が著しく、内面におよぶものが多い。器体が厚いために、一定の厚みを狙った結果であろう。素材縁辺を選択しない場合、全体に調整剝離が施されることが推察される。また明瞭な楔形といえるもの (214・215) が存在するのも特徴的である。212は接合資料で、基部・刃部・面部・欠損面の縁に摩擦痕がみられる。欠損後の転用である。213は、裏面に磨耗がみられるが表面になく、刃部稜の磨耗が認められないことから、刃部の再加工品であることがわかる。また、側縁部にタタキ痕がみられるものが半数ある。217は肉厚で大きな優品であるが、刃部に磨耗痕などの使用痕は認められない。

Ⅰ類 c としたのものの中には、安山岩C製の肉厚で未成品とも思えるもの (219)、楔形を呈すると推測される欠損品 (220) などがある。

Ⅰ類全体を一般的な平面形状から分類すれば、楔形が3点みられるほかは、すべて短冊形といえる。さらに短冊形のうちでも棒状のもの (208・209) が細分、指摘できようか。

Ⅱ類 a は、刃部が直状を呈するものには磨耗痕は観察されない。また228にみられる斜状の磨耗は、22・50・60などに認められ、着柄を含めた使用法の点で注目される。周縁の調整は側縁のみのものが多く、簡便であり、素材の自然面を多く残す。Ⅰ類に比べ、側縁のカーブは緩やかに挟れたものが多い。224は、Ⅰ類 a にみられたと同様に基部調整が顕著で、基部の偏平を求めた結果と思われる。

Ⅱ類 b は、周縁の調整はⅠ類 b のように深くなく、素材の自然面を残すものが多い。平面形状では全体

に長方形を呈するものが多いのが特徴であろうか。242は長大なもので刃部は使用による刃こぼれが認められる。

II類は、基部に調整加工を施すものが少く、折損したような突状や、平坦状を呈するものが多い。中には欠損によるものがあろうが、241にみられる素材面の残り方は、基部の形状に一定の形状を求めていなかったことを示唆している。平面形状については、II類aがやや刃部の広がる短冊形・楔形の中間形状を示し、II類bは短冊形を呈するといえる。また、I類と同じく短冊形のうちでも棒状のもの(229・230)が指摘される。

III類aは素材の形状を生かし、周縁の調整加工が簡単にすまされる。薄い素材を利用するために、これ以上の調整は必要なかったであろう。さらに片側縁のみ調整加工が施されるもの(248・249)などもみられる。また、一様に磨耗痕が認められるのが特徴である。

III類bは、調整がややIII類aより深い程度で、素材の形状を生かしているといえよう。磨耗痕が認められない。その他、III類cとしたものは、268が欠損部を片面からの剝離によって、スクレイパー状に刃部を作出したもの。269は接合資料で基部の形状が特異である。III類は、II類に認められると同様に基部が折損したような形状を呈す。平面形状は、楔形(253)、分銅形(255)、しゃもじ形(256・257)などのほかは、短冊形と捉えてよいと思われる。

I-III類を通じていくつかの特徴があげられる。

- 1 刃部が素材縁辺であるものは、各類において、側縁部の調整加工が簡便である。
- 2 刃部が素材縁辺であるものは、多く磨耗痕が認められる。
- 3 刃部に調整があるものは、側縁部の調整加工の頻度が高い。
- 4 側面のタタキ痕は、I類(厚手)に顕著に認められる。
- 5 I類aの刃部には、刃こぼれ状の剝離痕が認められる。
- 6 素材に板状礫を使用するため、全体に身が反るものがない。
- 7 基部は、I類aにみられるように一定の厚みを整えるために施される。
- 8 基部形状は、折損状を呈するものが多いが、269に認められるように余り意識されていない。

これらのことからわかることは、打製石斧は薄手で身が反らなくても、刃部が鋭いものであればよく、側縁部の調整が簡便であっても充分使用可能であり、実際磨耗痕に認められるように使用頻度は高いものであるということである。そして、基部形状に認められるように形状については極端な規制はないということであろう。そしてそのような素材を選択しているのである。また、刃部との側縁部の調整加工の関係は、もともと素材縁辺を利用していた。それによってある程度納得した形状を呈していたものが、欠損し再加工により形状が整えられた結果とも考えられる点が指摘される。

さて、これを受け、I類aにみられる厚手の刃部が刃こぼれ状を呈する一群についても考えてみたい。

打製石斧は一般にその製作が簡便で、使用頻度が高く、大量消費されたものとされている。本遺跡で出土したものをみるに、調整加工がより簡素なII・III類が量的に占める割合が高い。これに比してI類にみられる、厚手のものは、調整加工がより面倒である。素材となる安山岩cは入手が困難なものでないことを考慮すれば、簡便・大量生産を求めるならば合理的ではないものとなる。それでも厚手のものを求めた、素材の選択を行っていたことになる。このような背景と刃部の刃こぼれ状を考えると、単に土堀り具などの単一的な機能以外に、樹木などの伐採具的な機能分化も充分考えうるのではなかろうか。より簡便に加工可能な素材とは別に厚手の一群を選択する理由は、機能差に求められる可能性がある。

現時点ではその具体的な機能差を指摘しえないが、打製石斧の機能が単一ではないという点を示唆していると考えたい。打製石斧の一部が伐採具としてあった可能性も充分にある。

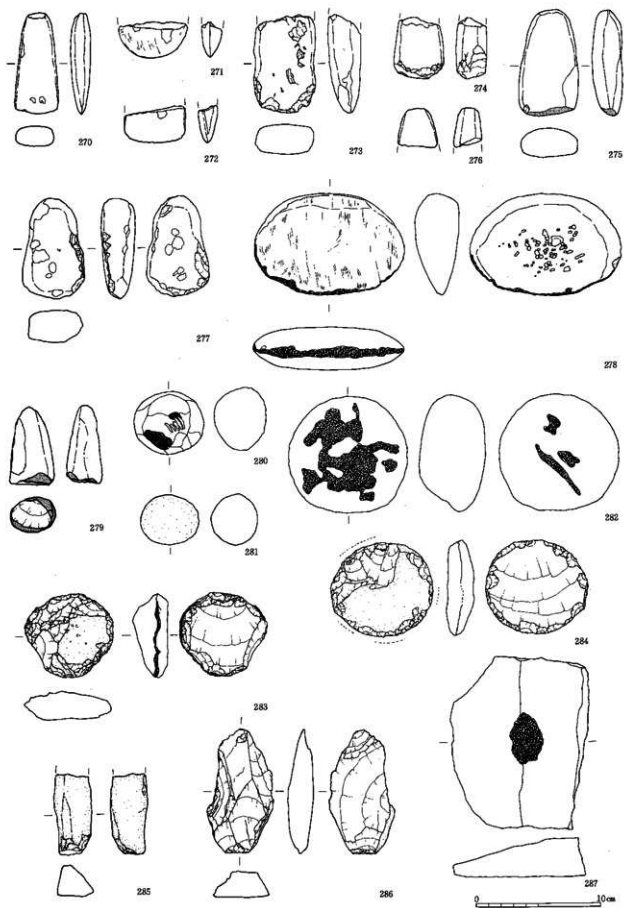


图87 遺構外出土石器 (12)

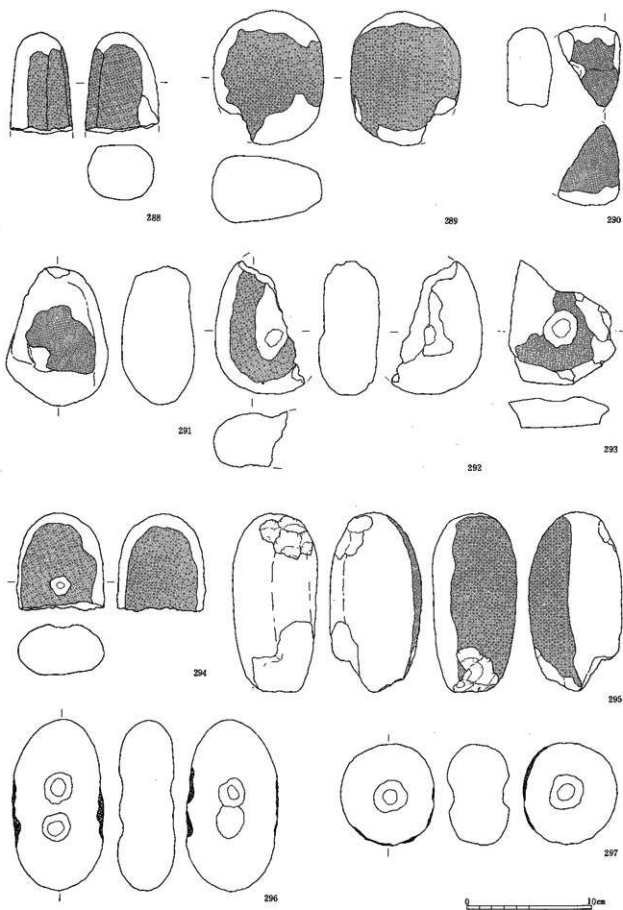


图88 遺構外出土石器 (13)

④ 摩耗・欠損

表裏の磨耗状況を図84に示した。各類・欠損品も含め、表裏の磨耗が均等であるものがやや多いが、不均等なものもかなりある。また点数は少ないものの磨耗痕が斜線を呈する一群(228など)が存在する点は注目すべき点である。刃部に素材縁刃を利用したものに多いことも挙げられる。ただし磨耗痕は、石質による要因が多分に有り使用頻度の差異と連断しがたいと思われる。今後の課題である。

欠損品については図84に示した。刃部を欠損したものが多く傾向である。折れリリング表(裏)からの横折れを呈するものがほとんどで、縦折れを示すものは数点、節理面によるもの、本体から剥れた(もしくは割れた)ようなものも数点みられたにすぎない。折れ方の平面形状は斜めのもの、平らなものを主体として、屈折するものなどもみられる。

以上、本遺跡における打製石斧のあり方を素材選択という観点から分類してみた。その結果、本遺跡においては素材選択(厚さと縁刃利用を考慮した選択)によって規定された素材形状を生かす中で、形態の差異が生み出されることが指摘できた。さらに、薄手のもので充分に打製石斧の機能は果たされ、その簡便さを避けて厚手の一群が存在することも指摘できたと思う。

なお、未製品と思われるものが2点出土している。図示しなかったが、写真掲載をした。また、「横刃型石器」と連断してしまうこともあるであろう。このようなことから、欠損品についてはそのほとんどを打製石斧の欠損品として扱ったことを留意されたい。

磨製石斧 (図6-287-270-279, PL39・46)

磨製石斧(270-279)は、すべて輝綠岩製である。転用品も含め総数は13点出土した。272は使用による欠損が刃部に認められ、縁線が一部やや折れるところがある。このような折れは、2・277にも認められ、27は敲打整形段階に折れが形成されていることを示差している。275は光沢痕を残すほどの研磨が全体に及ばず刃部に研磨が顕著であり、未成品とも考えられる。279は欠損面の縁に磨痕がみられるもの。278は全面に光沢痕を見せるが、刃部の作出がなく、未成品である。278は特異な横長の形状を呈す。全体に研磨され、研磨以前の敲打痕が面に残る。刃部は先鋭化していたと思われるが、現品は敲打痕が刃部縁に認められる。刃部付近には線条痕が随所に残る。磨製石斧と同じく石質が輝綠岩であること、製作手法が磨製石斧と同様であることから、磨製石斧として扱った。その他、定角式の完形品(270)、欠損品(279など)が検出されている。

敲石 (M87-280-287, PL46)

敲石(280-286)は、安山岩C製(283-284)、安山岩A製(280-282)、安山岩B製(285-286)である。円礫の面に敲打痕のみられるもの(280-281)、円形のハンマー状のもの(283-284)のほかに、棒状のもの(285)、クサビ状のもの(25・26・286)、板状礫中央に敲打痕の認められるもの(287)がある。280は、全面に研磨による細かな面取りがみられる。283は周縁に敲打によるツブレが認められる。286は下端部の稜にツブレが認められる。287は形状から台石の方が適当かもしれない。なお、116は断面三角形の角礫を整形加工したもので、稜の中央に集中的に剝離が施される。下端は、側面観V字状を呈し、縁は刃こぼれ状の剝離が認められる。下端部の厚さから、石斧の利用よりも、敲石として扱った。

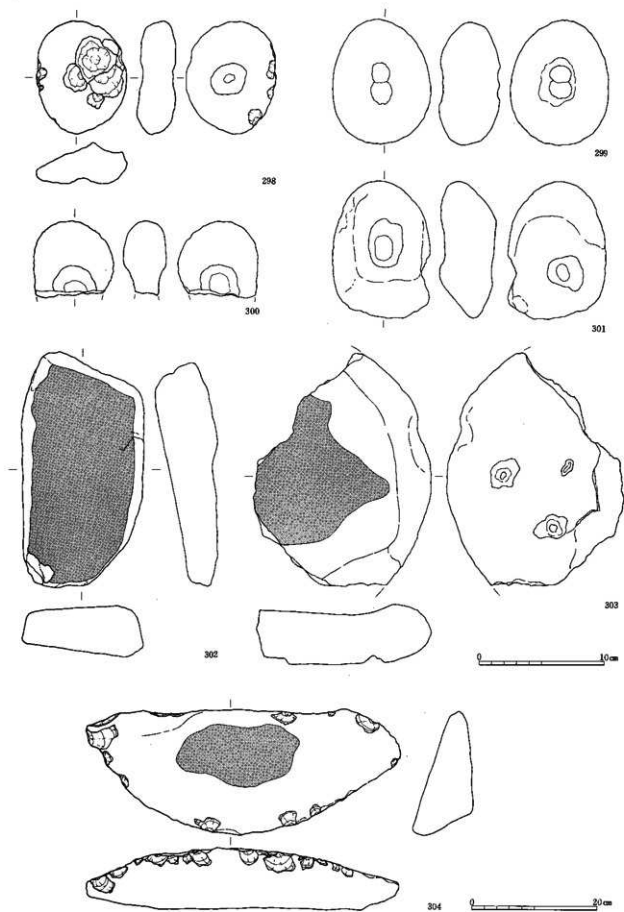


図89 遺構外出土石器 (14)

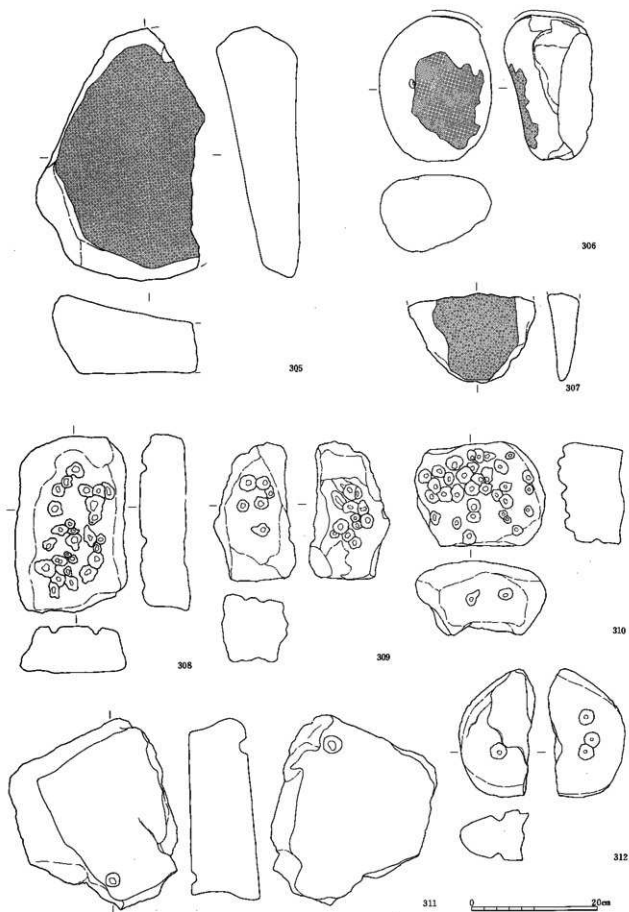


図90 遺構外出土石器 (15)

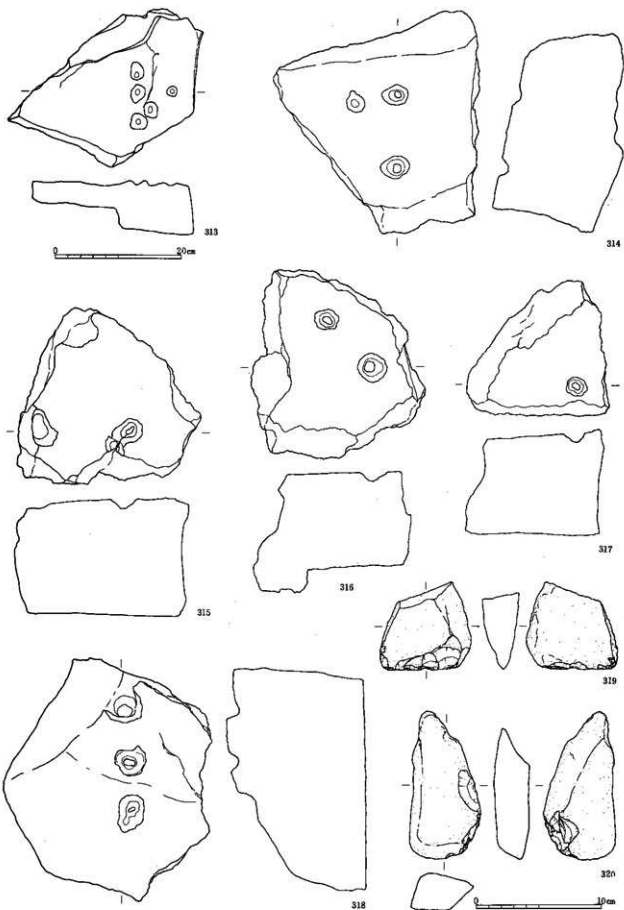


図91 遺構外出土石器 (16)

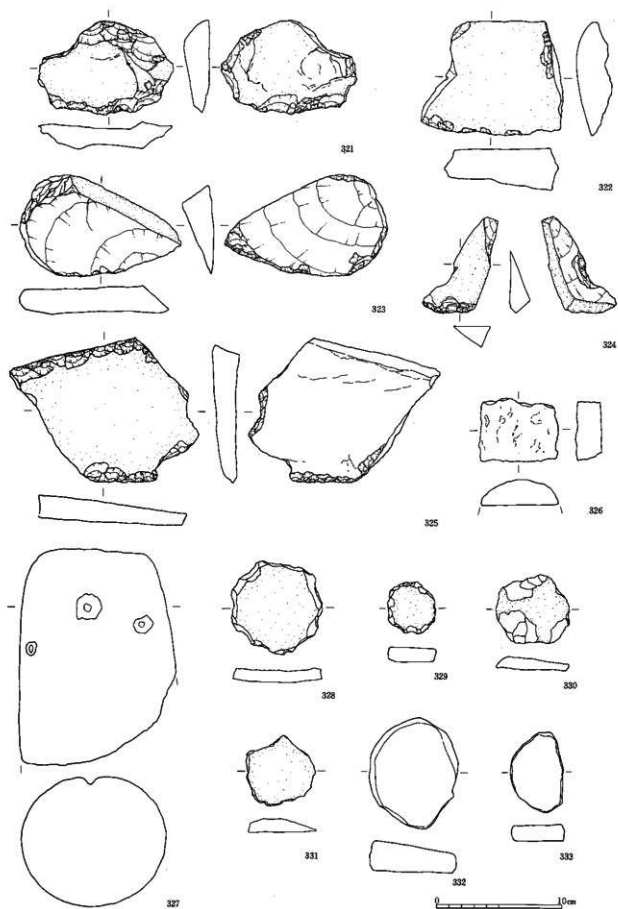


图92 遺構外出土石器 (17)

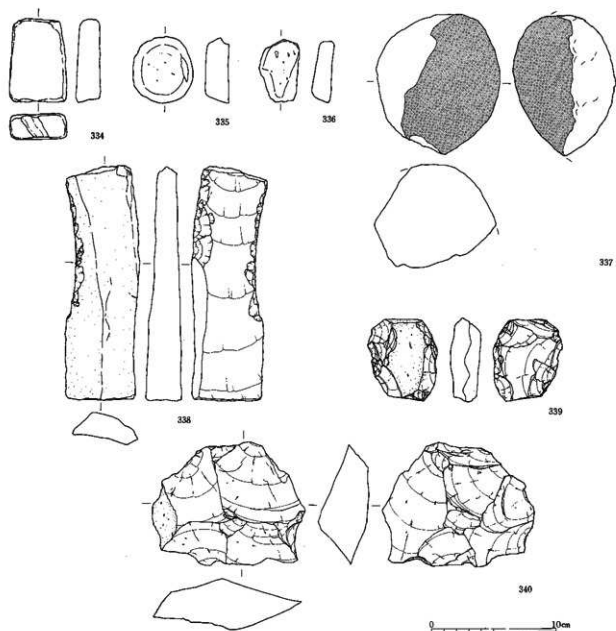


図93 遺構外出土石器 (18)

磨石類 (D688・89-288-301, PL46)

磨石 (288-301) は、安山岩A製の円礫・長垂円礫をおもな素材とし、かつ、磨り面・凹み面を有するものを一括した。このため敲打痕のみの円礫などは、敲石として区分した。凹みについては、面にみられる集中敲打痕と捉える。

- I類：磨り面のみを有するもの5点 (28・102・288・289・291)
- II類：磨り面・凹み面を有するもの5点 (83・290・292・293・294)
- III類：磨り面・敲打痕 (敲打による剝離痕も含む) を有するもの1点 (295)
- IV類：凹み面・敲打痕を有するもの3点 (296-298)
- V類：凹み面のみを有するもの5点 (69・84・299-301)
- VI類：磨り面・凹み面・敲打痕を有するもの2点 (68・85)

凹み面の形状は、浅いものがほとんどで、深めのものについても集中敲打によるものである。多孔石にみられる逆円錐状のものはない。磨り面は縦長のもの (288-295) のほか、礫面中央部に広がっているものが

多い。磨り面の状況は、102が光沢痕状を呈するほかは、ザラザラした磨り面を持つものが多い。凹みの深いもの(84・300)については、集中敲打によるとしても、ほかのものにくらべ深い。凹みが使用痕であるのか、整形痕であるのかの違いはこのあたりにありそうである。素材となる手頃な川礫は、採取するのにそれほど困難はなかったであろう。そう考えると、凹みの深いものを単なる使用頻度の相違とは一概に言いえない。浅い敲打痕状のものから集中敲打によって形成された凹みや、多孔石にみられる逆円錐状の凹みとは異った一群が存在することを指摘しておきたい。

石皿・台石 (図13-30・32・89・90-302-307, PL40・46・47)

石皿(302-309)は作業面がくぼんでいるもの(30・32)、平坦なものに2分される。30・32ともに背面に逆円錐状の凹みが残されている。304は据え置きに適した礫の中央部を作業面としている。外周部は、大きな剝離を施し、装飾を兼ねた整形が施されている特異なものである。306は、作業面がツルツルしており、置き砥石とすべきかもしれない。304は大形のもので作業面は広い台石状の石皿である。304・305などの大形のもの、その場に放置された可能性が高いのに比べ、30・302の石皿は欠損品が廃棄されている点が指摘されよう。すべて安山岩製である。

多孔石 (図90・91-308-318, PL47)

多孔石(308-318)は、安山岩製である。偏平礫面に逆円錐状の凹みが多数みられるもの(308など)、凹みが3つ前後と少ないもの(310など)に2分される。凹みが多面に及ぶものもある。

砥石 (図28-86, PL41)

1点出土した(86)。このほか、石皿・台石に分類した内にも、砥石として利用されたものがある。安山岩製である。

礫器 (図14-35・36, 91・92-319-324, PL47)

礫器(319-324)は、岩塊状の礫の一部に粗雑な剝離が認められるもの(35・36・318・319)、板状節理の礫を利用し、粗雑だが鋭い刃部を作出するもの(320)など、さまざまである。すべて安山岩製である。

石棒 (図92-326・327, PL48)

石棒(326-327)は4点出土し、うち2点が接合するため、個体数は3点となった。326は逆円錐状の凹みが施される。安山岩製である。

円盤状石器 (図92-328-333, PL48)

円盤状石器(328-333)は安山岩製である。片面からの粗雑な剝離調整で成形されるもの(328-330)は、東北地方から新潟県にかけて縄文時代中期以降出現し、県内では南信地方によくみられるという(大竹1988)、いわゆる「石製円盤」であろう。このうち、330・331は不整形で人為的なものと仕様が掲載した。磨製のもの(332-333)は平面半円形、断面盤状を呈する。打製・磨製の両者は本来なら分類されるものかもしれない。

軽石製品 (図93-334-336, PL48)

方形(47・72・334)、円形(335)、不整形(336)がある。334は下端に帯状の削り痕らしきものが認められる。

軽石は、浅間山麓で産出されるものであろう。

その他の石器 (図93-337-338)

336は、円礫片の表皮面が摩耗したようにも自然面状とも判断し難いもので、丸石の可能性も捨て難いため、取り上げた。337は、棒状の板状剥片の側縁部に連続する剥離調整が入る。下端は欠損したのか、平端である。338は厚手の安山岩Cの剥片を素材として、側辺部に粗雑な両面からの剥離調整が施される。稜は波状を呈し、使用痕はみられない。実際の使用に適したのか判断し難い。同様なものがほかに2点みられる。一様に剥離痕が不連続・不揃いである。

石核 (図93-339・340、PL48)

339は安山岩Cによる石核である。剥離面は大きく、かなり大きめの剥片を取ったものと推測できる。得られた剥片は、大形剥片石器の素材剥片として利用されたというより、本遺跡では出土をみなかった石鏃、石錐などの素材剥片を得た可能性が高い。

黒曜石製の石核は、ネガティブな剥離痕で構成される残核状のものが7点みられる。いずれも、剥片を得るには、本体が小さく不定形であり、狭雑物を含むものが多く、剥片を得るには不適當なものである。原石・石片類黒曜石の原石が2点出土している。図示しなかったが写真図版PLに掲載したので参照されたい。いずれも石目が、本体中を横断し、剥片生産には適さないものである。このような原石を手にしたということは、黒曜石製の石器生産に日頃から余り比重を置かなかったことによるのであろうか。確かに黒曜石製の石器の絶対量が少ないのは本遺跡の特徴である。それに比して、安山岩Cの原石・石片類は多量に出土した。かといって、黒曜石製の石器類の完全な代わりを成した石材というわけでもない。

なお、黒曜石の石片は砕片状のものを主体とするか、なんらかの石器破片と思えるようなものもあることを記しておきたい。

ク 平安時代以降の遺物

平安時代以降の遺構は検出されていないが若干の遺物が出土した。

土器類は平安時代では9世紀頃と推測される土師器甕・内面黒色の坏または碗の小片が出土した。中世においては13～14世紀前半の中国から輸入された龍泉窯系の蓮弁文碗片(1)が1点出土した。

金属器は刀子片(2・3)・火打金(4)・釘(5・6)、銭は寛永通宝(7-9)・文久永宝(10)が出土した。4の火打金は山型を呈し中央頂上部には小孔をもつが両端の突出部を欠損している。刃部中央には袈りが認められる。刀子・火打金・釘の時期は不明である。

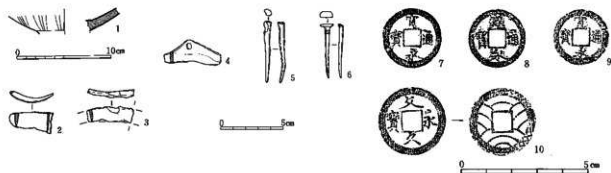


図94 古代以降の遺構外出土遺物

ii 第二地点の調査 (PL26)

第二地点は前記した第一地点から支谷を隔てて西に位置する。トレンチ調査の結果、南に向かって張り出す支尾根の東斜面に縄文時代の遺物包含層が確認され、その部分を拡張して平面的な調査を行った。谷底に設定したトレンチ内からも数片の縄文土器が出土したが、量的に少なくまた摩滅の著しい微細破片のみであったことから、周辺からの流れ込みと判断した。

拡張した尾根の斜面には尾根と同方向に凹地状の浅い低まりがあり、そのテラス状部分から斜面下方にかけて縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての遺物が多数遺存していた。層位的にはIVI層を主とし、III層およびIV2層中にかけて遺物の包含が認められた。また分布的にはその9割以上がI J-09・14・19・24・25グリッドから出土した。検出された遺構と遺物の総数は、焼土址1基、配石状遺構1基、縄文土器1,045片・34,870g、石器類19点であった。

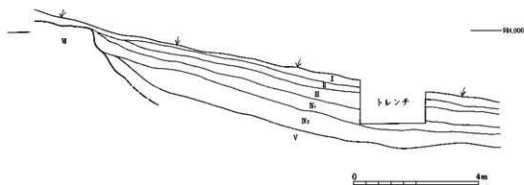
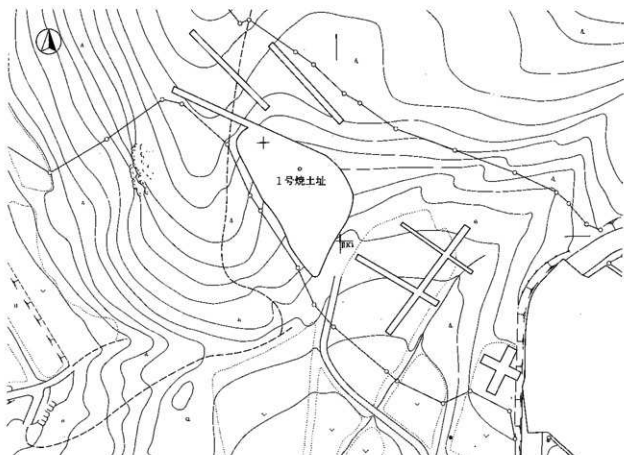


図95 基本土層

(1) 遺構

ア 焼土址

1号焼土址 (図96、PL26)

拡張範囲の中央北寄り、I J—O09グリッドに位置する。IV 1層を若干掘り下げた段階で検出された。しかし、調査時の不手際からIV 2層上面での記録しか残されていない。

径100 cmほどの不整形形の範囲に焼土の広がり確認された。平面・断面ともに掘り方をもたず、被熱により地山が直接焼土化した遺構と考えられる。とりわけ北側半分に着しい焼土化が認められた。焼土化した厚さは15 cmほどであり、その上部は赤橙色に変化していた。

遺物 本址に伴出する遺物はないが、周辺には縄文時代後期前葉、堀之内I式土器の破片が多数遺存していた。

時期 検出層位および周辺出土遺物から、本址は縄文時代後期前葉、堀之内I式期に火を焚いた跡と考えられる。

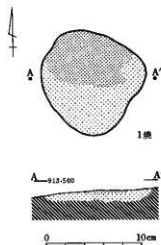


図96 焼土址

イ 配石状遺構

IJ—M12・13グリッドを中心に位置し、1号焼土址の南西に5 m余り離れて存在した。検出層位はIV2層上面である。調査時点では配石址との認定がまったくなされず、実測図など詳細な記録は残されていない。しかし、整理の段階で写真や土層堆積状況を含む立地環境を詳細に検討した結果、人為的な遺構である可能性が高まったため、配石状遺構としてその存在を報告することにした。

遠景写真および調査担当者からの聞き取り以外資料を持ち合わせていないが、斜面に形成された狭小なテラス状部に層平な大型礫を10個程度敷き並べてあった。平面的な形状や規模は不明のままとなったものの、おおよそ3~4 mの範囲にやや傾斜をもって遺存していた。配石状部分の周囲が落ち込み状を呈していたとの所見もあり、その性格については即断できない。いずれにしても、本址が人為的な遺構であった可能性はきわめて高く、周辺から出土した遺物量の多さや1号焼土址の存在を考慮すると、これらの所在したテラス状部分は生活痕を強く示す箇所として注意される。

(2) 遺構外出土遺物

ア 土器

総重量1,045片・34,870 gの縄文土器が出土した。すべて破片の状態出土し、復原または図化できた個体はきわめて少ない。時期的には中期末葉(図99)から後期前葉までの土器を含む。そのほとんどは後期前葉の土器によって占められ、数量的な内分けは、中期末葉6片・200 g、後期初頭67片・2,810 g、後期前葉972片・31,860 gである。以下、時期別に図示・概説を行うが、第一地点の記述と同様、分類による記号化を避け個別的な説明にとどめておく。

中期末葉の土器 (図99-21-25、PL30・37)

21は平縁の口縁部破片。口縁下に無文帯を残り、以下隆帯を挟んで縄文が施文される。22は口縁下に大小の円形文をめぐらす深鉢形土器。胴部文様ははっきりとしないものの、縄文を地文として沈線による渦巻状のモチーフが描かれていたとみられる。23は「く」の字状に内傾する波状の口縁部破片である。内傾

する部分に沈線と円形文によって区画された縄文帯がめぐる。

24・25は指頭状の圧痕を伴う紐帯文が施される。胎土に粗砂などを多く含み、調整が粗いため器面はザラザラする。胎土や調整の特徴から、県北部から新潟県下にかけて分布する中期末葉の土器と判断した。しかし、縄文施文が認められないことなどの相違点もあり、後期初頭もしくは同後葉の粗製土器である可能性を残す。

後期初頭の土器 (図97-1, 99-26-43, PL37)

26-32は平行する沈線文間に充填された縄文帯により、曲線的な文様が描かれるもの。モチーフはおおむね縦位方向に展開し、一部「J」字状、「スベード」状となる。1・33-41は平行する沈線区画内に列点状の刺突文を充填する。

1は推定口径31.5cmをはかる深鉢形土器。28などに比べて胴部の屈曲が弱く、直立する口縁から外反ぎみに胴部へ至る。文様構成にも退嬰化・粗雑化が顕著に認められ、明確なモチーフを形成していない。33-41は1と同様な個体。おおむね明褐色ないしくすんだ褐色を呈し、胎土に砂粒などを含む。ていねいな器面調整が加えられて平滑な仕上がりをみせ、全体に硬質なつくりの土器である。

42・43は歯数3本の櫛歯状もしくは束の工具による条線文が引かれるもの。縦位方向に間隔を置いて施される。図示した2点のみの出土であり、両者は同一個体の可能性が高い。

後期前葉の土器 (図97-98-2-20, 99-101-44-104, PL30・37・38)

2・44-57は主として沈線文のみ施される一群。これらのうち2・44-47は文様構成上33-41など前段階の土器と親縁性をもち、系統上それらに連なる土器と考えられる。弱々しい沈線によって崩れた区画文状の文様が施されており、とりわけ42・45はそうした傾向が著しい。48-57は器面が研磨されるなどていねいな調整が行われ、44-47とは趣きを異にする。平行沈線文による弧状や渦巻状のモチーフを組み合わせて施文し、49や52・53などの頸部や胴部には「8」の字状・「ボタン」状の貼り付け文が附加される。

58-61は細い隆線文が施される一群。58は内湾する口縁上部に隆線による区画文が施され、一部で胴部文様と連結する。60・61は平行する2条の隆線文により渦巻状などのモチーフを構成する。口縁上部が大きく開く器形の61は、渦巻状のモチーフを横位に連ね、渦巻の端部には「ボタン」状の貼り付け文をつける。薄手・堅微なつくりで、ていねいな調整により器面は平滑。

3・8・62-71は沈線文とともに縄文施文が加わる一群。球胴状の丸い体部に「ラッパ」状に開く口縁部がつく小形の甕形土器。4単位の山形把手を有し、把手基部からは「8」字状に変化する隆線文が頸部まで垂下する。64は3と同類の口縁部破片とみられ、口縁下にも文様が施される。また、把手上部および裏面には「8」の字状の貼り付け文や「C」字状の沈線文などがつく。8は脚を有する小形の土器。鉢形を呈する体部に渦巻状・「スベード」状のモチーフが描かれるとともに、「C」字状文を伴う隆線文がつく。4-6・72-77は種々の口縁部・頸部破片。4と72-74は深鉢形土器、ほかは甕形土器であろう。4は「く」の字状に内傾する口縁部に4単位の大形把手がつき、それぞれを沈線でつなぐ。把手下の1か所には「8」の字状をなす貼り付け文と同化するように「注口」が作り出されている。口縁下の最大径は27.5cm。

7・9・78は無文土器。内面口縁下に沈線がめぐる9は後出的である。10-14・79-96は口縁下に紐帯文や隆帯文をめぐらす一群。直立する口縁から極端な屈曲をもたずに底部へ移行する単純な器形の深鉢形土器である。一般に粗製土器と総称される一群であるが、ナデ調整など総じてていねいな器面調整が加えられている。10-12・79-93は指頭状の圧痕やキザミのつけられた紐帯文が施されるもの。そのうち12と79は紐帯文の一部が途切れて口縁上部に収束する。口縁下に隆帯文がめぐる13・14・94-96は10-12などに

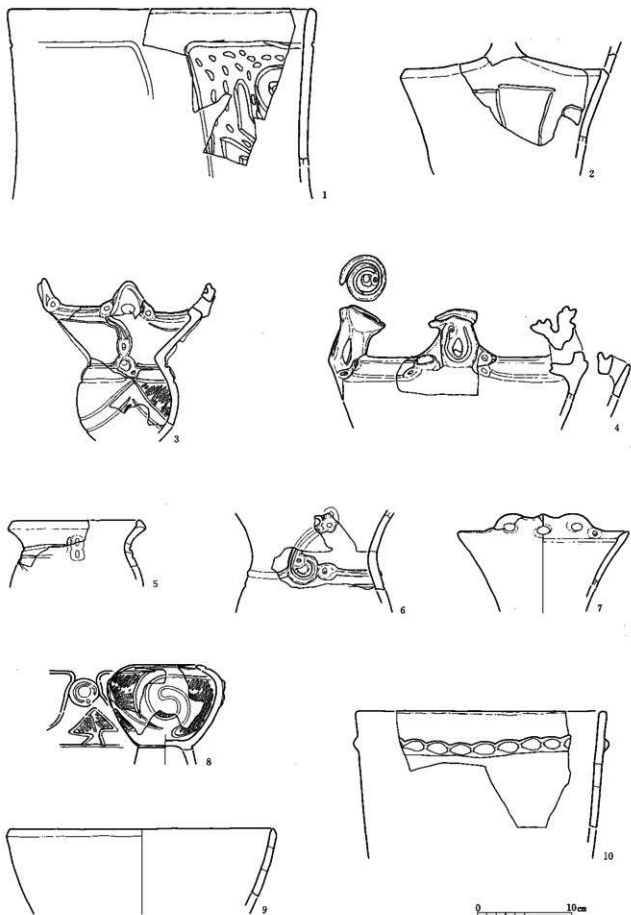


图97 遺構外出土土器 (1)

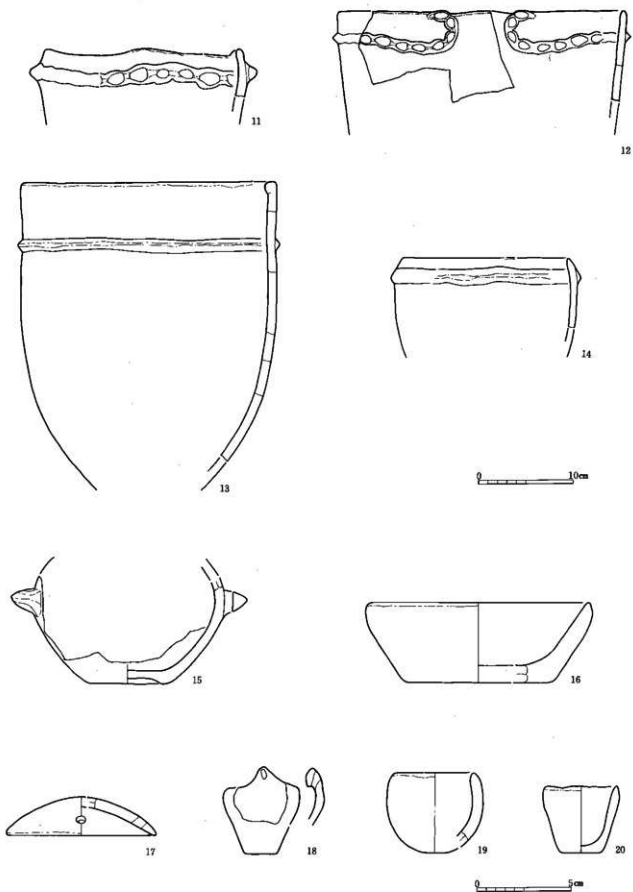


图98 遺構外出土土器(2)

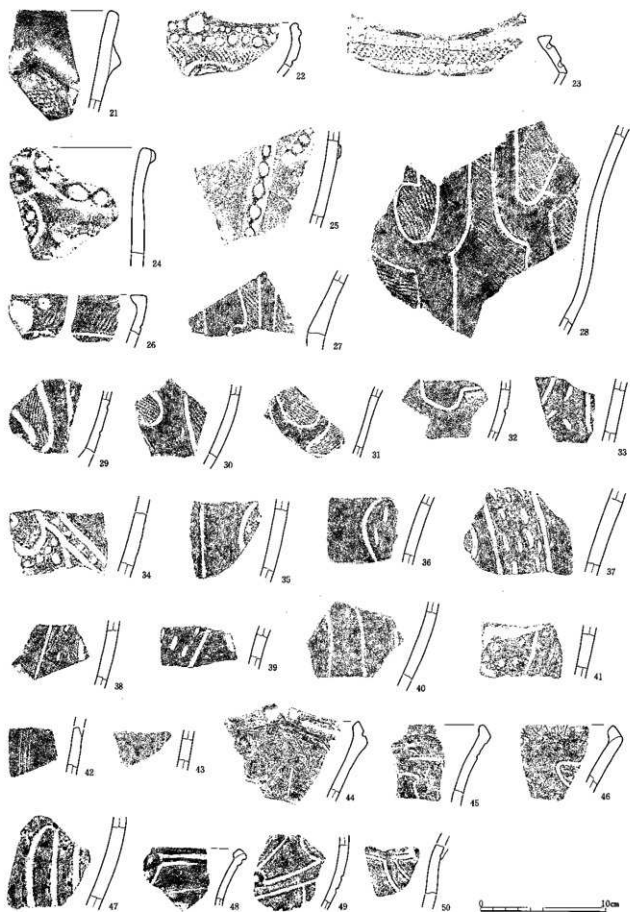


图99 遺構外出土土器(3)

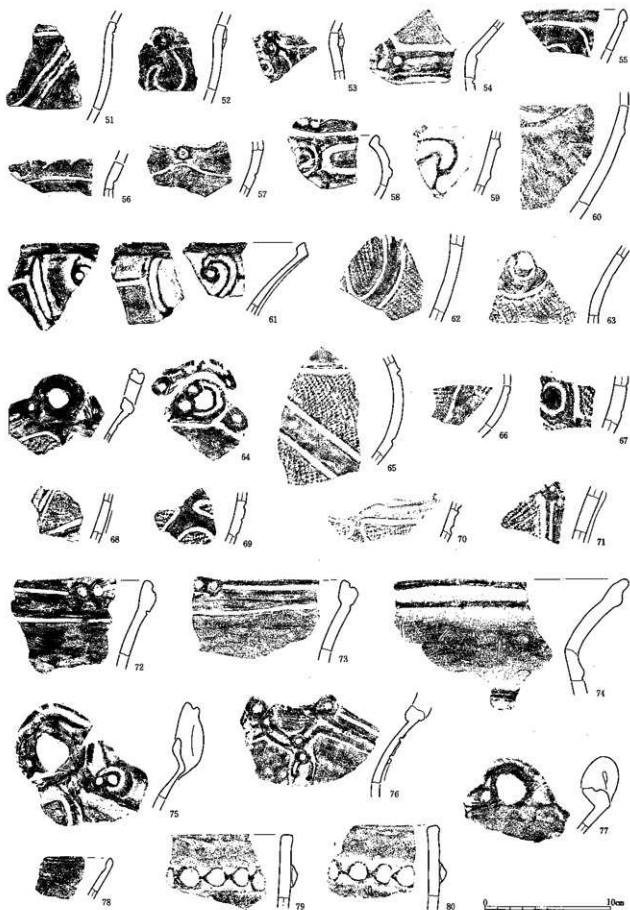


图100 遺構外出土土器(4)

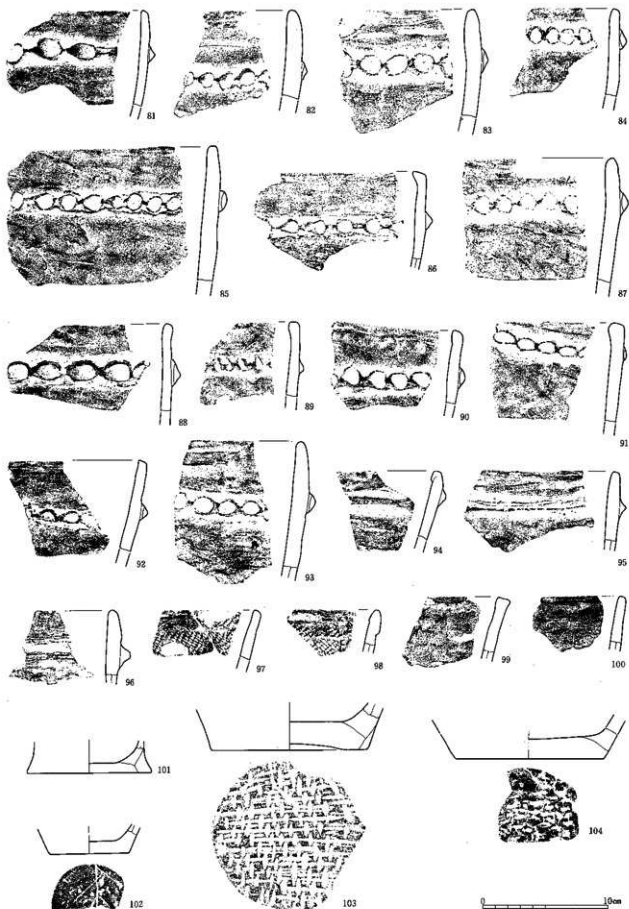


圖101 遺構外出土土器(5)

比べ、整形や調整が粗雑である。隆帯文の施文位置が低い14は、胎土に砂粒を多く含む点や全体のつくりなどから後期初頭に帰属する可能性もあろう。

97・98は縄文施文、99・100は無文の口縁部破片。101～104は底部破片。102は木葉痕を、103・104は網代痕をそれぞれ底面にとどめる。

15～20には小彩土器・ミニチュア土器を一括した。15は丸みのある体部に橋状の小把手がつく。16は皿状を呈し、口径推定11.5 cm、器高4.2 cmをはかる。底面には網代痕が認められる。17は蓋形をなし径8 cmほどをはかる。全体の2分の1程度しか残っており、機能・用途の判断は難しい。一か所に補修孔と考えられる直径5 mmの小孔が貫通する。器厚5～6 mmと薄手のつくりであり、焼成は不良。18～20は器高3.5～4.5 cmのミニチュア土器。18の突起下に刺突文が施されるほかは文様は認められない。すべて手捏ねによって作られている。

イ 土製品 (Bd102)

土製品としては土製円板1点が出土したのみである。1は径4.2×4.2 cmの不整形円形を呈し、厚さ0.9 cm・重量22.1 gをはかる。縄文時代中期後葉の土器片を用い、周縁を打ち欠いて製作している。I J-N10グリッドのIV1層中から出土した。

遺構外出土土器の主体をなす時期(後期前葉)と使用された土器片の時期とが異なり、製作時期を断定することは困難である。ここでは、中期後葉の土製円板と考えられる第1地点出土のものと同じ大きさの点でほぼ一致することのみを指摘しておきたい。

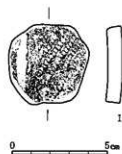


図102 土製品

ウ 石器 (Bd103-341-352, PL48)

第二地点で検出された石器・石片類は、表5に示した。このうち分類可能な石器は総数19点と少量である。出土層位は、縄文時代後期前葉の土器片の包含層にあたり、出土した石器も該期に属するものとして扱ってよからう。

総数19点のうち、欠損した打製石斧6点を除いてすべて図示した。

341はチャート製の石錐で、片面調整加工により錐部を作出した不定形なものである。使用痕は認められない。342はチャート製のスクレイパーである。片面からの急角度剥離により刃部を作出する。343はチャート製のスクレイパーである。剥片の先端部に槌状の剥離痕がみられ、縁辺部に刃こぼれがみられる。上辺2辺には片面からの剥離調整が施される。彫形的な使用も考えられる。344はチャート製の小剥離痕を有する剥片で、剥片の下端部に連続する微細な剥離痕が認められる。

345は大形剥片石器V類に相当し、基部に刃潰し状の剥離調整が施される。刃部はほぼ直上で刃こぼれが認められる。346は大形剥片石器VI類に相当し、不定形な破片の突部に急角度の剥離調整が施されている。347は扁平な角礫の中央に敲打痕が認められる敲石で、台石にもなる。石質は安山岩製である。348は安山岩製の敲石で、下端に敲打痕がみとめられる。350・351は砥石で安山岩製である。351は器面に線状痕が著しい。349は安山岩製の多孔石で、3つ逆円錐形状の凹みを持つ。そのほか、352は安山岩の縦長石片を素材とし、側縁に粗い剥離調整が認められる。

未掲載の打製石斧については、出土した6点のうち胴部残存1・基～胴部残存が5点と、すべて刃部を持たないものであった。

これらの石器の分布状況は、トレンチ出土の打製石斧を除いて、土器の分布と同様なあり方を示す。前

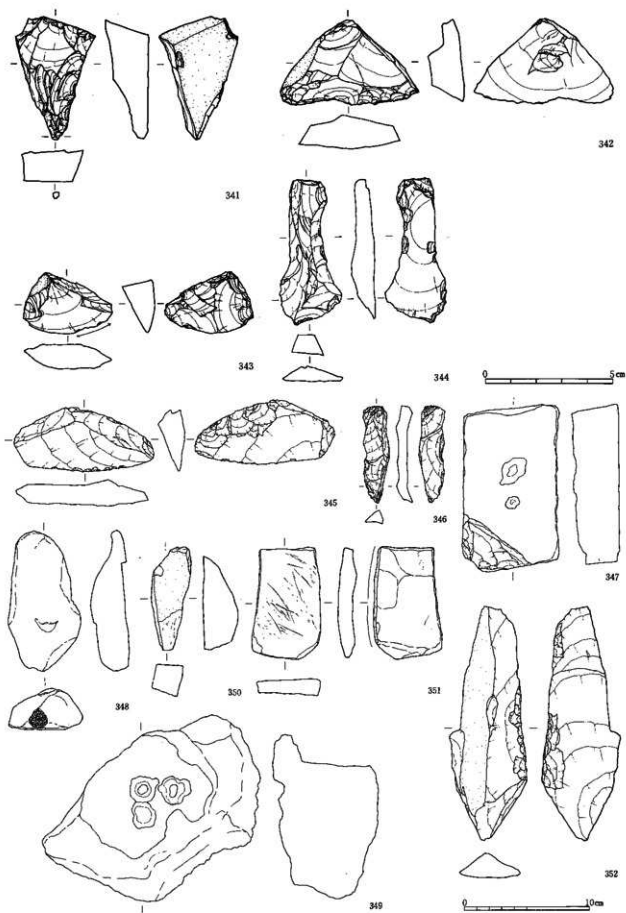


图103 遺構外出土石器

述した配石状遺構の間辺では、多孔石・砥石が検出されている。多孔石は、配石遺構など祭儀に伴う石器という指摘がある(衛地1990)。本遺跡第一地点についても、多孔石の出土量の多い地点に配石状遺構が認められており、配石土坑に伴う多孔石は多いようだ。このような点を考慮すれば、調査段階で認知できなかったのは残念ではあるものの、この配石状遺構としたものを遺構として捉えうる可能性が高いといえる。

出土した石器量は少ないとはいえ、一定の分布範囲をもちながら、出土したことにその意味があるはずである石器組成からみれば、6点の打製石斧、1点の多孔石を除いて、ほとんどが加工具として捉えられるものである。このうち、「切る」・「割る」という機能をもち得るものが、大形剥片石器も含め6点と全体の $\frac{1}{2}$ を占める。このようにしてみれば、石器群は、前述した配石状遺構のことも含め、およそ3種に区分される。石錐・スクレイパーなどの小形石器加工具を中心とした一群と、生産活動に伴う打製石斧と、多孔石という3種である。このうち、多孔石は配石状遺構に関係する可能性を持ち、小形石器加工具は作業場の痕跡としての焼土址を位置づける可能性を持つ。さらに欠損した打製石斧が示すように、植物質食糧生産の場としての活動の痕跡をも示している。

第二地点における場の利用の具体像は、出土した石器からは以上のようなことが指摘されよう。この場の変遷の同時性、差異性は明確に指摘し得ないものの、少なくとも3つの縄文時代の人々の生活の場面が推定されるのではなかろうか。

表5 出土石器・石片類一覧

種別	石 錐	石 錐	石 錐	スクレ	ヒュス	小中錐	打石斧	大形斧	細石斧	磨石類	石錐等	多孔石	石製品	その他	黒曜石 片/区	チャート層 (区)	安山岩C (区)
遺構外	1		2			2	6	3		1		1	3				
遺構内 (区)	6		49			15	566	337		300		2180	387		2/3	2	3516

エ 小結

第二地点の調査では、焼土址と配石状遺構とがそれぞれ1基ずつ検出されたのみであるが、狭小な区域にもかかわらず、縄文時代後期前葉、堀之内I式期の一段階を画す土器を多数出土するという予想外の結果を得た。やせ尾根の南東斜面に形成されたわずかなテラス状部分に焼土址と配石状遺構が存在し、遺物はそのテラス状部から斜面下方にかけて集中していた。焼土址と配石状遺構については十分な調査記録が残されておらず、それぞれの性格を明らかにすることができないが、石器類の分析を通して植物食生産活動などの生活場面が推定できたことから、これらの遺構がそうした生活場面を保障する機能を担っていたと考えることができよう。

また、土器の時間的位置づけに照らし合わせてみると、本地点での生活もしくは生産活動がきわめて短期のうちに生じ消滅していったことがうかがわれる。

結論的に述べるならば、本地点は縄文時代後期前葉、堀之内I式期を中心とした短期間の生産活動の場であり、一過的な生活地であったといえる。このような短期的・一過的な生活のあり方は、一定の時間と空間を占有した中期後葉段階の集落構成と対比されるとともに、後期初頭段階も含めた該期における時代性や地域性を反映した事象として注目される。

5 まとめ

上信越自動車道建設に伴う事前の記録保存を目的とした今回の発掘では、吹付遺跡の全範囲(第一地点)を調査するとともに、従来遺跡として捉えられていなかった西側尾根(第二地点)にも遺構・遺物の分布を確認

し、調査の手を加えることができた。検出された遺構と遺物の詳細は、すでに記したとおりであり繰り返さないが、本遺跡の時期および性格は、縄文時代早期後葉と考えられる「陥し穴」群と同中期後葉～後期前葉の集落址・生活址とに規定できる。前者については木戸平A遺跡の報告(第1節)に際して整理を試みたように、早期後葉段階における両遺跡の一体性が明らかになり、後者については種々の遺構群が住居址を中心として有機的なまとまりを形成していることが確認された。以下、本遺跡の時間的な変遷を基軸として、検出された遺構と遺物をめぐる集落復元的な作業を行い、まとめとする。なお、早期後葉の「陥し穴」については木戸平A遺跡のまとめにゆずり、ここではおもに縄文時代中期後葉から同後期前葉の遺構と遺物に焦点を当てる。

(1) 縄文時代中期後葉の土器群とその変遷

中期後葉の土器群が本遺跡出土土器の主体を占めることは既に述べた。そして、住居址をはじめ集落的規模で検出された遺構の多くがそれら中期後葉の土器を伴う時期のものであった。吹付遺跡に残された遺構の変化・変遷や集落構造を明らかにするための作業として、まず同土器群の段階細分を行う。

本遺跡より出土した中期後葉の土器は、縄文を地文とする加曾利E式(系)および同系土器(以下、加曾利E式(系)土器とする)、鱗状短沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布をみせる土器(以下、佐久系土器と仮称する)、「ハ」の字状文などを地文とする曾利式および同系土器(以下、曾利式(系)土器とする)の3者に大別できる。これら土器群の中で常に主要な位置を占めるのは加曾利E式(系)土器であり、これを時間軸の縦糸として用い段階設定の基準とする。加曾利E式土器については従来よりすぐれた型式観・変遷観が示めされており、ここでもそれら学史的な成果をふまえつつ、遺跡のあり方に即して分類・区分した(M104)。

中期後葉第I期の土器

1号・3号・5号の各住居址に帰属する土器によって設定される。出土数量は少ない。加曾利E式(系)土器、佐久系土器、曾利系土器の3者が認められる。

加曾利E式(系)土器は明確な口縁部文様帯を有する。佐久系土器は沈線による4単位の縦位懸垂文と蛇行懸垂文が施される。胎土に雲母などを多く含み、調整そのほか、加曾利E式(系)土器とは一線を画す。口縁部文様帯については明らかにしえる資料を欠く。加曾利E式(系)土器との併行関係は、5号住居址において生活面を共有する出入口部埋塞(32)と炉内設置土器(33)とから導かれる。この佐久系土器は松本平から上伊那地方にかけて分布する唐草文系土器の影響を受けて成立した土器と考えられ、本期に先行する段階のものを含む良好な資料が北佐久郡望月町内の諸遺跡から出土している。成立段階に近いほど唐草文系土器の要素が強く、その影響は文様要素のみならず雲母を多く含む胎土や器面調整などにも色濃く反映している。本遺跡の資料からそうした成立期の状況を明らかにすることはできないが、唐草文系土器もしくはその製作集団からの影響のもとに成立した後は、加曾利E式土器の要素を強めながら佐久地方において独自の変化・変遷をたどったことが考えられる。曾利系土器の存在はきわめて稀薄であり、唯一1号住居址の出入口部埋塞に用いられていた土器(1)が挙げられるのみである。

中期後葉第II期の土器

5号住居址の覆土中から出土した土器や2号・6号・11号の各住居址出土土器によって設定され、特徴の類似性を基に遺構外出土土器の一部もこれに加えた。文様・モチーフの相違や出土状況から、a-cの3小期に区分される。ただし、この小期は土器変化の方向性を主眼として分類したものであり、これのみで遺構の同時性や時間差を保証するものとはなっていない。とりわけ、b・c期にはきわめて強い縦線

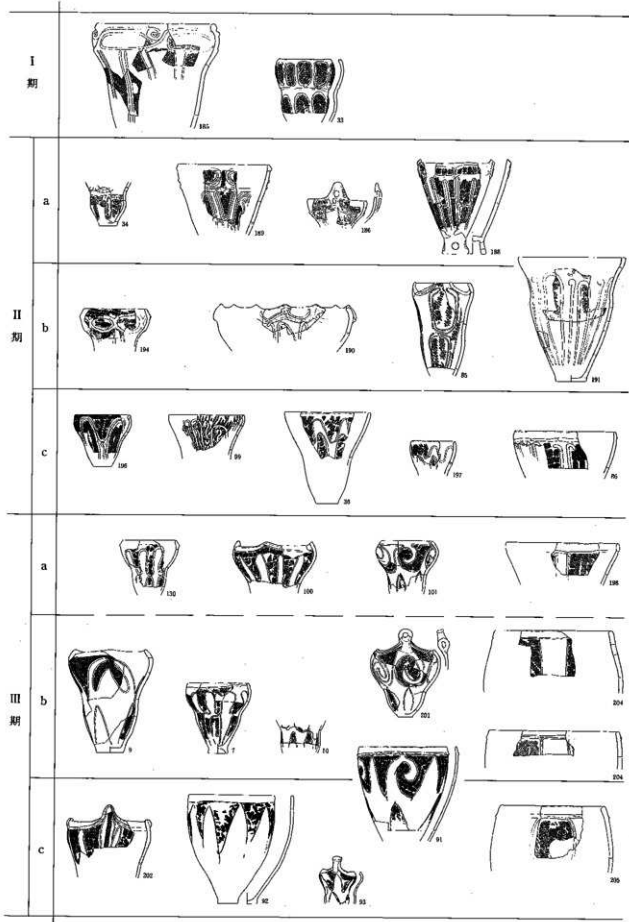
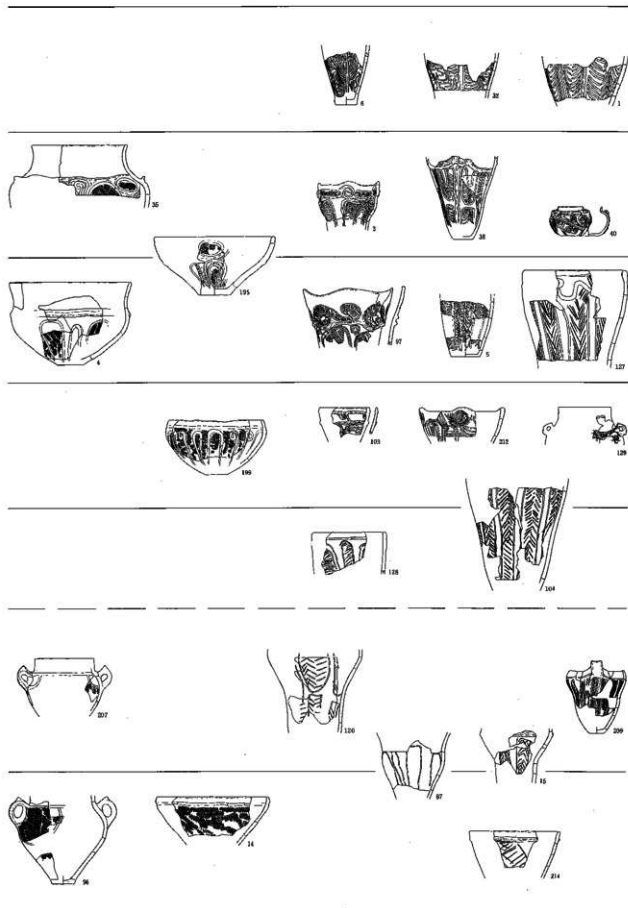


図104 縄文時代中期後葉の土器変遷



性が認められる。

a期 加曾利E式(系)土器は口縁部文様帯が崩れ、明確な渦巻状・楕円状の区画文が退化する。胴部文様帯も縦位懸垂文が横位に連結し、「H」状や「Y」字状のモチーフへと変化する。また、「蕨手」状の懸垂文も胴部文様の重要な要素として取り入れられる。佐久系土器は大きく変化し、鱗状短沈線による地文を前代から継承しつつも、胴部文様は加曾利E式(系)土器とも共通する独特なモチーフとなる。また、胎土や調整に残存していた唐草文系土器の要素も消失する。この段階には加曾利E式(系)土器が多数を占めるようになり、その影響は胴部文様における同土器との共通性にも現れてくる。こうした点からすれば、佐久系土器の成立基盤となった唐草文系土器の要素を消失し、加曾利E式(系)土器との親密性を強める本段階が佐久系土器衰退への両期といえよう。

b期 本段階に入ると加曾利E式(系)土器は、口縁部文様帯の喪失化傾向が一層顕著となる。6号住居址の埋裏に用いられていた85に認められるように、口縁部文様帯が形骸化して上部へせり上がる。また、胴部文様は逆「U」字状モチーフへ収束する方向が現れる。

佐久系土器にも口縁部文様帯の退化傾向が現われ、それとともに胴部モチーフの規則性が崩れ始める。遺構外出土の354・355もこの段階の土器であろう。曾利式(系)土器としては5や127が列举される。いずれも襷形状の短沈線を地文としつつも文様・モチーフは加曾利E式土器の影響を強く受けており、正しくは加曾利E式土器圏に取り込まれた曾利系土器の移入と見るべきであろう。各土器群の量的な問題については段階区分可能な個体が少なく、明示しえない。

c期 加曾利E式(系)土器の多くは口縁部文様帯を完全に喪失し、波状文と逆「U」字状文との組み合わせへと変化する。また、6号住居址出土の86に代表される単純な器形の深鉢形土器を伴う。例外的な個体も認められるが、文様は幅の広い凹線様の沈線によって描かれ、口唇部は総じて角頭状を呈す。胎土に粗砂を多く含み、ナデ調整される。口縁部文様帯の名残りをとどめる328~340の一部も本段階に帰属しよう。

佐久系土器もまた口縁部における文様帯としての意識が薄れ、それに合わせて胴部モチーフの簡略化も進む。103や212に特徴的な口縁部文様帯は矮小化し、加曾利E式土器に現れた逆「U」字状文が主要モチーフとして定着する。こうした加曾利E式(系)土器の影響は質的な面のみならず量的な面にもおよび、同土器の占有率は大幅に高まる。

曾利系土器としては、11号住居址出土の104や遺構外出土の369~380の一部が含まれよう。

中期後葉第III期の土器

11号住居址の覆土出土土器や4号および9号納鏡形敷石住居址出土土器などにより設定される。口縁部文様帯の消失によって上部へせり上がった体部文様が上下2段に分れ、おもに「W」字状や「V」字状のモチーフが施される。a~cの3小期に区分される。ただし、その区分は明確に捉えられるものではなく、図示したように漸移的な変化をたどる。

a期 加曾利E式土器は体部文様が2段に分離するとともに、口縁下を無文帯として表現するようになる。本段階と次段階との間には文様構成上大きな差異は認められない。しかし、前段に特徴的であった幅広の浅い沈線文が用いられる個体(130)や表現の稚拙さを残す個体(101)を含むほか、胎土・調整など土器自体のつくりにもIIc期との共通性が認められる。

佐久系土器については明確な共伴関係を指摘できないが、83号土坑出土の128や遺構外出土の357~367などの伴出が考えられる。ただし、佐久系土器としての独自性は失われ、形骸化する。

b 期 本段階からは加曾利E式土器と同土器の影響を受けた曾利系土器の2者によって構成され、実質的には加曾利E式(系)土器のみとなる。また、198などに采譜をもつ幅広い縄文帯と無文帯とが交互に器面を縦位分割する大形の土器や207のような両耳壺も確立する。このほか、隆起線により曲線的な文様が構成される146や310~319などの多くもこの段階に伴うと考えられる。曾利系土器は遺物集中箇所Iから出土した120にみられるように、モチーフを加曾利E式土器と共有するなど同土器の強い影響を受けている。本段階における両者の量的な関係について明らかにしうる具体的な資料を提示できないが、曾利系土器の占める割合はきわめて少ない。また、本段階には209や210に代表される条線文を地文とする一群もわずかながら認められる。

c 期 加曾利E式土器の終末段階に相当する。本遺跡では事例を見ないが、地域によっては後期初頭称名寺式土器との共存も想定される。前段階において特徴的に用いられた体部文様の上下分割施文が崩れ、下段文様の上段文様への連結や消失、あるいは文様全体の退化などが顕著となる。こうした退化傾向は文様のみならず、土器の整形や調整にもおよぶ。

曾利系土器のあり方については明らかでないが、遺構外出土の214のような区画文・地文ともに規格性のない弱々しい文様の個体が残存する可能性が考えられる。

以上、中期後葉の土器群を3期7段階に区分したが、最後に段階設定の指標とした加曾利E式土器の型式細分との対比を行うならば、第I期~第II期が加曾利EⅢ式の中~新段階に、第III期が加曾利EⅣ式および同直後に相当しよう。また、第二地点の西に尾根を隔てて位置する鶴ヲネ遺跡からは、本遺跡第III期に後続する良好な資料が出土している(早川1988)。

(2) 縄文時代遺物の時期別出土分布

本遺跡からは第一地点を中心として、総重量14,452片・355,710gに達する縄文土器と総数575点の石器類が出土したことは前記したとおりである。これら出土遺物は何の意味もなく遺跡内に存在していたのではなく、遺構や遺物を残した人々の行為の結果として遺存していたと考えられる。そして、遺物の分布や遺存状況はそうした行為の帰結を反映したとも言える。とりわけ、上述したように段階的な変遷をたどったことが知られる第一地点でのあり方は、集落内部での“場”の使われ方やその変遷、ひいては集落構造を解明する上できわめて重要な意味を持つていよう。

そこで、遺跡の復原へ向けての第2の作業として、第一地点における出土遺物の時期別分布や出土状況を検討し、“場”変遷を抽出してみる。ただし、石器類については次項にゆずり、ここでは時期的な細分が可能な土器のみを対象として分布傾向を把握する。

総量分布と全体の傾向 (図105)

遺構外出土土器は調査区内に広く分布が認められるが、量的な多寡からみれば調査区の中央付近に集中する傾向を示す。この調査区中央部には小さな谷頭が入り込み、縄文時代においても若干の凹地状を呈していたと推測される。また、住居址をはじめほかの遺構の多くは凹地部分の外縁からその周辺にかけて分布し、遺物の主要分布域とはほぼ一致する。ただし、微視的に見ると中央の凹地全体に集中的な分布が認められるのではなく、凹地部分の東側に片寄って分布する。こうした分布の偏在性は以下に記す時期別分布において一層明瞭に捉えられ、特定の場の存在や場の使われ方の差異を示す傍証のひとつと考えられる。

早期後葉の土器分布 (図106上)

量的にはきわめて少ないものの、調査区のほぼ中央付近、先に述べた凹地部分を中心とした分布が確認